兵庫県文化財調査報告　第126冊

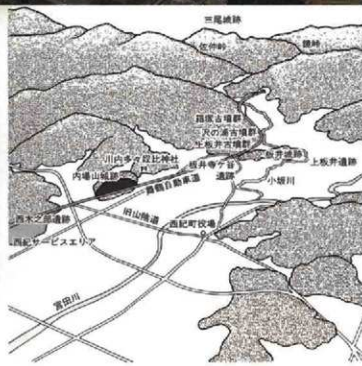
内場山城跡

ないばやま

近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書（XXI）

1993.3

兵庫県教育委員会


三尾城跡
佐仲峠
勝峠
長坂古墳群
天の浦古墳群
上板井古墳群
川内寺の段比神社
内場山城跡
板井寺ケ谷
板井遺跡
上板井遺跡
小坂川
舞鶴自動車道
遺跡
明山橋遺
西紀町役場
西木之部遺跡
西紀サービスエリア
篠田川

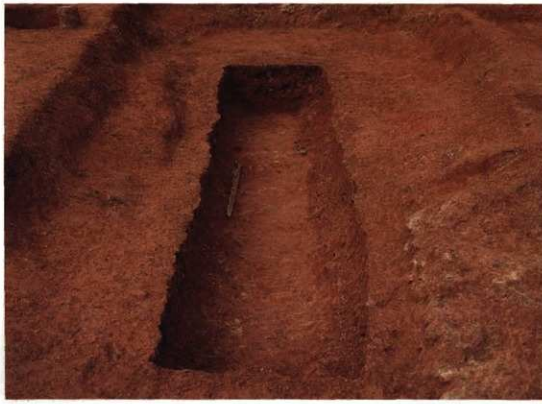
山城跡の曲輪・幕曲輪(南西から)

山城跡の曲輪・幕曲輪(南から)

山城跡の井戸

中世墓1

内場山墳丘墓

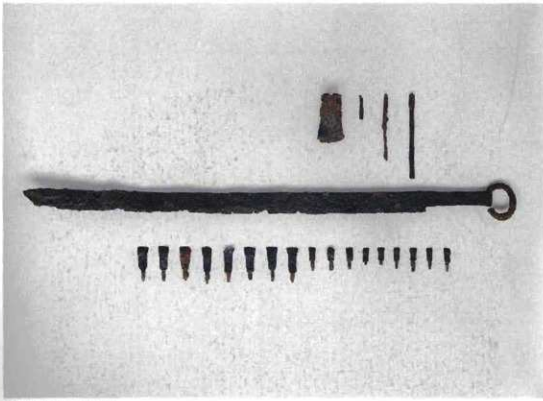


副葬品出土状況

木棺墓 1 ガラス管玉出土状況

木棺墓 3 ガラス小玉出土状況

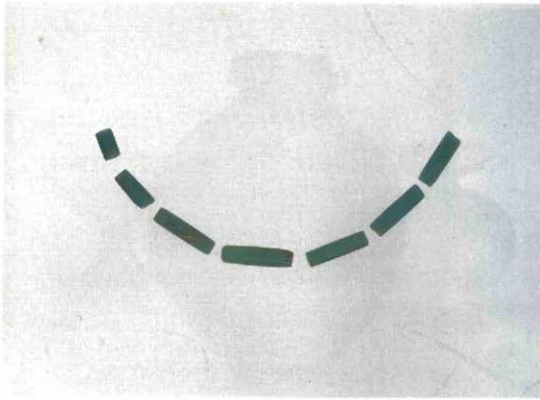
内場山墳丘墓の供献土器



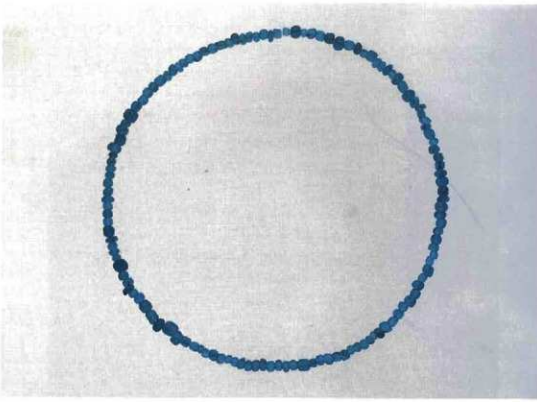
内場山墳丘墓の副葬品

3号土器棺

東海系高杯



木棺墓 1 出土ガラス管玉



木棺墓 3 出土ガラス小玉

例　　言

1．本書は、兵庫県多紀郡西紀町下板井字内場・荒田譯、栗本之郡字内場に所在する内場山城跡および内場山遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は、近畿自動車道舞鶴線建設事業に伴うもので、日本道路公団三田工事事務所の依頼を受けて、兵庫県教育委員会が昭和60年度に確認調査・全面調査を実施した（遺跡調査番号870006・870007）。

3．整理作業は、昭和62年度に兵庫県教育委員会が、平成４年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が行った。

4．本書は巻首図版８頁・本文 109頁・挿図８葉・図版83頁・写真図版91頁・付図１枚からなる。

5．本文は全９章からなる。そのうち山城に関する調査成果は、第３章にまとめた。山城以外の遺構・遺物に関しては、立地的な面から尾根部・斜面部・山麓部の３地区に分けて、第４－７章の中で述べた。第８章では関連科学の分野から、５件の分析・鑑定を行った。第９章では若干のまとめを行った。

6．本文中で表した標高は東京湾平均海水準（T.P.）を基準とし、方位は国土座標第Ⅴ系に則る。

7．図版３の地形図は、国土地理院１：50,000地形図「篠山」を使用する。また写真図版１の空中写真は、国土地理院KK-74-1X　C3-12を使用する。

8．本書の執筆は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所岡崎正雄・山下史朗・中川　渉・菱田淳子・山上雅弘・山口卓也および兵庫県教育委員会社会教育・文化財課岸本一宏が行い、中川が編集を担当した。その他分析・鑑定の見地から、東京工業大学　高塚秀治氏、武庫川女子大学薬学部　安田博幸教授・金杉直子氏、奈良国立文化財研究所　肥塚隆保氏、嶋倉巳三郎氏、京都大学名誉教授　島地　謙氏、京都大学木質科学研究所林　昭三氏より、玉稿を頂いた。文責は目次に示すとおりである。

9．写真図版に用いた写真のうち、遺構の写真撮影は各調査担当者が行い、航空写真は国際航業（株）に、遺物の写真撮影は（株）サンスタジオに委託して行った。

10．本書にかかる内場山城跡の写真・図面・遺物などは、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区荒田町2-1-5）に保管する。

11．なお、発掘調査および報告書の作成にあたっては、下記の関係機関および方々から御教示・御協力をいただいた。この他にも、多数の方から折にふれて御助言をいただいたが、個々にはお名前を挙げていない。ここに記して、謝辞としたい。

奈良国立文化財研究所、西紀・丹南町教育委員会、篠山町教育委員会、一宮市博物館、財
京都府埋蔵文化財調査研究センター、篠山史友会、関西城郭研究会、城郭談話会
北垣聰一郎、村田修三、前田保夫、寒川　旭、渡辺　誠、高橋　学、南木睦彦、芦田　茂、
西田辰博、山本明彦、大槻　伸、土本典生、田中禎子、中井　均、梅津栄太郎、藤井善布
（故人）、角田　誠、宮田逸民、多田暢久、宮田靖國、井尻弥三英、小山雅人、戸原和人、
三好博喜、岸岡貴英、石崎善久、有井広幸、野島　永、石黒立人、宮瀬健司
（順不同、敬称略）

目　次

第1章　調査の経緯 ……（岡崎）
　第1節　近畿自動車道建設事業に関わる遺跡の調査　1
　第2節　調査に至る経過　3

第2章　調査の方法
　第1節　確認調査 ……（岡崎）　5
　第2節　全面調査 ……（岡崎）　6
　第3節　整理作業 ……（岡崎・中川）　8

第3章　山城跡の調査 ……（山上）
　第1節　概　要　9
　第2節　調査の成果　13
　第3節　出土遺物　18
　第4節　遺物分布状況　22
　第5節　作事・普請について　25

第4章　尾根部の調査
　第1節　調査の概要 ……（中川）　31
　第2節　竪穴住居跡 ……（山上）　31
　第3節　内場山墳丘墓 ……（中川・菱田）　38
　第4節　上器棺墓 ……（菱田）　46
　第5節　内場山1号墳 ……（岸本）　47
　第6節　中世墓 ……（山上）　48

第5章　斜面部の調査
　第1節　調査の概要 ……（中川）　51
　第2節　竪穴住居跡 ……（中川・山下）　51
　第3節　和寿園地区 ……（山下）　52
　第4節　中世土壙群 ……（山上）　53
　第5節　近世墓 ……（菱田）　56

第6章　山麓部の調査
　第1節　調査の概要 ……（中川）　57
　第2節　竪穴住居跡 ……（岸本・中川）　57
　第3節　木棺墓 ……（岸本）　59
　第4節　井戸跡 ……（中川）　64
　第5節　旧河道 ……（山下・中川）　64

第7章　石　器
　第1節　旧石器・縄文時代の石器 ……（山口）　75
　第2節　縄文時代～弥生時代の石器 ……（中川）　75

第８章　分析・鑑定
第１節　内場山城跡出土鉄滓と錆片の分析結果について ……（高塚）　77
第２節　多紀郡内場山城跡（内場山遺跡）出土遺物にかかわる赤色顔料物質の微量科学分析と出土土器の胎土の分析 …（安田・金杉）　80
第３節　内場山城跡出土ガラス管玉の分析 ……（肥塚・加古）　85
第４節　内場山城跡出土炭化材の樹種 ……（鳴倉）　89
第５節　内場山城跡出土木製品の樹種 ……（島地・林）　92

第９章　まとめ
第１節　内場山城跡について ……（山上）　97
第２節　内場山墳丘墓について ……（中川）　105

挿図目次

挿図１　土量計算図　26
挿図２　近世墓出土の遺物　56
挿図３　木棺墓３出土ガラス小玉計測グラフ　62
挿図４　Ｘ線透視撮影写真　87
挿図５　管玉３にみられる表面の縞模様　88
挿図６　管玉６の側面にみられる皺状亀裂　88
挿図７　管玉端部面の写真　88
挿図８　補足説明図　99

表 目 次

表１　西紀町管内の近畿自動車道舞鶴線に関わる調査一覧　2
表２　内場山城跡遺物集計表　23
表３　作業積算根拠計算表　25
表４　木棺墓１出土ガラス管玉計測表　61
表５　木棺墓３出土ガラス小玉計測表　63
表６　試料の観察と実測　77
表７　化学分析結果　78
表８　滋賀県野路小野山遺跡出土鉄滓の化学組成　79
表９　ジフェニカルバジド・アンモニアによる呈色スポットのRf値と色調　81
表10　ジチゾンによる呈色スポットのRf値と色調　81
表11　原子吸光分析における元素の分析条件　82
表12　内場山墳丘墓出土土器と東海系標識土器（対照）の胎土の化学分析値　83
表13　内場山遺跡出土の鉛ガラス分析データ一覧　87
表14　炭化材の樹種一覧表　89
表15　内場山城跡出土木製品の樹種　94
表16　樹種別の製品一覧表　96
表17　製品別の樹種一覧表　96

図版目次

付図1　内場山城跡遺構全体図

図版1　遺跡の位置（1/75,000）
図版2　遺跡周辺微地形図
図版3　工事の路線と調査の位置
図版4　調査範囲とトレンチの配置
図版5　調査前地形図
図版6　内場山城跡全体図

山城跡の遺構

図版7　内場山城縄張り図
図版8　山城跡遺構全体図および盛土・切土の造成図
図版9　曲輪断面図(1)
図版10　曲輪断面図(2)
図版11　第1郭周辺
図版12　第3～6郭周辺
図版13　第10郭周辺
図版14　井戸2
図版15　遺物出土分布図
図版16　接合関係図
図版17　ブロックダイヤグラム

尾根部の遺構

図版18　尾根部遺構配置図
図版19　5・23号住居跡
図版20　8・12号住居跡
図版21　10・14号住居跡
図版22　10号住居跡
図版23　14号住居跡
図版24　2号住居跡
図版25　9・16・17号住居跡
図版26　3・4・18・19号住居跡
図版27　25・27～30号住居跡
図版28　墳丘墓全体図
図版29　墳丘墓SX－10供獻土器出土状況図
図版30　墳丘墓SX－10棺内副葬品出土状況図
図版31　墳丘墓SX－9
図版32　墳丘墓SX－11・12
図版33　墳丘墓SX－13～18
図版34　墳丘墓3号土器棺
図版35　墳丘墓4号土器棺
図版36　墳丘墓2号土器棺，5・6号土器棺
図版37　1号土器棺
図版38　1号墳
図版39　中世墓1・8
図版40　中世墓6・7・9・11・12

斜面部の遺構

図版41　斜面部遺構配置図
図版42　15・20・21号住居跡
図版43　和寿園地区遺構詳細図
図版44　中世土壙群詳細図

山麓部の遺構

図版45　山麓部遺構配置図
図版46　1・6号住居跡
図版47　7・22号住居跡
図版48　木棺墓1・2
図版49　木棺墓3・4
図版50　木棺墓5～7
図版51　井戸1
図版52　旧河道土層断面図

山城跡の遺物

図版53　土師器・備前焼・礎石
図版54　丹波焼(1)
図版55　丹波焼(2)
図版56　丹波焼(3)
図版57　丹波焼(4)
図版58　丹波焼(5)
図版59　中国産磁器・瀬戸美濃産陶器
図版60　木器・鉄器

尾根部の遺物

図版61　竪穴住居跡出土遺物(1)
図版62　墳丘墓出土遺物(1)
図版63　墳丘墓出土遺物(2)，竪穴住居跡出土遺物(2)
図版64　墳丘墓出土遺物(3)
図版65　土器棺(1)
図版66　土器棺(2)
図版67　土器棺(3)
図版68　中世墓出土遺物

斜面部の遺物

図版69　竪穴住居跡・和寿園地区出土遺物
図版70　中世土壙群出土遺物

山麓部の遺物

図版71　竪穴住居跡・木棺墓・井戸出土遺物
図版72　木棺墓・井戸出土遺物
図版73　旧河道出土遺物　土器(1)
図版74　旧河道出土遺物　土器(2)
図版75　旧河道出土遺物　土器(3)
図版76　旧河道出土遺物　土器(4)

図版77　旧河道出土遺物　木器(1)
図版78　旧河道出土遺物　木器(2)
図版79　旧河道出土遺物　木器(3)
図版80　旧河道出土遺物　木器(4)
図版81　旧河道出土遺物　木器(5)
石器
図版82　石器(1)
図版83　石器(2)

写真図版目次

巻首図版1　遺跡遠景
巻首図版2　山城跡の曲輪・帯曲輪（南西から）
山城跡の曲輪・帯曲輪（南から）
巻首図版3　山城跡の井戸2
中世墓1
巻首図版4　内場山墳丘墓
副葬品出土状況
巻首図版5　木棺墓1ガラス管玉出土状況
木棺墓3ガラス小玉出土状況
巻首図版6　内場山墳丘墓の供献土器
内場山墳丘墓の副葬品
巻首図版7　土器棺3
東海系高杯
巻首図版8　木棺墓1出土ガラス管玉
木棺墓3出土ガラス小玉

写真図版1　内場山城跡周辺空中写真
写真図版2　調査前遠景
1．東から
2．南東から
3．北東から
写真図版3　伏樣後遠景
1．南からの空中写真
2．東から
写真図版4　確認調査
1．5トレンチ　北西から
2．2トレンチ　南西から
写真図版5　全面調査
1．斜面部掘削状況　北から
2．1号住居跡掘削状況
北西から
写真図版6　全面調査
1．第10郭（墳丘墓）掘削状況
北西から
2．第6郭（2号住居跡）掘削状況　北から
写真図版7　現地説明会
1．曲輪と見学者
2．説明風景

山城跡の遺構
写真図版8　曲輪現況
1．第3～10郭　北から
2．第5～10郭　北西から
写真図版9　帯曲輪現況
1．遠景　南から
2．第5～10郭南側の帯曲輪
北西から
写真図版10　関連遺跡
1．八上城遠景
2．宝篋印塔（伝城主一族の墓）
写真図版11　調査後全景
1．東からの空中写真
2．北からの空中写真
写真図版12　調査後全景
1．南東からの空中写真
2．南東からの空中写真
写真図版13　調査後全景
1．南からの空中写真
2．第10郭　南からの空中写真
写真図版14　調査後全景
1．北東からの空中写真
2．第3～10郭　北から
写真図版15　曲　輪
1．第3～8郭　南東から
2．第3郭　南から
写真図版16　曲　輪
1．帯曲輪東面の状況　南東から
2．帯曲輪遠景　南から
写真図版17　帯曲輪断面
1．帯曲輪1断面（第10郭南側）
2．帯曲輪1断面（第10郭北側）
写真図版18　水の手曲輪
1．井戸2
2．井戸2　断ち割り状況
写真図版19　水の手曲輪
1．水の手周辺　東からの空中写真
2．釣瓶出土状況

写真図版20　積雪状況
1．遠景　東から
2．第5郭　北西から
写真図版21　積雪状況
1．第1～3郭付近　南から
2．第4－10郭付近　北西から
尾根部の遺構
写真図版22　尾根部の遺構
1．南西からの空中写真
2．北西から
写真図版23　竪穴住居跡
1．5号住居跡　北西から
2．23号住居跡　北から
写真図版24　竪穴住居跡
1．8号住居跡　南西から
2．12号住居跡　北東から
写真図版25　竪穴住居跡
1．10・14号住居跡検出状況　南東から
2．10号住居跡　北西から
写真図版26　竪穴住居跡
1．14号住居跡　北西から
2．14号住居跡カマド　南東から
写真図版27　竪穴住居跡
1．2号住居跡　北西から
2．2号住居跡カマド　北東から
写真図版28　竪穴住居跡
1．9号住居跡　南西から
2．9号住居跡カマド　北東から
写真図版29　竪穴住居跡
1．3号住居跡　北から
2．3・4・18・19号住居跡　南から
写真図版30　竪穴住居跡
1．25号住居跡　北西から
2．28号住居跡　北から
写真図版31　竪穴住居跡
1．29号住居跡　北西から
2．30号住居跡　北西から
写真図版32　墳丘墓
1．全景　北西から
2．SX－9　北西から
3．SX－10　北西から
写真図版33　墳丘墓
1．SX－11　北西から
2．SX－12　北西から
3．SX－13・14　北西から
写真図版34　墳丘墓
1．SX－10　供献土器出土状況　北東から
2．SX－10　供献土器出土状況　北東から
写真図版35　墳丘墓
1．SX－10　素環頭大刀出土状況　北東から
2．SX－10　鉄鏃・鉄斧出土状況　南西から
3．SX－9　鉄剣出土状況　南西から
4．SX－11　鉄槍・鉄出土状況　北東から
5．SX－15　北西から
6．SX－16　真上から
7．SX－17　真上から
8．SX－18　東から
写真図版36　土器棺
1．1号土器棺　南西から
2．2号土器棺　真上から
3．3号土器棺　南東から
写真図版37　土器棺
1．4号土器棺　南から
2．5号土器棺　真上から
3．6号土器棺　真上から
写真図版38　1号墳
1．全景　南東から
2．第1主体　北から
3．棺内の断面　南から
4．第2主体　南から
写真図版39　中世墓
1．中世墓1　北から
2．中世墓1土壙内土器出土状況　東から
3．中世墓1土壙断面　東から
写真図版40　中世墓
1．中世墓12　西から
2．中世墓7　南から
3．中世墓9　東から
4．中世墓9　上器出土状況
5．中世墓9　土器出土状況

斜面部の遺構
写真図版41　斜面部の遺構
　1．調査前　南から
　2．調査後　南から
写真図版42　竪穴住居跡
　1．15号住居跡　南西から
　2．20・21号住居跡　北東から
写真図版43　中世土壙群
　1．ＳＫ－１・15　北から
　2．ＳＫ－６　西から
写真図版44　中世土壙群
　1．ＳＫ－11・13　東から
　2．ＳＫ－16　東から
山麓部の遺構
写真図版45　竪穴住居跡
　1．１号住居跡　西から
　2．６号住居跡　北東から
写真図版46　竪穴住居跡
　1．７号住居跡　北東から
　2．22号住居跡　南から
写真図版47　木棺墓
　1．木棺墓群　北から
　2．木棺墓１　北から
　3．木棺墓２　西から
　4．木棺墓３　西から
写真図版48　木棺墓
　1．木棺墓４　西から
　2．木棺墓５　南から
　3．木棺墓６　北から
　4．木棺墓７　南から
写真図版49　井戸
　1．井戸１　南西から
　2．井戸１　南東から
　3．水溜に使われた曲物
　4．井戸側　南西から
　5．曲物の内面
写真図版50　旧河道
　1．三角水田地区の旧河道
　　南から
　2．18トレンチ拡張区の旧河道
　　南から
写真図版51　旧河道
　1．旧河道断面
　2．木器出土状況
　3．木器出土状況
　4．旧河道掘削状況
　5．旧河道掘削状況
山城跡の遺物
写真図版52　土師器・備前焼
写真図版53　瓦質土器
写真図版54　丹波焼(1)
写真図版55　丹波焼(2)
写真図版56　丹波焼(3)
写真図版57　丹波焼(4)
写真図版58　中国産磁器・瀬戸美濃産陶器
写真図版59　木器・鉄器
尾根部の遺物
写真図版60　竪穴住居跡出土遺物(1)
写真図版61　竪穴住居跡出土遺物(2)
写真図版62　墳丘墓出土遺物(1)
写真図版63　墳丘墓出土遺物(2)
写真図版64　墳丘墓出土遺物(3)
写真図版65　墳丘墓出土遺物(4)
写真図版66　土器棺(1)
写真図版67　土器棺(2)
写真図版68　中世墓出土遺物(1)
写真図版69　中世墓出土遺物(2)
写真図版70　中世墓出土遺物(3)
斜面部の遺物
写真図版71　竪穴住居跡・和寿園地区出土遺物
写真図版72　和寿園地区・近世墓出土遺物
写真図版73　中世土壙出土遺物
山麓部の遺物
写真図版74　旧河道出土遺物　土器(1)
写真図版75　旧河道出土遺物　土器(2)
写真図版76　旧河道出土遺物　土器(3)
写真図版77　旧河道出土遺物　土器(4)
写真図版78　旧河道出土遺物　木器(1)
写真図版79　旧河道出土遺物　木器(2)
写真図版80　旧河道出土遺物　木器(3)
写真図版81　旧河道出土遺物　木器(4)
写真図版82　旧河道出土遺物　木器(5)
石器
写真図版83　石器(1)
写真図版84　石器(2)
分析・鑑定
写真図版85　鉄滓の分析
写真図版86　炭化材の樹種(1)
写真図版87　炭化材の樹種(2)
写真図版88　炭化材の樹種(3)
写真図版89　炭化材の樹種(4)
写真図版90　木製品の樹種(1)
写真図版91　木製品の樹種(2)

第１章　調査の経緯

第１節　近畿自動車道建設事業に関わる遺跡の調査

近畿圏中枢部と丹波・丹後地域を結ぶ大幹線道として、日本道路公団が近畿自動車道舞鶴線を計画した。近畿自動車道舞鶴線は兵庫県美嚢郡吉川町において中国自動車道から分岐し、三田市、多紀郡丹南町・西紀町、氷上郡春日町・市島町を経て京都府舞鶴市に至る総延長76.5kmの区間である。

兵庫県教育委員会は周知の遺跡の提示を行い、路線計画の変更を含めた埋蔵文化財保護のための協議を文化庁の指導のもとに行った。昭和53年には、遺跡詳細分布調査で新たに発見した遺跡を含めた路線内の遺跡の取り扱いについて、日本道路公団大阪支社と協議を行った。その時点ではまだ多くの未買収地区があり、遺跡詳細分布調査も実施できない箇所が残されている状況であった。そこで昭和56年からは、立入りの可能な箇所から遺跡詳細分布調査を行い、調査の必要を認めた地区については随時、確認調査および全面調査を実施した。

多紀郡内の調査を概観すると、丹南町においては、丹南インターチェンジ予定地内の杉・西吹遺跡など７遺跡の確認調査と、庄境古墳群、中世初田館跡、近世の篠山城石切り場跡、以上３遺跡の全面調査を行い、調査は昭和62年２月までに終了した。

西紀町においては、昭和57年４月からNo.31～33、35、36、39地点の確認調査を順次実施した。確認調査などの結果、西木之部遺跡（弥生時代から鎌倉時代にかけての集落）と板井寺ケ谷遺跡（旧石器時代から鎌倉時代にかけての集落）、上板井古墳群（円墳２基と鎌倉時代の経塚）、沢の浦古墳群（円墳２基）、箱塚古墳群（円墳３基と江戸時代の墓地）、内場山城跡（中世山城と弥生時代から鎌倉時代にかけての墳墓と集落）の６遺跡について、全面調査を実施した。西紀町管内の調査は、昭和60年12月までに終了した（表１参照）。

発掘調査終了後の遺跡の取り扱いについては、記録保存によって対応している。ただし、沢の浦１号墳については道路施工計画を変更し、側道斜面部に盛土をして、現地における保存を図っている。また箱塚４号墳の石室基底部については西紀サービスエリア内に移築し、一般に公開を行っている。

表1　西紀町管内の近畿自動車道舞鶴線に関わる調査一覧

遺跡調査番号	遺跡名	調査担当者	調査の種類	調査期間	所在地	調査の結果
820024	№35地点	池田正男、村上泰樹	確認	57.11.26～57.12.7	上板井	板井寺ケ谷遺跡全面調査実施
820025 820028	№39地点 （小坂古墳群）	池田正男、村上泰樹	確認	57.12.13～57.12.20	小坂	遺構は確認できず
820027	№32地点 西木之部遺跡 （B地区）	池田正男、村上泰樹	確認 全面	57.4.12～57.8.18 57.8.19～57.12.17	東木之部、西木之部	確認調査の結果、西木之部遺跡の全面調査実施
820056	№31地点	池田正男、村上泰樹	確認	57.11.8～57.11.25	東河地、西木之部	遺構は確認できず
820057	№33地点	池田正男、村上泰樹	確認	57.5.10～57.5.17	東木之部	遺構は確認できず
820065	№36地点	池田正男、村上泰樹	確認	57.12.21～57.12.24	上板井 字興法寺他	上板井古墳群全面調査実施
830024	板井寺ケ谷遺跡	池田正男、市橋重喜	確認、全面	58.10.1～58.3.31	上板井 字寺ケ谷	鎌倉時代集落
830025	西木之部遺跡 （B地区）	池田正男、村上泰樹 市橋重喜	全面	58.4.12～58.10.20	東木之部 字観音ノ坪	弥生～鎌倉時代集落
830026 830027	上板井古墳群 上板井経塚	池田正男、市橋重喜	全面	58.11.1～59.3.31	上板井 字興法寺他	円墳2基、経塚
830028 830029	沢の浦古墳群	池田正男、市橋重喜	全面	58.10.23～59.3.31	上板井字友永	円墳2基
840026	板井寺ケ谷遺跡	水口富夫、市橋重喜 岸本一宏	全面	59.4.13～59.12.25	上板井 字寺ケ谷	旧石器～鎌倉時代集落
840027	西木之部遺跡 （A地区）	水口富夫、市橋重喜 岸本一宏	全面	60.1.6～60.3.27	東木之部 字観音ノ坪	弥生～鎌倉時代集落
840055	西木之部遺跡 （C地区）	植老拓治、村上泰樹 平田博幸	全面	59.12.27～60.3.30	東木之部 字観音ノ坪	弥生～鎌倉時代集落
850002	箱塚古墳群	岡崎正雄、市橋重喜 岸本一宏、山下史朗 中川　渉	全面	60.5.8～60.7.30	小坂字箱塚	円墳3基、江戸時代墓
850006	内場山城跡	岡崎正雄、市橋重喜	確認	60.4.23～60.4.30	下板井、東木之部	山城跡
850007	内場山城跡	岡崎正雄、市橋重喜 岸本一宏、山下史朗 中川　渉、藤村淳子 山上雅弘	全面	60.7.16～61.1.10	下板井字内場・荒田坪、東木之部字内場	山城跡 弥生～鎌倉時代集落・墳墓 江戸時代墓

参考文献

兵庫県教育委員会『庄境2号墳』（近畿自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ）1983年
兵庫県教育委員会『上板井古墳群』（近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ）1986年
兵庫県教育委員会『庄境1号墳』（近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅵ）1987年
兵庫県教育委員会『沢の浦古墳群』（近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅷ）1987年
兵庫県教育委員会『鐘山城採石場』（近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅸ）1988年
兵庫県教育委員会『板井寺ケ谷遺跡』（近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅳ）1991年
兵庫県教育委員会『初田館跡』（近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書XIX）1992年

第2節　調査に至る経過

西紀町管内における、近畿自動車道舞鶴線関係の埋蔵文化財発掘調査は、昭和57年度から開始し、昭和59年度までに4箇所の遺跡について全面調査を終えていた。その成果は旧石器時代、弥生時代、古墳時代、奈良～鎌倉時代にわたるもので、貴重な資料も多く含まれていた。また遺跡が濃密に分布する点からも注目されていた。しかし昭和60年3月の段階においては、箱塚古墳群と内場山城跡が含まれる地区は、用地買収の遅れなどのため、手がつけられていない状況であった。

内場山城跡が立地する独立丘陵は、北方に多紀郡の一宮である川内多々奴比神社（延喜式内社）が鎮座し、東に平安時代からの近衛家領宮田荘を望み、南麓下に交通の要路である山陰道を抑えるという要衝の地を占めている。室町時代から戦国時代にかけては、篠山盆地の各所に特徴的な山城が展開していた。例えば篠山町の八上城は盆地のほぼ中央を抑え、多紀郡一円を支配する波多野氏の拠点となっていた。また鐘坂峠には金山城、佐仲峠には三尾城、東寺領大山荘には大山城、宮田荘には板井城などが配置しており、内場山城跡もその一環として築かれたものと考えられる。

城跡の存在は、江戸時代に篠山藩士永戸半兵衛貞著らが著した地誌『丹波志』[1]に詳しく記載されており、古くから知られていた。その中には城主の館跡とみられる方形区画が、丘陵の南側に残っていることも記されていた。また城跡に関連した遺跡として、宮田の天満神社の宝篋印塔と、東木之部の薬師堂と宝篋印塔などを挙げることができる。

さらに内場山の地が栖雄氏の氏神を祀る川内多々奴比神社に隣接し、江戸時代以降には下板井集落の共同墓地となっている点などから、地元では内場（ないば）は凶ぎ場（なぎば）＝祭祀場に通じるという説が生み出されている。実際に現在も稲荷社が祀られており、眺望もよくきく点からも、城跡の下層に何らかの遺構が存在する可能性は充分に考えられた。

ところが昭和57年に発行された『兵庫県中世城館・荘園』のP.77『内場山城』の項には、「昭和33年社会福祉法人多紀養老院和寿園の建設で破壊されている」と記述されており[2]、遺構が遺存しているかどうかは危ぶまれていた。

内場山城跡の含まれる路線センター杭No.134～137 の区間は、特別養護老人ホーム「和寿園」の移転後、漸く用地内への立入りが可能となり、昭和60年4月に詳細分布調査を行うことになった。現地踏査は、西紀町管内でともに調査未了であった箱塚古墳群と併せて、4月16日に行った。その結果、尾根線上には階段状に曲輪が設けられ、周囲には腰曲輪が取り付くことが判り、「丹波志」に記載されている曲輪が、比較的良好な状態で残っていることが確かめられた。そこで引続き4月23日から、内場山城跡の確認調査に着手することが決定した。

しかし今でこそ戦国時代の山城跡の発掘調査は常識となったが、その当時は山城跡に対する

認識は低く、調査事例もほとんどなかった。結果的に内場山城跡の調査は、兵庫県下における山城跡の本格的な発掘調査の嚆矢となり、次に続く三田市中尾城跡の調査への足掛かりともなった。しかし当初は調査方法が確立しておらず、確認調査も手探りの状態で開始することになった。

確認調査にあたっては、独立丘陵全域が山城の遺構であるという考え方を基本とし、丘陵の尾根線から斜面および山麓にまで亜る トレンチを数本設け、遺構・遺物の検出に努めた。調査の進行に伴い、山城の曲輪や遺物を確認するとともに、山城以前の遺構・遺物が数多く出土する事態に直面し、山城の立地する丘陵部だけでなく、山麓の水田部にまで目を向ける必要に迫られた。

内場山城跡南側の水田部は、先にも述べたように、城主の館跡があると伝えられる重要な地区であった。しかし調査への対応が遅れたことによって、その時点ですでに盛土が終了しており、調査は不可能となっていた。一方、川内多々奴比神社に通じる北東側の水田部は、まだ工事にかかっておらず、調査が可能な状況であった。

確認調査の結果を踏まえて、全面調査は丘陵部の道路用地にかかる部分全域と、北東側水田部の工事未着手部分の、計約16,000㎡を対象とすることになった。ただし北東側水田部については、全面調査の中で、トレンチによって二次確認的な調査を行うこととし、その結果によって随時調査区を広げる手順をとった。

全面調査は箱塚古墳群の調査終了を待って、昭和60年7月16日から開始し、昭和61年1月10日まで約半年間の日程で実施した。

註

(1) 『多紀郡中城跡記』(1686年)、『篠山領地誌』(1687年)、『篠山封彊志』(1716年)、『兵家茶話』(1721年) を参考とし、篠山藩士古川茂正・永戸貞著が実地に調査して編纂した。寛政6(1794)年刊行。

(2) 兵庫県教育委員会『兵庫県の中世城館・荘園遺跡－兵庫県中世城館・荘園遺跡緊急調査報告－』1982年

第２章　調査の方法

第１節　確認調査

１．調査の体制

調査主体　　兵庫県教育委員会　社会教育・文化財課

調査担当者　　兵庫県教育委員会　社会教育・文化財課　埋蔵文化財調査係

主　　任　　岡崎正雄

技術職員　　市橋重喜

２．調査の概要

確認調査にあたっては、独立丘陵全域が山城の遺構であるという視点を基本に据え、調査区域内に幅１mのトレンチを８本設けて、遺構・遺物の検出に努めた。

１・２トレンチは、特別養護老人ホーム「和寿園」が建っていた東斜面の平坦地（和寿園地区）に設定した。１トレンチは崖面を、長さ30mにわたって整形し、断面を観察した。２トレンチは平坦地上を長さ32mにわたって掘り下げた。その結果、この地区には古墳時代～平安時代の遺構・遺物が存在することが判明した。

３・４トレンチは、それぞれ第１・３郭の東側斜面に設定した。両トレンチでは、腰曲輪を確認した他、包含層中より弥生土器・土師器・須恵器などが出土した。

５トレンチは第４～11郭にかけての尾根線上に、６トレンチは第10郭南側の斜面に設定した。その結果、山城跡の曲輪や腰曲輪は比較的良好に遺存していることが判明した。また第５郭では住居跡らしき遺構を、第10郭では墳墓に供献された土器群を検出した。

７・８トレンチは、和寿園地区下の斜面と平坦地に設定した。他のトレンチと同様に、包含層中より弥生土器・土師器・須恵器などが出土した。

３．調査の結果

以上の確認調査の結果からみて、山城跡の遺構は比較的良好な状態で遺存しており、全面調査によって曲輪の復原も可能な状況であると判断できた。さらに調査区の全域から弥生時代～中世の遺物が出土しており、山城構築以前の遺構も、調査の中で大きなウェートを占めることになった。同時に山麓の水田部分についても、確認調査を施す必要性が生じてきた。

従って全面調査の範囲は、丘陵の道路用地にかかる部分全域と、丘陵北東側の水田部分を含む約16,000㎡を対象とする。ただし北東側水田部分に関しては、確認調査を実施していないため、本調査の中で二次的な確認調査を行い、その結果によって随時調査区を広げるという手順をとることにした。

4．調査日誌抄

4/16(火)　内場山城跡と箱塚古墳群について現地立会いを行う。

4/23(火)　内場山城跡調査前の遠景写真撮影後、再び現地踏査し、古代・中世の遺物を発見する。

4/24(水)　トレンチ設定から確認調査を開始する。山城の確認調査のため、現地形から見て、南より第1曲輪（第4～10郭）、第2曲輪（第3郭）、第3曲輪（第1郭）と仮称し、下の旧和寿園建物跡地の平坦部を含め地区番号を付ける。和寿園1トレンチで6枚の包含層を確認する（縄文～平安時代）。第2・3曲輪間で備前焼・丹波焼擂鉢を発見する。

4/25(木)　和寿園1Tの土層図を作成し、2・7・8トレンチの掘削を続ける。第2曲輪（4トレンチ）、第3曲輪（3トレンチ）でも掘削を続け、第3曲輪で須恵器杯を発見する。

4/26(金)　第2曲輪（4トレンチ）で須恵器・土師器の包含層と上層の山城の整地層を確認する。和寿園2・7・8トレンチの土層図を作成する。

4/27(土)　第1曲輪に6トレンチを設定する。第1曲輪の5トレンチから弥生土器を発見する。『丹波志』の内容を検討すると、記載された山城縄張りの名称と、確認調査で仮称していた第1～3曲輪の対応が異なることが判り、本調査時に呼称を統一することにした。また、南山裾の内場ノ坪の可能性のあった地区は、既に工事が完了していることが判った。

4/30(火)　第1曲輪の掘削を完了し、写真撮影と平板図を完了する。

5/7(火)～13(月)　第1～3曲輪の土層図を作成する。第1曲輪の5トレンチと6トレンチとの交点部分が墳墓になると予測し、調査を終える。

第2節　全面調査

1．調査の体制

調査主体	兵庫県教育委員会　社会教育・文化財課	
調査担当者	兵庫県教育委員会　社会教育・文化財課　埋蔵文化財調査係	
	主　　任	岡崎正雄
	技術職員	市橋重喜、岸本一宏、山下史朗
		中川　渉、藤村淳子、山上雅弘
調査委託	東海興業（株）	

2．調査区の設定

全面調査は確認調査の結果に基づいて、城跡の立地する丘陵部分から山麓の水田部分までを範囲とし、路線センター杭No134～137間の約16,000㎡を対象とした。

調査区内の地区割りには国土座標を利用し、20mメッシュの座標を組んだ。座標の呼び方は南北ラインを西からアルファベットで、東西ラインを南から算用数字で表した。座標の基準はFラインがX＝＋76,340、7ラインがY＝－100.360である。地区の呼び方は、例えばFラインと7ラインの交点F7を南西隅とする20m方眼をF7区とし、それからさらに10m方眼に4分割して、南西隅から逆時計回りにa・b・c・dの4地区に小区割りをし、F7a区などと表記して、遺構の位置・遺物の出土地点を記録した。

3．調査の概要

工事の工程の都合上、工事用道路部分の調査を急ぐため、2地区に分けて調査を行った。

第Ⅰ期(7/16～8/7)には、まず掘削に先駆けて、航空写真測量によって調査前地形図を作成した。次に確認調査の成果をもとに、二次的なトレンチ調査を行った。その結果水田部分に設定した9・10・21トレンチにおいて、旧河道より建築材を含む多量の遺物が出土し、さらにその下層からはアカホヤ火山灰・大山伯耆火山灰・姶良Tn火山灰を検出した。また丘陵部分には新たに11トレンチを設定した他、1・6・7トレンチを延長して土層の堆積を確認した。

第Ⅱ期(8/8～10/17)には、二次的トレンチ調査の結果を踏まえ、現場事務所位置を移し、工事用道路部分（約3,200㎡）の調査を開始した。表土除去の際、近世墓を多数検出した。山麓の平坦地では弥生時代～中世の遺構を調査し、旧河道からは多量の土器・木器が出土した。谷部の包含層から旧石器が出土したため、確認グリッドを設けたが、旧石器時代の包含層は検出できなかった。10/9には航空写真測量を実施し、10/17に調査を完了させ、日本道路公団三田工事事務所と管理引継ぎを行った。

第Ⅲ期(10/18～12/22)には、山城跡の本格的な調査を開始した。丘陵全体の覆土を除去し、山城跡の曲輪を表出した。同時に、下層の住居跡・墳墓などの遺構についても調査を行った。水田部分には17～20トレンチを設定し、火山灰・植物遺体などのサンプリングを行った。また18トレンチの南北を拡張して、全面調査を実施した。12/17には大雪に見舞われたものの、12/21に現地説明会を開催し、12/22に航空写真測量を行った。

第Ⅳ期(12/23～1/10)には、もう掘削は終了しており、遺構の細部精査や図化を行い、1/10までに現地での作業を仕上げた。

調査終了後、1/14に日本道路公団三田工事事務所と管理引継ぎを行い、内場山城跡の調査を完了した。

第3節　整理作業

1．調査の体制

昭和62年度

調査主体	兵庫県教育委員会　社会教育・文化財課	
調査担当者	兵庫県教育委員会　社会教育・文化財課　埋蔵文化財調査係	
	主　査	岡崎正雄
	主　任	加古千恵子
	技術職員	市橋重喜、岸本一宏、山下史朗、別府洋二
		中川　渉、菱田淳子、山上雅弘

平成4年度

事業主体	兵庫県教育委員会	
調査主体	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所	
調査担当者	主　査	岡崎正雄、加古千恵子
	主　任	山下史朗
	技術職員	中川　渉、菱田淳子、山上雅弘
	嘱託職員	山口卓也、伴　悦子、尾崎比佐子、布施英子
		早川亜紀子、二階堂庫

2．調査の概要

発掘調査現場事務所において土器類・木製品・石製品の水洗い・ネーミング作業を行い、金属製品とともに兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（以下、調査事務所）および魚住分館へ収納した。

昭和62年度には、魚住分館において接合・復元作業を行い、調査事務所において実測・写真撮影・金属製品の保存処理を行った。また木製品の保存処理については、財団法人元興寺文化財研究所に委託した。

さらに関連科学による分析・鑑定の見地から、鉄滓の分析については東京工業大学　高塚秀治氏、赤色顔料と土器の胎土分析については武庫川女子大学薬学部　安田博幸教授・金杉直子氏、ガラス玉の分析については奈良国立文化財研究所　肥塚隆保氏、炭化材の樹種同定については鳴倉巳三郎氏、木製品の樹種同定については京都大学名誉教授　島地　謙・京都大学木質科学研究所　林　昭三の両氏に依頼した。

平成4年度には、調査事務所においてレイアウト・トレース作業を行い、報告書を刊行した。報告書に使用した図面・写真・遺物は、調査事務所および魚住分館に保管している。

第３章　山城跡の調査

第１節　概要

１．はじめに

山城遺構については、地形および地名から『丹波志』に記載のある「内場山古城」と考えられる。このため本書では山城の名称を内場山城跡（ただし、まとめの記述では内場山城）とした。山城の調査にあたっては、斜面・山麓などにも遺構の存在が予想されるため、出来るかぎり広く平面を調査するよう努めた。この上で曲輪内外の建物・土壙などの遺構の検出作業を行うと共に、曲輪の造成痕跡の把握を心掛けた。遺物の取り上げに際しては、前述のように国土座標を基に設定した地区割りに従って取り上げている。

２．周辺の環境について

内場山城跡の前面には山陰道の推定コースが通る。この街道を西へ辿れば中世荘園「大山荘」に抜け、鐘坂峠を越えて氷上郡に達する。一方、山陰道を内場山城跡の東で北に分岐すると板井城跡を経て、栗柄峠や佐仲峠を通り、やはり氷上郡に入る街道がある。つまり、城跡は多紀郡から氷上郡に抜ける要衝の地に立地している。

内場山城跡に最も近い山城は板井城跡である。先に初田館跡の報告で述べたが、板井城跡については大きな堀切と土塁、比較的広い曲輪を持つなど新しい城郭の構造を伝えている。他に、中世荘園「大山荘」の荘域の南側には大山城跡がある。大山城跡は大山川に突き出す河岸段丘上に立地するもので、段丘を大きく分断する堀と、これに沿って土塁遺構が残っている。

また、帯曲輪に特徴の見られる山城としては、多紀郡では八上城跡・油井城跡１・大沢城跡などがあり、氷上郡でも山垣城跡などが知られる。

３．『丹波志』について

内場山城跡は『兵庫県の中世城館・荘園調査―兵庫県中世城館・荘園遺跡緊急調査報告―』[1]によれば、特別養護老人ホーム「和寿園」の開発によって遺構は破壊されたとなっている。この記述によって現在では山城跡は見るべき遺構を現地に残していないという考えが一般的であった。また、同城についての記述全体も簡単なもので、山城としての評価も高いものではなかった。

一方、江戸時代の地誌『丹波志』は山城の縄張りについて詳細な記述を残している。『丹波志』は籠山藩士、水戸半兵衛貞著が著したもので、江戸時代中頃の当地域を語る貴重な記録である。同書は個々の曲輪規模や曲輪の位置について詳細に形状・寸法まで記述している。そこでここでは『丹波志』の記述を紹介し、現地との照合を行っておく[2]。

一、　内場山古城

東木ノ部の東相去る丁二町西方に道有て独立の山にて下板井村南東木ノ部村の東西村の境界を限り此山上にあり内場某と言人居因て山に名く但し何れの頃と言うことを知らずと東木ノ部村人の説又内場藤十郎と言て山名小太郎の家臣なりと言是下板井の説なり。

私言下板井に山名小太郎と言人の城跡あるが故にこの説をなすか板井の山城平城共に前に出ず其の山城只本二三の三頃入り平城と言も又方一町にもたらず然るに此山城跡郭数多し最地によって形を制するは習と言共人数の多少によるはもとよりなるに其主たる人の山城すら右の如き処其臣として主の城地近辺の高掃地に深き居えき道理なし是等の義を以て見れば山名の臣にはあらざるべし又東木ノ部村東古城山の南に龍水池あり此池塊の西大手道辻堂半町許北の山下に薬師堂あり。此境内に古石方二尺高四尺許の宝篋印塔二基あり。内場氏夫婦の塔と言。別に一小塔あり、是は彼息男の塔と言、或は内場の家臣の塔と言。彼小塔の台石は往年故あって他地に移され村民其代りの台石を求めんと石工に問石工が云、この石此辺になし、たやすく求めがたしと、故に求める事を得ずと言伝う。彼是考合すれば城主の塔たるかと、是亦東木ノ部老の説なり。

本　丸　東西南北共二十間　山西の東西道より直高十五間

二　郭　東西八間　南北十間　本丸の南一間許下此処東より登路在、三十七間

三　郭　東西十間　南北十三間　二郭の南四尺許高く本丸より二尺許り低し

四　郭　東西十三間　南北四間　三郭の南七尺許低し

五　郭　東西八間　南北四間　四郭の南一間下

六　郭　東西五間　南北二間半　五郭の南一間低し

七　郭　東西五間　南北一間半　六郭の南一間低し

八　郭　東西五間　南北六間　七郭の南一間低し

九　郭　東西八間　南北五間　八郭の南一間低し

十　郭　東西八間　南北五間　九郭の南三尺高し

十一郭　東西十二間　南北一間半　十郭の南一間半低し此所より東西の方へ廻道あり此路の上東西共に切岸なり高一間或いは一間半

十二郭　東西七間　南北三間　十一郭の南一間低し此処より南麓の路まで直下七間斜下二十間

北二郭　東西九間　南北八間　本丸の北三尺低し

同三郭　東西八間　南北七間　二郭の北二尺高し

同四郭　東西十間　南北二間　此郭より東西の方へ廻り道あり路幅一間南十一郭の郭に通三郭の北一間半二尺低し。

此処より北麓路迄真下十三間斜下五十五間。此北麓の路者東木ノ部より下板井への通路にして板井の神社一宮山との間なり路幅五尺又四ノ郭の土地と宮山との峯の高さと比ぶるに宮山の方西間高し。又四郭の土地と宮山の土地比する処にて二山の相隔る間弐百十間許りなり。右城山の南に堀道と小溝とを隔て田在、四面溝あり、道あって限りとす。東は溝を限て下板井、南は宮田より木の郷並に大山への大道を限る。字を内場の坪と言。四面の間数左の如し。

東方　南北五十五間、西方　南北四十三間、南方　東西四十五間、北方　東西半より西三十三間斜也半より東二十一間但道なり。

私言是処は内場平生の住居の旧跡か。

以上の記述と現地の調査前の地形とを照合し、比定してみたのが図版７である。これによれば、『丹波志』の記述では標高243mの北側尾根の頂上が本丸（第一郭）で、以下南に１段下がって第二郭、さらに南側の尾根頂上を第三郭と考えているようである。第四郭から第十一郭にかけては、ほぼ現地形と対応が可能である。ただし、第六郭先端の幅２mほどの小段を第七郭としている点については（段差１間というのは誤記と思われる）、これは範囲が小規模すぎるため、１つの曲輪と理解するより第六郭の一部と理解したほうが良いようである。さらに、第十二郭については平坦面が認められないため存在が確かめられなかった。

本丸から北背後の尾根筋についても地形と記述がよく一致する。ただし、記述内の本丸と北第二郭・北第三郭は全て、山頂部（第１郭）の曲輪を指すようである。第１郭の曲輪内には確かに軽微な段が見られ、記述と符号している。しかしこの部分は別の曲輪とするよりも同一曲輪内の小区画段と考えた方が妥当と思われる。他に、北背後には北第四郭がある。現地形と曲輪の名称は対応するため、『丹波志』の記述はやはり現地を踏査したものであることは疑いない。

帯曲輪については第十一郭・北第四郭に「廻り道」という記述が見え、これを山城に関連する遺構と捉えている。ただし、竪堀・土塁については触れられていない。

この他、文末の「内場平生の住居の旧跡か」というくだりには大いに興味が持たれる。周辺の地形については図版２・３に示したとおりである。この中の図版２に示した斜線の範囲は、「四面溝あり、道あって限りとす」以下の記述に対応する場所と考えられる。すなわち、周囲の道路の拡幅や舗装などを考慮しても、各辺の距離と北側が「西三十三間斜也」という記述が現地と非常に良く符合している。さらに、現在の小字名でも「内場の坪」と呼ばれていることから、この場所が『丹波志』にいう平生の住居－居館－であることは疑いがない。

この地点は明らかに用地内に入っていたものの、調査は行われなかった。記述にいう場所が本当に居館であったかどうか確認できなかったことが悔やまれる。

以上の通り『丹波志』と現地の地形はよく符合しており、この地形は現在の研究から評価すれば山城遺構と考えられるものである。従って、山城が破壊され遺構が残らないという指摘は当たっておらず、当城については江戸時代の地誌のほうが事実を伝えていたといえよう。

４．各郭の呼称と用語について

以上のように『丹波志』に記された地形は現代まであまり変わっていないことが判明した。そこで、本報告においてもできる限り同書の記述を活かすことを旨とし、各郭の名称を図版７のように統一した。曲輪の名称の個々については前述したとおりの根拠から、第七郭・第十二郭を欠番、第十一郭を帯曲輪１、北第四郭を北第１郭とし、さらに北の郭群を北第１～５郭とそれぞれ呼称した。また、帯曲輪２～４・竪堀・土塁については『丹波志』に記述がないので、今回新たに図のように呼称することとした。

5．現　状

内場山城跡の現況は『兵庫県の中世城館・荘園調査－兵庫県中世城館・荘園遺跡緊急調査報告－』の記述に言うほど破壊されていないことは先に触れたが、次の点に関しては曲輪の破壊や削平が行われていた。

遺構が改変された大きな原因は次の３点である。①特別養護老人ホーム「和寿園」と遊歩道の建設、②この施設と遊歩道の撤去、③近世の秋葉社の建立に伴う削平などである。

中でも最も影響を与えたのは①の「和寿園」の遊歩道の建設によるものである。この道は山の東斜面一帯を巡って、曲輪あるいは腰曲輪を繋ぐように設けられ、第３郭には展望を兼ねた休憩所も作られた。遊歩道は個々の曲輪を完全に破壊するものではないが、曲輪の形状を改変したり、遺構面を削平するといった改変を各所に行っており、遺構面や構造の究明に必要な部分の破壊は大きかった。

また、第３郭に大きな影響を及ぼしたものとしては、②の施設撤去時の重機使用がある。和寿園の施設撤去では、山頂部分の遊歩道や休憩所に重機が上がり、休憩所などの施設（展望台・椅子など）が撤去された。残念なことはこの時、山頂の第３郭において、重機で穴を穿ち、撤去するはずの瓦礫を埋めてしまったことである。曲輪内部は大きく破壊をうけ現状を推し量ることができなくなった。このため、山城の重要な部分がこの行為によって調査不可能となった。

また③によるものとして、第８郭には近世に秋葉社が設けられ、第10郭には鳥居が建っていたようである。秋葉社への参道は南東驚の尾根稜線上を登ってくるもので、帯曲輪１から第10郭南東隅に取り付く道があったようである。

註

(1)　兵庫県教育委員会『兵庫県の中世城館・荘園調査－兵庫県中世城館・荘園遺跡緊急調査報告－』1982年

(2)　記述の出典は、『丹波志　上』杉本清一発行　1973年刊行本による。

第2節　調査の成果

1．概　略

今回の調査は内場山城跡全体の2/5、約15000㎡の範囲について実施した。調査の結果、検出できた遺構は個々の曲輪・帯曲輪の他、土壙・溝・井戸などである。調査範囲は前述の曲輪の内、第1～3郭の一部，第4～10郭・帯曲輪2～4の全部、帯曲輪1の東側を除く大部分が含まれる。これは山城が立地する独立丘陵の南東側のほとんどと東斜面の2/3を含むものである。本節ではこれらの遺構について第1郭から順に報告する。

2．第1郭

第1郭は標高244mの山頂部にあたる。この曲輪は大半が調査区の外側にあって、全体の詳細を明らかにするには至らなかった。このため，遺構などの諸施設や遺物の散布状況の詳細については全く不明である。

現地形から推定すると、この曲輪は南東から北西方向に細長く続くもので、最大長50m、最大幅20m前後の規模を有すると思われる。そして調査区周辺は、幅20m、面積約140㎡の規模を持つ小規模な段となっている。この内、調査を行った範囲は面積約40㎡弱である。

なお、この曲輪東斜面には表土に混じって多くの土師器片が出土した。地形の状況から判断すると、第3・10郭と同じく古墳あるいは墳丘墓が立地する可能性が高い。このため曲輪平坦面は墳丘などの前時代の造成面をそのまま利用していると考えられる。

前方には1段下がって第2郭，両側には帯曲輪（東側1・4、西側1・5）が，北背後には1段下がって北第1曲輪を配している。また、曲輪の北端の両側面には竪堀と土塁が取りついている。第1郭と第2郭の段差は1.0m，第1郭と北第1郭の段差は0.9mである。帯曲輪4には4m、帯曲輪5には7m前後の段差を持っている。

3．第2郭

第1郭と第3郭に挟まれ、両曲輪より1段低くなる。第1郭同様、ほとんどの部分が調査範囲外である。このためやはり曲輪内の諸施設や遺物の散布状況の詳細は不明である。

地形から推定すると西側は第3郭の側面まで延びていると考えられる。規模は最大の幅が18m前後で，面積300㎡前後と推定される。

4．第3郭

第3郭は内場山城跡南側の山頂部にあたり、標高243mを測る。曲輪の周囲は南側に第4郭，両側面に帯曲輪3が取り巻き、北背後を第2郭が囲む。この曲輪周辺では，帯曲輪が最大三重になっており、第1郭周辺と同様、多重に配置される特徴がある。東側でみると帯曲輪1から順に帯曲輪2・3・4と雛壇状になり、厳重な防禦がなされているのがわかる。

曲輪の平面形は円形に近く、周囲より一段高い壇状を呈している。この地形は第1郭同様古

墳の墳丘地形を利用したもので、墳頂部には南北軸を持つ主体部（第４章第５節参照）も見つかっている。また、曲輪内部は緩い傾斜を持っており、曲輪と斜面の境は明瞭ではない。さらに曲輪斜面の傾斜についても、他の曲輪ほど急傾斜ではないため、古墳の墳丘が形成した地形にあまり手を加えていないと考えられる。ただし、第４郭から帯曲輪２の傾斜立ち上がり部分、つまり古墳の墳裾部分には高さ10～15cm前後の地山掘削による段差が付いている。おそらく築城時に第３郭などの曲輪面を確保する意図で、部分的に墳裾を削平したものと思われる。

曲輪内部は約2/5を調査したが、建物などの諸施設は検出されなかった。遺物は曲輪面や斜面の表土中より出土し、曲輪面より斜面の方から多く出土している。前述のように休憩所や重機による破壊の影響で、表土が流失したことが原因と思われる。

５．第４郭

第４郭は第３郭の南下に位置する曲輪で、帯曲輪と一体となって、第３郭の南および東側を囲む構成をとる。この曲輪から南側に第10郭にかけて階段状に曲輪が連なっており、第４郭はこの階段の起点にあたる。曲輪内には竪穴住居跡９・土器棺墓５などが検出できたが、山城に関係する建物などの諸施設は検出されなかった。

曲輪の東側は帯曲輪２に続くがその境は明瞭ではない。しかし、図版８のように帯曲輪２は第３郭の傾斜裾を削平し前面に大きく盛土する造成を行うが、第４郭については第３郭の傾斜裾部分に軽微な削平を行う以外は盛土などの造成が行われない。この境界が「帯曲輪造成境界」（挿図８）とした部分である。従って、この境界の西側を第４郭の範囲と考えた。

西側については調査範囲外に延びており詳細はわからない。現状地形を観察する限りでは、幅は先端の方で狭くなるようであるが、全体的には一定の幅を有している。従って現地形で観察できる西部分の端までを第４郭と推定した。

曲輪の規模は長さ34.0m、幅6.5m、面積220㎡前後で、調査範囲内は長さ14.0m、幅6.5m、面積90㎡前後である。

６．第５郭

第４郭の南下に位置する曲輪で、南北8.5m、東西10.5m、面積100㎡前後を測る。曲輪は竪穴住居跡10・14によって形成された平場を利用したものである。標高237m前後に位置し、第４郭とは1.8m、第６郭とは0.7m前後の段差を持っている。さらに南側の帯曲輪１とは２m前後の段差があり、東側には帯曲輪２が取り付く。

曲輪内部はやや南側に傾斜しており、北東端は住居跡による掘り込みがなされていないためか、隆起し、土塁状の地形となる。しかし、この隆起には盛土は見られず、自然地形をそのまま利用している。

この隆起は上段の帯曲輪２に繋がるもので、第５郭はこのルートを伝って上段に登ったと思われる。

7．第６郭

第５郭の南下に検出された曲輪で、南北7.5m、東西10.0m、面積60㎡弱を測る。曲輪は竪穴住居跡２によって削平された平坦面を利用したものである。標高235m前後に位置し、第８郭とは0.8m程度の段差を持っている。南側の帯曲輪１とは2.0m程度の段差がある。

曲輪内部はやや南側に傾斜しており、南端は幅2.0mほどの範囲で１段低くなる。この段差は『丹波志』に記述がある第七郭に相当する。しかし、検出した状況から一つの曲輪と判断した。

この曲輪も北東端は住居跡の掘り込みから外れるため土塁状の隆起となる。ここを自然地形で残しているのは第５郭に登る通路を確保する目的も考えられる。

8．第８郭

秋葉社を造成するために大部分が削平され、旧状を推定するのは困難である。現状での規模は南北12.0m、東西13.5m、面積150㎡を測る。

秋葉社の祠を建てるため縦10m、幅８mの範囲を大きく削平しており、曲輪中央には祠の礎石を検出した他、近現代の瓦片も散布していた。また、祠跡周辺には焼土も散見された。

9．第９郭

第10郭と第８郭に挟まれた曲輪である。調査前は第10郭と同一レベルであったが、調査の結果両曲輪より１段低くなることがわかった。これは、第８曲輪の秋葉社の祠建立に際して、削平された土砂をこの曲輪に廃棄したためと思われる。検出後の曲輪のレベルは230.7m前後である。曲輪内部は緩い傾斜をもっている。そして、北東方向に谷状地形をなして窪んでいる。このため曲輪全体は北側に下る地形となっている。

曲輪の規模は南北（長さ）７～８m、東西（幅）12～13m、面積90㎡である。

この他、曲輪内部には焼土・鉄滓などが散見され、小鍛冶を行った痕跡が窺えた。しかしこれらの痕跡は全て秋葉社の造成土の上面で検出されたもので山城とは関係ないと判断した[1]。

10．第10郭

第３郭から延びた階段状の曲輪群の先端に位置する。尾根の先端という立地、塁上の高まりという地形や、第１郭・第３郭同様に眺望がきくという点で重要な曲輪と考えられる。丘陵下への見張り台や前方の防御拠点などの機能を担っていたと思われる。

曲輪の規模は南北(長さ)13.5m、東西(幅)13～15m、面積190㎡を測り、曲輪面は標高231.0m前後の高さにある。

この曲輪は墳丘墓を利用したもので、方形の墳状地形は基本的には前代に築かれたものである。曲輪周囲の斜面は帯曲輪造成に伴って、旧状をさらに急斜面にしたと思われる。曲輪頂部についても墳丘墓の検出状況から、築城に伴って若干の削平が行われていることが観察された。

この他、曲輪上には鍛冶炉一基を検出した。曲輪の北東寄りに見つかったもので、直径0.7mを測る円形の浅い土壙状の遺構である。中からは焼土・炭と共に鉄滓の小片を出土している。

ただし、検出面の時代を特定することができないため、山城と直接関係ない時期の可能性がある。

11. 帯曲輪

帯曲輪は内場山城跡の縄張りにとって最も大きな意味を持つものである。城跡を大きく囲んでいる帯曲輪１と部分的に囲む帯曲輪２～７がある。この内、調査では帯曲輪１の2/3、帯曲輪４の半分、帯曲輪２・３のほぼ全体を検出した。(現地形から調査区外の帯曲輪にも名称を付したが、未調査であるため細部は異なる可能性がある。) 帯曲輪は全体に切土・盛土の造成を行っており、曲輪面の造成に比べると大きな労力が払われている。しかし、遺物の散布などから観察すると生活痕跡はほとんど皆無で、建物などの諸施設も持たないようである。

帯曲輪１は階段状に連なる曲輪群を大きく囲むもので全体の延長距離が340m前後と推定され、検出範囲での延長距離が228m弱の規模を持っている。幅は場所によって大きく異なり1.5～５m前後であるが、総じて第３～10郭の周囲が幅広になる。しかも、この部分では造成に大きな労力を使っている。例えば帯曲輪の第４・５郭下の斜面には竪穴住居跡12があるが、これを完全に埋め立てて帯曲輪面を形成するなど、急斜面かつ起伏の大きい地形であるにもかかわらず、この部分は幅広な帯曲輪面を作りだしている。

これに対して、第１～３郭の斜面下では同じ帯曲輪１の幅が1.5～2.0m前後と狭い。第１郭下では帯曲輪４が幅が３～４m、第３郭下では帯曲輪２・３が幅２～４mと幅広になるのと対照的である。このことから帯曲輪１のこの部分は、通路としての利用が強調されたと考えられる。

この他、帯曲輪１は第２郭直下が狭くなっている。この周辺は谷地形となっており堆積土が深い。このため切土が地山に達しない部分も見られ、後世の流失が大きいと考えられる。

帯曲輪２は第５郭から帯曲輪３に登る傾斜した帯曲輪である。主として通路的な機能を果したと思われる。やはり切土・盛土が大きく行われ、帯曲輪３側の斜面を削平し、前面斜面に大きく盛土している。帯曲輪の延長距離27m、幅5.0～1.0m前後である。

帯曲輪３は延長距離44m、幅2.0～3.5m前後である。前述のように切土・盛土の造成は大きく行われ、第３郭の傾斜部分に10～15cm程度の削平した段差が観察された。この帯曲輪は第３郭の東裾に沿って設けられている。両端は南側が第４郭から延び、北側は第２郭下に延びる。検出結果では第２郭との間には0.3m前後の段差が付く、しかし周囲は撹乱も見られるため帯曲輪３から第２郭に上る構造であったと推定される。

帯曲輪４は第１郭の東下に沿って1/2が検出された。検出範囲内での延長距離34m、幅３～４m前後である。第１郭との段差は4.0m前後、帯曲輪１との段差は3.0m前後である。南側末端は帯曲輪２に隣接するが、0.2mほどの段差を持つ。しかし、状況から考えて帯曲輪３同様、第２郭に繋がっていたと考えられる。

その他の帯曲輪については調査区外にあるため詳細は不明である。図には現状地形から推定

される帯曲輪の形状を示した。しかし、各部分については合併あるいは細分される箇所が多くあると思われる。

12. 斜面・その他

山城の曲輪周辺は傾斜が急になる部分が多い。特に山城の南側斜面・第1～4郭の東斜面などが急傾斜になる。これに対して、第9～10郭の北斜面はやや緩い傾斜になる。全く痕跡を見つけることは出来なかったが、山城への通路は北斜面にあったのではないかと思われる。

13. 井戸2

山麓に検出された素掘り井戸である。検出レベルは標高212.5m前後で内場山城跡の山裾をやや上がった部分に位置する。山頂の曲輪群は第3郭を起点にして「く」の字に曲がるが、井戸はこの屈曲点の山懐にあたり、山並みが井戸を覆い隠すような立地となる。このような立地から井戸は山城の水の手であると考えた。

また、井戸の検出箇所周辺はややテラス状の平坦面になっているが、後世の果樹園の削平のために開墾・改変を受けており、当時の地形を推測することはできなかった。従ってこのテラス地形が当時のものかどうかは判断できない。また、井戸に付随する施設（覆屋・防御施設・水溜）や山城への通路などについても不明である。

井戸の検出面での平面形状は上部円形で下部は方形を呈し、断面は下部でやや膨らむ胴張り状になる。検出面での掘方最大直径は1.55m、深さ5.6mを測る。さらに、井戸の最深部は、掘方より一回り小さく1辺0.65mほどの水溜を作っている。

井戸の埋土は大半が地山土であるが、底から深さ1m前後ほどについては礫層が堆積していた。

この他、井戸底の水溜から礫層に混じって釣瓶（65）が出土した。

14. 調査区外の曲輪・竪堀・土塁など

調査区外の曲輪群については、ここでは調査によって得られた知見と比較できることを中心に記しておきたい。

第I曲輪の北端の両側から延びる竪堀・土塁は、連続性を持って繋がる帯曲輪を断ち切るもので、調査範囲内の曲輪とはやや異なる構造である。竪堀・土塁は長さ12m、幅は3～4m前後である。この他、第3曲輪西下にも竪堀状の地形が観察できる。調査を行っていないため結論は出せないが、この部分でも帯曲輪が寸断する構造を呈している。

北曲輪群も多くの曲輪を有している。しかしこの部分は第4～10郭と異なり、曲輪間の距離が離れているのが特徴的である。曲輪個々の面積は、他の曲輪同様さほど広くはない。

註

(1) 第8章第1節の鉄滓の分析結果でも、第9郭出土資料（HN－7）は新しい年代を示すデータが出ており、この見解と一致する。

第３節　出土遺物

調査で出土した16世紀代の遺物には多種のものがある。しかし、遺物の遺存状態は悪く、細片や磨滅したものが目立った。特に土師器は細片が多く実測できる個体は限られた。

遺物の器種は土器では土師器小皿・中皿、瓦質土器香炉・火鉢、備前焼擂鉢・甕、丹波焼擂鉢・壺・甕・小杯、中国産の磁器染付皿・染付碗・青磁皿・青磁碗、瀬戸美濃産の天目碗、器種不明品などがある。他に、石製品では碁石・砥石（未実測）、木製品では釣瓶、鉄製品では小刀・釘・鑿・不明品などが数えられる。

出土遺物の総点数は土器が165点、木製品が１点、石製品が２点、鉄製品が６点で合計174点である。この内実測点数は72点である。これらの遺物は井戸から出土した釣瓶や山麓で出土した遺物を除くと、全て表土からの出土で山城の盛土内や遺構の中から出土したものは認められない。

１．土師器（図版53、写真図版52）

皿（１～４）　　皿はいずれも残りが悪く、調整痕跡はわずかしか観察できない個体ばかりである。１～３は小皿、４は中皿である。１のように、底部から口縁部にかけて丸く立ち上がり、薄手に仕上げるものと、２～４のように外面底部にユビオサエを施し、口縁端部を肥厚させるものがある。そして２～４は同一の技法で作られたものであるが、４は内面の底部と体部の境に圏線が巡る。

４の時期は16世紀後半と考えられ、他の遺物より新しいものと思われる。

埵（５～７）　　５・６は口径27.6～27.8cmのもので、いずれも口縁部の小片である。外面は右上がりの平行タタキで、叩いた後に一部をナデ消している。口縁部周辺についてはヨコナデが施されタタキ痕跡は完全に消される。内面は不定方向のナデによって仕上げている。口縁部は内傾し内面側に面を持つ。外面に剥の退化したものが僅かに認められる。

７は外面が格子目タタキが観察できるが、調整技法は５・６に酷似している。

２．瓦質土器（図版53、写真図版53）

香炉（８）　　８は口径10.4cm、器高5.4cmのもので、体部は直線的に立ち上がり、口縁部上端に面を持つ。さらに、体部外面には花文のスタンプが巡るもので、底部には三足が付く。

火鉢（９～11）　　９のように口縁部が丸く内湾し肥厚するものと、10・11のように体部が直線的に立ち上がり口縁部の上面に面を持つものがある。９は口縁部の破片で体部に円穿を持つ。法量は口径16.5cmを測る。

10は口径15.8cmを測る。口縁部上端に面を持つもので、端部をやや外側につまむ。

11は口径25.7cm、残存高7.1cmを測る。10と同じく上端に面をなす。肉厚の器壁で、直立する体部をもつ。

3．備前焼（図版53、写真図版52）

徳利・壺・甕がある。壺は細片が多く図示できるものはなかった。

徳利（13～15）　3個体とも同様の形態の徳利と思われる。頸部はすぼまりながら長くのび、口縁部がラッパ状に開く。13の口径は5.4cmを測る。14は頸部の下端に「メ」のヘラ描きが見られ、内面には絞り目が観察される。15は底部の破片で底径8.6cmを測る。内面にはロクロの痕跡が顕著に残る。

甕（16）　口縁部の破片である。口径56.0cmを測る。口縁部を折り返し肥厚させるもので頸部で「く」の字に立ち上がっている。

これらの遺物の時期は15世紀末～16世紀前半頃と思われる[1]。

4．丹波焼（図版54～58、写真図版54～57）

最も多く出土した遺物で、33個体を実測した。擂鉢、壺、甕、小杯がある[2]。

擂鉢（17～34）　擂鉢は18個体を実測した。完形品はなく、辛うじて図上で完形品として報告できるものも26の1個体のみである。口縁部の破片がほとんどであるが、底部の擂目を観察できるものは26と34の2個体のみである。

法量は口径25.8～33.6cm、器高は11.3～13.9cm、底部径は12.5～14.5cm前後である。ただし、口径については18が27cm代、22が25cm代である以外は、すべて29～33cm代の個体である。このことからやや小型の擂鉢も含まれるが、大半は口径30cm前後の個体であることがわかる。

擂目はすべて一本描きで施されており、底部には分割線が入る。26では形骸化した十字の分割線が、34では8分割の分割線が入っている。また体部外面には指頭痕が多く残り、特に粘土紐の接合部付近には顕著である。これは最終仕上げのナデが不完全なものが多いためである。

その他、外面体部の下端、底部との境にヘラケズリが一周する個体も多い。口縁部には小さい片口をもち、片口の内面下には「十」・「井」・「勹」などの手印が入る。

今回の資料は小破片が多いが、口縁部の観察によって、口縁部内外面を強くナデるもの(17～20)、口縁端部を上方につまむもの、口縁端部を肥厚させて丸く終えるもの、内弯ぎみで厚手のもの(27～30)などに分類できる。

壺（36～44）　壺は9個体を実測した。やはり小破片が多く全体の器形を知れるものは少ない。36～38は口縁部から肩部の破片、39～41は底部片、42・43は図上で完形になるもので、44は胴部の破片である。体部の内外面に指頭痕跡が残るものが多く、粘土紐の接合部分を中心に多くの凹凸が観察される。また、櫛掻きは見られない。

口径は11.2～18.2cmと開きが大きい。口径の大小は口縁部を外方に屈曲させているかいないかの点が大きいが、42と44のように大小の差が大きいものもある。

43は胴部にヘラ記号「ヲ」を描き、その裏面にも文様を描いている。また、43の外面には肩部から胴部にかけて緑色の自然釉が観察される。

甕（45～49）　甕は口縁部が短く直立する短頸のもの（45・46）と、口縁部を折り曲げるもの（47～49）がある。

完形品はなく、底部を観察できる個体もなかった。総じて内外面に指頭痕跡が残る個体が多い。口径は45・46が24.6～32.0cm、47～49は21.5～26.0cmである。

小杯（35）　小杯は口径10.3cmのもので、体部中位から口縁部にかけて屈曲し、口縁端部は尖らせておえる。

5．中国産磁器・瀬戸美濃産陶器（図版59、写真図版58）

中国産の磁器は16個体を実測した。器種は染付皿・同碗、青磁皿・同碗（62・63）がある。瀬戸美濃産の陶器には天目茶碗(64)と器種不明の個体がある。全体的に中国産の染付が多く見られるのが特徴である。

染付皿（50～53）　中国産の染付皿は６個体が実測できた。50・51は同タイプのもので、底部は残らないが碁笥底になり、皿Ｃ類[3]に相当する。口径11.2cmと9.0cmのもので、両者とも内面には二重の界線を持ち、口縁部外面は二重の界線の間に波頭文を表す。

52は外面に二重界線と花文、内面に界線を表す。53は端反りになる皿で口縁部の内外面に界線を持ち、外面体部に花文を表す。54・55はやはり端反りになるもので、皿Ｂ類に相当する。高台径は54が5.3cm、55が9.1cmである。54は内面に三重の界線、内面底部には十字花文状の文様を描く。外面は口縁部に一重の界線、高台側面に三重の界線、体部には唐草文を描く。55は内面底部に花文が表される

染付碗（56－60）　碗は５個体が実測できた。56・57は腰部が屈曲し体部が直線的に立ち上がるもので碗Ｄ類にあたると考えられる。内面底部には小さなトチン痕跡が観察される

文様構成は内面が二重の界線の内側に花文を描き、外面体部には唐草文、外面の高台側面には二重の界線が表される

58・59は厚手の個体である。高台は低いもので、高台内部には露胎になる部分が残っている。内面は二重の界線の内側に花文を描き、外面は体部に縦方向に点を連ねた文様を描く

60は碗Ｃになるもので、口径14.1cm、器高5.4cm、高台径5.9cmを測る。内面は二重の界線の内側に花文、外面にも口縁部に二重の界線がある他、体部には唐草文が退化して点を３つ重ねた文様を一面に施している

青磁皿（61）　61は口径12.3cmで口縁部を波打たせている。体部は中程で屈曲する。釉は濃い緑色でやや厚めに掛かる

青磁碗（62・63）　62は口径14.6cmで、鎬は無く花弁は片刃彫で表現されるが、器面に隆起は認められない。口縁部には雷文が入る。63は細線で花弁を表現するものである

瀬戸美濃産陶器（64）　天目茶碗(64)と器種不明品（未実測）がある。天目茶碗は口径11.5cmで底部を欠く個体である。口縁端部を屈曲させ、上端は尖らせて終わる

6．木製品（図版60、写真図版59）

井戸から出土した釣瓶がある

釣瓶（65）　底部がやや小さく、上に向かって開く形態になる。上端は残存していないが、把手をつけたと思われ、把手片が釣瓶と一緒に出土している。

側板は両端の上下の一方を切り込み、交互に組んで木釘を打ち込んで留める。これに底板をやはり木釘で留めている。

法量は底板の底辺が7.0cm×7.4cm、残存高7.3cmを測る。使用している板材は厚さ0.5cm前後のものである。樹種はヒノキである。

7．鉄製品（図版60、写真図版59）

刀子・釘・鑿・不明品などがある。

刀（66）　66は刃の部分と柄の木質部を残すものである。残存長7.2cmを測る。

釘（68～70）　3本を図示した。いずれも角釘である。68は全体が残るもので長さ4.9cmを測り、1寸5分前後の釘である。69・70は上下の両端を欠く。

鑿（71・72）　71が長さ6.1cm、幅1.5cmで、中央付近の厚さが0.6cmである。72は頭の部分を少し欠く。残存長5.9cm、幅1.5cm、中央付近の厚さ1.1cmである。厚さは頭の部分が厚く、先端に行くほど細くなっている。

不明品（67）　残存長5.9cm、幅0.9cmを測る。両端を欠くが、残存部の一方端に円形の穿孔が観察される。

8．石製品（図版53）

碁石と砥石がある（砥石は小片のため未実測）。

碁石（12）　黒石で、直径2.2cm、厚さ0.45cmのものである。碁石は中尾城跡・水尾城などの付近の山城でも出土している。

砥石は細片で第2郭から出土している。

9．まとめ

以上の遺物群の時期について触れておきたい。

土師器皿は4が内面底部に圏線を持つもので、16世紀後半の時期が考えられる。鍋はいずれも鍔部分が退化したもので、16世紀後半以降の時期と考えられる。従って、土師器には16世紀後半以降の遺物が多いと考えられる。

備前焼は甕が第Ⅳ期のもので、徳利は中尾城跡出土のものに類似することから16世紀前半頃までと思われる。従って、15世紀後半～16世紀前半の年代が考えられる。

丹波焼については、壺に算盤玉状の器形や外面に猫掻き手法を施したものが見られない。甕は大型のものが登場する。摺鉢は詳細を検討できる資料が不足しているが、中尾城の各形態に近似するなどの特徴がある。従って、中尾城跡出土資料とほぼ近接した時期と思われ、16世紀

前半頃の遺物群と考えられる。

磁器は青磁・白磁・染付がある。これらは青磁碗(62)が古いため伝世品と考えられる以外は、16世紀代の遺物と考えてよい。

染付は皿がⅢC類（50・51）、B類（54・55）などであるが、時期が新しくなるとされるⅢBⅡ類やD類・E類は出土していない。染付碗は碗D類、碗C類などが認められるが、新しいE類・F類は認められない。従って、磁器類は15世紀後半～16世紀の前半頃のものと考えてよいだろう。

以上のことから、内場山城跡の遺物の時期は、備前焼・丹波焼・磁器類については15世紀後半～16世紀前半代の時期が考えられる。これに対して土師器皿(4)と鍋(5～7)はいずれも16世紀後半代以降に下るものである。

これらを集約すれば、15世紀後半～16世紀前半と16世紀後半以降の2時期が存在する。量的には15世紀後半～16世紀前半のものが圧倒的で、16世紀後半は極く少数という結果となる。

註

(1) 備前焼については、岡山県忠彦・段子「備前焼ノート1」「倉敷考古館研究集報1」1965年刊、「同2」「同集報2」1966年刊、「同3」「同集報5」1965年刊による。

(2) 丹波焼については、兵庫県教育委員会「中尾城跡」（近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ）1989年刊による。

(3) 小野正敏「越前一乗谷出土の染付磁器について」「貿易陶磁研究II」貿易陶磁研究会1982年刊による。

第4節　遺物分布状況

1．はじめに

ここでは、山城の遺物出土位置と分布状況、さらに遺物間の接合関係について報告する。遺物の出土地点については図版15、遺物間の接合関係については図版16、出土遺物の種類については表2にそれぞれ示した。

出土遺物の取り上げにあたっては現地調査で地区割りを行い、これに従って実施した（第2章の調査区の設定参照）。取り上げは破片の単位を基本としているが、明らかに1個体と思われるものについては一括して取り上げたものも含まれる。

2．遺物出土層位・位置・分布状況

遺物は曲輪内よりも傾斜面に多く出土した。垂直分布については図示していないが、出土層位はすべて表土からのもので、盛土内など曲輪面より下層には全く遺物が認められなかった（ただし、井戸内の釣瓶や山麓部の遺物は除く）。

一方遺物の検討から、遺物の大半は15世紀後半～16世紀前半代のもので、それに16世紀後半以降の遺物も少量含まれることが明らかとなっている。従って、山城は16世紀前半～後半の期間に渡って継続、ないし断続した2時期に機能したと考えられる。

曲輪が16世紀後半に大きく改修されたのであれば、改修時には16世紀前半代の遺物が大量に遺棄されているはずであるから、曲輪面より下層（盛土）に16世紀前半代の遺物が出土するはずである。しかし、遺物が下層に混じっていないということは、少なくとも調査区の範囲内については、16世紀前半代（築城当時）の形態や諸特徴を大きく改変することなく機能したことが推測される。このことをふまえて以下考察したい。

図版15は遺物出土地点を出土頻度に応じて濃淡で示したものである。この他、各地区の出土遺物の器種については表2に示している。出土遺物の総記録数は 165点である。

図を概観すると、遺物が集中あるいは比較的まとまっているのは、①第1曲輪の東斜面周辺地区、②第2～4郭を中心とする地区、③第9郭を中心とする地区、④斜面部の相寿園周辺の地区の4箇所である。

特に遺物が集中する②の周辺は遺物の数量・器種共に豊富で今回の出土遺物の大半を占めている。これらの遺物は第3～4郭を中心に出土した。都曲輪2・3周辺では傾斜立ち上がり部分からの出土が多く上位の第3郭内からの転落が想定できる。第4郭付近は曲輪面とその斜面からのものが多い。第3郭については曲輪平面よりも斜面からの出土が多く、G-12-d区からの出土遺物が最も多い。これは第3郭からの転落も考えられるが、状況からみて第2郭が供給源であるものも多く含まれると思われる。

この他、①付近は城跡の中心部分と考えられる、しかし②周辺に比べるとやや密度が粗である。また、③周辺は第10郭を中心として、尾根先端の重要な部分にあたる。しかし遺物が出土したのは第9郭北斜面である。従って、この遺物の供給源は第9郭に求められると思われる。④の和寿園周辺は老人ホーム建物の南端に比較的まとまって出土している。

これらのことから遺物が出土する場所は特定の場所に限られることは明確であり、その分布は極端に粗密の差があることがわかった。

表2　内場山城跡遺物集計表

種別	土師器				瓦質土器			中国産磁器・瀬戸美濃産陶器			
器種	皿	鍋	小計		火鉢	香炉	小計	染付	青磁	天目他	小計
破片数	4	18	22(13.3%)		4	5	9(5.5%)	13	6	2	21(12.7%)
種別	丹波焼							備前焼			
器種	摺鉢	壺	甕	徳利	その他	小計		摺鉢	壺	甕	徳利	小計
破片数	37	25	31	1	1	95(57.6%)		1	9	2	6	18(10.9%)
総合計	165(100%)											

（但し、砥石・釣錘などを含まない。このため、取り上げ時の遺物単位は167 個の資料がある。遺物単位は破片を基本としているが、一部同一個体については個体単位に取り上げたものも含まれている。）

3．遺物接合関係

図版16は遺物の接合関係が複数地区に広がる個体を示したものである。地区をまたがって破片が接合した遺物は6個体（20・30・44・45・47・48）である。

この6個体の中で、前述の遺物集中地点を越えて接合しているものには44・48の2個体がある。さらに45・47についても②の集中地点を中心にして破片が斜面に広がったことが予想された。これらの破片は状況から考えて第2～4郭に廃棄されたものが移動したと考えられる。また、45についても②の集中地点から破片の一部が麓に落下したもので、山城の遺物は多量に斜面に落下したことが予想される。

④の遺物集中地点については、②と接合する遺物があり、井戸2からも離れており、山城の施設に伴って廃棄されたと考えるのは不自然な位置にある。恐らく②の遺物集中地点からの落下によって見かけ上遺物が堆積したものと判断できる。

従って、実際に山城の遺構に伴う遺物が集中するのは①～③の地点周辺であると結論できる。

4．遺物の分布と山城の機能

遺物が集中する場所は機能的に駐屯場所、住的空間として使用されたことが予想される。遺物が集中するのは①第1郭、②第2～4郭周辺、③第9郭である。そして、これらの中で最も遺物量が多いのは②第2～4郭周辺である。

これに対して、量的には劣るが①の第1郭周辺についても遺物がまとまって出土する。しかし、大半が調査区を外れているため詳細は不明である。但し、立地や遺物出土の事実からは第2～4郭周辺同様住的・軍事的に重要な場所と思われる。

③第9郭周辺については、第10郭とその斜面に遺物が出土せず、遺物は第9郭の北斜面に出土した。山頂に比べると遺物量は量的には僅かである。このことから山頂曲輪群に比べると恒常的あるいは多人数の住的空間であったとは考えられない。また、第10郭ではなく1段下がって縁部になった第9郭が選ばれていることも興味が持たれる。

5．小　結

以上の検討から以下のことがまとめられる。

①内場山城跡は遺物と出土層位からみて、16世紀前半に築城され、16世紀後半以降に部分改修が行われた。ただし、調査区内については16世紀前半の形状や諸特徴をそのまま残した遺構と判断できる。

②遺物の接合状況から、住的な痕跡を残している地点は①第1郭、②第2～4郭周辺、③第9郭の3箇所と考えられる。

③山城の特定の部分に遺物が集中して出土する傾向がある。これらの内①第1郭周辺、②第2～4郭周辺は特に多く、立地から住的・軍事的両面の中心と考えられた。第10郭では最も重要な場所を住的な駐屯地にせず、城跡の1段奥まった縁部に求めている。

第5節　作事・普請について

1．はじめに

本節では山城の築城過程と築城（普請）工事量とについて考察する。

築城については前述のとおり帯曲輪造成に主眼が置かれており、帯曲輪を遠ろうことが内場山城跡の普請の大部分を占めることは明らかである。

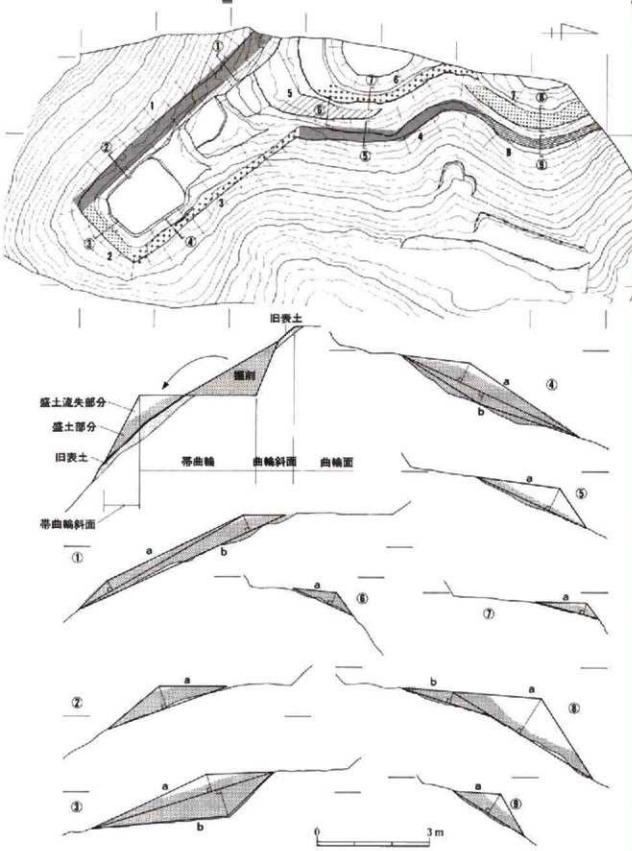
2．築城過程

山城の築城は以下のような過程で行われている。まず、城域を選地し帯曲輪の範囲に造成工事を行う。工事は帯曲輪の山側斜面を削り、斜面側に盛土することによって、平坦地(帯曲輪)を確保する。これに対して曲輪部分は第2節で述べた通り第4郭で見られた軽微な掘削段以外にはほとんど造成痕跡を検出できなかった。従って、軽微な造成は行われたと予想されるが、帯曲輪に比べると比較にならない程度の工事と思われる[11]。

次に諸施設を設ける作事を行ったと思われる。しかしこれについても、施設などの土台となる部分は多少の工事を行ったと思われるが、調査結果からその痕跡を見いだすことはできなかった。やはり、軽微な工事が行われた程度と思われる。

表3　作業積算概説計算表

	断面名		底辺 (m)	高さ (m)	断面積 (m²)	平均断面 (m²)	距離 (m)	盛土量 (m³)	盛土重量 (t)
1	①	a	5.00	0.30	0.75				
		b	6.00	0.50	1.50				
	②	a	3.40	0.60	1.02	1.64	69.00	113.16	248.95
2	③	a	5.10	0.45	1.15				
		b	5.10	0.75	1.91	3.06	17.00	52.02	114.44
3	④	a	5.10	0.55	1.40				
		b	5.10	0.30	0.77	2.17	57.00	123.69	272.12
4	⑤	a	3.20	0.70	1.12	1.12	50.00	56.00	123.20
5	⑥	a	1.80	0.40	0.36	0.36	27.00	9.72	21.38
6	⑦	a	1.70	0.30	0.26	0.26	44.00	11.44	25.17
7	⑧	a	4.40	1.10	2.42				
		b	2.50	0.30	0.38	2.80	34.00	95.20	209.44
8	⑨	a	2.20	1.10	1.21	1.21	35.00	42.35	93.17
合計							333.00	503.58	1107.87



挿図1　土量計算図

3．根拠の計算

以上のことから、帯曲輪の盛土部分の総計が内場山城跡の普請の工事量をほぼ表す根拠となると考えられる。そして、曲輪部分の造成、作事については仕上げ段階の軽微な工事として考えられる。この考えに基づいて盛土部分の土量を次のような手順で計算した[2]。

①調査時に実測した断面図を基に旧表土を除いて盛土部分の断面積を計算する。

②この断面積を平均して平均断面積を計算する。

③これに断面周辺の帯曲輪部分の距離をかけて土量を計算する。

④土量を総計して調査範囲部分の土量を計算する。

ここまでの計算過程と土量総計が表3である。残念ながら山城全体を調査したのではないため、山城全体の盛土の土量は一律の計算基準では出せない。

そこで、何とか山城全体の工事量を推定するため帯曲輪の距離に着目して計算してみた。帯曲輪全体のおおよその距離を現地形の測量図から計算し、この距離をもとに調査範囲の帯曲輪距離との比率を計算し推定した。この比率計算式から全体の盛土量を推定した。

現地形から計算した残りの距離は帯曲輪・竪堀も合わせると約 200mとなる（調査範囲外では帯曲輪1が100m、帯曲輪5が30m、帯曲輪6が25m、北第1曲輪が20m、竪堀が両方で約24mとして計算）。また、図版8より調査範囲での帯曲輪合計距離が333mである。

従って、全体の帯曲輪距離は333.00m＋200.00m＝533.00mとなる。これから山城全体の盛土量が推定できる。

計算は以下のようになる。

$$\frac{533.00\text{m（全体の帯曲輪距離）}}{333.00\text{m（調査の帯曲輪距離）}} \times \underset{\text{（調査された盛土量）}}{503.58\text{m}^3} = \underset{\text{（山城全体の盛土量）}}{806.03\text{m}^3}$$

また、内場山城跡の造成痕跡の及ぶ範囲を計算すると調査範囲では4600m²であることから、1m²あたりの単位土量を計算すると0.11m³となる。つまり全体にならすと平均約11cm盛土したことになる。これらから割り出された数字が山城を構築するための全体作業量算出の基礎になると考えた。

〔作業の根拠〕

調査範囲内での盛土量＝503.58m³　　築城の影響範囲（調査範囲内）＝4600m²

山城全体の盛土量　＝806.03m³　　1m²あたりの工事土量　＝0.11m³

4．工事の量について

以上のようにして計算された根拠から、築城がどの程度の工事量であったかを次に検討してみたい。しかしこのような工事計算を実際の調査にもとづいて行った例は少なく、工事量の積算基準ともいうべき歩掛かりについて確たる根拠が見いだせる研究はない。

但し、唯一水尾城跡[23]（兵庫県西脇市）の調査例において詳細な根拠が示され、現段階で可能な限りの歩掛かり計算が行われている。

そこで今回は水尾城跡の歩掛かり計算を参考にしながら、内場山城跡の盛土量の計算を元にして仕事量を推定してみる。

まず、水尾城では築城にあたっての工事には掘削・運搬・仕上げの過程があるとし、それぞれの歩掛かりを計算して、その合計が全体の仕事量になるとしている。

各工程の積算は以下のように行っている。

掘削[24]は土量を根拠に、1㎥あたり1日に0.69人が必要で、軟岩質の掘削が土に対して1.67倍の手間がかかるとしている。運搬は土量の総重量を計算し、1日一人452.4kgの歩掛かりで計算し、土の重量は土砂1㎥あたり2.2kg換算している。また、仕上げは全体手間の0.3倍に見積もり、作業夫役を算出している。そして、1日あたりの作業人数を30人と考えて築城に要する工事日数を計算している。

なお、内場山城跡での仕上げについては、帯曲輪の平面・斜面の仕上げ、曲輪内部の仕上げなどを含めた。曲輪内部についてはどの程度の工事を行ったかは不明であるが曲輪に費やされた労力の全てはこの仕上げの中に含めて考えた[25]。

内場山城跡のデータをこの計算に当てはめると次のようになる。

〔調査範囲内では〕

掘削　＝　503.58㎥÷0.69人×1.67倍　＝1219人（延人数は端数以下切上げ）

運搬　＝　1107.87ｔ÷0.4524ｔ　＝2449人

仕上げ＝　1219人　＋2449人×0.3　＝1101人

合計　＝　1219人　＋2449人＋1101人　＝4769人

これを先の帯曲輪比率で出した全体の土量から山城全体の工事量に直してみると。

〔山城全体では〕

掘削　＝　806.03㎥÷0.69人×1.67倍　＝1951人（延人数は端数以下切上げ）

運搬　＝　1773.27ｔ÷0.4524ｔ　＝3920人

仕上げ＝　1951人　＋3920人×0.3　＝1762人

合計　＝　1951人　＋3920人＋1762人　＝7633人

さらに水尾城跡では1日の作業人数を30人と推定し、築城に要する日数を96日と試算している。この人数で計算すると内場山城跡の築城日数は238日となる。つまり、内場山城跡は水尾城の約2.5倍の日数が工事に費やされたことになる。しかし、内場山城跡の築城主体がどれほどの稼働人数をもちえた権力であったかが推定できない現在、この日数はあまり説得力がない。今回は、工事の延人数が水尾城の約2.5倍を要しているから、内場山城跡は水尾城に比べ2.5倍の工事を行ったというに止めておきたい。

一方、単位面積あたりの工事量という点から両城を比較すると、内場山城跡の調査範囲内での工事影響範囲は4600㎡である[16]。これによって1㎡あたりの工事量は約0.11㎥、つまり11㎝平均で土を掘削したことがわかる。従って、全体では約7700㎥に及ぶ範囲について約11㎝の掘削工事を行ったと考えられる。

一方水尾城では築城（工事影響範囲）は2600㎡[17]の範囲で行われている。これから1㎡あたりの工事量は約0.12㎥、つまり12㎝平均で土を掘削したことがわかる[18]。このため単位面積あたり水尾城のほうが約1.1倍前後の工事を行ったことを示し、水尾城の方が面積あたりの手間が多く、内場山城跡は簡単な作りということがいえる。

5．まとめ

以上、内場山城跡の作業量について計算し、類例と比較してきた。今回は単に問題提起として材料を提出するに止まったが、盛土や切土の研究は築城に関する作業量換算に止まらないと考えている。また、16世紀後半を境に掘削道具が大きく変化することも指摘されており[19]、この問題と築城がどう関わるのかなど、問題とすべき課題は多岐に渡る[20]。

城跡の調査にあたって当時の遺構面より下を掘削し、地山まで検出することは重要で、必ず行うべき作業と考える。この調査の目的について列記しておきたい。

①断面下の普請部分の工事量を計測し、作業日数や夫役を推定できる。

②城郭の普請部分の単位あたりの工事量を計測することで、各郭の客観的な工事量が比較可能になる。

③断面下の遺構の有無から、改修痕跡を調べることが可能。

④断面下から遺物が出土すれば解決する問題が多い。曲輪面までの掘削で遺物が全く出土しない場合や、表面の遺物と遺構の年代が現段階の成果から合わない場合などの問題が山城調査ではよく起こっている。このような場合は、盛土内の遺物を検出することによって決着をつけることができる。

⑤旧地形の詳細な復元が可能。推定で旧地形が復元できるとする考えがある。しかし、各部分については自然・人工の別を問わずそれぞれの状況で変化がある。特に、縄張りの上から重点的にある部分に造成が行われた場合は、微細な隆起や谷地形は見えないことがある。このような部分こそ築城者が労力を掛けている部分である。この部分の工事量を計算に入れることが重要である。そして、造成上労力を払わなければならないにも係わらず何故その部分を大きく改変したかが重要なポイントとなる。

⑥1つの城跡の内部における作業の重点的な部分と簡素な部分の精粗の検討が可能。例えば中尾城の東斜面と西斜面の造成度合から入り口の方向を裏付けることができた。

⑦造成断面の比較から重量物をおいた部分（櫓などの建物）と、単に平坦面を確保した部分が比較できるなど城内の各郭の機能を推定できる。

⑧造成断面を他の城跡と比較することによって、今後築城方法の特徴の比較と分析が可能となる。版築状に積む、或いは斜めに流し込んだように土砂を置いているなどの違いや、盛土の中に石・礫を混入して強度を補強するなど、城跡によって様々な構築方法があると考える。

⑨旧表土の上面を検出すると、築城前に山を焼いた痕跡を検出できることがある。三木市の加佐山城では土塁下に焼土面が観察され所々に礫を集積したり、樹木を集積してさらに焼却した痕跡が検出できた。前述の水尾城跡においても下層から山焼きの痕跡が検出されている。

但し、内場山城跡の調査ではこの点に全く注意が払われていない。

以上、この作業には多くの調査成果が期待でき、新たな調査視点・目的も今後検討できる可能性がある。さらに、曲輪面から遺構・遺物が検出されない城跡の場合には、下層の調査を行わなければ調査の意味がないとすらいえるだろう。

水尾城の調査成果に導かれながら項を進めたが、今後同様の手法による調査例が増加し議論が活発になることを望みたい。

註

(1) 第4郭・帯曲輪3の傾斜立ち上がり部の掘削など一部に工事痕跡は認められるが、工事量を計算する根拠が見いだせないため今回はデータをとっていない。なお今回この点については、後述の「仕上げ」の手間の中に含めるものとする。

(2) この計算表は各断面図の断面をもとに計算した。断面図は①が図版9のC－C'断面、②・④が図版13のX－X'断面、③が同じくY－Y'断面、⑤・⑦が図版9のA－A'断面、⑥・⑨が図版8のB－B'断面をもとに作成した。なおNの断面図は未掲載である。計算の端数については小数点第3位までを計算し、第3位を四捨五入している。

(3) 西脇市教育委員会『播磨・水尾城の調査と研究』1993年

(4) ただし水尾城では、盛土部分は流失部分が存在し正確でないとして、掘削部分について計測している。内場山城跡では逆に盛土部分の断面を元に計算している。同じ計算方法に立っていないため、この点で両者の比較には問題があると考えている。

(5) さらに詳細な積算の根拠については註(3)文献を参照していただきたい。

(6) 影響範囲については曲輪とその斜面、帯曲輪とその斜面、斜面は盛土の末端までを影響範囲と考えた。この部分を実測図を元に、クリノメーターによって計算した。未調査範囲については やや不正確な部分も含まれている。

(7) 水尾城の築城範囲は、註(3)文献添付の全体図をクリノメーターによって計測した。

(8) 工事影響範囲には掘削部分と盛土部分が混在する。このため単位面積あたりの比較は本来掘削部分に限定した面積比で行うのが正当と考える。この点、今回算出した数字についてはある程度の疑問を抱いている。

(9) 河野通明『角北グワの成立—織豊期技術革新の一事例—』『関西考古学研究』関西考古学研究会 1991年

(10) また、発掘調査を日々行っている我々にとって、仕事の都合上「土量計算」は欠かせないものである。そして、厳密な土量計算を行おうとすればするほど膨大な作業が要求されることも痛感している。調査に当たって議論が活発になることは喜ばしいが、そのために本来の調査に割くべき労力との兼ね合いが問題となることも注意しなければならない。

第４章　尾根部の調査

第１節　調査の概要

尾根部は調査区の南半部を占め、最も遺構の密集する尾根線上と、両側の斜面までを含める。

尾根線上には山城の曲輪が築かれているが、その曲輪の下層から多数の遺構が見つかった。

この章で述べる遺構には、竪穴住居跡、墳丘墓と土器棺墓、円墳、および中世墓がある。

竪穴住居跡は18軒を調査した。そのうち時期の判るものは弥生時代中期後半～後期初頭が４軒、古墳時代後期が４軒ある。住居跡の多くは遺存状況が悪いために時期が不明であるが、古墳時代に含まれるものが多いとみられる。

墳丘墓では多数の主体部と豊富な副葬品が出土した。また土器棺墓も尾根線上の各所に立地している。

円墳は東半部のみの調査で、主体部を１基検出した。

中世墓は地区内に点在しており、墓地として群集することはなかったようである。

第２節　竪穴住居跡

１．遺　構（図版19～27、写真図版23～31）

５号住居跡（図版19）

第10郭、墳丘墓の東北端で検出された、円形の住居跡である。壁際には周壁溝をもち、柱穴も２基見つかった。ただし、北側の2/3が削平されて残っていない。これは、墳丘墓築造や山城の曲輪造成に際して削平を受けたためである。

検出範囲内での残存長5.6m、復元径約６m。壁の高さは0.15～0.3m前後が残っていた。柱穴は周壁溝の付近に多く検出された。円形ないし楕円形で直径0.25～0.4m前後、深さ0.05～0.08mの規模である。いずれも浅く、棟を支える柱かどうかは疑問が残る。

周壁溝は部分的に２重になるもので幅0.1～0.2m、深さ0.1mの規模である。

遺物は弥生土器が出土したが、細片のため図化できなかった。但し、住居跡の時期は出土遺物などから弥生時代後期前後と考えられる。

23号住居跡（図版19）

帯曲輪３の北寄り付近で検出された。住居跡の東側の大半の部分は既に流失あるいは古墳築造時の破壊によって失われている。

弧を描く周壁溝が検出されたことから円形住居跡の可能性が高い。周辺には十数基の柱穴が検出されたが、いずれが住居跡に伴うものであるかは判別できなかった。

遺物には弥生土器があり、図化できたのは壺（100）と甕（124）の２個体である。住居跡の時期は遺物からみて弥生時代中期後半と考えられる。

8号住居跡（図版20）

第10郭の北斜面中腹で検出された。方形ないし長方形の住居跡で、南西－北東辺は10m以上の規模がある。但し、北斜面側1/2以上の部分は既に流失して残っており、住居内の埋土も斜面側の裾部以外は床面まで撹乱されて、一部は堆積土が流失しているなど遺存状態は良くない。

残存部分から推測すると、住居の周囲には周壁溝が設けられている。この溝は、幅0.2～0.3m、深さ0.05～0.08mの規模を測る浅いものである。柱穴は３基を検出した。しかしいずれも浅く小さいもので住居跡に伴っていたかどうかは不明である。

なお、この住居跡内部の北西端には２段の段差が付いている。段差の西側のものは0.32m、東側のものは0.1mの高低差がある。これらは周壁溝も含めて大きくずれており、縦方向のみならず、横斜め方向にも大きい地層のずれが観察できる。図に示したとおり明らかに住居跡の建築後に生じたもので、状況から考えて、地震による地割現象と考えられる。この地割れは、後の内場山城の曲輪には影響を及ぼしていないことから、地震の年代は弥生時代後期以降、戦国時代までの間に限定できる。通産省地質調査所の寒川旭氏の御教示によれば、この地震は西暦701年に京都府綾部市付近を震源として発生したものである可能性が強いと考えられる。

出土遺物には弥生土器甕(77・79)・高杯(78)があり、時期は弥生時代後期頃と考えられる。

12号住居跡（図版20）

第５・６郭・帯曲輪１の斜面下に位置し、帯曲輪１の盛土下層から検出された。周溝が南西端で屈曲することから方形の住居跡と思われる。但し、急傾斜面に建てられたため南斜面側は流失して残存しない。

周溝は幅0.25～0.3m、深さ0.1～0.15mの規模を測る。柱穴は２基検出されたが、いずれも浅いもので棟持柱の柱穴かどうかは不明である。

この住居跡の時期については、弥生土器甕（94）・壺（95）があることから当初は弥生時代と考えていた。しかし、古墳時代後期末の須恵器杯身（93）、土師器甕（92）なども含めて、これらは第６郭と帯曲輪１の間に認められた包含層から転落した遺物である可能性が強いため、住居跡の時期は不明としておく。

10号住居跡（図版21・22）

第５郭で検出された住居跡で、14号住居跡と切り合う。遺構の検出レベルは標高237.0m前後である。平面は円形で、やや東西方向に膨らむ歪な形状を呈している。また、斜面上方の北西側へは、地山を削って住居跡の平場を確保するため大きく膨んでいる。北西側の壁は良く残るが、南側は削平が激しく残りが悪い。一部は床面と周壁溝が削平されて残らない。

住居跡の規模は最大直径8.7mで、柱構造は８本柱になる。山頂の同時期の住居では最も大型

のものである。棟持柱はほぼ円形で均等に配置されており、柱穴は円形ないし楕円形を呈する。柱穴の規模は直径0.24～0.5m、深さ0.3～0.54m前後である。さらに、住居跡の壁際には周壁溝が巡っていた。規模は幅0.3～0.4m、深さ0.05～0.1m前後を測る。

中央土壙は14号住居跡によって東側を破壊されている。北西－南東方向に軸を持つ長方形の土壙である。一般的には円形土壙とセットになる形態のものと思われる。残存する土壙の規模は長軸長1.0m以上、幅0.9m、深さ0.4mを測る。出土遺物は弥生土器高杯（88・89）・壺（85）・甕（86・87・90・91）などがある。この他周壁溝から砥石（未実測）も出土している。時期は出土遺物から弥生時代後期と考えられる。

14号住居跡（図版21・23）

第5郭で検出された方形住居跡で、10号住居跡と切り合う。北側は残りが良いが、南側は床面しか残っていない。また、住居跡の北辺には作り付けの竈を敷設していた。

住居跡の規模は南北6.1m、東西5.8mを測る。柱は4本柱構造である。柱穴は円形のもので、直径は0.45～0.6m前後である。周壁溝は検出されなかった。

作り付けの竈は北辺の中央やや東寄りに敷設されている。小型の竈で長さ0.74m、幅0.74mを測る。竈の開口方向は北辺に対して直行せずやや西に傾いている。背後には住居跡の外側へ焼土面が長く延びており、煙道が住居外に敷設されていたことが窺われる。竈の内部には多量の炭、焼土が検出された。焼土はブロックで混じるものや、面を成して堆積するものなど様々な形で混じっていた。これらの焼土は袖の崩落土が堆積したものと思われる。また、竈の周囲にも炭が面を成して広がっており、一部に焼土も混じっていた。

竈の南東側には隣接して土壙が検出された。この土壙は長さ1.4m、幅1.4m、深さ0.35mのもので、埋土には炭を多く含んでいた。但し、南東側の一部は木の根の撹乱を受ける。

出土遺物には土師器の細片があるが図示できなかった。住居の時期は遺物から古墳時代と考えられるが、さらに竈の敷設や前後の住居との関係から2・9号住居跡とほぼ同時期と思われる。従って時期は6世紀末～7世紀初頭頃と推測される。

2号住居跡（図版24）

第6郭で検出された方形住居跡である。住居跡の西辺には作り付けの竈を敷設している。ただし、周溝は検出されなかった。10号住居跡同様に北辺の壁は斜面中程まで、地山を削り出して平面を確保している。住居跡は北側の斜面に近い方が残りが良く、反対に南側は悪い。特に、南辺は削平を受けて破壊され壁が残らない。

住居跡の規模は南北4.6m、東西5.8mを測り、柱は4本柱構造になる。柱穴は円形で、直径0.5～0.6m前後、深さ0.5～0.76mを測る。住居跡の規模の割りには柱穴は大きく深いのが特徴的である。壁は北側が0.2m前後残るが、南側ではほとんど痕跡程度である。

竈は西辺のおそらく中央付近に敷設されていたと思われる。小型の竈で長さ0.82m、幅0.7m

である。竈の背後には住居跡外に焼土面が円形に検出された。煙道の痕跡と思われる。竈の内部には多量に炭、焼土が検出された。焼土はブロックで検出されたものもあり、面を成しているものもみられた。この焼土は袖の内壁の崩落した土が堆積したと思われる。さらに竈の周囲には炭が床面に広がっているのが観察できた。

出土遺物には須恵器・土師器などがある。図化した須恵器杯身（74）は竈の右袖部の基部から出土した。住居跡の時期は遺物などからみて６世紀末～7世紀初頭頃と考えられる。

9号住居跡（図版25）

第４郭で検出された方形住居跡である。住居跡の検出レベルは標高239m前後である。全体に残存状況が悪く、住居跡のプランも北辺と西辺以外は不明である。しかしいずれにしても、作り付けの竈の位置や周囲の地形から観察すると、それほど大型の住居跡ではないことは確実である。作り付けの竈は西辺に敷設している。

住居跡の規模は検出された範囲から推定すると南北辺、東西辺はともに3.2m前後である。柱穴・周溝は検出できなかった。浅い土壙状のものが２カ所検出できたが住居跡に伴うものかどうかは不明である。壁の高さはもっとも良く残る所で0.2m前後である。

作り付けの竈は小型で、長さ0.95m、幅0.86mの規模を持つ。竈は西辺に敷設するが、背後の住居跡外に薄い焼土面が観察され、煙道が敷設されていることが判る。竈の内部には多量の炭、焼土が検出された。焼土は細かくなって堆積したものやブロック状に検出されるものなどがあり、袖の内壁が崩落したものと思われる。また、炭は竈の周囲でも多く検出できた。

出土遺物には須恵器・土師器がある。この内図化したものは須恵器杯蓋（82）・杯身（80・81）、土師器高杯（84）・甕（83）の５点である。時期は６世紀末～７世紀初頭頃と考えられる。

16号住居跡（図版25）

第８郭の北斜面で検出された。北東側の大半が流失しているため、住居跡の詳細を明らかにすることはできない。ただし、部分的に検出された周壁溝が屈曲することから、方形の住居跡と考えられる。検出状況からみて時期は古墳時代の可能性があるが、断定はできなかった。

17号住居跡（図版25）

第８郭の北斜面で検出されたもので、16号住居跡の南西隣に位置している。両者は切り合っていると思われるが前後関係は不明である。

部分的に検出された周壁溝から見ると、方形の住居跡であった可能性が高い。時期は検出状況から古墳時代の可能性があるが、結論は下せない。

3号住居跡（図版26）

第６郭の北斜面で検出された。住居跡の東側は大半が流失して残っていない。柱穴や周壁溝の存在から住居跡と考えたが、詳細については不明な点が多い。西斜面上には18号住居跡、北隣には４号住居跡が重なって検出された。ただし、互いの切り合い関係は不明である。

検出した範囲での最大長は南北方向で6.9m、幅3.16mである。柱穴は4基を検出した。出土遺物は須恵器甕片（75）がある。このことから3号住居跡は古墳時代のものと判断した。

4号住居跡（図版26）

第6郭の北斜面で検出された。南に隣接して3号住居跡が位置する。やはり東側の大半を流失しており、構造などについては不明である。周壁溝・柱穴も全く検出できず、3号住居跡より残りが悪い。単なる段状遺構の可能性もある。

18号住居跡（図版26）

第6郭北斜面の、3号住居跡の西上段で検出された。やはり東側は大半が残らない。周溝の幅は0.36m、深さ0.1mで、中程で鈍角に屈曲している。検出範囲での最大幅は3.7mである。柱穴は検出できなかった。

19号住居跡（図版26）

帯曲輪2の下付近の帯曲輪1上に、長さ6m、幅3～4mの範囲で段状になった地形を検出した。周辺では焼土面が観察されたり、床面と思われるレベルから土器片を多く検出している。また、埋土に炭・焼土などを伴うことから住居跡の可能性を認め、19号住居跡として報告する。ただし、柱穴・周壁溝などは検出できなかったため確証を得るには到っていない。

出土遺物には弥生土器甕がある。図化したのは底部片2点（97・99）と体部上半（98）の破片である。遺物や検出状況から住居跡の時期は弥生時代中期後半頃と思われる。

25号住居跡（図版27）

第10曲輪の南側、帯曲輪1の下層周辺から4棟の住居跡を検出した。いずれも斜面に検出されたもので重なっている。しかし、切り合い関係については堆積土が薄く、しかも土壌化しており明らかにはできなかった。

25号住居跡は28号住居跡の斜面下に検出されたもので、南西側の大半は流失している。段状の地形と柱穴2基を検出した。段状地形の範囲は東西4.0m前後で、南北2.1m以上である。柱穴は円形で直径0.3m、深さ0.2m前後で、棟持柱の柱穴と思われる。

28号住居跡（図版27）

帯曲輪1の盛土層下から検出された住居跡である。段状地形と周溝、柱穴1基を検出した。

段状地形の範囲は東西4.3m、南北3.6m以上を測り、平面は方形と推定される。周溝は幅0.1m、深さ0.5～0.8m前後である。柱穴は円形で直径0.37m、深さ0.15mの規模を測る。

29号住居跡（図版27）

28号住居跡の東側に検出された住居跡で、西辺に小型の竈を敷設する。西側が屈曲するため方形住居と思われる。住居の規模は1辺4～5m前後の小型の建物と予測される。竈は壁に貼り付いて敷設されるもので幅0.40m、縦0.44mの規模を測る。竈の内壁には焼土面が観察され周囲には炭が多く検出できた。

遺物は出土していないが、竈の存在からやはり古墳時代後期末の住居跡と考えられる。

30号住居跡（図版27）

25号住居跡の東側、29号住居跡の南西側に重なって検出した。段状地形と周溝の存在から住居跡として報告する。ただし、大半が斜面下に流失して残っていないため、構造など詳細は不明である。周溝は0.40m、深さ0.05～0.1m前後である。

2．遺　物（図版61・63、写真図版60・61）

大半の遺物が小片のため実測できる個体は限られた。実測した個体数は29点である。

2号住居跡出土の遺物

須恵器杯（73）　口径10.0cm、器高3.3cmを測る。底部と体部の境が明瞭で、ヘラ切り後のケズリは省略している。立ち上がりは退化したもので、斜め上方に小さく延びる。

土師器小壺（74）　手捏ねで厚手に仕上げる。外面はナデによって仕上げるが、内面には粘土紐痕跡が明瞭に残り、稚拙な作りである。

3号住居跡出土の遺物

須恵器甕（75）　胴部の破片である。外面は平行タタキ、内面は同心円のあて具痕跡を残す。あて具痕跡を全く消していないことから6世紀代の遺物と考えられる。

4号住居跡出土の遺物

弥生土器甕（76）　口径12.8cm、残存高7.4cmを測る。口縁部を短く斜め外方に屈曲させるもので、内面には粘土紐の接合痕跡が明瞭に残る。

8号住居跡出土の遺物

弥生土器甕（77・79）　いずれも底部片である。79には縦方向のハケメが観察できる。

弥生土器高杯（78）　脚部の破片で、穿孔が認められる。

9号住居跡出土の遺物

須恵器杯身（80・81）　いずれも底部をヘラ起こして切り離しており、底部と体部の境が明瞭である。外面のヘラケズリは範囲が狭く雑である。80は口径11.1cm、器高3.4cmを測る。

須恵器杯蓋（82）　口径12.0cmを測る。口縁端部の沈線や外面の稜は退化している。

土師器甕（83）　口径19.0cmで口縁部は大きく外方に広がり、端部は丸くおさめる。

土師器高杯（84）　杯部の口縁を欠く個体である。残存高は8.0cmを測る。

10号住居跡出土の遺物

弥生土器壺（85・90）　85は長頸の壺になる。口径14.9cmを測るもので、口縁部を長く立ち上がらせ端部を外反させるものである。90は底部片である。

弥生土器小壺（86）　口径11.0cm、残存高7.3cmを測る。手捏ね成形し、内面は縦方向を中心とする不定方向のナデで仕上げ、外面はヨコナデで仕上げる。

弥生土器高杯（88・89）　いずれも脚部片である。88は脚の中程に透かしをもつが、小片の

ため透かしの単位は不明である。89は脚の下端外面に面を持ち、2条の凹線を施している。

弥生土器甕（87・91）　87は口縁部の破片で、口径19.0cmを測る。口縁部を外反させ、端部を小さく上方につまんでいる。91は底部の破片である。外面にハケメ調整を施している。

12号住居跡出土の遺物

須恵器杯身（93）　口縁部の破片である。立ち上がりは小さく、退化の進んだものである。口径12.0cmを測る。

土師器甕（92）　口径15.2cmである。口縁部を大きく外方に折り外面に面を持つ。

弥生土器甕（94）　口径16.0cmを測り、内面には指頭痕跡を観察できる。

弥生土器壺（95）　口径21.8cmを測る。外反して立ち上がる口縁の端部を上方につまんでおわらせる。

14号住居跡出土の遺物

須恵器杯蓋（96）　口径10.6cm、器高4.0cmを測る。天井部に狭い範囲で雑なヘラケズリ調整を施している。

19号住居跡出土の遺物

弥生土器甕（97～99）　底部片2点（97・99）と体部上半（98）の破片である。98は外面に左上がりのタタキ痕跡を残すもので、口縁部外端面には2条の凹線を施す。口径16.6cmである。97・99は外面をハケメで最終仕上げするものである。

23号住居跡出土の遺物

弥生土器壺（100）　口径17.0cmを測る。口縁部は外反しながら立ち上がり、端部に面を持ち、凹線を施す。外面は縦方向のハケメ調整で仕上げ、内面はケズリ調整を施している。

弥生土器甕（124）　図上で完形復元を行った。口径13.8cm、器高29.4cmを測る。外面はハケメ調整、内面はケズリ調整で仕上げている。口縁部外面には面を持ち、3条の沈線を施す。

3．小　結

尾根部の住居跡については残りが悪く、全体の構造がわかるものは少ない。時期が明確なもので観察すると、住居跡の時期は弥生時代中期後半～後期初頭のものと古墳時代後期末（6世紀末～7世紀初頭頃）のものが大半を占めているようである。

弥生時代中期後半～後期初頭の住居跡は4・5・8・10・19・23号住居跡がある。ただし、4・19号住居跡についてはやや疑問も残る。平面プランは円形のものが5・10・23号住居跡、方形あるいは長方形のものには8号住居跡があり、円形のものの割合が多い。柱構造は4本柱になるものはないと思われ、すべて壁際には周壁溝を設けている。

古墳時代後期末の住居跡は2・3・9・14・29号住居跡（但し3・29号住居跡は6世紀代の何時かは不明。）がある。棟持柱は4本構造のものが多く、大半のものには周壁溝が見られない。また、作り付けの竈を敷設するものが多いのが特徴的である。

第3節　内場山墳丘墓

第10郭では、確認調査の際に土器群が出土していたため、墓の存在が予想されていた。調査の結果、第10郭の下層には弥生時代終末期の墳丘墓が存在することが判り、木棺墓・土器棺墓・土壙墓を含む13基の主体部を検出した。

この遺構については、第9章第2節で後述するように、墳丘墓の概念で捉え、「内場山墳丘墓」と呼称することにしたい。ただし主体部の名称については、混乱を避けるため、調査時のものを踏襲する。

1．立　地

独立丘陵状をなす内場山は、標高244mをピークとし、南東方向に尾根線を延ばしている。墳丘墓はその尾根の先端に位置しており、平野を見渡せる絶好の地を占めている。標高は231mで、平野部との比高差は約24mである。

2．墳形・規模（図版28、巻首図版4、写真図版32）

墳丘は三方を山城の帯曲輪に囲まれており、山城の造成による改変を受けている。また第9郭と第10郭を画するカットも、墓域を意味するものか、城域によるものなのかは判断できない。さらに墳丘の上面についても、供献土器の破片が多く失われている点、土器棺墓4が片付け行為を受けている点などからみて、ある程度の削平を被っているのは間違いなく、当初の墳丘に盛土があったかどうかについても不明と言わざるをえない。従って、次に述べる墳形と規模はあくまで現状を示すものであることを断っておく。しかし主体部の配列は墳丘内にバランスよく収まっており、輪郭線自体はそれ程大きな改変を受けていないと考えて差し支えない。

墳形は長方形で、地山の風化した岩盤を削って、造り出している。現状では盛土は認められない。主軸は尾根線に沿っており、北西－南東方向（N40°W）に向いている。ただし便宜上、この節では尾根の項部側を北、先端側を南として、以下の記述を行う。

墳丘の規模は上端で18.5×14.2m、下端で21.6×19.5mであり、南に向かってやや先細りとなる。高さは北側で0.8m、南側で2.6m、西側で2.8m、東側で3.0mを測る。

3．主体部（図版29～36、写真図版32～37）

主体部は大型の木棺墓6基（SX－9～14）、小型の木棺墓1基（SX－15）、土壙墓3基（SX－16～18）、土器棺墓3基の計13基からなる。大型の木棺墓はいずれも主軸を墳丘の軸線と平行にとり、中心主体（SX－10）の周りに他の5基が整然と並んでいる。主体部の切り合いはSX－10とSX－9、SX－13とSX－14に認められるが、どちらも掘り方の一部がかかるだけで、棺内にまで及ぶことはない。大型の木棺墓の間を埋めるようにして、他の小型の木棺墓・土壙墓・土器棺墓が位置する。土壙墓については墓かどうかの疑問もあるが、他の主体部との位置関係からみて、墓と認定した。以下、個々の主体部について説明を加える。

SX－9（図版31、写真図版32・35）

墳丘の南西隅に位置し、SX－10と一部重複している。

墓壙は短軸方向のみ二段に掘り込み、さらに棺を据え付ける部分を若干掘り込んでいる。規模は上端では6.06×4.86m、深さ1.40m、中段では幅2.64m、深さ0.98mである。墓壙埋土から、SX－10の供献土器の一部とみられる壺の底部片（117）が出土している。

棺の構造は組合式木棺直葬で、大きさは4.32×1.16m、深さ0.62mである。

棺底の中央からやや南寄りに、およそ0.74×0.54mの範囲で、赤色顔料の広がりが認められた。さらにその赤色顔料の広がりの南東端付近で、ほぼ底面に接して、鉄剣の切先（147）が、刃先を北東に向けて出土した。被葬者の頭位は不明だが、赤色顔料付近に頭があったとすると、頭位は南向きだったことになり、SX－10とは逆向きの可能性がある。なお、赤色顔料の成分は分析・鑑定（第8章第4節参照）の結果、水銀朱であることが明らかとなっている。

SX－10（図版29・30、写真図版32・34・35）

墳丘墓の中心主体で、ほぼ中央の位置を占める。SX－9と一部重複しており、平面精査によってSX－10が切っているものと判断したが、断面観察では確証は得られなかった。

墓壙上面で、棺上祭祀に伴う供献土器の一群を検出した。土器群は主に、棺が腐って落ち込んだ1・2層の中に含まれていたために、削平を免れたものである。供献土器は15点を図示したが、この他接合・図化しえなかった土器の破片が、まだ多数存在する。また土器以外に、赤色顔料の付着した砥石（116）や、炭化米が出土している点も特筆できる。

供献土器の出土位置は中央で大きく2つのまとまりに分けられる。双方のまとまりの中には、それぞれ二重口縁壺・脚付無頸壺といった器種が含まれており、既に失われた個体を併せて考えるならば、両者は似通った器種構成をもって供献された、2つの土器群であった可能性がある。ただし砥石に関しては、これらの土器群からやや離れており、副葬品との位置関係から見て、ほぼ頭部から胸部辺りの真上にあたる地点からの出土と考えられる。

墓壙はやや風化した岩盤を掘り抜いて、いわゆる二段墓壙となっている。墓壙の規模は上端では7.38×3.1m、深さ0.96mで、中段では5.56×1.5mである。

棺の構造は組合式木棺直葬で、断面観察の結果、側板の内側に小口板を立てた形式と考えられる。ただし底板の痕跡とみられる14層が小口板の内側にしか認められないため、底板と側板・小口板との関係は不明である。木棺の大きさは4.36×0.88m、深さ0.44m、小口板間の内法は2.72mである。

副葬品は全て、棺内底面近くの14層中より出土した。副葬品の配置は大きく2つに分かれている。西側板に沿って置かれた一群中には素環頭大刀（125）がある。大刀の柄頭が北小口方向に向いていることから、大刀は頭位を北向きにした被葬者の右手側に置かれていたと判断できる。その大刀に沿って鉇（144）、針状鉄器（145）、不明鉄器（146）がある。鉇は刃先を北に向

ける。なお周辺から出土した鉄鏃は、原位置から移動したものであろう。

副葬品の別の一群は、被葬者頭部の左側付近に位置する。袋状鉄斧（143）は刃先を北小口側に向け、その先に鉄鏃９本がひとかたまりとなっている。そのうち刃先を北西へ向けている６本が、本来の向きを保っているとみられる。

SX－11（図版32、写真図版33・35）

墳丘の南東隅に位置し、SX－10の東側に接している。

墓壙は短軸方向のみ、二段に掘り込んでいる。規模は上端では4.75×2.94m、深さ0.58m、中段では幅1.40m、深さ0.47mである。

棺の構造は組合式木棺直葬で、大きさは3.57×0.82m、深さ0.42mである。

棺底の中央やや北寄りに、約0.6×0.4mの範囲で赤色顔料の広がりが認められた。その赤色顔料の広がりの西側付近で、ほぼ底面に接して、鉄剣（149）と鉇（150）が出土した。鉄剣は棺内中央のやや西寄りに、切先を南に向け、鉇は鉄剣の北側に、刃先を北に向けて置かれていた。赤色顔料の位置が北に片寄っており、鉄剣の柄が北向きであるところから、頭位は北向きであったと考えられる。従って、副葬品は被葬者の右手側に置かれていたと判断できる。

SX－12（図版32、写真図版33）

墳丘の東側で、SX－11の長軸ラインの北側延長線上に位置している。

墓壙は短軸方向のみ、二段に掘り込んでいる。規模は上端では3.60×1.80m、深さ0.38m、中段では幅1.10mである。

棺の構造は組合式木棺直葬で、大きさは2.60×0.74m、深さ0.30mである。

SX－13（図版33、写真図版33）

墳丘の北西側に、SX－13・14が２基並んでおり、SX－13がSX－14を切っている。

墓壙は短軸方向を二段に掘り込むが、長軸方向ははっきりした二段掘りにはならない。規模は上端で3.70×2.02m、深さ0.64m、中段の幅0.94mである。

棺の構造は組合式木棺直葬で、大きさは2.56×0.76m、深さ0.38mである。

SX－14（図版33、写真図版33）

SX－13の西辺に沿っており、掘り方の一部を切られている。

墓壙はSX－13と同様であるが一回り小さく、規模は上端で3.18×1.78m、深さ0.52m、中段の幅1.03mである。墓壙から数点の土器が出土している。

棺の構造は組合式木棺直葬で、大きさは1.82×0.68m、深さ0.22mである。

棺内の副葬品として、鉇（151）１点がある。

SX－15（図版33、写真図版35）

小型の木棺墓で、SX－９の北側に位置する。主軸は他の木棺墓に対してほぼ直交しており、N56°Eに向いている。掘り方は長方形で、1.12×0.50mの規模をもつが、遺存状況は非常に悪

く、検出面からの深さは0.15mしかない。僅かに、両側辺に沿って、側板を立てたらしい掘り込みが認められたため、小型の木棺墓であろうと判断した。

SX－16（図版33、写真図版35）

SX－13の南東隅と、SX－10の間に位置する。

不整円形の土壙で、大きさは径0.80×0.90m、深さ0.60mである。

SX－17（図版33、写真図版35）

SX－15の東側で、SX－9とSX－10に区切られたコーナーに位置する。

小さな不整円形の土壙で、大きさは径0.36×0.48m、深さ0.22mである。

SX－18（図版33、写真図版35）

墳丘の北側のやや東寄りに位置する。

不整形な土壙で、掘り込みの中に対角線方向の張り出しを造る。上端での大きさは1.30×0.86m、対角線方向の長さ0.92×0.90m、深さ0.73mである。

2号土器棺（図版36、写真図版36）

SX－13とSX－10の間に位置する。掘り方は検出面で長軸0.55m、短軸0.48mの楕円形の土壙である。木の根による破損が著しく、調査時には土器の器形も判別しにくい状況であったが、遺物整理の段階で複合口縁の壺（156）であることがわかった。付近から出土した鉢（157）はおそらく蓋か底部の覆いとなっていたものであろう。ほかに高杯杯部（158）もこの近くで出土しており、土器棺にかかわるものと思われる。

3号土器棺（図版34、写真図版36）

墳丘墓の南東隅に位置し、SX－11の南東にあたる。完形の複合口縁壺(153)が口を西方向に向けて横たわっていた。掘り方は長軸1.20m、短軸0.80mで、壺の大きさより若干長い楕円形に掘られていた。蓋は当初からなかったものと思われる。ただし、掘り方の大きさは壺の口の延長方向に余裕があり、ここに木など残存しない素材の蓋があった可能性も考えられる。

4号土器棺（図版35、写真図版37）

SX－14の南側に所在する。長軸1.18m、短軸1.04mの楕円形の土壙内に、壺（155）の胴部のかなり大きい破片が、全て内面を上に向けて、何層も積み重ねられていた。これは壺を主体とする土器棺が、いずれかの時点で上面が削平されて壺が露出したため、それを片付けて埋め戻したものと思われる。これらの破片を全て取り上げたところ、別個体の壺の底部（154）が土壙の底に貼り付くようにして検出された。これはおそらく壺（155）の蓋か底の覆いであったと考えられる。

4．出土土器・石器（図版62・63・65・66、巻首図版6・7、写真図版62・63）

SX－16供献土器

檀上祭祀に伴って供献された、非常に一括性の高い土器群である。器種には二重口縁壺・小

型脚付壺・脚付無頸壺・鉢・高杯・器台などがあり、甕は全く含まれていない。土器群の胎土にはチャート粒が含まれ、色調は橙色を発するものが多い。ただし101・106・107は浅黄橙色を呈し、胎土中にクサレレキが目立つなど、若干異質である。また土器の他に、砥石が1点ある。

二重口縁壺（101・102）　101は扁球形の体部から頸部がラッパ状に開き、端部に面をとる。さらにその上から口縁部が上外方に立ち上がり、いわゆる二重口縁となる。底部は高台状に突出する。文様は肩部から上に集中する。まず口縁端部内面と口縁部外面に櫛描波状文を施すが、剥離のため不鮮明である。次に頸部端面に楕円形の浮文を貼り付けるが、1箇所しか遺存していないため単位は不明である。さらに頸部の付け根に貼り付け突帯をめぐらし、突帯を上下2段に刻む。肩部には櫛描で、上から直線文・波状文・波状文・直線文の順に施文する。櫛状工具の大きさは、最大で8条/1.5cmである。外面の調整は、頸部に縦方向のハケメが残る他は剥離してしまっているが、おそらくミガキで仕上げたものと思われる。体部内面は単位の密なハケメで調整する。口径17.8cm、器高25.5cm、底径4.8cm、胴部最大径24.7cm。

102は101とよく似たプロポーションをとるが、口径・頸部径が少し大きく、肩部の張りが弱い点で異なっている。文様はまず口縁部外面の上下2箇所に櫛描波状文を施す。次にやや下方へ突き出た頸部端面の下端に、キザミメを施す。また頸部の付け根から7～8mm間隔をおいて、突帯の剥がれた痕跡がみられる。肩部には櫛描で、上から波状文・波状文・直線文・波状文の順に施文する。櫛状工具の大きさは、最大で9条/1.3cmである。外面はほぼ全面をミガキで仕上げる。口径24.4cm、器高27.0cm、底径4.6cm、胴部最大径27.4cm。

小型脚付壺（103）　扁球形の体部から口縁部が短く立ち上がる。脚部は大きく外へ開いて、端部は丸く収まる。頸部の付け根には、2箇所に穿孔をもつ。全面はミガキで仕上げる。口径3.0cm、器高8.6cm、底径6.5cm、胴部最大径8.4cm。

脚付無頸壺（106・107）　2点はほぼ同形・同大である。体部はワイングラス形で、口縁部は僅かに外反する。脚部はラッパ状に開く。外面の調整は剥離のため不明であるが、ミガキによるものと思われる。106は脚部を欠失する。口径11.8cm。107は口縁端部を失う。推定口径12.0cm、推定器高15.6cm、底径11.6cm。

鉢（108～110）　108は体部が内弯気味に立ち上がり、口縁部が平たく収まる。内外面にミガキを施し、外面の下半にはハケメが残る。口径19.0cm。

109は扁平な体部から、口縁部が短く屈曲する。表面の剥離が激しいが、外面にはミガキの痕跡が認められる。口径12.9cm、器高4.9cm。

110は底部のみの破片で、底面は高台状に内弯する。調整は不明である。底径6.4cm。

高杯（113・114）　113は口縁部のみの破片で、器台の可能性もある。杯部の形態は、内弯気味の浅い体部から、口縁部が外反する。口径28.6cm。

114の杯部は、浅い鉢状の体部に、よく発達した有段口縁が付く。口縁部外面には10条の擬凹

線文を施す。杯部底面には円盤充塡を行う。脚部はラッパ状に開き、4方向に円形の透かし孔を穿つ。調整は外面と杯部内面をミガキで仕上げ、脚部内面にハケメを残す。口径26.6cm、器高20.0cm、底径17.6cm。

器台（115）　脚柱部を欠失しており、図上で復元した。受部は大きく2段に外反する。裾部は2段目のみ残っており、受部の相似形になるとみられる。口径29.6cm、底径22.0cm。

脚部（104・105・111・112）　104・105は小型で、脚付壺・鉢などに付くものであろう。底径は104が8.1cm、105が8.4cm。

111・112は高杯や脚付壺などの脚部であろう。底径は111が17.0cm、112が12.8cm。

砥石（116）　2面に使用痕を残す。砥面には数条のキズと、僅かに赤色顔料の付着がみられる。石材はキメの細かい砂岩である。大きさは13.4×7.9×7.1cm。

SX－9出土土器

壺底部（117）　形態・胎土からみて、102と同器種の可能性が強い。底径4.1cm。

SX－14出土土器

壺（118）　短く外反する口縁部のみの破片である。口径15.0cm。

甕（119・120）　119は外反する有段口縁をもち、口縁部外面は無文である。体部内外面はハケメ調整を行う。口径15.0cm。

120は内傾する口縁端部に、2条の擬凹線文を施す。口径19.4cm。

高杯（121）　裾部の破片で、外面にハケメが残る。底径19.9cm。

包含層出土土器

甕（122・123）　122は直立気味の有段口縁をもち、口縁部外面は無文である。体部外面はハケメ、内面はヘラケズリを行う。口径13.0cm。

123はくの字状の口縁部をもつ。体部外面はハケメ、内面はヘラケズリを行う。口径13.0cm。

2号土器棺

複合口縁壺（156）　主体となる壺はいわゆる山陰系の複合口縁の壺で、外面は細かいハケメを施し、内面はヘラケズリを行っている。大きさの割りにきわめて器壁が薄く、浅黄橙色から鈍い橙色を呈し、胎土・焼成とも良好な精良なつくりの土器である。複合口縁の稜はシャープで、口縁ははぼ直立し、端部は平坦な面をもつ。底はやや丸みを帯びた平底である。
器高39.6cm、胴部最大径33.5cm。

鉢（157）　有段口縁の鉢で、大きく外側に開く口縁部の外面に擬凹線文が施されている。浅黄橙色を呈し、体部外面はハケメのちヘラミガキ、内面は全面をヘラミガキする丁寧なつくりの土器である。口径26.3cm。

高杯（158）　杯部内面に、低い段で幅広の施文帯を作り出し、そこに24条の多条沈線文を巡らしている。施文原体は櫛状工具で、下から上に3単位が観察できた。胎土はきわめて精良

で淡黄色を呈し、内面には赤色顔料が塗られていた。東海地方に見られる器形である。復元口径21.6cm。

3号土器棺

複合口縁壺（153）　　器高77.0cm、胴部最大径62.8cmのかなり大型の土器である。調整は糸り明瞭ではないが、外面は胴部上半はヘラケズリののちハケメを施し、胴部下半はヘラケズリのままである。また、内面は頸部から肩部にかけてと底部に指頭圧痕が残っている。また、色調はやや明るいいわゆるチョコレート色で、胎土中に雲母を含んでいる。これらの特徴はかつて川島遺跡で「播磨系」と言われ、現在では四国の「讃岐系」と呼ばれている土器群の特徴と一致する。

4号土器棺

壺（155）　　主体の壺は頸部以上が無い。胴部最大径68.6cm、残存高76.2cmとかなり大型の壺で、外面はハケメとヘラミガキ、内面は肩部は横方向のヘラケズリで、それ以下はハケメを施す。なお、底は尖り気味で、焼成後に穿孔されたらしい。胎土は雲母を含み、色調は淡茶褐色で、おそらく他地域からの搬入品であろう。

壺（154）　　胴部最大径付近までの底部の破片である。内外面ともハケメを施すが内面には粘土帯の継ぎ目がかなりはっきりと残っている。色調は淡黄橙色である。この土器は地元産のものと思われる。

これら土器棺の土器の時期は、弥生時代終末ないし古墳時代初頭に位置付けられる。また、153や155のようなかなり大型の土器が他の地域から運ばれてきたものであることや、2号土器棺や4号土器棺で異なる地域産の土器を組み合わせている点が注目される。

5．出土鉄器（図版64、巻首図版6、写真図版64・65）

SX－18棺内副葬品

素環頭大刀（125）　　切先が腐食のため少し欠ける以外は、ほぼ完形である。刀身は反りのない直刀で、平棟である。関部は片関で、直角に切れ込む。柄部は断面台形で、端部に素環の柄頭がつく。素環部は共作りで、棟側から刃部側に向かって折り曲げ、嚙部は密着させない。素環部の形状は楕円形で、断面はやや内側が平たい円形となっている。

大刀には全体に織物の断片が付着している。織物は平織の絹とみられ、特に遺存が良好な切先や素環部などでは層状に錆着している部分もあり、大刀は絹で幾重にも巻かれていたものと考えられる。従って、鞘や柄木は装着されていなかったと考えられる。

現存長93.5cm、刀身長76.5cm、刃幅4.0cm、棟幅0.85cm、関部の段差0.8cm、柄部長11.5cm・幅2.9cm・厚さ0.6～1.0cm、素環部5.5×6.9cm・径1.0cm、重さ807g。

鉄鏃（126～142）　　大小2種類あり、いずれも鏃頭式に属する。鏃身部の長さが2～3cmのものを1類、4～5cmのものを2類とする。17点のうち1類が9点、2類が8点ある。

1類（134～142）は羽子板形を呈し、関部は直関である。刃部は両面から研ぎ出す。茎部は断面がやや角張った円形で、一部に矢柄の木質と樺皮が残る。全長4.05～4.5cm、身部長2.3～2.7cm、刃幅1.15～1.45cm、厚さ0.4～0.6cm、茎部長1.5～2.15cm・径0.35～0.5cm、重さ2.71～5.55g。

2類（126～133）は鏃身部が一回り大きく、基部から刃部にかけて先太りになる。中央には円孔を穿つ。全長6.4～7.0cm、身部長4.5～4.9cm、刃幅1.9～2.3cm、厚さ0.4～0.6cm、茎部長1.6～2.2cm・径0.4～0.45cm、孔径0.3～0.35cm、重さ8.48～16.48g。

鉄斧（143）　袋状鉄斧で、袋部の折り曲げは密着させない。全体に織物の断片が付着しており、織物に包まれていたことが判る。出土時の下側には、柾材の一部とみられる木質が付着している。全長9.15cm、刃幅5.0cm、袋部径2.4×3.6cm、重さ110.10g。

鉋（144）　切先を欠失する。刃部には鎬を作り出し、織物の断片が付着する。残存長16.3cm、刃幅1.0cm、柄部幅0.8cm、厚さ0.4cm、重さ14.29g。

針状鉄器（145）　両端を欠失する。断面は円形である。一部に布の残欠が付着する。残存長12.7cm、径0.4cm。

不明鉄器（146）　工具の柄部の残欠とみられ、端部が僅かに屈曲する。残存長4.6cm、幅0.7cm、厚さ0.25cm。

SX－9槨内副葬品

鉄剣（147）　切先の破片である。錆のため遺存状況が悪いが、布の断片が付着している。残存長9.4cm、刃幅2.9cm、厚さ0.65cm。

不明鉄器（148）　鉄器の残欠で、爪形を呈する。中が中空になっているため、何かに装着したものと思われる。残存長3.1cm、幅1.6cm、厚さ0.9cm。

SX－11槨内副葬品

鉄剣（149）　完形である。刀身は直線的で、明確な鎬はもたない。断面はレンズ状である。関部は両関で、直角に切れ込む。茎部は先端に向かってやや細くなり、茎尻は平たく収まる。茎部のほぼ中央に目釘が打たれている。目釘は片側を尖らせており、断面は円形である。茎部から刀身にかけては、呑口式の拵えが遺存している。錆のため観察が困難であるが、柄木はおそらく両面から合わせたもので、先端を三角形に加工している。その上から糸で千段巻きにして柄を固定している。糸巻の残存する範囲は最大21mmで、その中に29本の糸を確認することができた。仕上げには漆よりも浸透性の高い液体を用いたようで、表面は褐色を呈しているものの、層状の樹脂は認められない。全長35.5cm、刀身長29.0cm、刃幅3.7cm、厚さ0.5cm、茎部長6.5cm・幅1.5cm～2.0cm・厚み0.5cm、目釘長1.8cm・径0.5cm、重さ202.53g。

鉋（150）　完形である。刃部と柄部の境は不明瞭で、刃部に鎬は認められない。柄部の端は僅かに跳ね上がる。布の断片が付着する。全長12.65cm、幅0.85cm、厚さ0.5cm。

SX－14棺内副葬品

鉈（151）　刃部はU字形に折り曲げられており、切先を失う。柄部も半ばで欠損している。刃部と柄部の境は不明瞭で、刃部に鎬は認められない。柄部に布の断片が付着する。残存長7.7cm、幅0.8cm、厚さ0.4cm。

2号土器棺出土遺物

不明鉄器（152）　棺内の土を水洗選別して見つかった。工具の柄部の破片とみられる。残存長2.4cm、幅0.6cm、厚さ0.3cm。

第4節　土器棺墓

1．遺　構（図版36・37、写真図版36・37）

1号土器棺

第11郭で発見された。1.15×1.03mの隅丸方形の土壙内に主体となる複合口縁壺（162）を据え、口には鉢（161）を被せ、底を甕の胴部（163）で覆っていた。壺は口を北東に向けて横たわっていた。

5号土器棺

第4郭のほぼ中央で発見された。壺（159）は立っていたらしく、底部のみ残されていた。掘り方は直径0.35mのほぼ円形の土壙で、土器がきっちりと納まる大きさに据られている。この遺跡では土器が立っている状況で納められた例はこの一例のみである。

6号土器棺

第10郭の北東斜面を下りた平坦面に位置する。0.35×0.31mの隅丸方形の土壙内に、甕の肩部までの破片が土器を半截したような形で残っていた。残りが非常に悪く、図化できなかった。

包含層出土の土器棺

ほかに第3郭の調査区外で、土器棺らしい壺（160）の破片がまとまって表面採集された。

2．遺　物（図版66・67、写真図版66・67）

1号土器棺

複合口縁壺（162）　極端な下ぶくれの器形で、胴部の最大径は34.7cm、口縁部は内傾する複合口縁で、口径は12.9cmである。調整は外面がタタキで、内面にハケメを施す。ただし、口縁部外面や肩部には一部ヘラミガキが認められる。複合口縁の稜は鈍く、胴部下半は粘土帯の接合痕がなで消されずに残っており、全体として粗雑な印象を受ける。底部は欠損しているため平底か丸底かは不明である。

鉢（161）　有段口縁の鉢で、内面にはヘラミガキが施されている。口径21.4cm。

甕（163）　底を寄ぐ甕の胴部の外面はタタキ調整であるが、内面は一方向に指でナデた痕跡がはっきりと残っていた。

以上３点の土器はいずれも浅黄橙色など白っぽい色調をしており、地元産と思われる。

５号土器棺

壺（159）　平底の底部からほぼ最大径の位置までが残存している。外面はタタキののちハケメを施し、内面にもハケメを施す。内外面とも粘土帯の接合痕が残っている。色調は橙から黄灰色である。161～163と同様地元産の土器であろう。直径32.1cm、残存高15.8cm。

包含層出土の土器棺

壺（160）　調査区外で表面採集した土器の破片のうち、図化できたのは口縁部のみであった。口径約37cmとかなり大型の土器である。右上がりの斜線を充塡したヘラ描きの鋸歯文が施されている。胎土中にかなりの量の雲母を含み茶褐色をしており、おそらくこの土器も土器棺３・４の壺と同様他地域から搬入された土器であろう。

第５節　内場山１号墳

１．墳　丘（図版38、写真図版38）

山頂に所在する１号墳は直径28.5mと推定される円墳で、図版38中の標高239.6mあたりが墳裾と考えられる。そうすると現状での高さは3.1mとなる。しかし、先述した内場山城第３郭の造成により墳頂が、また、第４郭により墳裾がそれぞれ削平されているため、本来の高さは確認できないが、推定では3.4mになるものと思われる。また、現代には展望台が作られたため、中央部が攪乱を受け、コンクリートの基礎が埋まっていた。古墳の西半部は道路工事予定範囲外であったため、原状のまま遺存しており、発掘調査を行ったのは東半部のみである。

２．主体部

前述のように古墳の中央部は現代の攪乱を受けていたが、墳頂上の東側に寄った部分で木棺墓を検出することができた。第１主体は攪乱による損傷を免れ、掘り方全体が遺存していたが、第２主体は東端部がかろうじて遺存していたに過ぎない。

第１主体の掘り方内部には箱型木棺と思われる痕跡が残っており、長さ4.6m、幅0.7m、検出面からの深さは約40cmであった。幅は北側が５cm広く、棺底も約３cm高いことから、頭部は北にあったと思われる。内部からは遺物は全く出土しなかった。

掘り方は、まず外側を垂直に掘削したあと底部をほぼ水平にし、中央部の棺体部分をさらに掘削したいわゆる二段墓壙である。棺相当部分の底部はやや丸くなっている。掘り方の規模は長軸方向が5.5m、短軸方向が2.2mで、深さは一段目では約30cm、二段目の最も深いところでは上面から約60cmであった。

主体部内堆積の土層は、木棺中央部では上層より暗黄色土、淡赤色土、暗赤褐色土で、掘り方の埋土は暗黄色土、淡赤色土、赤褐色土である。地山は赤色～赤褐色の軟質岩盤である。

第２主体は東西に主軸をもつ木棺墓であるが、東端部分しか遺存しない。第１主体同様二段

墓壙であるが、割竹形木棺の可能性が窺える。第1主体に先行して築造されている。

出土遺物が全く認められなかったため、所属時期は不明であるが、あえて推定するならば古墳時代中期の所産と想定される。

第6節　中世墓

尾根部では7基の中世墓が検出された。これらの墓は集中せず調査区の中に点在して見つかっている。いずれも丘陵地に検出されたため、上面を削平され残りはよくない。

1．遺　構（図版39・40、写真図版39・40）

中世墓1

丘陵の中腹、第10郭の北側斜面の中腹に位置し、和寿園の遊歩道の直下に検出された。遺構は急斜面の地山を掘削して築造している。しかし、残りは悪く、東半部が崖の崩落、あるいは遊歩道の削平によって失なわれていた。

遺構は中央に土壙を穿ち、その周囲をドーナッツ状に周溝が巡る構造である。中央の土壙は円形で直径0.43m以上、深さ0.1m以上の規模をもつ。周溝は直径約2.4mの弧を描き、幅0.35～0.41m、深さ0.15mの規模を有している。土壙の底から側壁にかけては焼土面が観察され、埋土にも多量の遺物や炭・焼土が含まれていた。同じく周溝にも遺物・炭・焼土が多量に含まれるが、焼土面は観察されない。

周囲に周溝を伴う構造をもつ墓にはいくつか類例があるが、これ程小規模なものは知られていない。また、中央の土壙についても人体を埋葬できるほどの規模ではなく、これが中世墓であるとすれば火葬墓と考えられる。しかし、焼土面はあるものの人骨などは検出していないため、中世墓とするには疑問点も残っている。

出土遺物には土師器皿（164～171）・托（172～182）・杯（183～192）・甕（193・194）、瓦器椀（195・196）、須恵器椀（197～206）・鉢（207）がある。

中世墓6

1号墳の主体部の南西寄りで検出された。東西方向に主軸をもち楕円形のプランを呈する。埋土は暗赤褐色土で地山の風化したものである。長軸1.32m、短軸0.88m、深さ0.11mの規模を測る。墓壙の上部は大半が削平され、非常に浅く、プランも不定形である。

中世墓7

帯曲輪4の南端で検出された。平面楕円形のプランを呈し、長軸2.32m、短軸1.20m、深さ0.14mの規模を測る。浅くプランもやや歪なため上部は大半が削平されていると思われる。中央に人頭大の角礫を据えている。

遺物は須恵器椀1点（208）が出土している。

中世墓8

第３郭の東斜面に位置する。南北に主軸をもつ。長さ1.85m、幅0.72m、深さ0.3mを測る。

中世墓９

第10郭・帯曲輪１の北斜面で検出された。北西ー南東方向に主軸を持つ。底は平らに掘削され、壁は直に立ち上がるもので、木棺直葬墓と思われる。規模は長さ1.96m、幅0.7～0.8m、深さ0.48mを測る。

墓壙の北西端に土師器小皿（210）が３個体、南寄りの東壁にやや浮いた状態で瓦器椀（211）１個体が据えられていた。いずれも埋葬時に副葬された遺物と思われる。そして、北西端のものは棺内に、東壁のものは棺上に置かれていた可能性がある。

中世墓11

１号墳の主体部の南端に重なって検出された。墓壙は円形を呈し、直径0.6m、深さ0.1mを測る。埋土は中世墓６同様に暗赤褐色土で、地山土の風化したものである。

中世墓12

２号住居跡（第６郭）内で検出されたもので、東西方向に軸を持つ。長さ1.94m、幅0.6m、深さ0.5mを測る。墓壙の平面は長方形で壁は垂直に近く、東端部の底からは人頭大の石が検出された。墓壙の上面で須恵器小皿（209）１点を検出した。

２．遺　物（図版68、写真図版68～70）

中世墓１出土遺物

出土遺物には土師器皿・台付皿・杯・甕、瓦器椀、須恵器椀・鉢がある。実測個体数は合計44点を数えた。

土師器皿（164～171）　皿は全て小皿である。法量は口径7.9～8.4cm、器高1.2～1.4cm前後で、底径4.8～6.0cmを測る。体部はヨコナデ調整で仕上げている。底部には糸切りの痕跡を残す。器高は低く、体部は直線的に立ち上がるものが多い。

土師器托（172～182）　高台の高くなるもので内面に大きな段が付く。172～180のように小型のものと、181・182のように大型のものがある。

小型のものは９個体を実測した。法量は口径8.8～9.4cm、器高2.8～3.2cm、底径4.0～5.1cm前後である。全体に薄手で、底部は糸切り、体部は横方向に大きく開く。口縁部はすんなりとおわるか、やや肥厚させるものが多い。内面底部が高台内に大きく窪むのが特徴的である。

大型のものは２個体を実測した。法量は口径16.4cm、器高4.0cm前後、底径5.0～6.0cm前後と思われる。やはり高く大きい高台を有し、内面底部は高台内に窪んでいる。体部は直線的に大きく開き、細かなロクロ痕跡が明瞭に残る。

土師器杯（183～192）　10個体を実測した。法量は口径14.0～16.0cm、器高2.8～3.5cm、底径6.1～9.5cmである。口径の割に底径が大きいことが目立つ。体部は184・188のように内弯するものもあるが、全体的には直線的あるいはやや外反ぎみに立ち上がるものが多い。口縁端

部はすんなりおわるものと、やや肥厚させるものがある。
底部はすべて糸切りで、底部と体部の境が明瞭である。

土師器甕（193・194）　両者とも外面には平行タタキの痕跡を残す。内面は横方向を基本とするナデ調整を施している。しかし、193ではナデがやや雑であるため同心円のあて具痕跡がわずかに観察できる。193は口径21.0cmを測る。器形はやや直立するもので、頸部と胴部の屈曲は大きくない。

瓦器椀(195・196)　2個体がある。法量は口径15.6～15.2cm、器高4.7～6.4cm、底径6.4～7.0cmを測る。どちらも器表が荒れ調整が観察しにくい。おそらくヘラミガキは内面に密で、外面は粗く簡略化したものと思われる。外面には指頭痕跡が明瞭である。暗文は内面底部の残りが悪く有無を確認できなかった。口縁部はやや尖らせておわるが沈線は認められない。高台の作りは195は低く、196は変形した雑なつくりである。

須恵器椀（197～206）　法量は口径16.2～17.7cm、器高5.2～5.6cm、底径4.2～6.6cmを測る。やや内弯気味に立ち上がる体部からすんなりおわる口縁部をもつ。器壁は厚手なつくりで体部にロクロ痕跡をやや多く残す。底部は糸切りになり、底部と体部の境は明瞭であるが、高台は痕跡を残す程度である。

須恵器鉢（207）　底部の破片で、底径10.1cmを測る。内面には使用痕が観察された。

中世墓7出土遺物

須恵器椀（208）　底部の破片で糸切り底のものである。底径5.8cmを測る。

中世墓9出土遺物

瓦器椀1点、土師器皿3点などが副葬されていた。図化できたものは瓦器椀1点と土師器小皿1点のみである。

土師器小皿（210）　体部と底部の境が明瞭である。口径8.6cm、器高1.3cm。

瓦器椀（211）　法量は口径15.0cm、器高4.7cm、高台径4.7cmで、やや踏ん張る高台を持ち、内面には細いミガキが観察される。外面は磨滅してミガキの有無を観察できない。

中世墓12出土遺物

須恵器小皿（209）　やや器高が高く、体部中位で屈曲する。口径8.0cm、器高2.3cm。

3．小　結

以上、7基の中世墓について記述した。この内、中世墓8・9・12は長方形の土壙墓で、中世墓9については木棺墓の可能性がある。

また、中世墓1は構造や出土した多量の土器などから特異な存在である。同構造の遺構については今のところ類例を見いだすことはできないが、墓とすれば火葬墓の可能性が高い。時期は須恵器椀や瓦器椀の形態から12世紀代のものと考えられる。

第５章　斜面部の調査

第１節　調査の概要

斜面部は調査区のほぼ中央を占め、特別養護老人ホーム「和寿園」の跡地である“和寿園地区”とその南側の谷部などを含める。

和寿園地区付近の斜面は、標高214～217m辺りが若干の平坦地となっている。山麓の平坦地とは５～８mの比高差をもっており、そこで古墳時代後期の竪穴住居跡、平安時代～中世の遺構・遺物が見つかっている。また谷部は中世にはゴミ捨て場として利用されており、土壙中からは廃棄された土器が出土している。

この他、近世墓および植栽の穴が約280基見つかっており、近世以降には墓地となっていたらしい。

第２節　竪穴住居跡

１．遺　構（図版42、写真図版42）

15号住居跡

崖に面した僅かな平坦面で見つかったため、遺構の残りが非常に悪い。遺存していたのは方形プランの一隅と若干の床面のみで、範囲は3.4×1.2m、壁面の立ち上がりは0.1mほどである。検出した柱穴は１箇所だけである。

遺物は床面から、須恵器杯身（212）、土師器椀（213）・製塩土器（214）・高杯（215）・甕（216・217）などが出土している。遺物からみて、住居跡の年代は古墳時代後期に属する。

20・21号住居跡

和寿園地区北側の崖面で段状の落ちが見つかり、周壁溝があることから住居跡であると判断した。遺構は大きく２つのまとまりに分けられ、北側を20号住居跡、南側を21号住居跡とする。

20号住居跡は方形プランで、西辺の一部と南西隅だけが残っている。周壁溝からは最低３回の建て替えが認められる。西端の床面は他より0.5m高いところから一番古いと考えられ、さらに東端・中央の順に周壁溝が移動していったと推定できる。床面で見つかった柱穴は、おそらく後世の建物跡に伴うものとみられる。

21号住居跡も方形プランで、西辺と南西隅だけが残り、20号住居跡を切っている。

住居跡の時期は、形態と付近の包含層出土遺物からみて、６世紀代～７世紀初頭にかけての範囲と考えられる。

２．遺　物（図版69、写真図版71）

15号住居跡出土の遺物

須恵器杯身（212）　立ち上がり部のみの残欠である。口径10.1cm。

土師器椀（213）　丸底の椀である。口径12.4cm。器高5.0cm。

製塩土器（214）　口縁部から体部にかけての破片で、底部を欠失する。二次焼成を受けており、非常に残りが悪い。口径3.9cm。

土師器高杯（215）　受部のみの破片で、口縁端部と脚部を失う。受部は水平に開き、口縁部は稜をもって立ち上がる。脚部はラッパ状のものであったとみられる。

土師器甕（216・217）　どちらもくの字に外反する口縁部をもつ。216は口縁部のみ、217は口縁部から体部にかけて残存する。216は口径16.3cm。217は口径19.0cm。

第3節　和寿園地区

1．遺　構（図版43、写真図版41）

和寿園地区周辺はもともと、斜面からの崩落土の堆積によってやや平坦な面を成しており、そこに住居や建物が築かれたものである。しかし和寿園の建設の際に、斜面の上方を大きくカットした上に建物の基礎を入れており、地区の西半分はほとんど遺構が残っていない。また斜面側もかなり土砂が流れており、遺構の残りは非常に悪い。

溝

崖面の上端に沿って、数本の溝状遺構が見つかっている。このうち溝3・6・7については、竪穴住居跡の周壁溝の可能性もある。また溝2は幅がやや広いことから、建物の雨落ち溝とも考えられる。溝の周辺からは、弥生時代後期～古墳時代後期にかけての遺物が出土している。

柱穴

多数の柱穴を検出しているが、建物は復元できなかった。柱穴内からは弥生時代後期～平安時代前期の遺物が出土している。

2．遺　物（図版69、写真図版71・72）

弥生時代後期～古墳時代前期

弥生土器甕（243・247）　243はP45から出土した甕の底部である。磨滅が激しいため、調整は不明である。247は溝6から出土した甕の体部で、肩部にキザミメを施す。

土師器高杯（241・242）　241はP241から出土したほぼ完形に近い高杯である。口縁部は有段口縁風に外反するが、内面の段はほとんど消失している。口縁部外面はヨコナデで仕上げる。脚部は低く外方へ踏ん張り、内面をハケメで調整する。口径16.3cm、器高11.7cm、底径10.0cmである。242は杯部が直線的に開く。口径16.8cm。

土師器鉢（246）　山陰系の大型の鉢の口縁部とみられる。有段口縁は基部の突出が認められるだけで、内面の段はほとんど消失している。口径30.0cm。

古墳時代後期

須恵器杯蓋（218～221）　218は立ち上がりが高く、シャープなヘラケズリを残している。口径10.7cm。219は立ち上がりが低く、ヘラケズリの稜も甘い。口径10.7cm。220・221は蓋と身が逆転する時期のもので、内面にかえりが付く。口径は220が9.0cm、221が7.8cm。

須恵器杯身（222・223）　222は立ち上がりが低く内傾する。口径9.2cm。223は平底で、体部が直線的に立ち上がる。口径9.6cm。

須恵器椀（224）　体部は丸みを帯び、口縁部は内屈する。口径9.2cm。

須恵器高杯（225）　脚部のみの残欠で、方形の透かしの上下に沈線を施す。底径9.6cm。

須恵器鉢（238）　体部のみの破片で、口縁部の形態は不明である。

須恵器壺（239）　口縁部のみの破片で、口縁は緩やかに外反し、端部が肥厚する。口径10.6cm。

土師器椀（244）　丸みのある体部で、口縁部はそのまま終わる。口径10.4cm、器高5.2cm。

土師器甕（245）　口縁部はくの字に屈曲する。口径20.2cm。

平安時代前期

須恵器杯蓋（226～231）　体部は低平で、口縁部が屈曲する。頂部のヘラキリ痕はほとんど調整していない。226は大型の蓋で、ツマミをもつ。口径18.0cm。227～231は中型の蓋である。口径13.6～15.0cm。

須恵器杯A（232）　底部は平底で、体部が上外方に開く。口径13.8cm。

須恵器皿A（233～235）　底部は平底で、切離しは回転ヘラキリ技法による。口径13.0～14.2cm。

須恵器皿B（237）　底部には輪高台が付き、口縁端部は外へツマミ出す。口径14.4cm。器高3.0cm。

須恵器椀（236）　底部は平高台で、切離しは回転ヘラキリ技法による。体部は中程で、わずかに稜をもって開く。口径13.1cm。器高4.0cm。

円面硯（240）　硯部から脚部かけての破片である。口縁部はわずかにツマミ上げて外側に面をもたせ、脚部には方形の透かしを穿つ。口径13.4cm。

第4節　中世土壙群

斜面部では和寿園地区南側の谷部に、土壙が多数検出された。人為的に掘削された土壙かどうかは判別できないが、中からは多くの遺物が出土している。

1．遺　構（図版44、写真図版43・44）

ＳＫ１・ＳＫ15

ＳＫ１・ＳＫ15は切り合うものであるが、前後関係は不明である。平面形状はどちらも不定

形である。ＳＫ１は長さ1.2m、幅0.6mの規模を有し、ＳＫ15は長さ2.1m、幅1.1mの規模を有している。この内、ＳＫ１から遺物が出土している。この遺物からＳＫ１は12世紀代の遺構と考えられる。埋土には炭を含んでいる。

ＳＫ２

隅円の方形を呈する土壙である。長さ1.6m、幅1.2mを測る。埋土は地山土でやはり炭混じりである。

ＳＫ４

南北方向に長軸を持つ楕円形の土壙である。規模は長さ0.9m、幅0.65mを測る。

ＳＫ６

不定形を呈する土壙である。規模は長さ1.6m、幅1.0mを測る。断面はＵ字形に掘削する。

ＳＫ７

楕円形を呈する小型の土壙である。規模は長さ0.85m、幅0.9mを測る。

ＳＫ８

楕円形を呈する小型の土壙である。規模は長さ1.0m、幅0.8m、深さ0.5mを測る。

ＳＫ11・ＳＫ13

切り合う土壙であるが前後関係は明らかに出来なかった。両者とも楕円形に近い形状を呈する。ＳＫ11は長さ3.1m、幅1.4mを測る。ＳＫ13は長さ2.7m、幅1.9mの規模をそれぞれ測る。

ＳＫ15

三角形を呈する土壙である。規模は南北方向1.２m、東西方向1.4mを測る。断面は擂鉢状になっている。埋土には炭を含んでいた。

ＳＫ17

楕円形を呈する土壙である。規模は長軸長0.9mを測る。二段掘りになるもので、あるいは柱穴の可能性もある。

２．遺　物（図版70、写真図版73）

遺物はＳＫ１・11・13・16から出土している。実測点数は25点である。

ＳＫ１

土師器托（248）　　口縁部を欠く個体である。底径6.6cmの高台部から直線的に立ち上がる体部を持っている。内面底部が高台内に大きく窪むのが特徴である。

土師器甕（249・250）　　口径18.6cmと18.9cmを測る。胴部は直線的で、頸部から口縁部にかけては大きく屈曲する。口縁部は端部を肥厚気味に仕上げ、250は外面に面を持つ。外面には右上がりの平行タタキ痕跡を残し、内面には不定方向のナデが観察できる。

瓦器椀（251）　　弧を描きながら立ち上がる体部を持ち、口縁部は尖らせておわる。内面には細かいミガキが、外面には指頭底跡が顕著に残り、ミガキが途切れ途切れに観察できる。暗

文は磨滅が激しく観察できなかった。

これらの遺物の時期は12世紀代と考えられる。

ＳＫ６

須恵器杯身（252）　古墳時代の須恵器である。口縁部には沈線が観察できる。口径10cmを測る。上層群の埋土に混入した遺物と思われる。

ＳＫ11

土師器皿（253・254）　253は底部糸切りで、腰部が体部にかけて大きく張り出すものである。口径8.6cm、器高1.6cmを測る。254はやはり糸切り底になる。底部と体部の境が明瞭で、体部が直線的に立ち上がるものである。

土師器杯（255）　口径15.8cm、器高4.2cmを測る。底部が糸切りになるもので、口縁端部を外反させる。

土師器甕（257）　口径14.9cmの小型の甕である。頸部で屈曲し短く伸びる口縁部を持つ。

黒色土器椀（256）　口径14.1cm、器高6.0cmを測る。体部は緩く内弯しながら上方に立ち上がるものでやや背高になる器形である。内面は細かい不定方向のミガキで仕上げている。

須恵器皿（258）　口径9.2cm、器高2.3cmを測る。薄手の作りで、底部は糸切りになる。体部は内弯しながら立ち上がる。

須恵器椀（259～266）　全体的に内弯する体部を持ち、高台は退化せず、明瞭に観察できる。内面底部は高台内に窪み段が観察される。口縁部は丸く納めるものが大半であるが、小さく外反させるもの（261・265）、天目碗のような屈曲をもたせるもの（259）も見られた。なお、259は内面に墨の付着が見られ、使用痕跡が観察された。このため転用硯として使われていたと判断される。

これらの遺物の時期は11～12世紀前半と考えられる。

ＳＫ13

土師器皿（268）　口径9.5cm、器高1.2cmを測る。底部と体部の境が明瞭で、体部は直線的に立ち上がり、口縁部は尖らせて終わる。

土師器台付皿（269）　口径8.9cm、器高2.4cmである。中世墓１出土遺物のように内面底部が高台内部に窪まないのが特徴である。

須恵器皿（267・270・271）　皿は全て糸切り底になる。267は口径8.0cm、器高1.4cmを測る。底部は若干高台状となり、体部は腰を持って立ち上がる。268は底部と体部の境が明瞭で体部が直線的に立ち上がる。271は小さい高台を持ち、体部が内弯しながら立ち上がる。

須恵器椀（272・273）　両者とも底部を欠く個体である。口径16.0cmを測る。272はやや直線的に立ち上がる体部で、口縁を肥厚させている。273は内弯しながら立ち上がる体部で、口縁部をやや尖らせて終わる。

これらの遺物の時期は12世紀代と考えられる。

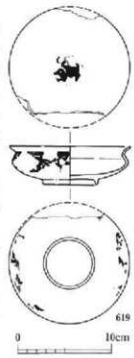
ＳＫ16

須恵器椀（274）　口径15.0cmを測り、口縁端部を軽くヨコナデしているのが特徴である。

第５節　近世墓

内場山城跡は和寿園以前に墓地であったことから、近世墓の存在が予想された。斜面部においては、調査時に280基に及ぶ大量のいわゆる近世墓を検出した。その大半が直径約１m、深さ約50cm程度の円形の土壙で、底はほぼ平らである。中には黒色のぼそぼそとしたしまりの悪い埋土が詰まっていた。これらは約２mの間隔で等高線に沿うように列をなし、かなり整然と並んでいる。そのうち和寿園近くの近世墓42から、挿図２の染付香炉（線香立て）が出土した。

染付香炉（619）　内面は唐獅子を中心におき、周囲は界線内に雷文を巡らせる。外面には界線内に菊花文と松に舟を描き、高台内には宗祥堂の銘がある。これらはいずれもスタンプによる施文で、コバルトブルーの発色からみても、江戸後期から江戸末頃のものであり、近世墓であることが裏付けられた。しかし、調査中作業に来ていた地元の人の話では、この山は戦時中桐の木が植林されたとのことであり、このいわゆる近世墓とした土壙の中に植林用に掘削した穴がまじっている可能性も考えられる。



挿図２　近世墓出土の遺物

第6章　山麓部の調査

第1節　調査の概要

山麓部は調査区の北端から東側にかけてを占め、山麓の平坦地と水田部を含める。

平坦地では弥生時代後期～古墳時代の竪穴住居跡や弥生時代後期の木棺墓、鎌倉時代の井戸跡などが見つかった。

一段下がった水田部は北西から南東方向にかけての旧河道となっており、堆積土中から平安時代の土器・木器が多量に出土した。また下層の沖積層ではアカホヤ火山灰、洪積層では姶良Tn火山灰が検出されている。

第2節　竪穴住居跡

1．遺　構（図版46・47、写真図版45・46）

1号住居跡（図版46、写真図版45）

山麓部に所在する住居跡のうち、最も南側に存在するのが1号住居跡である。

中央に土壙をもつ円形住居跡であるが、東の一部は旧河道によりに削られてしまっている。平面的にも削平が著しく、周壁は南部でかろうじて残存していた。住居跡内の埋土は褐色系の土層が堆積しており、床面は黄褐色粘質土である。

主柱は6本確認できたが、東部の2本は削平を受けている。柱間は、西半分の4本間がそれぞれ2.4～2.6mで、東半分のものは北の2間が2.8m、南端のみ狭く2.0mである。柱穴の径は残存良好のもので25cm、柱穴の径は43～67cmで、深さは54～57cmが3個と71cmが1個である。

中央土壙は径1.3mのほぼ円形で、深さは73cmである。この土壙を横切る形で、幅25cm、深さ10cm前後の溝が西側周壁溝から東方向に延びているが、東方向のつながりは削平のため不明である。西側溝から溝底レベルは土壙側が低く、住居跡外側が高いが、東側溝では逆になっている。中央土壙内の埋土は上層から暗茶褐色土が薄く、茶褐色土が厚く、次いで黒褐色土、明黄褐色土が堆積していた。黒褐色土中には木炭片を多く含んでいた。

周壁溝は幅30cm、深さ15cm前後で、北部は削平のため途切れているが、全周するようである。周壁溝外側で計測した本住居跡の規模は、直径7.9mである。

住居跡床面には一部焼けた部分が認められ、70×30cmの三角形状に赤褐色を呈していた。

遺物は中央土壙上層で甕口縁部と底部・脚部が、住居跡堆土からは壺口縁部が出土している。出土遺物の特徴から、弥生時代後期中頃の所産と考えられる。

6号住居跡（図版46、写真図版45）

旧河道に面した崖面で見つかり、全体の約3／4を失っている。平面は円形で、西壁に沿ってベッド状遺構を設けている。床面の遺存している範囲は4.3×1.8cm、復原径は約5.2cm、深さ0.4cmである。ベッド状遺構の大きさは2.5×1.0cm、高さ0.2cmである。柱穴は2箇所あり、一方の柱穴上から土器が一括で出土している。

出土した遺物には、弥生土器壺（280）・小型壺（281）などがある。遺物からみて、住居跡の年代は弥生時代後期に属する。

7号住居跡（図版47、写真図版46）

旧河道に面した崖面で見つかり、東半部を失っている。平面は方形で、西壁のほぼ中央に土壙を設けている。規模は南北方向が3.36cm、東西方向の残存長が1.56cm、深さ0.1cmである。土壙の大きさは1.72×1.16cm、深さ0.34cmで、中から土器が出土している。

出土した遺物には土師器甕などがあり、住居跡の年代は古墳時代前期に属する。

22号住居跡（図版47、写真図版46）

調査区の北端に位置し、方形プランの南西隅のみを検出した。東半部は失われており、検出しえた規模は2.1×1.7cmで、深さ0.14cmである。住居跡の時期は不明である。

2．遺　物（図版71）

1号住居跡出土遺物

壺（275）　住居跡埋土から出土した。口縁部は大きく外反しており、端部は上方に大きく拡張している。端部先端は尖る。内外面とも器表が剥離しており、調整痕は残っていない。口径は13cmである。

甕（276）　中央土壙上層から出土した。「く」字状に外反する口縁部をもち、端部は徐々に厚みを増し、面を持ち、端部上端は上方につまみあげている。口径は15cmを計り、体部の調整は不明である。

底部（277・278）　277は中央土壙上層出土で、若干上げ底である。調整は不明で、底径は5cmである。278は出土位置不明の底部で、277よりも器壁が薄い。内外面とも磨滅が著しく、調整は不明である。

脚部（279）　中央土壙上部の壁に密着して出土した脚部で、台付鉢と思われる。中実で、脚部はあまり外に広がらない。ナデ調整で仕上げている。

8号住居跡出土遺物

壺（280）　口縁部は頸部から直口気味に開き、外面をハケメで仕上げる。口径12.6cm。

小型壺（281）　丸みを帯びた体部から、口縁部が直線的に開く。口縁部内面にハケメが残る。口径10.7cm。

第３節　木棺墓

山麓部では木棺墓を合計７基検出した(図版47)。検出場所は山麓部の平坦地であるが、西側が若干高い傾斜面である。木棺墓はまとまって存在しており、北端の木棺墓１の１基がやや離れて存在しているほかは、北から木棺墓６・３・２・７・５・４と集中している。それらは主軸が南北方向のもの（１・５・６・７）と東西方向のもの（２・３・４）の２方向が認められるが、墓域では分かれていない。

１．遺　構（図版48～50、巻首図版5、写真図版47・48）

木棺墓１

１号住居跡の南東に位置する、主軸をほぼ南北方向にとる木棺墓で、東側面の掘り方上方が旧河道により削平されている。木棺墓の掘り方は南北方向の長軸が2.3m、東西方向の短軸が最も幅の広い所で1.1m、狭いところでは1.0mであった。掘り方の形状は断面でみると、特に長軸方向西側で顕著に認められるのであるが、掘削角度が途中で変わっている。つまり、上方は緩やかな角度で掘られているが、途中からは垂直に近い角度となっている。傾斜変換点での掘り方の幅は8.0mである。掘り方の深さは最も高いところからでは、68cmである。掘り方の底部は平坦であるが、北部が若干高くなっている。その比高差は４cmである。掘り方の埋土は濁黄褐色土で、南端は濃茶褐色粘質土で埋められていた。

掘り方内ほぼ中央には箱形木棺の痕跡が検出され、底からの高さ約20cmの所で上面を検出できた。掘り方の最も低い所からでは掘り方と同時に検出したことになる。木棺は長軸が1.75m、短軸の北端では0.5m、南端では0.46mで、北側の方が若干幅が広い。底は掘り方の底と同一で、前述したように、北側が若干高い。埋土は上から灰褐色粘質土、茶褐色土、暗茶褐色粘質土で、北端では最下層に暗黄褐色土が堆積していた。棺本体の埋土中から脚部と蓋または甕の口縁部小片が出土した。また、棺底に密着してガラス製の管玉が８点出土した。これらのガラス玉の出土高低差は１cm以内であった。ガラス玉の出土位置は棺中央部より南に寄った位置で、棺の南端から45～62cm離れた位置である。頭部の位置については棺の幅、底の高さからすれば、北側が妥当と思われるが、出土したガラス玉を首飾りとして装着していたとすれば南側となる。ここでは、後者の考えをとっておきたい。

木棺墓２

主軸を東西方向にとる小規模なもので、調査時点では木棺墓とは考えていなかったが、現時点では木棺墓として扱う方が妥当と思われる。掘り方の長軸は1.53mで、短軸は西端で0.7m、東端で約0.4mと東側の幅が狭い長方形である。深さは最も残りの良い西端で約23cm、東端では３cm程度であった。底は平坦であるが、斜面上方の西側が若干高く、約４cmの比高差である。棺自身は検出できなかったが、東端から西へ約20cmの底でガラス製の小玉が２点出土しており、

その間隔は5cmであった。或いは耳飾りとして装着していた可能性がある。このことから、頭位は東であったと推定できる。

木棺墓の埋土は上層がにぶい褐色で、下層が明赤褐色であり、地山は橙色（2.5YR6/8）である。内部からはガラス小玉以外は出土しなかった。

木棺墓3

本木棺墓も掘削当初は木棺墓とは認識せずに掘削していたが、土層観察用畦内よりガラス小玉が多量に出土したことから、木棺墓の可能性が高いことを意識したものである。

掘り方の平面形はやや不整な長方形で、主軸は東西方向である。長さ約2.9m、幅は西端で約1m、東端では約0.9mである。深さは最も残りがよい西端で35cm、東端では6cmであった。底部はほぼ水平で、中央部が若干盛り上がった状態である。掘削角度は垂直に近いが、下端は丸くなっている。埋土は図に示した状況であったが、南北方向でかろうじて木棺らしき幅約60cmの堆積状況を把握したにすぎず、棺自身の長さは不明である。

ガラス小玉は東端から約90cm西側で、南北25cm、東西17cmの範囲内に130個集中して検出できた。それらは8cmの高低差をもって出土し、最も低い位置はほぼ底に密着した状態であったが、その数は多くなく、主として床から1.5cm以上浮いた状態で出土した。

ガラス玉が首飾りとして装着された状態で埋葬されていたとすると、頭位は東方向となる。

木棺墓4

木棺墓群の最南端で検出した、東西方向に主軸を持つ、平面長方形の木棺墓であるが、本墓も平面では木棺の痕跡を検出することはできなかった。

掘り方の長さは2.7mで、幅は東西端ともに1.2mである。深さは西端で23cm、東端では11cmであった。埋土の断面観察から、棺内部には茶褐色系の土が堆積していることが判明した。
掘り方の底部はほぼ水平である。内部からは遺物は全く出土しなかったが、他の木棺墓と時期を隔てることはないと考えられる。

木棺墓5

主軸を南北方向にとる木棺墓のうち最も南で検出したものである。平面形は長方形に近いが、南端が丸みをおびている。長軸は1.8m、短軸北側は0.9m、南側は0.7mである。深さは北端で14cmであり、底部は中央がやや窪んでいる。本例も木棺墓の認識なく掘削したもので、土層図においても充分な検討を行わずに作図した後、土層観察用畦を除去したために追認は不可能となったものであるが、木棺墓の可能性が高いものとして現在考えている。

遺物は全く出土しなかった。

木棺墓6

平面長方形で、南北方向に主軸をもつ。本例も土層断面観察により木棺墓と認識できたものである。長さ3.15m、幅は北側で1.3m、南側で1.4mと群中で最も規模が大きい。深さは約34cm

で、底部は平坦でほぼ水平である。

木棺部分は断面によると、長さ2.3m、幅約0.8mである。箱形と思われる。

内部からは遺物は全く出土しなかった。

木棺墓7

木棺墓群中のほぼ中央部で検出した。主軸方向は南北で、規模は最も小さい。掘り方は平面長方形に近く、長さ1.3m、幅0.7m。底部は平坦であるが、北側が若干高い。深さは約20cmである。木棺部分は平面で検出でき、長さ0.97m、幅0.36mで、深さは掘り方同様であった。その形状から箱形木棺である。木棺内部には暗茶褐色ないし暗灰褐色系の土が堆積し、掘り方内は茶褐色ないし黄色系の土であった。地山は黄色粘質土である。遺物は全く出土しなかった。

2．遺　物（図版71・72、巻首図版8）

本木棺墓群中で出土した遺物は、木棺墓1の土器とガラス製管玉8点、木棺墓2のガラス小玉2点、木棺墓3のガラス小玉130点である。

木棺墓1出土遺物

甕（282）　有段口縁の小破片で、外面の稜はあまり目立たず、屈曲も小さい。口縁端部は欠損している。内外面ともヨコナデで、外面には煤が付着している。

脚部（283）　高杯あるいは器台で、外反しながら下外方向にのび、器厚の変化はほとんどない。端部は上下に若干拡張し、凹面をなす。内外面とも刷毛調整で、端部付近はヨコナデである。胎土には282と同様にチャート・クサリ礫を含む。

ガラス管玉（286～293）　出土した8点のうち、5点が完形品で残りは破片であるが、291と292は同一個体で、接合すれば完形品となるものである。長さは完形品で17.5～22.5mmで、直径は4.5～6.0mmである。個体別の計測値は下に示す通りである。

木棺墓2出土遺物

ガラス小玉（424・425）　424は径4.5mm、高さ3.0mm、孔径1.5mmで重量は0.09gで、緑青色を呈している。425は高さが4.0mmである以外は424と同様である。木棺墓3出土のガラス小玉との相違は認められない。

表4　木棺墓1出土ガラス管玉計測表

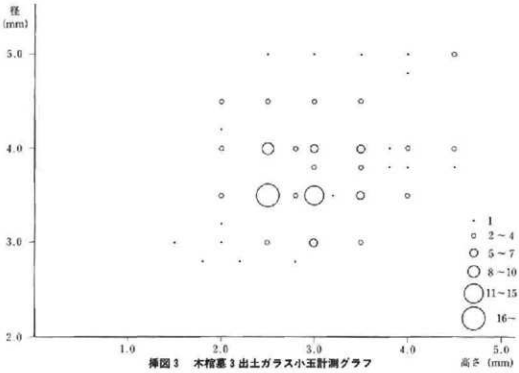
番号	長さ(mm)	径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	色調	備考
286	22.5	6.0	1.5	1.90	エメラルドグリーン	完形
287	20.5	5.0	1.5	1.24	〃	〃
288	20.0	5.5	1.5	1.23	〃	〃
289	19.5	5.0	2.0	1.29	〃	〃
290	17.5	5.5	1.0	1.22	〃	〃
291		5.5	2.0	0.98	〃	破片
292		5.5	2.0	0.62	〃	〃
293		5.0	2.5	0.27	グリーン	〃

木棺墓3出土遺物

ガラス小玉(294～423)　色調はすべて緑青色である。高さは1.5～4.5mmで、373が最も高さが低く、316・335・342・343・345・363が最も高い。径は2.8～5.0mmで、349・414・413が最も小さく、335・344～346・406・408が最も大きい。孔径は0.8～2.0mmで、297が最も孔径が小さく、295・300・309・316・318・320・327・338・345・346・357・358・366・374・379・383・390・394・401・404・408・410・412が最も孔径が大きい。重量では、321・349・373・401・403・414・421・423が最も軽く、0.02gを計り、345が0.13gで最も重い。径と高さでは2.5～3.0mmの径で、高さ3.5mmのものが最も多く、40点あり、全体の約30%を占め、重量については平均約0.05gである。

各個別の計測値については表にゆずることとする。表5をみれば、径では3.5～4.0mmが最も多く、92点とほとんどがこの数値に集中している。全体に占める比率は約71%である。高さでは2.5～3.5mmに集中しており、その数は99点で全体の約76%を占める。これら狭い数値のなかにこれだけ集中していることは、その製作にあたってはかなり熟練した工人が専門的につくった可能性が高く、あるいはかなり細かい規格が存在していたのかもしれない。

以上、計測表にもとづいた分析結果を述べた。自然科学的な調査による材質の特徴や製作技法の推定については第8章第3節にゆずる。



挿図3　木棺墓3出土ガラス小玉計測グラフ

表5　木棺墓3出土ガラス小玉計測表

番号	高さ	径	孔径	重量(g)	番号	高さ	径	孔径	重量(g)	番号	高さ	径	孔径	重量(g)
294	3.0	3.5	1.0	0.04	339	2.0	3.2	1.2	0.03	384	3.0	3.0	1.0	0.03
295	2.0	4.0	2.0	0.03	340	2.8	3.5	1.0	0.04	385	2.5	3.0	1.0	0.03
296	3.0	3.5	1.5	0.05	341	3.0	4.0	1.5	0.06	386	2.5	3.5	1.5	0.04
297	2.5	3.5	0.8	0.04	342	4.5	4.3	1.5	0.09	387	3.5	3.8	1.0	0.06
298	2.8	3.5	1.0	0.04	343	4.5	3.8	1.5	0.08	388	3.0	3.5	1.0	0.04
299	2.5	3.5	1.5	0.03	344	2.5	5.0	1.5	0.09	389	3.0	3.5	1.0	0.05
300	3.0	4.0	2.0	0.05	345	4.5	5.0	2.0	0.13	390	2.5	4.0	2.0	0.05
301	2.5	3.5	1.5	0.03	346	3.5	5.0	2.0	0.10	391	3.5	4.5	1.5	0.07
302	3.5	3.0	1.0	0.05	347	3.5	3.5	1.0	0.06	392	2.0	4.2	1.5	0.04
303	3.0	3.5	1.0	0.05	348	3.5	3.0	1.0	0.04	393	3.8	4.0	1.0	0.07
304	3.0	3.0	1.0	0.04	349	1.8	2.8	1.0	0.02	394	3.5	4.5	2.0	0.08
305	3.5	3.5	1.5	0.05	350	2.5	3.2	1.0	0.03	395	2.5	4.5	1.5	0.05
306	3.0	3.5	1.5	0.04	351	4.0	4.0	1.0	0.06	396	3.2	3.5	1.0	0.05
307	2.5	3.5	1.0	0.03	352	3.0	3.5	1.0	0.04	397	2.5	3.5	1.5	0.04
308	2.5	3.5	1.5	0.03	353	2.0	3.5	1.0	0.03	398	2.8	4.0	1.5	0.05
309	3.5	3.8	2.0	0.05	354	2.5	3.5	1.0	0.04	399	2.5	3.5	1.5	0.03
310	2.5	3.5	1.5	0.04	355	2.5	4.0	1.0	0.05	400	3.5	3.5	1.5	0.06
311	4.0	3.5	1.5	0.06	356	3.0	4.0	1.0	0.05	401	2.0	3.5	2.0	0.02
312	2.5	3.5	1.5	0.05	357	2.5	4.0	2.0	0.04	402	3.0	3.5	1.5	0.03
313	2.8	3.5	1.5	0.04	358	2.5	4.0	2.0	0.05	403	2.5	3.0	1.0	0.02
314	3.0	3.5	1.0	0.05	359	3.0	3.8	1.0	0.05	404	2.0	4.0	2.0	0.03
315	3.8	3.8	1.0	0.06	360	3.0	4.0	1.0	0.05	405	3.5	3.5	1.0	0.05
316	4.5	4.0	2.0	0.11	361	2.0	4.0	1.0	0.04	406	4.0	5.0	1.5	0.10
317	2.5	3.5	1.0	0.03	362	3.0	3.8	1.0	0.05	407	4.0	3.5	1.0	0.06
318	3.0	4.5	2.0	0.07	363	4.5	4.0	1.0	0.11	408	3.0	5.0	2.0	0.08
319	4.0	4.0	1.5	0.08	364	2.5	3.5	1.0	0.04	409	3.0	3.0	1.5	0.03
320	3.5	4.5	2.0	0.08	365	2.8	3.5	1.5	0.05	410	2.0	4.5	2.0	0.06
321	2.0	3.0	1.0	0.02	366	3.0	4.0	2.0	0.05	411	2.5	3.5	1.5	0.04
322	3.0	3.0	1.0	0.03	367	3.0	3.5	1.0	0.05	412	2.5	4.0	2.0	0.04
323	2.5	3.5	1.0	0.03	368	3.0	3.8	1.5	0.06	413	3.5	4.0	1.5	0.07
324	2.5	3.0	1.0	0.03	369	2.5	3.5	1.5	0.04	414	2.2	2.8	1.0	0.02
325	3.0	3.5	1.0	0.04	370	2.5	3.5	1.0	0.03	415	2.5	4.0	1.5	0.05
326	3.0	3.5	1.5	0.04	371	2.5	3.5	1.5	0.04	416	4.0	3.8	1.5	0.05
327	3.0	4.5	2.0	0.06	372	2.5	3.5	1.5	0.03	417	4.0	4.8	1.5	0.11
328	3.0	3.0	1.0	0.04	373	1.5	3.0	1.5	0.02	418	3.5	3.8	1.0	0.07
329	3.0	3.5	1.0	0.04	374	2.5	4.0	2.0	0.05	419	3.5	3.5	1.0	0.06
330	2.5	3.5	1.0	0.04	375	3.5	4.0	1.5	0.07	420	3.0	3.8	1.5	0.06
331	4.0	4.0	1.0	0.08	376	3.5	3.5	1.0	0.04	421	2.5	3.0	1.0	0.02
332	2.0	4.5	1.5	0.04	377	3.5	4.0	1.3	0.05	422	3.5	4.5	1.5	0.09
333	3.0	3.5	1.0	0.04	378	2.5	3.5	1.5	0.04	423	2.8	2.8	1.0	0.02
334	2.0	4.0	1.0	0.04	379	3.5	4.0	2.0	0.07					
335	4.5	5.0	1.0	0.12	380	3.0	3.5	1.5	0.05					
336	2.8	4.0	1.0	0.05	381	3.5	4.0	1.5	0.06					
337	2.5	4.0	1.5	0.05	382	3.0	3.0	1.0	0.03					
338	2.5	4.5	2.0	0.05	383	4.0	4.0	2.0	0.08					

第4節　井戸跡

井戸1（図版51・71・72、写真図版49）

平坦地の、旧河道に面した崖面の際で検出した。掘り方の一部は旧河道の埋土にかかっており、検出状況・断面観察からみて、この井戸が旧河道埋積後に掘り込まれたのは明らかである。

掘り方は1.16×1.35mの不整円形を呈し、検出面からの深さは0.45mである。井戸側は通有のものと異なり、中央に杭を打ち込んで横木を渡し、掘り方を東西に仕切っただけの簡便な構造である。横木の中には、曲物の底板（572）なども使われていた。

仕切りの西側には、底を抜いた曲物を二重にした水溜がしつらえてあった。内側の曲物(570)は直径0.41×0.34m、深さ0.18mで、一回り大きい外側の曲物(571)は直径0.51×0.43m、深さ0.27mである。直径からみて、572は571の底板であると考えられる。また曲物の南側には、掘り方にもたれさせるようにして、方形曲物の底板（573）が立てられていた。

仕切りの東側には雑多な材が入れ込まれているだけで、特に施設のようなものは認められなかった。

以上のような構造からみて、あまり深い井戸であったとは考えられず、おそらく本来の深さも1m以内に収まるものであろう。

遺物としては須恵器椀（284・285）、滑石臼玉（426）などの他、曲物の中や掘り方内からサンショウ・ミズキ・ウリなどの種子、クルミの核皮、炭化米といった自然遺物も出土している。また水溜に使われていた曲物（570・571）やその他の曲物の底板（572・573）については、第5節の木器の項で旧河道出土の木器と併せて扱うことにする。

須恵器椀（284・285）　どちらも口縁部から体部にかけての破片で、底部を欠失する。体部は直線的に大きく開き、器高は比較的低いものである。284は口径15.8cm。285は口径13.8cm。

滑石臼玉（426）　明オリーブ灰色を呈する。径3.5cm、高さ1.0cm、孔径1.5cmで重量は0.02gである。遺物の性格からいって、井戸1に本来的に伴うものとは考えにくい。

井戸の時期は、須恵器椀の形態からみて、鎌倉時代前期と考えられる。

第5節　旧河道

1．遺　構（図版52、写真図版50・51）

丘陵東側の水田部に設定した確認トレンチにおいて平安時代以前の旧河道を検出し、河道中より多量の土器・木器が出土した。そのため調査範囲を水田部にまで拡大し、旧河道の調査を実施した。さらに18・21トレンチでは、下層に鉢良Tn火山灰・大山伯耆火山灰・アカホヤ火山灰が堆積している状況を検出した。トレンチでの断面観察から、地形環境を復元したい。

内場山の東斜面は水田下へ深く潜り込み、旧河道の基盤層となっている。基盤上には洪積世の堆積が認められ（29～45層）、そのうちの40層は約24,000年前の鮎良Tn火山灰である。約24,000～20,000年前の間に河道の形成がみられ、河道の埋土中に大山伯耆火山灰（34層）が堆積している。

28層以降は沖積世で、洪積層を大きく切って河道を形成している。その年代は約6,300年前のアカホヤ火山灰（19層）降灰以前で、縄文時代前期を遡る時期である。河道は湿地性堆積物（16～28層）で埋もれており、後背湿地の様相を呈している。

次に河道が形成されたのは平安時代以前のことで、16・17層を削り込んでいる。その後河道は再び湿地化し、有機物を多く含む暗色シルト層（13～15層）が堆積した。13～15層からは弥生時代後期～平安時代の土器・木器が多量に出土し、付近に集落が営まれたことを示している。

平安時代以降は水田化しており（9～12層）、鎌倉時代前期には旧河道の埋土を切って井戸1が作られている。最後に河道を形成するのは8層の時で、洪水性の堆積物で一気に埋もれている。その後は再び水田となり、現代に至っている。

図版2を参考に、地形を大きく見るならば、宮田川右岸と丘陵の間には、北から大きく扇状地形がせり出しているのが判る。板井・寺ヶ谷遺跡はこの地形の上に乗っている。しかし扇状地の末端に近い内場山付近では、山裾の辺りが埋まりきらないため、扇状地と丘陵に挟まれた後背湿地となっている。そのためにこの付近では、旧河道の形成と湿地性の堆積を繰り返すことになっている。

2．土　器（図版73～76、写真図版74～77）

弥生時代後期

広口壺（427～432）　427～429は口頸部の破片で、口縁部は大きく開いて、端部に面をとる。427は内傾気味の端面に3条の擬凹線文を施し、その上から4本1単位のキザミメを乗らす。内外面の調整はハケメで行う。口径20.0cm。428は直立気味の端面に2条の擬凹線文を施す。口径18.1cm。429は無文で、内外面はハケメで調整する。口径17.0cm。

430・431は頸部が筒状に立ち上がり、口縁部が受口状に開く。430は内外面をハケメ調整し、外面には煤が付着する。口径13.4cm。431は外面がハケメ調整で、内面に指頭痕が残る。口径11.4cm。

432は頸部から肩部にかけての破片である。頸部の付け根に突帯を貼り付け、肩部には8条の横描直線文を施す。内外面はヘラミガキで仕上げる。色調は黒褐色を呈し、胎土には角閃石を含む。いわゆる生駒西麓産の土器である。

甕（433～436・438・439・441）　433は口縁端部に面をとり、2条の擬凹線文を施す。外面はハケメ、内面はヘラケズリで調整する。口径14.0cm。

434は口縁端部を拡張して、内傾気味の面をとる。胴径は口径よりもかなり大きくなる。内外

面の調整はハケメで行う。口径13.6cm。

435・436・438・439は口縁部がくの字に屈曲し、端部をつまみ上げて面をとる。調整は外面がハケメ、内面がヘラケズリで行う。口径13.0～16.0cm。

441は口縁部が短く外反する。口径13.2cm。

高杯（442・444）　442は杯部が直線的に上外方に開き、口縁部が短く立ち上がる。杯部底面には円板充填を行う。脚柱部は直線的な筒状で、裾部は小さく開く。口径15.7cm。器高15.2cm。底径9.5cm。

444は杯部から脚部にかけての破片で、丸みを帯びた杯部に、直線的な脚柱部が取り付く。杯部と脚部は、分割成型を行う。

脚部（445～447）　小型の脚部の残欠で、鉢などに取り付くものである。底径は445・446が7.7cm、447が5.0cm。

古墳時代

土師器甕（437・440）　437は口縁部がくの字に屈曲し、端部に面をとる。口径19.0cm。440は口縁部がくの字に屈曲し、端部は細く収まる。口径16.0cm。

土師器高杯（443）　椀状の杯部のみの破片で、口縁部は緩やかに外反する口径16.0cm。

須恵器高杯（448）　杯部のみの破片であるが、無蓋高杯と考えられる。体部外面に2条の沈線をめぐらす。口径12.9cm。

須恵器杯（449・450）　449は立ち上がり部が大きく伸長し、外面にはヘラケズリを行う。口径11.0cm。器高4.2cm。

450は体部・立ち上がり部ともに退化して、低くなる。口径11.9cm。器高3.0cm。

須恵器杯蓋（451）　天井部を欠失しているため、ツマミについては不明である。口径8.4cm。

奈良～平安時代

杯類は大きさによって分類できるので、仮に、口径13cm未満のものをa類、13cm以上15cm未満のものをb類、15cm以上のものをc類として記述を進めることにする。

須恵器杯蓋（452～457）　b類（452・453・455）とc類（454・456・457）がある。

b類にはツマミをもつもの（453）ともたないもの（452）がある。非常に低平な器形で、口縁部は屈曲して、端部を丸く収める。

c類も形状はb類とほぼ同様である。

須恵器杯B（458～468）　a類（458～462・464）とb類（463・465）とc類（466～468）がある。

a類には体部が直線的なもの（458・460・462・464）と内弯気味のもの（459・461）がある。また459にはヘラ記号が刻まれており、460は底部外面を砥に転用している。

b類には体部が外反気味のもの（463）と直線的なもの（465）がある。465は時期的にやや古く、奈良時代に遡るものである。

c類には体部が内弯気味のもの（466）と直線的なもの（467・468）がある。

須恵器杯A（469～493）　a類（469～472）とb類（473～493）がある。底部の切り離しはいずれも回転ヘラキリ技法で行い、ロクロの回転方向は右廻りである。

b類には体部が直線的なもの（473～482・484）と外反気味のもの（483・485・487・488・490・492・493）と内弯気味のもの（486・489・491）がある。489は見込みに「庄本□」の墨書がある。また492の見込みには「×」のヘラ記号がある。

須恵器Ⅲ（494～500）　平底のもの（494～498）と平高台のもの（499・500）がある。いずれも底部の切離しは回転ヘラ切り技法で行うが、494・495・497・498は切り離し痕をナデ消している。

495は口縁部の傾きが急で、内面に1条の沈線がめぐる。口径14.3cm。器高2.2cm。494・496・497は口縁部が緩く外反する。494の底面には「將」とみられる墨書がある。口径15.1～15.5cm。器高2.1～2.8cm。498は口縁部が大きく開く。口径15.9cm。器高2.5cm。

500は口縁部が直線的に開く。口径13.7cm。器高2.4cm。499は口縁部が大きく開き、端部が僅かに外反する。口径15.8cm。器高1.9cm。

須恵器耳杯（501）　完形品である。小皿の口縁部の両側縁をつまんで、耳杯としている。底部は平高台をもち、静止糸切り技法によって切り離している。

緑釉椀（502～507）　502は全形を復元できる。体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部は緩やかに外反する。底部には輪高台を貼り付ける。釉調は深く灰色がかったオリーブ色で、底部外面には施釉しない。口径13.1cm。器高4.5cm。底径6.2cm。

503は口縁部が直線的に開く。釉調はライトグリーンを呈し、洛北系の製品とみられる。口径14.8cm。

504は口縁部が体部に稜をもって外反する。口径14.4cm。

505～507は底部のみの破片で、輪高台をもつ。見込みには1条の圏線をめぐらす。釉調はややくすんだグリーンである。底径7.1～8.6cm。

須恵器稜椀（508～511）　いずれも口縁部のみの破片で、口縁部が体部に稜をもって外反する。510がやや深手で、口径18.0cm。それ以外は口径14.6～16.0cm。

須恵器沈線椀（512・513）　体部外面に1条の沈線をめぐらし、深手の体部をもつ。口径15.8～16.0cm。

須恵器椀（514～528）　底部の切り離し技法によって分類できる。a類（514～518）は回転ヘラ切り技法によるもの、b類（519～528）は回転糸切り技法によるものとする。

a類の底部は平高台で、ロクロの回転方向はほとんどが右廻りであるが、516のみは左廻りで

ある。口縁部は直線的である。516は見込みが大きく凹む。514～517は口径12.7～13.4cm。器高4.2～4.9cm。底径6.2～6.9cm。

b類には平高台をもつもの（519～527）と平底のもの（528）がある。519は底径が大きく、見込みが凹まない点でa類との共通性をもつが、底部の切り離しは回転糸切り技法で行い、さらに高台側面を再調整している。口径13.8cm。器高4.7cm。底径7.3cm。520は口縁部の傾きが急で、a類に似た器形をとる。口径12.0cm。器高5.1cm。底径5.6cm。521・522は器高が低く、体部は内弯する。見込みには凹みをもつ。口径14.0cm。器高4.6～4.9cm。523～525は深手の椀で、体部は丸みをもって立ち上がる。見込みには凹みをもつ。口径15.0～16.4cm。器高6.1～6.8cm。底径5.0～5.3cm。526は口縁部が直線的に開く。口径15.0cm。器高5.4cm。底径5.2cm。527は口縁部が内弯気味に浅く開く。平高台は非常に低く、見込みの凹みは消失している。口径14.1cm。器高4.8cm。底径4.9cm。528は平底で、口縁部が直線的に開く。口径13.8cm。器高3.9cm。底径7.2cm。

須恵器小皿（529）　平底で、口縁部は直線的に開く。底部の切り離しは、回転糸切り技法による。口径8.1cm。器高1.6cm。

土師器小皿（530・531）　手捏ね成形による。口径8.9～9.5cm。器高1.4～1.5cm。

土師器托（532）　底部の破片である。見込みには大きな凹みをもち、体部が屈曲して開く。底部の切り離しは回転糸切り技法による。底径6.0cm。

須恵器双耳壺（533）　頸部から肩部にかけての破片である。肩部付近に最大径をもち、頸部は外反気味に立ち上がる。肩部に耳を縦向きに貼り付ける。最大径15.1cm。

須恵器長頸壺（534・535）　いずれも頸部から肩部にかけての破片である。534は肩部がよく張り、頸部が直立する。535は丸みをもった肩部に、やや開き気味の頸部が取付く。

須恵器壺底部（536）　平底で、底部の切り離しは回転糸切り技法による。底面に「一」のヘラ記号がある。底径9.6cm。

須恵器小型壺（537～540）　いずれも口頸部を欠失する。底部は平底で、回転糸切り技法で切り離す。537は縦長の体部をもつ。残存高11.7cm。底径5.4cm。538は胴部中位に張りをもつ。残存高7.6cm。底径6.6cm。539は胴部下位に最大径をもつ。残存高4.4cm。底径5.2cm。540は丸みのある体部をもつ。残存高7.5cm。底径3.6cm。

須恵器甕（541・542）　541は体部下半を欠失する。口縁部は頸部で屈曲し、短く開く。外面には平行タタキ、内面には同心円の当て具痕が残る。口径17.4cm。542は口縁部を欠失する。体部は倒卵形を呈し、底部は不安定な尖底である。外面には平行タタキ、内面には同心円の当て具痕が残る。肩部には、3～5条の筋線を3段にめぐらす。残存高43.8cm。最大径33.6cm。

須恵器鍋（544）　直立気味の体部から口縁部がわずかに開く。口縁端部はやや内面に肥厚させる。外面には精粗2種類の平行タタキ、内面には同心円の当て具痕が残る。やや軟質では

あるが、登窯で焼かれたものと判断する。口径22.3cm。

土師器鍋（543・545）　内傾気味の体部から口縁部が屈曲して開き、端部はつまみ上げる。外面には平行タタキが残る。543は口径17.3cm。545は口径23.4cm。

土師器羽釜（546）　体部は直立気味で、口縁端部には面をとる。鍔部は短く、厚めで、やや受け口状となる。口径22.0cm。

3．木　器（図版77～81、写真図版78～82）

山麓部では旧河道および井戸1内より、100点以上の木器が出土した。そのうち、山城跡の井戸2出土の釣瓶を含む90点については、京都大学名誉教授　鳥地　謙先生、京都大学木質科学研究所　林　昭三先生に依頼して、樹種同定をしていただいた（第8章　第5節参照）。図版には54点の遺物実測図を掲載した。樹種同定のサンプルNo.と報告書掲載No.の対応は、表15に掲げた。なお整理にあたって、製品名の分類・用語は、できるだけ奈良国立文化財研究所発行の『木器集成図録（近畿古代篇）』に従った。それに伴い、製品名の大分類として「種別」の項目を設けた。ただし、建築や土木に用いる材については『木器集成図録（近畿古代篇）』では触れられておらず、また建築用と土木用の峻別もつきにくいため、両者の種別名をまとめて“用材”とした。

木器のほとんどは山麓部の旧河道より出土したものである。そのうち石斧の柄1点のみは弥生時代であるが、それ以外は全て平安時代に帰属する。また井戸1出土の曲物は鎌倉時代に下る。ちなみに山城跡の井戸2出土の釣瓶は16世紀中葉（室町時代）の所産である。

90点の木器を種別ごとにみてみると、用材が最も多く全体の62%を占めている。それに次いで多いのは部材・容器である。一方、農具・工具は割合としては少なく、特に鋤・鍬の類は出土しなかった。当遺跡の特徴としては、用材・部材といった大型の木器の占める割合が非常に高く、農工具その他小型の製品の出土が少ないという傾向があげられる。またその大型の木器に使われている樹種は、ほとんどがヒノキ・スギであるという点にも特徴が表れている。

以下、製品別に遺物の説明を加える。

工　具

石斧の柄1点がある。

石斧の柄（568）　横斧である。木の幹と枝の股を利用したもので、幹を削って作り出した斧台に対して、枝から作った握りが65°の角度で取り付く。遺存状態は悪く、10片以上に分かれている上、斧台の一部は欠損している。しかし接合の結果、ほぼ全形が判る。全長94.4cm、斧台部長31.5cm、幅5.9cm、厚5.3cm、握り部長約80cm、径3.0cm。アカガシ亜属。弥生時代後期。P.E.G.処理済。

農　具　田下駄3点、木錘1点がある。

田下駄（557～559）　枠型（大足）足板である。板の四隅に枠を取り付けるための孔があ

けられている。鼻緒孔は3孔あけられ、そのうちの前壺は557・559が中央に、558が右に片寄っている。前壺付近には、指の当たりの痕跡が残る。557は全長40.2cm、幅17.2cm、厚1.8cm、ヒノキ。558は全長32.3cm、幅11.0cm、厚1.9cm、スギ。559は全長28.7cm、幅13.5cm、厚1.3cm、スギ。いずれも平安時代。P.E.G.処理済。

木錘（547）　　割材の丸棒の中央を細く削り込んだ、いわゆる「繰の子」である。中央で折れて、半分を失っている。残存長12.0cm、径4.0～4.9cm。アカガシ亜属。P.E.G.処理済。

容　器

挽物1点、円形曲物7点、長方形曲物1点がある。

挽物（554）　　ロクロ整形によって挽き出された木皿である。内面に刃痕が残る。中央の孔は、蓋板に転用されたためである。横木取り、柾目。口径18.9～19.1cm、高1.2cm。ヒノキ。P.E.G.処理済。

円形曲物（555・556・570～572）　　7点のうち2点は同一個体であったため、実質は5点である。

555・556は円形曲物の底板としたが、側面に木釘孔が観察できないため、蓋板の可能性もある。いずれも大半を欠失している。555は復原径19.5cm、厚0.6cm。ヒノキ。P.E.G.処理済。556は復原径23.4cm、厚0.6cm。ヒノキ。水流。

570・571は井戸1の水溜に使われていた円形曲物の側板である。取り上げ後、全体が破損してしまったため、部分的な図を掲げるに止める。570は内側の水溜の断片で、底板との結合には木釘のみを用いる木釘結合曲物である。側板の綴合わせ部分は、1列上内5段分のみが残る。内面にはタテ方向の罫引きを入れ、黒漆を施す。現場で記録した口径34～41cm、高18cm、厚0.8cm。ヒノキ。P.E.G.処理済。571は外側の水溜の断片で、やはり木釘結合曲物である。本来は外側に3段の籾がはまっていた。側板の綴合わせ部分は、1列上内6段分のみが残る。ただし樺皮の端は、いったん外へ回してから収めている。内面にはタテと斜め方向の罫引きを入れ、黒漆を施す。現場で記録した口径43～51cm、高27cm、厚1.0cm。ヒノキ。P.E.G.処理済。

572は井戸1の井戸側に使われていた円形曲物の底板である。大きく3片に分かれているが、図上で復原した。木釘結合曲物で、側面に木釘の孔が不均等に並ぶ。内面には黒漆を施す。
組板に転用されたのか、両面に無数の刃痕が刻まれている。大きさからみて、571の底板と考えられる。径48.0cm、厚0.8～1.5cm。ヒノキ。P.E.G.処理済。

長方形曲物（573）　　573は井戸1の井戸側に使われていた長方形曲物の底板片である。樺皮紐結合曲物Bで、樺皮紐を通す2個1対の孔が2箇所に残る。組板に転用されたのか、両面に刃痕が刻まれている。図示したのは外面で、内面には黒漆を施す。残存長50.2cm、厚0.9cm。ヒノキ。P.E.G.処理済。

食事具

箸とみられる製品1点がある。

箸？（548）　形状からみて箸に分類したが、長さが短いことと、樹種が二葉マツであったことから？をつけた。完形で、割木の一端を細く整形している。断面は方形となる。長13.3cm、径0.6～0.9cm。二葉マツ。P.E.G.処理済。

祭祀具

馬形1点がある。

馬形（549）　2片に分かれている。A Ⅰ型式で、頭と頸の境の切欠と嗣部の表現はあるが、背の表現はみられない。長30.1cm、幅4.9cm、厚0.6cm。スギ。P.E.G.処理済。

部　材

部材としたものは10点あるが、いずれも用途を決められないため、その他の部材に分類した。10点のうち8点を掲載した。

その他の部材（550・552・560～564・584）　550は現状では台形を呈し、短辺側に沿って2箇所に方形の孔を穿つ。現存長21.0cm、現存幅4.3cm、厚2.1cm。ヒノキ。P.E.G.処理済。

552は板材の一方の辺のみ切欠いて、凸字状にする。現存長29.9cm、幅8.9cm、厚1.6cm。スギ。水漬。

560は板材の側面の1箇所に浅い刳り込みを入れる。一方の端部は欠失する。現存長31.4cm、幅11.8cm、厚2.1cm。スギ。P.E.G.処理済。

561は完形で、板材の一方の長辺に沿って2箇所に長方形の孔を穿つ。長33.7cm、幅9.4cm、厚1.8cm。孔の大きさは2.6×1.7cmと2.7×1.1cm。2つの孔の間隔は19.5cm。ヒノキ。P.E.G.処理済。

562は板材の側面の1箇所にV字状の切込みを入れる。両端を欠失する。現存長35.2cm、幅6.3cm、厚1.6cm。ヒノキ。P.E.G.処理済。

563は板材の一端に方形の孔を穿つ。一端と一側面を欠失する。現存長35.1cm、現存幅7.1cm、厚1.4cm。スギ。水漬。

564は板材に円形の孔を穿つ。両端を欠失する。現存長35.2cm、幅6.3cm、厚1.6cm。ヒノキ。水漬。

584は細長い板材の側面に、方形の刳り込みを1箇所入れる。刳り込み部分の片面には、刃物によって罫引きを入れた痕が残る。一端を欠失する。現存長66.8cm、幅3.6cm、厚1.6cm。スギ。P.E.G.処理済。

用　材

出土した木器の中で最も多数を占め、56点を数える。内訳は板材17点、角材4点、棒材7点、建築材6点、柱材2点、扉1点、矢板9点、杭10点で、建築や土木に使われた用材ではあるが、

具体的な用途の不明なものが多い。27点を掲載した。

板材（576～580・583・585・587・589・591・594・595）　板状の材木で、他の部材と組合わせるような枘や刳り込みといった加工のないものである。17点のうち12点を掲載した。

576・579・580・585・589・591・594は、表面の調整がほとんどみられない。576は残存長79.6cm、幅15.4cm、厚2.4cm。スギ。水漬。579は残存長67.6cm、幅9.8cm、厚1.2cm。スギ。水漬。580は残存長69.5cm、幅6.4cm、厚2.2cm。ヒノキ。水漬。585は残存長85.4cm、幅8.8cm、厚1.5cm。スギ。水漬。589は残存長140.7cm、幅14.5cm、厚2.6cm。スギ。水漬。591は残存長129.8cm、幅6.8cm、厚2.1cm。スギ。水漬。594は残存長114.6cm、幅8.8cm、厚1.6cm。スギ。水漬。

577・578・583・587・595は表面にハツリ調整を施す。577は完形で、長69.5cm、幅18.5cm、厚2.7cm。ヒノキ。P.E.G.処理済。578は側面にV字状の切込みがみられる。残存長70.2cm、幅15.3cm、厚2.6cm。スギ。P.E.G.処理済。583は端部付近に2箇所の穿孔があり、片側の側面には漆を施す。何らかの製品を転用したものと思われる。残存長61.7cm、幅11.1cm、厚1.3cm。ヒノキ。P.E.G.処理済。587は表面の一部に、錐で突いたような孔が縦に並んでいるのが認められる。長178.9cm、幅12.7cm、厚2.5cm。スギ。P.E.G.処理済。595は残存長128.2cm、幅16.3cm、厚2.1cm。スギ。水漬。

角材（590・596）　角材のうち、枘や刳り込みといった加工のないものである。4点のうち2点を掲載した。

590は残存長136.1cm、幅6.6×4.0cm。スギ。水漬。ノキ。P.E.G.処理済。596は残存長115.8cm、幅8.5×7.0cm。ヒノキ。P.E.G.処理済。この他、図は掲載しなかったが、ヤチダモ製の角材1点がある。

棒材（566・567・598）　棒状の材木で、特に加工のないもの。この中には栓や杭の先端を失ったものなども含まれる。7点のうち3点を掲載した。

棒材には丸太材と、割材を用いたものがあるが、図示した3点はいずれも割材を用いている。

566は両端を失っている。残存長54.5cm、径2.8～3.0cm。スギ。水漬。567は一端が残っており、端部は丸く収める。残存長39.4cm、径2.6～2.8cm。スギ。水漬。598は残存長142.8cm、径3.0～3.8cm。ヒノキ。水漬。

建築材（575・581・582・586）　板材や角材に、枘孔の切ってあるものである。6点のうち4点を掲載した。

575は両端を欠失するが、枘孔の一部が残る。残存長79.5cm、幅27.9cm、厚4.0cm。スギ。P.E.G.処理済。

581は両端と一側面を欠失するが、枘孔の一部が残る。残存長68.2cm、残存幅13.0cm、厚3.7cm。ヒノキ。P.E.G.処理済。

582は一端が残り、端部近くに枘を浅く切っている。残存長72.0cm、幅13.6cm、厚6.4cm。

ヒノキ。P.E.G.処理済。

586はほぼ完形で出土した大型の組築材で、1間半の長さがある。材には左右対称に、貫通しない枘が5箇所、貫通した枘が4箇所設けられている。この他、2個1組の小さな方孔が2箇所ある。貫通した枘の間隔は約60cmと120cmで、尺寸に則っている。貫通しない枘の間隔は45～50cm、2個1組の方孔の間隔は約110cmを測る。オモテ面は平らで、中央付近の片側に幅13cmほどの刻り込みを設ける。ウラ面には枘孔を境として、2cmほどの段差をつける。柾目。長273.6cm、幅13.0cm、厚5.5cm。スギ。P.E.G.処理済。

柱材（588）　太めの丸太材で、表面に面取りやハツリ調整などの加工を施したものである。2点のうち1点を掲載した。

588は表面の加工はないものの、頭部を作り出して、側面に抉り込むような特徴から柱材とした。下端は失っている。残存長151.6cm、径8.1×8.2cm。モミ。P.E.G.処理済。

扉（574）　板材の一方の長辺に、軸部を作り出した扉材である。軸部の一部を欠失する。門用の構造は設けられていない。残存長75.6cm、幅29.2cm、厚3.2cm。ヒノキ。P.E.G.処理済。

矢板（600）　板材で、先端を尖らしたものである。9点のうち1点を掲載した。

600は板材の先端を斜めにカットする。頭部は欠失する。表面にハツリ調整が施されていることから、他に使われていた板材が転用されたものと考えられる。残存長97.0cm、幅16.3cm、厚1.5cm。ヒノキ。水漬。

杭（592・593・599）　丸太材や割材で、先端を尖らしたものである。10点のうち3点を掲載した。

592は割材の先端を尖らしたものである。残存長152.0cm、幅9.9cm、厚4.2cm。スギ。P.E.G.処理済。

593は丸太材の先端を尖らしたものである。残存長200.0cm、径9.6×8.4cm。ヒノキ。水漬。

599は丸太の半割材の先端を尖らしたものである。残存長101.7cm、幅11.3、厚6.4cm。ヒノキ。水漬。

用途不明品（551・553・565・569・597）

他の部材と組合わさることなく、単独の形態をととのえているが、今のところその用途を決定しえないものを用途不明品とした。6点のうち5点を掲載した。

551は完形で、板材の頭部を台形に加工する。頭部には2箇所に方孔を穿つ。長20.5cm、幅9.9cm、厚3.5cm。ヒノキ。P.E.G.処理済。

553は完形で、板材の両端を削り出して、方形の突出部を作る。中央からやや長辺よりに、1箇所方孔を穿つ。大きさからみて田下駄の可能性もあるが、鼻緒孔はなく、用途不明品としておく。長42.1cm、幅12.0cm、厚1.9cm。スギ。P.E.G.処理済。

565は一端を欠失する。板材の端を鐙節状に削り、織機の部品の刀杼に似るが、刃部がないた

め用途不明品としておく。あるいは有機台の刀抒の未成品かもしれない。残存長63.1cm、幅9.2、厚1.5cm。アカガシ亜属。P.E.G.処理済。

569は心持丸木の枝部をたわめて、枠状にする。先端は欠失する。たも網の枠に似るが、全周しないため用途不明品としておく。残存長108.3cm、基部長25.0cm、茎部径3.0×3.3cm、枝部径1.9～3.4cm。ヒノキ。水漬。

597は割材を、断面楕円形に整形した棹状の棒材で、頭部付近を中心に、縦方向と横方向に穿孔している。まず縦方向には、小口面の中心から垂直に約32cmの深さまで円孔（径1.8cm）を穿つ。さらに楕円形の長軸方向にずれたところに、やはり縦方向の円孔（径1.7cm）を約23cmの深さまで穿つ。ただしこの孔は小口面まで到達しておらず、また2単位に分かれていることなどから、側面に開放していた可能性がある。しかしこの部分は一部欠損しているため、詳細は不明である。次に横方向の孔は、縦孔に対して、楕円形の長軸方向に穿って貫通させている。
現状で観察できる孔は、円孔（径1.4cm）が1つ、2個1組の不整形な方孔（1.5～2.5×0.9cm）が両面に1組ずつである。この他やや下方に、貫通しない円孔（径1.2cm）を2個、浅く穿っている。この製品の用途については、孔に何かを装着したであろうことは想像がつくが、それ以上のことは全く不明である。長123.9cm、径4.9×6.3cm。スギ。P.E.G.処理済。

第7章　石　器

第1節　旧石器・縄文時代の石器

内場山城跡からは、旧石器・縄文時代に属する可能性のある石器類が若干出土している。これらは、サヌカイト・安山岩ではなくメノウ・チャートを素材とし、石鏃や錐状石器といった弥生時代的な石器でない点で識別される。内場山城跡の北方500mには、姶良Tn火山灰の上下から旧石器が層位的に出土し、また縄文時代早創期の尖頭器や縄文期石器群の出土した板井寺ケ谷遺跡、南方500mには姶良Tn火山灰下からナイフ形石器が出土した西木之部遺跡があるなど、周辺が旧石器・縄文時代遺跡の集中地域であることが知られている。旧石器・縄文時代に属する可能性のあるもの、いくつかを図示する。

削器（601）　メノウ製の削器である。亜円礫の表皮から剥離された大型の剥片を素材としており、表面には水磨の痕跡のある自然面を大きく残す。表皮除去剥片ともみられ、不規則な横長剥片で、やや反りがある。打面部は一面の平坦剥離面を利用している。剥片末端に角度の急な加工を施し、幅広く削器機能部を形成している。メノウ石材は、当該地域の縄文以降の石器生産に供されることが稀であること、剥片末端加工の削器としての形状から考えて、旧石器時代の所産である可能性がある。長さ6.45cm、幅3.7cm、厚さ1.7cm、重さ39.5g。

不定形剥片（602）　良質のチャートを素材とした不定形剥片である。打面には打面調整はなく、剥片末端は蝶番状剥片となっている。とくに使用痕などは認められない。表面には上下二方向の剥離面が認められ、剥片形状と同様の形状の剥片剥離が先行していると推定される。サイコロ状の石核を打面転移しながら剥離されたものと考えられよう。所産時期の特定は困難である。長さ3.1cm、幅2.9cm、厚さ1.1cm、重さ6.2g。

石核（603）　チャート製の楔形を呈する石核である。表面には上から下方向への剥離痕が一面、裏面には左から右への剥離痕が2面、右から左への剥離痕が1面認められる。いずれの剥離も稜上の加撃によって行われているが、稜線の磨耗はなく、楔形石器ではない。チャート製楔形石核は、当該地域の縄文時代前半期の石器生産にしばしば認められることを考えると、縄文期の所産の可能性が高いと考えられよう。長さ2.55cm、幅2.95cm、厚さ1.0cm、重さ5.8g。

第2節　縄文時代～弥生時代の石器

1．縄文時代の石器

石鏃（604・605）　いずれも包含層からの出土で、凹基式の形状からみて縄文時代のものとした。石材はサヌカイト製である。

604は縦長の二等辺三角形を呈する。長さ2.5cm、幅1.3cm、厚さ0.25cm、重さ0.8g。605はなで肩の五角形を呈する。長さ2.3cm、幅1.25cm、厚さ0.4cm、重さ0.8g。

2．弥生時代の石器

石鏃（606～609）　609は2号住居跡からの出土で、それ以外は包含層からである。石材は全てサヌカイト製である。

606・607は平基式の石鏃である。606は側縁が丸く膨らんで、五角形に近い形状を呈する。先端を欠失している。現存長2.2cm、幅1.5cm、厚さ0.3cm、重さ1.4g。607は二等辺三角形を呈する。長さ2.9cm、幅2.0cm、厚さ0.4cm、重さ1.9g。

608・609は有茎式の石鏃で、二等辺三角形の身部に、やや太めの茎部が付く。608は長さ4.6cm、幅1.8cm、厚さ0.65cm、重さ4.5g。609は先端を欠失している。現存長3.6cm、幅1.4cm、厚さ0.7cm、重さ3.3g。

石錐（610・611）　610は10号住居跡、611は1号住居跡からの出土である。石材はサヌカイト製。

610は棒状を呈する。長さ4.6cm、幅1.15cm、厚さ0.8cm、重さ3.8g。

611は平たいつまみ部に、錐部が短く付く。長さ2.3cm、幅1.8cm、厚さ0.35cm、重さ1.1g。

楔形石器（612）　2号住居跡からの出土である。サヌカイト製。長さ2.7cm、幅1.5cm、厚さ0.55cm、重さ2.6g。

石庖丁（613）　包含層からの出土である。両端と刃部を失っており、僅かに紐穴の一部だけが残る。結板岩製。残存長4.2cm、残存幅4.8cm、厚さ0.6cm。

スクレイパー（614・616・617）　614は8号住居跡から出土しているが、混入品とみられる。その他は包含層からの出土である。

614は横長の剥片の下端に刃部を設ける。長さ2.2cm、幅4.8cm、厚さ0.65cm、重さ7.7g。

616は縦長の剥片の側縁に刃部を設ける。長さ7.1cm、幅2.8cm、厚さ1.7cm、重さ32.8g。

617は剥片の側縁に使用痕とみられる刃こぼれが認められる。長さ4.7cm、幅2.15cm、厚さ0.9cm、重さ7.8g。

石核（615）　包含層からの出土である。楔形を呈し、両面に剥離痕を残す。サヌカイト製。長さ3.7cm、幅5.0cm、厚さ1.0cm、重さ18.7g。

ハンマー（618）　10号住居跡からの出土である。自然面を多く残した拳大の小礫で、先端に打撃痕が認められる。長さ10.2cm、幅6.1×4.8cm、重さ363g

第8章　分析・鑑定

第8章 第1節、第2節は

公開していません

第３節　内場山遺跡木棺墓１出土のガラス管玉の科学的調査

肥塚　隆保（奈良国立文化財研究所）
加古千恵子（兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所）

１．はじめに

ガラス製遺物は遺跡から出土するもの、寺院などで伝世しているものなどさまざまな状態で存在しているが、小形のものや破片も含めるとその数は全国で百万点以上にも及ぶと推定できる。しかし、現在まで自然科学的な調査結果の公表は数百点にすぎず、なかでも、弥生時代のガラスについての分析例はごく僅かである。このため、ガラス材質から考古学的考察をすすめるには今後の分析データの蓄積が必要とおもわれる。

今回、内場山遺跡の木棺墓からガラス製の小玉130点と管玉８点が出土したのを機会に自然科学的な調査をおこない、材質の特徴や製作技法の推定をおこなってみた。また従来から公表されたデータとの比較検討もおこなった。なお、紙面の制約上、小玉についてはすべてがアルカリ石灰ガラスであったという調査結果のみにとどめ、詳細な報告は別の機会に譲ることにし、ここでは、特にガラス管玉についてのみの報告をおこなうことにする。

なお、材質に関する分析調査は奈良国立文化財研究所の肥塚隆保がおこない、比重測定とＸ線透過撮影、実体顕微鏡観察による製作方法の推定に関しては、埋蔵文化財調査事務所の加古千恵子が担当したものである。

２．測定および調査方法

蛍光Ｘ線分析

遺跡から出土した多数の遺物を分析するには、非破壊方法が最も望ましい事は言うまでもない。しかし、従来からの波長分散型蛍光Ｘ線分析方法では、Ｘ線照射時に遺物を変色させる可能性があり、非破壊分析を困難にしていた。今回は新しく開発された微小領域ED蛍光Ｘ線分析装置を用いた研究でこれらを克服することが出来たので、当遺跡出土の遺物に適用した。また、本装置は0.5㎜角程度の試料でも分析出来るので広範囲の遺物について適用可能となる。

測定条件の概要は以下に示す。

Ｘ線管：Mo　　Ｘ線管電圧：50Kvp　　Ｘ線管電流：３mA
検出器：SSD Si (Li)　　計数時間：1000sec
コリメーター：300μφ　　条　件：真空中

なお、定量計算はFP法により、標準試料としてはアルカリ石灰ガラスおよび鉛ガラス標準試料11種類と標準岩石試料２種類をもちいた。また、あらかじめICP等により測定した試料をもちいて分析値の精度の確認をおこなった。

比重の測定

ガラス材質を最も簡単に調べる方法として、比重を調査する方法も基礎的データとして測定した。ここでは、非破壊的方法で求めたので見かけの比重である。真比重を測定することにより内部の空隙量を調べることも可能であるが、今回は特に実施していない。

比重の測定にはピクノメータ[pycnometer]（定容積のガラスびんで比重瓶ともいう）を用いた。この方法は精度の高い比重測定が可能で、以下のように測定した。

比重瓶の重量W_1、比重瓶に試料を入れた重量W_2、比重瓶に試料と液を入れた重量W_3、比重瓶に液を入れた重量W_4、液の比重をρとすると、試料の比重dは次式で与えられる。

$$d=\rho\left\{(W_2-W_1)/(W_4-W_1)-(W_3-W_2)\right\}$$

今回は室温18℃、蒸留水18℃において測定したので、$\rho=0.9986$である。なお、測定試料に付着する気泡は減圧して除去した。

X線透過撮影、顕微鏡観察

管玉の製作技法を調べるために、X線透過撮影や実体顕微鏡による観察をおこなった。

X線透視撮影の条件は以下に示す。

X線管電圧	：110～60Kvp	X線管電流	：2 mA
X線実効焦点：	2 mm	被写体－焦点間距離	：80cm
照射時間	： 3～2 min	フィルム	：IX＃50

3．結果と考察

螢光X線分析の結果

古代における珪酸塩ガラスは材質上大きく分類すると、鉛－シリカガラス（以下，鉛ガラスとする）とアルカリ石灰シリカガラス（以下、アルカリ石灰ガラスとする）である。

今回の試料である内場山遺跡出土の管玉は、バリウムを含む鉛ガラスであった。

バリウムを含む鉛ガラスは、従来から福岡県、佐賀県、熊本県の弥生中期から後期の遺跡から発見が報告されている。筆者らの知り得るかぎりでは、九州以外から発見されたのははじめてのことであると思う。中国では古くは西周の墓（陝西省宝鶏）から発見され，戦国時代、漢代の遺跡から出土が報告されているものである。また、韓国では初期鉄器時代や原三国時代の遺跡から発見がしられているところである。これらの多くは緑色ないし濃緑色の料珠や璧、管珠などであるが、なかには、空色や乳白色，元色，深色，藍色などの報告がある。

今回、内場山遺跡で出土した管玉は緑色系統であるが、やや空色を混合したようなエメラルドグリーンを呈し、半透明ないし不透明の管玉が7点で、残りの1点は半透明ないし不透明の緑色を呈した小形の管玉で表面は風化している。前者の管玉7点は、バリウムの含有量はおおざっぱにみて7～10%［BaO］で鉛の含有量は28～30%［PbO］である。後者の小形の管玉はこ

れらとは異なり、バリウムが2%［BaO］で鉛が17%［PbO］で、これらの成分はきわめて少ない。従来から報告されているバリウムを含む鉛ガラスのデータでは、バリウム含有量は5%～20%で、鉛含有量は21%～53%とかなりのバラツキをしめしている。以下、分析データを表にした（表13）。

表13　内堀山遺跡出土の鉛ガラス分析データ一覧　　※（－）は検出限界以下を示す。（重量 %）

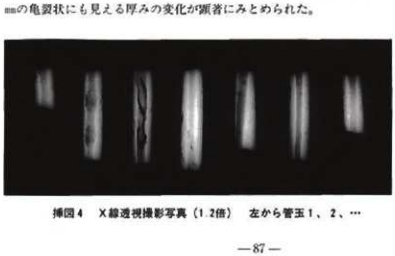
試料No.	報告No.	ガラスの色	SiO_2	PbO	BaO	Al_2O_3	Na_2O	K_2O	MgO	CaO	Fe_2O_3	CuO	MnO	As_2O	SnO_2
管玉1	292	淡灰青緑不	57.71	28.53	7.31	0.38	3.56	0.34	0.105	1.12	0.123	0.347	－	0.601	0.557
管玉2	288	淡灰青緑不	56.73	29.73	7.66	0.33	3.71	0.40	0.091	0.97	0.161	0.219	0.008	0.606	0.031
管玉3	287	淡灰青緑不	56.43	38.24	9.45	0.31	4.11	0.30	0.107	1.29	0.113	0.272	－	0.010	0.032
管玉4	286	淡灰青緑不	56.91	28.74	7.85	0.31	4.43	0.14	0.115	0.82	0.151	0.134	0.009	0.028	0.030
管玉5	290	淡灰青緑不	50.40	32.16	9.62	0.26	5.83	0.67	0.102	1.27	0.103	0.251	－	0.002	0.015
管玉6	289	淡灰青緑不	55.79	29.24	8.68	0.29	4.95	0.11	0.107	0.52	0.123	0.249	0.003	tr	0.021
管玉7	291	淡灰青緑不	56.82	28.40	7.05	0.30	5.46	0.19	0.146	1.24	0.198	0.337	－	0.015	0.026
小管玉	293	緑色風化	72.96	16.72	2.03	0.37	5.73	0.06	0.140	1.43	0.457	0.167	－	－	0.951

比重の測定結果

８個の管玉のうち、風化した小形のものは、液中で減圧する際に壊れる恐れがあったため測定から除外した。他の管玉は表面の泥はあらかじめ洗浄済であったが、液中で減圧した時に孔内の泥がかなり出てきたため、再度洗浄をやり直して測定をおこなった。また、減圧して気泡は出来るだけ除去したがどうしても抜けきれないものも若干あった。非破壊測定のため見かけの比重であるが、管玉２はd＝3.90、管玉３はd＝3.65、他のものはd＝3.70～3.81の数値を得た。

Ｘ線透視撮影と顕微鏡観察による管玉の製作技法について

管玉はすべて不透明にちかく外側から孔の内部の状態を見通すことが出来ないため、Ｘ線透視撮影を行った。１度撮影したのち、管玉を90°回転させて別の角度からも撮影を行った。その結果、管玉２と管玉３の孔の内部の厚みにばらつきがあり、特に管玉３では斜め方向に幅４～６㎜の亀裂状にも見える厚みの変化が顕著にみとめられた。



挿図４　Ｘ線透視撮影写真（1.2倍）　左から管玉１、２、…

実体顕微鏡による観察では管玉の表面は非常にざらついた感じで、鈍い光沢がある。管玉の全体の形状は、平面では胴部中央がやや膨れたようにみえるエンタ

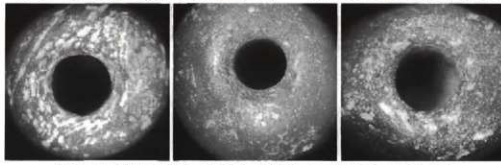
シス状であるが、側面からみるとやや扁平で、両側から軽く押さえたために出来たのではないかと思われる皺状の細かい亀裂が両側面に認められる。管玉３の表面には巻き付けたような縞模様が顕著に見えるのをはじめとして、すべての管玉の表面に斜め縦縞が認められた。また、管玉２・３・４には縞方向に亀裂状の空隙があり、内部に土が入り込んでいる状態が観察された。破損部を除いた管玉の端部の状態は、滑らかに仕上げたもの（管玉４）もあるが、ほとんどの端部には凹凸が見られ、不定方向の細かいハケ状の痕跡が認められる。

挿図５　管玉３にみられる表面の縞模様（×6）

挿図６　管玉６の側面にみられる皺状亀裂（×3.7）

内場山遺跡から出土したガラス管玉の製法については、気泡の観察が不可能なため観察出来る数少ない情報から推定するしかなく断定は避けたいが、Ｘ線透視撮影によって観察された管玉２・３の孔の内部の厚みの変化を見るかぎり、金属線に巻き付ける巻き玉の可能性が高いとおもわれる。また、これらの管玉が長いガラス管を切断して製作されたとするならば、切断端部を仕上げるための再加熱で、現状で観察される細かいハケ状の痕跡は消えてしまうものと思われる。このため、１点ずつ単品を製作したのではないかと考えることも可能である。

古代のガラス製造方法については、現代のガラス製作方法から考察を加えているのが現状で詳細は不明な点が多く、今後の資料の増加を待ちたい。



挿図７　管玉端部面の写真　左から管玉３（×8）、管玉４（×8）、管玉６（×8）

第8章 第4節、第5節は

公開していません

第9章　まとめ

第1節　内場山城跡について

1．概　要

内場山城跡は15世紀末～16世紀代に存続した山城で、標高244mの独立丘陵上に多くの曲輪を階段状に設け、その周囲を回廊状に帯曲輪が取り巻く構造であることがわかった。ここでは山城について若干の考察を行いたい。

2．遺　物

遺物群は前述したように16世紀前半のものが大半であるが、16世紀後半以降の遺物（土師器皿・鍋）も少数含まれる。

器種と産地ごとの構成については丹波焼が大半で、取り上げ破片点数（石製品・鉄製品は含まない）165点の内、丹波焼は95点を数える。中でも摺鉢が多く、他には壺・小杯・甕などがある。その他の遺物には土師器・瓦質土器・備前焼・中国産磁器・瀬戸美濃産陶器があるがいずれも出土量は少量である。

備前焼は徳利・壺・甕など限られた器種が出土した。土師器は小皿・皿・鍋がある。この内、皿・鍋には16世紀後半以降の年代が与えられるものが含まれる。瓦質土器には火鉢・香炉などがある。

陶磁器は遺物量の割に多く出土している。中国産の染付碗・皿、青磁碗・皿、天目茶碗の他、瀬戸美濃産の灰釉碗がある。これらの磁器も少量の伝世品を除いて16世紀前半のものが多い。

以上の出土遺物の様相は、丹波焼が多いこと、土師器が少ないことなど中尾城跡（三田市）[1]に類似している点が多く指摘できる。

3．遺構の時期と類例

遺構の時期については、これまで15世紀末～16世紀前半を存続期間として捉えてきた[2]。しかし、既述のように、再整理の結果、16世紀後半以降の土師器が出土していることが判明した。このため遺物の時期は、15世紀後半～16世紀前半の遺物が多く、少量の16世紀後半の遺物を含んでいるとしなければならない。従って、遺構の時期は15世紀後半～16世紀後半の期間にわたって存続したか、断絶する2時期に存在したと考えられ、このように訂正したい。

これまでの遺構の評価と異なる事実が明らかになったため、得られた事実を再検討しなければならない。16世紀後半の遺物はいずれも小片で数量も少量であるが、山城の調査データから考えてこの事実は無視できない。中井均氏[3]が「16C後半の山城には生活痕跡がないものが多く、16C前半の山城は日常性も有していた」と指摘しているように、16世紀後半の遺物が減少

したからといって山城が衰退あるいは廃絶したとすることはできない。むしろ、この土師器甑・鍋と他の遺物とは同等の価値を持つとして評価してよい。整理が不十分であったことを反省したい。

このことを踏まえて考えるとき、現地での村田修三氏の指摘[9]が思い出される。氏は「竪堀と土塁が曲輪背後にあるため、16世紀後半代の改修が考えられる。」として、山城の部分的な改修について指摘された。このことは出土した遺物の存在から重みを持つ言葉となろう。

一方、第3章第4節で指摘したように遺物の出土は表土に限られ、造成盛土内より出土した遺物は古墳時代のもの以外は認められない。そして、16世紀後半代の遺物についても同様の出土傾向を持っている。この事実は16世紀後半の改修が現状遺構(調査区内)の背諸部分を大きく改変していないことを示すもので重要である。従って、16世紀後半の改修は考えられるものの、帯曲輪・曲輪などの形態については16世紀前半の遺構が継続して使用されたと判断して誤りではない。新たな事実が判明したものの、遺構の評価については大きな修正を加えずに済むもので、帯曲輪の曲輪群を取り囲む構造や、曲輪の加工が軽微な造成に止まるなどの手法は全体的には16世紀前半段階のものであるとして大過ない（調査範囲外の土塁・堅堀については不明)。

但し、16世紀後半の改修部分がどの場所かについては検証できていないし、村田氏の指摘に対しても回答を出したわけではない。今後、内場山城跡の評価については、この点十分注意を払わなければならないだろう。

4．築城について

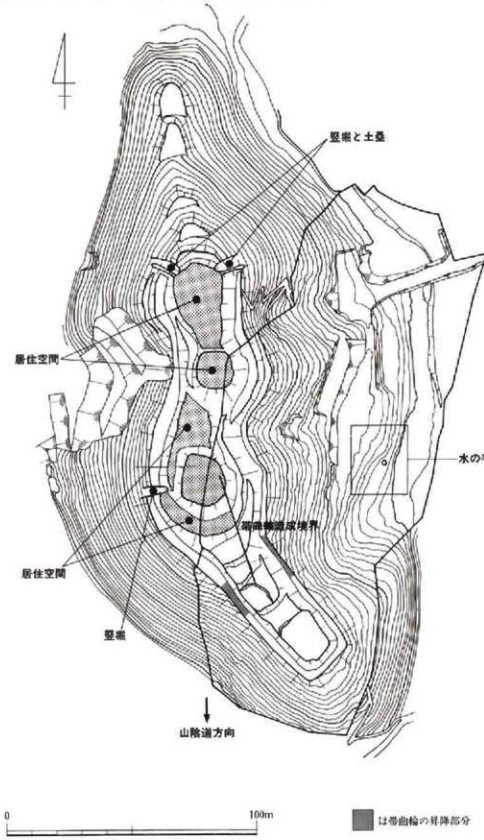
内場山城跡の曲輪平坦面は前時代の竪穴住居跡・古墳・墳丘墓などによって形成された面に軽微な加工を施し、簡素な諸施設を設けるための仕上げを行って使用していた。このため、曲輪内は自然の凹凸が残されたまま使用していたことが予想される。あるいは樹木の根起こしも行われなかったかもしれない。残念ながら山頂の第1～4郭周辺の曲輪群（以下、山頂曲輪群とする。）や北側の曲輪群で内部の様子を知りえたのは、第4郭・帯曲輪3と第3郭の一部のみであるが、両曲輪でも内部に施設は検出できず若干の凹凸を残した状態であった。

築城に際しては、第3章第5節で見てきたように、造成には推定土量750.17㎥の土砂が帯曲輪に盛られている。計算式は前述のように類推の域をでないものであるが、今後の比較検討と議論の発展を願うものである[10]。

5．曲輪内部

山頂曲輪群周辺は、帯曲輪が複数に取り巻くことや、遺物が多量に出土し生活痕跡を多く残していることから防御と生活の両面で他の部分より優越していると考えられる。さらに山頂という立地からしても、この付近が山城の中心であることは動かしがたい。

第10郭周辺では第9郭に少量の遺物が出土しており、若干の居住性が見られた。また、立地からは街道を監視する見張台的なものを想定できる。帯曲輪は1重だが南側は幅も広く、曲輪



挿図 8　補足説明図

との高低差も大きい。これらのことは機能上、第10郭周辺が山頂曲輪群に次いで重要な部分であることを証明している。

第５～８郭は山頂曲輪群と第10郭を階段状に繋ぐ通路的な機能を果たしたと思われる。この部分周辺でも造成は帯曲輪に止まり、曲輪内はほとんど手を付けていない。また、遺物の出土も山頂曲輪群から転落したものと予想される。

帯曲輪は城の性格を規定するのに重要であることはすでに見てきた通りである。帯曲輪１は山城の第１郭から第10郭をほぼ全周にわたって取り囲み、基本的な防衛線を形成している。さらに防御上重要な部分では、山頂曲輪群付近にみられるように帯曲輪を複数本重ねて配置したり、第10郭周辺のように帯曲輪を幅広にしたり、曲輪・帯曲輪間の高低差を大きくするなど特徴的な配置となっている。

これに対して通路的な機能を果たす部分では幅が狭く、傾斜地形がそのまま利用されている。例えば、第１郭直下の帯曲輪１では東斜面は幅1.5m前後と幅が狭い部分が続く。この周辺では、上段の曲輪群直下に位置する帯曲輪４が比較的幅広に造られている。また、挿図８のスクリーントーンで示した部分は傾斜して板となる。

これらはその部分部分が果たす役割に差があるためと考えられる。第３～10郭南側の帯曲輪１は、位置的なことや幅広くなることからみて、防御としての役割が大きい部分である。これに対して、帯曲輪２や帯曲輪１の第１郭下部分、帯曲輪１の第５～９郭北下と第６・８郭南下部分などは通路としての機能が大きい部分である。また、帯曲輪２は第５郭と帯曲輪３を繋ぐ通路である。このように帯曲輪は平面では同一のものとして捉えられるが、細かく見ると同質の平坦面の連続したものではなく、部分によって担う機能の度合いに変化を持たせていることが理解できる。つまり、帯曲輪は全体を囲み曲輪間の移動をスムーズにするとともに、要所を丁寧に作り（帯曲輪１の第10郭周辺と第１郭下の造成の違いなど）、重要な部分では防御機能を強化している。

このように帯曲輪は２種類の機能を果たしているいるが、両者は部分によって二者択一的に分けられるのではなく、防御機能・通路機能の両機能を帯曲輪各部分が請け負っていたと考えられる。一方、帯曲輪には前述のように遺物が希薄なことや生活痕跡がないことから居住（駐屯地）機能は期待されていない。

井戸は斜面部に１基検出した。素掘り井戸で、山城の水の手である。井戸の周辺には覆屋や水溜場など周辺施設や山城への通路の存在が予想されるが、和寿園建設に際して果樹園に開墾したため周辺は削平をうけており、確認することができなかった。

山城の水の手は南北朝時代の千早・赤坂城が有名であるが、丹波の城郭でも八上城郭[6]に水の手が知られる。八上城跡の水の手は尾根斜面に見られるもので、１つの曲輪を形成するほどの本格的なものである。

6．調査区外の曲輪群について

調査区外にも多くの曲輪や施設が認められる。

調査区の外には第１～３郭の大部分が位置するが、第１・３郭については既に述べた通りである。第２郭は尾根頂上部の鞍部に位置し風を防げる場所である。そして、調査区内の遺物出土状況から、多くの遺物が出土することが予想できる。遺物の量や様相、内部の諸施設については具体的には窺う術もないが、おそらくかなりの生活痕跡を残していると推測される。

帯曲輪については東側斜面と同じく第１～４郭を多重に取り巻いた構造となると思われる。現地形で推定できる帯曲輪の状況を図版７に提示した。

現地形で気になるのが第１郭の背後にある堅堀と土塁のセットである。現状では堀は幅1.5m程度、土塁も高さ数50cm程度の小規模なものである。しかし、これが図示したように第１郭の両側から独立して伸びるものなのか、あるいは北第１郭が堀になって堀切と横堀の中間のような堀になるのか注意しなければならない。

北背後には尾根斜面を下りながら５段の曲輪が配置される。この曲輪群は第４～10郭とは異なり連続して繋がらず、曲輪ごとにやや間隔をおいた配置がなされている。

7．山城調査について

以上、検討してきたことをまとめると、①山城の時期は16世紀前半に築城され、16世紀後半まで存続あるいは断絶して再利用されていることが考えられる。②山城は帯曲輪造成を積極的に行い、曲輪部分については粗雑な仕上げに止まっている。③城兵は城域のすべてに駐屯したのではなく、山頂部周辺（第１～４郭周辺）を中心に駐屯していたようである。また、第10郭周辺についても若干駐屯したようである。④帯曲輪については、16世紀後半の改修があったとしても16世紀前半（築城段階）から存在し、調査区の中では大きく改変を受けていない。⑤帯曲輪は機能的には防御機能と通路機能の両面を持っているが、両者は明確に区分されることはないが、場所によって一方の機能が強調された利用の仕方をしている。

これらの成果を元に曲輪の造成と遺物の分布の問題について触れておきたい。まず、簡素な造成の城郭遺構はどのように考えられるのだろうか。類例を見ながら検討する。

加佐山城跡[7]（兵庫県三木市）は、織豊政権の陣城と考えられる遺構である。これは三木陣城群の１つである。この城では主曲輪部分は削平、盛土などの造成を行うが、その外周の曲輪については自然地形を大きく横堀と土塁で取り巻くのみである。

笠屋城[8]（兵庫県三田市）はやや平坦な丘陵上を土塁で取り囲む構造である。この城も曲輪内部は自然地形のまま使用している。時期は16世紀後半である。

忍城出城跡[9]（岡山県岡山市山上）は長く連なる尾根上を部分的に削平するもので背後に堀切を設けた構造である。

このように時期的には16世紀後半の遺構が多く、しかも大平が遺物を余り出土しない陣城や

臨時的な遺構などの可能性が高いようである。しかし、残念ながら16世紀前半段階では類似した構造をもつ山城の調査例は見当たらない。造成面から考えれば内場山城を16世紀前半代の臨時的な類例とすることもありうる。しかし、出土遺物の量や偏在の仕方を見るとやや疑問が残る。従って、内場山城跡については16世紀前半の一類型として今後の資料の増加を待って再検討したい。なお、その際部分的に16世紀後半の改修を受けている可能性があることも注意しなければならない。

次に、山城に遺物が偏在することは一般的なのだろうか。

鵜尾山城[10]（岐阜県郡上郡美並村）では尾根の頂上部よりやや下りた場所に遺物を集中的に出す曲輪が認められ、その曲輪からさらに下りた中腹にある広い曲輪に遺物及び施設が集中する。この城の山頂部では遺物の出土は少ない。

恵下山城[11]（広島県広島市高陽町）では山城の山頂部の曲輪が最大の面積を持っている。この最も広い曲輪から遺物・諸施設が集中して検出された。城内ではこれに次ぐ面積を持つのが、尾根前面にある曲輪である。しかしこの曲輪をはじめ、城内の他の曲輪からは全く施設は検出されず、遺物も希薄である。

北谷山城[12]（広島県広島市東区温品）では山斜面に帯曲輪が何重にも巡る構造を持っているが、遺物や建物などの諸施設はこの帯曲輪に集中し、逆に山頂の中心曲輪は諸施設や遺物が希薄である。また、帯曲輪の建物内には作り付けの竈も敷設され本格的な住空間が設けられていたことがわかっている。

見近島城[13]（愛媛県越智郡宮窪町）は村上水軍の海賊城として知られるが、この調査でも山頂には軽微な削平段と少量の遺物出土が知られるのに対して、山腹地区では多くの建物造成段と遺物の出土があった。住空間の主体はやはり山腹地区にある遺構である。山腹地区の建物造成段は尾根が馬蹄形に囲む窪地に集中しており、今後この種の調査に一つの視点を与えている。

山田城[14]（三重県員弁郡東員町）は主要部の周囲を土塁囲いにする構造の山城であるが、土塁囲いの山頂部にはⅠ郭・Ⅱ郭・Ⅲ郭の３つの郭がある。この３郭はさらに小土塁によって区画され、Ⅱ郭の南側には大きな虎口空間も見られる。遺物の出土はこの主要な３つの郭のうちのⅠ・Ⅱ郭に集中的で、Ⅲ郭とその他の地点にはほとんど遺物が見られない。

このように多くの調査例では小規模なものや単郭を除くと（例えば兵庫県三田市の中尾城）、同じ山城のなかで遺物の集中する場所と希薄な場所があることは多いようである。
この事実は住的な空間が城域の中の一部に偏在し、残りの場所は指揮をとる場所・見張り台・防御の切所などの軍事的な機能を担っていたと考えられるもので、曲輪の機能を考える上で重要である。このことは城郭が複郭になってもその現象がすぐに自立した集団の複数入城や、駐屯する城兵の増加を示さないことを指しているともいえよう。そして、16世紀代の城郭が肥大化する現象は、必要に応じた防御上の強化のために曲輪を拡大させたことの表われとも考えら

れる。

8．最後に

以上、内場山城について検討したが、本書では山城調査について様々な調査方法を考察してみた。そして、これらの手法は大半が遺構面下までを調査して初めてなし遂げられることも指摘したと考えている。今後山城調査に活発な議論が展開されることを期待したい。

今回の報告に際しては、調査が8年前ということもあって不備な点も多々見られた。反省するとともに、より良い調査へのステップと考え、今後に生かしたい。

註

(1) 兵庫県教育委員会『中尾城跡』（近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書XI）1989年

(2) 兵庫県教育委員会『内場山城跡現地説明会資料』1985年
山上雅弘『西日本における中世城館跡調査』『考古学ジャーナル10　№353臨時増刊』ニューサイエンス社　1992年

(3) 中井均『中世城館調査の成果と課題』『考古学ジャーナル10　№353臨時増刊』ニューサイエンス社　1992年

(4) 村田修三氏より御教示を頂いた。

(5) 但し、普請は単純に土を移動するだけでは計算できない(この点については今回はすべて仕上げの中で考えた)。先の水尾城でも指摘されているように、築城に伴っては様々な作業が付随している。また、作業量の比較についても条件などによって大きく異なるだろう。今回はこれらの問題を解決するには到っていない。以下に考えられる付随工事と作業条件について検討し、今後の指標としたい。
①削平する削平面の土の固さ、あるいは礫混じりであるか否かなどの土質の問題(水尾城跡ではJIS規格による岩石の比重を根拠にしている。)
②旧地形に樹木が繁っているかどうか、これによって伐採・集積・根起こしなどの作業量が大きく変わってしまう。
③山の斜面傾斜角度。斜面に土を置いても曲輪面を確保することは難しいので、帯曲輪に盛土するには末端部の土留めを行う必要もあったと思われる。この作業量は傾斜が急になれば大がかりになり増大する。
④間接的な附帯工事の量や質の問題。山に登るための通路(工事用の進入路→築城後は登城道になるかどうかは不明。)・道具の運搬・作業小屋の建設など多くの工事が付随してくるはずである。
⑤施設の多寡や施設の内容によって、造成後の仕上げと作事の労力が変わってくる。居住施設も整った本格的な拠点の城郭と臨所的な臨時の城郭では防御機能は等しくとも、築城に伴う作業量は大きく異なるはずである。この点については、内場山城跡では軽微なもの（作事部分）に止まると考え『仕上げ』の中で考えた。しかし、本来一作業項目として考慮に入れなければならないと考えられる。
⑥城の立地と作業面での制約要素。高い山や交通上不便な場所に有る場合とそうでない場合などや、作業員を遠隔地から確保する場合とそうでない場合などが考えられる。
以上のことが主量以外にも作業の進捗に影響を与えそうな要因として考えられる。これらの点について、今回の調査は十分な検討行うだけの現場作業を行っていない。反省するところである。

(6) 兵庫県教育委員会編『兵庫県の中世城館・荘園遺跡―兵庫県中世城館・荘園遺跡緊急調査報告―』1982年刊による。および実見による。

(7) 兵庫県教育委員会『加佐山城跡現地説明会資料』1992年

兵庫県教育委員会『加佐山城跡・慈眼寺山城跡現地説明会資料II』1992年
⑱ 兵庫県教育委員会『筆尾城跡』『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書II』1975年
⑲ 岡山県教育委員会『岡山県埋蔵文化財文化財発掘調査報告72　忍城出城跡　一般県道岡山賀陽線改良工事に伴う発掘調査』1989年
⑳ 岐阜県教育委員会『鵜沢山城跡現地説明会資料』1991年
㉑ 広島県教育委員会「恵下山城」『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』1977年
㉒ 広島市教育委員会『広島市の文化財第34集　広島市東区温品所在北谷山城跡発掘調査報告』1986年
㉓ 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター『瀬戸内海大橋関連遺跡埋蔵文化財調査報告III（見近島城跡）』1983年
㉔ 三重県員弁郡東員町教育委員会『山田城跡　山田城跡発掘調査報告』1984年

第２節　内場山墳丘墓について

この遺構については、以前に『内場山城跡10郭下層台状墓』として紹介したことがある[1]。またこの他に『内場山２号墳』として引用されたこともあった[2]。しかし今回の報告にあたって、『周溝墓と台状墓とは質的な差はない』[3]という見方に加えて、各地域において特徴的に発達した弥生時代終末期の首長層の墳墓を総称する意味で、『墳丘墓』の用語をとることにした。以下、内場山墳丘墓の特徴を取り上げ、各地の類例と付き合わせつつ、若干の検討を行いたい。

１．立地・墳形

墳丘は現状では盛土が認められず、ほとんどが削り出しによって作り出されている。墳形は長方形を呈し、墳頂部は広い平坦面となっている。

こういった墳墓はいわゆる『方形台状墓』の系譜に連なるもので、同一の尾根線上に造墓活動が継続するのが通例である。しかし内場山墳丘墓の場合は、尾根の先端を単独に占地しており、前期古墳に似た在り方を示している[4]。

２．主体部

墳頂部には複数の主体部があり、大型の木棺墓６基、小型の木棺墓１基、土器棺墓３基、土壙墓４基といった様々な種類の埋葬施設が混在している。それらは主軸を共有し、ほとんど切り合うことなく整然と配列しており、極めて短期間に連続的に築かれたことが想定できる。中でもＳＸ－10は墳丘内における位置・規模・供献土器・副葬品など、他の主体部とは際立った内容を有しており、明らかに墳丘墓の中心主体と言える。

３．祭　祀

埋葬にあたって土器の供献行為が行われたのは、中心主体のＳＸ－10のみである。供献土器は棺を埋め戻した後に、墓壙上に置かれていたようで、出土位置から２つの土器群を想定した。さらに被葬者胸部のほぼ直上にあたる地点から出土した赤色顔料の付いた砥石（116）は、後に触れるように、意味を持って置かれたものと考えることができる。

なお、ＳＸ－９・11の棺床に認められた赤色顔料の広がりも、祭祀行為の範疇として捉えられるだろう。ＳＸ－９の赤色顔料の成分は、分析・鑑定によって水銀朱であることが確かめられている（第８章第４節）。

４．出土土器の検討

ＳＸ－10供献土器

土器群の器種は壺・鉢・高杯・器台などを主体としており、甕を含んでいない。

各器種のうち、小型脚付壺（103）・脚付無頸壺（106・107）・鉢（109）・高杯（113・114）・器台（115）などは、山陰から北陸にかけての日本海側の系譜を引くものである。中でも直接の影響が考えられるのは丹後・但馬地域で、京都府加悦町内和田４・５号墳[5]、豊岡市絹田・若宮

3号墳第1主体[5]の供献土器がほぼ同時期に対比できる資料である。三者に共通する器種は器台と（脚付）鉢で、特によく発達した口縁部をもつ器台は、時期を判定する手掛かりとなるものである。

これに対して二重口縁壺（101・102）は、一般に畿内の系譜を受け継ぐ器種とされている。類品には京都府福知山市寺ノ段1号墳[7]、城陽市芝ヶ原古墳[8]出土品などを挙げることができるが、二重口縁壺という器種自体がもつ特性として、個体ごとの変異が大きいため、好適に比較できる資料に恵まれていない。

このようにＳＸ－10供献土器には、日本海系と畿内系の2つの系統が共存するといえる。しかし胎土を肉眼観察した限りでは、101は107と、102は115などと共通していることから、両系統の土器とも在地の製品と考えて差し支えないであろう。

搬入された土器

供献土器が在地の製品で占められるのに対し、墳丘上で見つかった3基の土器棺墓から出土した6個体の土器のうち、4個体は他の地域から搬入されたか、あるいは強く影響を受けた土器である。尾根部の土器棺を全部合わせても、12個体中5個体が外来系の土器で、非常に高い割合を占めている。土器の搬入元には、次に述べる讃岐・山陰・東海の3つの地域が考えられる。

153・155・160は土器棺に使用された大型の壺で、色調はチョコレート色を呈しており、胎土中に角閃石・金雲母などを含むのが特徴である。かつて太子町川島遺跡の報告書で「Ｂ型土器群（壺Ｃ）」とされ[9]、そののち姫路市長越遺跡出土品の分析から讃岐産であることが明らかとなった[10]土器である。今回の土器胎土分析（第8章第2節）によっても「四国系土器」に近い分析値が求められ、これを裏付ける形となった。この種の土器はもっぱら棺用として流通したようで、県内各地で類例が見つかっている。中でも神戸市東灘区深江北町遺跡の4号墓では、讃岐産と在地産の壺を組み合わせて使っており[11]、内場山墳丘墓の4号土器棺と共通した様相を示している。

156は複合口縁をもつ壺で、山陰地方の影響を強く受けた器形である。色調は淡黄橙色から鈍い橙色を呈しており、胎土分析の結果でも在地の資料とは異なる分析値が出ている。類例は福知山市寺ノ段2号墳第2主体部[12]などにみられる。

158は口縁部内面に多条沈線文を施し、赤色顔料で加彩した東海系の高杯である。一宮市博物館のご好意により、胎土分析用に比較試料として5点の土器片を提供していただいた。分析の結果では、158が在地の胎土とは異なることは判明したが、一宮市の試料とも一致しなかった。現在のところは産地を特定しえないが、おそらく濃尾平野北部の何処かから直接もたらされたものであろう。なお先に述べた豊岡市鎌田・若宮3号墳第1主体の供献土器にもパレス・スタイルの壺があるが、胎土は在地のものと同じで、地元で製作されたとされている。

土器の年代

兵庫丹波地域では未だ当該時期の土器編年が確立していない現状であるため、隣接する京都丹波・丹後・但馬地域、および搬入された土器の編年観からその併行関係をたぐり、年代を決定したい。

まずＳＸ－10供献土器の併行関係を、京都丹波・丹後・但馬地域にみてみる。

京都丹波のうち、中丹地域と舞鶴市・大江町を含む北丹波地域には、綾部市青野西遺跡[113]、舞鶴市志高遺跡[114]の土器編年がある。やや資料不足の感はあるが、前後の関係からみて「青野Ⅱ式」「志高弥生Ⅹ期」に比定できよう。この時期は、庄内式に併行するとされている。

丹後地域の土器編年には『京都府弥生土器集成』[115]があるが、当該期の良好な資料が掲載されていないため、先に掲げた加悦町「内和田４・５号墳の供献土器」をもってこれに充てる。

但馬地域でも、先述した豊岡市「鎌田・若宮３号墳第１主体の供献土器」を併行する資料と考えたい。

次に搬入された土器の併行関係をみることにする。

讃岐系の土器（153・155）は、庄内式併行期を中心とした時期に各地へ持ち運ばれる器種とされている[116]。

また山陰系の土器（156）は、口縁部および体部の作りからみて、「青木Ⅴ・Ⅵ期」[117]に比定することができる。なお「鎌田・若宮３号墳第１主体の供献土器」にも山陰系の鼓形器台があり、ほぼ同時期であろうと考えられる[118]。

東海系の土器（158）は、沈線文の多条化、内面の段の低まりからみて、「廻間Ⅱ式期前半」[119]に位置付けられよう。また「鎌田・若宮３号墳第１主体」出土のパレススタイル壺もほぼ同時期と考えることができる。なお「廻間Ⅱ式期前半」は、東海系の土器が各地域に拡散する時期にあたり、北陸においても時期的に併行する「漆５群土器」の中にこの種の土器が多く含まれている。「漆５群土器」は田嶋明人氏によって提唱された「白江式」の古相にあたり、外来系の土器が組成に出現する時期として捉えられている[120]。

以上、内場山墳丘墓出土土器およびそれに併行する資料が、各地の土器編年とどのような関係をもつかについて言及してきた。ここで改めて整理すると、京都丹波地域では「青野Ⅱ式」「志高弥生Ⅹ期」、丹後地域では「内和田４・５号墳の供献土器」、但馬地域では「鎌田・若宮３号墳第１主体の供献土器」を併行する資料として取り上げた。これらの土器群の特徴として、高杯・器台・甕などにみられる有段口縁が、この地域としては最も発達した段階に到達している点が指摘できる。この有段口縁が極相を見せるという点を評価するならば、これらの土器群の年代は北陸で言うところの「月影Ⅱ式～白江式」に対応させるのが適当であろう。

さらに搬入された土器は、山陰では「青木Ⅴ・Ⅵ期」、東海では「廻間Ⅱ式期前半」に対応することを示した。「廻間Ⅱ式期前半」は、北陸では「白江式古相」、畿内では寺沢編年の「庄内

２式期」に相当するとされている[21]。

以上、各地の併行資料の示す年代は、いずれもそれぞれの地域における布留式導入の直前に集中する点が指摘できる。これは供献土器と土器棺の年代にほとんど隔たりがないことの証左ともなり、墓壙の配置が非常に整然としていることとも符合してくる。

またもう１点肝腎なことは、土器の示す年代を「庄内式の新段階」辺りに絞り込めたことである。つまり内場山墳丘墓は、定型化した前方後円墳成立直前の首長墓の１つとして評価できると言える。

５．副葬品の検討

主体部出土の副葬品には、素環頭大刀・鉄鏃・鉄剣といった武器類と、鉄斧・鉋などの工具類がある。ここでは武器類に絞って、検討を行ないたい。

素環頭大刀（125）

ＳＸ－10棺内からの出土で、被葬者の右体側に、切先を足元へ向けて置かれていた。全長93.5㎝、刀身長76.5㎝の長大な大刀で、弥生時代終末期の資料としては異例の長さである。これだけの長さをもつものは、国内では弥生時代の北部九州に僅かに認められる他は、古墳の副葬品に限られる。しかし古墳の副葬例が通常は柄・鞘などの木装を施しているのに対し、内場山例は抜身のままで織物にくるまれていた。また関部の形状についても、直角で、明瞭な鍵手状に切れ込むのが特徴的で、あまり類例をみることができない。

鉄鏃（126～142）

鏃頭式鉄鏃には、断面が扁平でほとんど鏑をもたないタイプ（平根系）と、断面矩形で横方向の鏑をもつタイプ（有稜系）がある[22]。平根系は弥生時代からの系譜がたどれるのに対し、有稜系は弥生時代終末期に出現し、古墳時代前期には碧玉製の模造品が作られるようになる。

ＳＸ－10棺内から出土した鏃頭式鉄鏃はすべて平根系で、17点のうち１類（鏃身長２～３㎝）が９点、２類（鏃身長４～５㎝）が８点ある。１類の類品はほぼ同時期の内和田５号墳[23]で見られる他、長瀬高浜遺跡では住居跡から出土している[24]。２類は京都府舞鶴市切山古墳[25]に類品が見られる他、遠く韓国の釜山市老圃洞31号墳[26]でも出土している。また鏃身中央に円孔をもつ例は、京都府山城町椿井大塚山古墳[27]、兵庫県豊岡市駄坂・舟隠９号墳[28]などを挙げることができる。こうしてみると、この種の鉄鏃は日本海側に分布の中心があると言えそうである。

鉄剣（149）

ＳＸ－11棺内からの出土である。柄えが呑口式であるところから、ヤリの可能性が高いと考えられることが多い[29]。しかし本例に関しては、墓壙内の空間が限られていることと、柄の延長が確認できなかったことから、剣として報告する。ただしこれは、ヤリとしての可能性を否定するものではない。

さて呑口式の柄えをもつ剣（ヤリ）は、弥生時代終末期～古墳時代初頭にかけて、各地の首

長墓の副葬品として出土している。その画一的な一連の工程をもつ製品については、「特定地域で一括して制作され、各地へ配布された」[30]ものという指摘がなされており、畿内政権と各地の首長との政治的関係を示す遺物として捉えられてきている。

6．日本海系の要素

ここまで検討してきた中で、内場山墳丘墓には、山陰から北陸までを含む日本海系の要素が色濃く反映されていることが窺えた。もともとこの地域は、弥生時代後期以降、土器様式に強い親縁性を保っており、供献土器にもそれがよく顕れている。

また「方形台状墓」と呼ばれる墓制は、方形プランで低平な墳丘を特徴としており、山陰・北陸の「四隅突出墓」もこの延長として捉えられる。多数の主体部、数種類の主体部の混在、巨大な墓壙をもつ木棺墓、墓壙上の供献土器といった要素など、これらの墓制に共通するものが多い。特に、被葬者胸部の鉛直上に赤色顔料の付着した石器を置く事例は、四隅突出墓である島根県出雲市西谷３号墓[31]、福井県清水町小羽山30号墓においても認められており、偶然では片付けられないつながりがあると言える。

さらに土器棺（156）・鉄鏃（126～142）も日本海ルートを考証する遺物として挙げることができる。ちなみに直接の関係はないが、山麓部の木棺墓１から出土したガラス管玉(286～293)は、分析の結果バリウムを含んだ鉛ガラスであることが判明しており(第８章第３節)、これも九州北部から日本海ルートを通じて持ち込まれた可能性が高い。

7．小　結

内場山墳丘墓についてここまで検討を重ねてきた。その中で、墳形・埋葬施設などについては、丹波・丹後・但馬地域に共通する墓制にのっとったものと説明した。さらに供献行為などにみられる祭祀形態は、山陰から北陸にかけての日本海側に広がりをもつことも明らかにした。これは丹波・丹後・但馬地域が、つながりの深い１つの地域を形成しているとともに、巨視的には山陰～北陸文化圏に包括されていることを意味している。

一方、副葬品の中には素環頭大刀や鉄剣のように、政治的な関係で入手したと考えられる製品が含まれている。さらに棺に転用していた土器の中に、他地域産の土器が少なからず含まれており、ヒトやモノの地域間の動きに直接関わっていた首長者像が浮かび上がってくる。ただし供献土器の中に他地域産の土器が持ち込まれた形跡は無く、その勢力範囲は自ずと限られたものであったと言えよう。

内場山墳丘墓の被葬者は地域の政治・流通を掌握する首長者であった。その勢力範囲は、地理的な条件からみて、羅山盆地西北部を視野に収める程度のものであっただろう。そして葬送にあたっては、あくまで弥生時代以来の伝統的な墓制がとられていた。この点において、古墳時代の首長墳と区別できると考える。彼の被葬者は古墳時代の覚醒を耳にしつつ、伝統的な祭祀によって埋葬された弥生時代最後の首長と言えよう。

註

(1) 埋蔵文化財研究会『第24回埋蔵文化財研究集会　定型化する古墳以前の墓制』第II分冊—近畿・中部以東編—　1988年。一部内容の食い違う点があるが、本報告で訂正したものと理解されたい。

(2) 池田正男『篠山盆地における古墳群の動態』『高井悌三郎先生喜寿記念論集　歴史学と考古学』1988年
西紀、丹南町教育委員会『長者ケ谷1号墳』1989年など

(3) 都出比呂志「前方後円墳出現期の社会」『考古学研究』第26巻第3号　1979年
都出比呂志「墳墓」『岩波講座　日本考古学』4　岩波書店　1986年

(4) ただし第1・3郭で土器棺が出土しているところから、丘陵の頂部付近に同時期の墓が存在する可能性は残されている。

(5) 財京都府埋蔵文化財調査研究センター「内和田古墳群」『京都府遺跡調査概報』1992年

(6) 豊岡市教育委員会「鍬田・若宮古墳群」『豊岡市文化財調査報告集』1990年

(7) 福知山市教育委員会『駅南地区発掘調査報告書』1989年

(8) 城陽市教育委員会『芝ケ原古墳』1987年

(9) 太子町教育委員会『川島・立岡遺跡』1971年

(10) 兵庫県教育委員会『播磨・長越遺跡』1978年

(11) 兵庫県教育委員会『深江北町遺跡』1988年

(12) 前掲註(7)

(13) 財京都府埋蔵文化財調査研究センター「京都府遺跡調査報告書」第4冊　1985年

(14) 財京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査報告書』第12冊　1989年

(15) 財京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府弥生土器集成』1989年

(16) 岩崎直也「四国系土器群の搬出」『大阪文化誌』第17号　大阪文化財センター

(17) 鳥取県教育委員会『青木遺跡発掘調査報告書III』1978年

(18) 前掲註(6)の報告では土器の年代を「青木VII期古段階」に位置付けているが、報告書を見る限り、1段階遡らせるのが妥当と考える。ただし土器を実見していないことを断わっておく。

(19) 愛知県埋蔵文化財センター『廻間遺跡』1990年
ただし愛知県埋蔵文化財センターの石黒立人・宮腰健司両氏によると、この時期に高杯の内面を赤彩するのは異例とのことである。

(20) 石川県立埋蔵文化財センター『漆町遺跡Ⅰ』1986年

(21) 前掲註(3)

(22) 松木武彦「前期古墳副葬品の成立と展開」『考古学研究』第37巻第4号　1991年
松木武彦「古墳時代前半期における武器・武具の革新とその評価—軍事組織の生成に関する一試考—」『考古学研究』第39巻第1号　1992年

(23) 前掲註(5)

(24) 財鳥取県教育文化財団『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書IV』1982年
財鳥取県教育文化財団『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書V』1983年

(25) 京都府教育委員会「舞鶴切山古墳」『京都府文化財調査報告』第22冊　1960年

(26) 釜山大學校博物館『釜山老圃洞遺蹟』釜山大學校博物館遺蹟調査報告第12輯　1988年

(27) 京都府教育委員会『椿井大塚山古墳』1964年

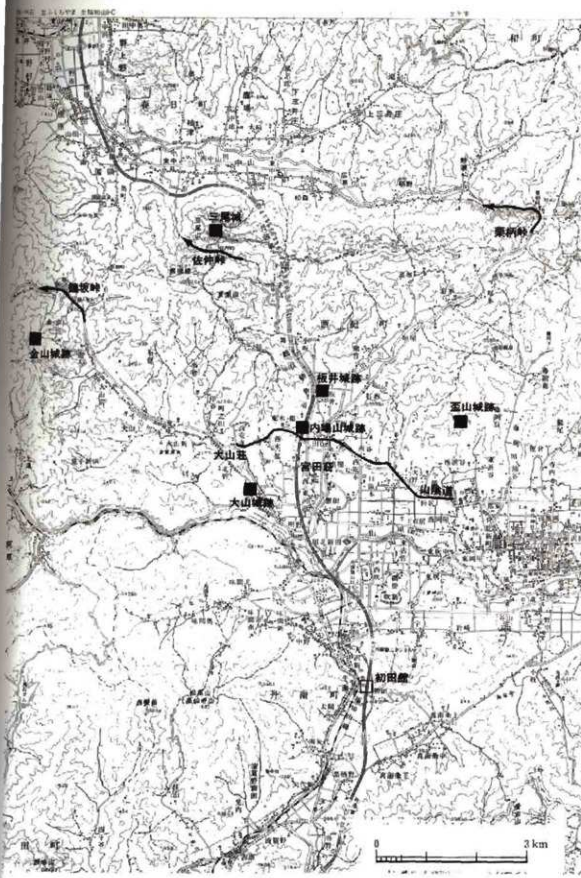
(28) 豊岡市教育委員会『駄坂・舟隠遺跡群』1989年

(29) 菅谷文則「前期古墳の鉄製ヤリとその社会」『橿原考古学研究所論集』吉川弘文館　1975年

(30) 池淵俊一「鉄製武器に関する一考察—古墳時代前半期の刀剣類を中心として—」『古代文化研究』No.1　島根県古代文化センター　1993年

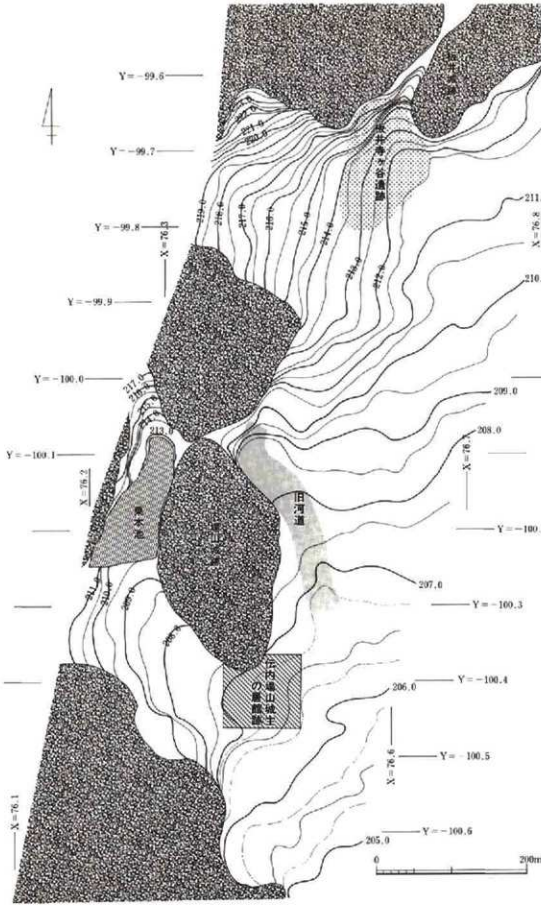
(31) 島根大学法文学部考古学研究室『II部　西谷墳墓群の調査（1）』『山陰地方における弥生墳丘墓の研究』1992年

図　　版

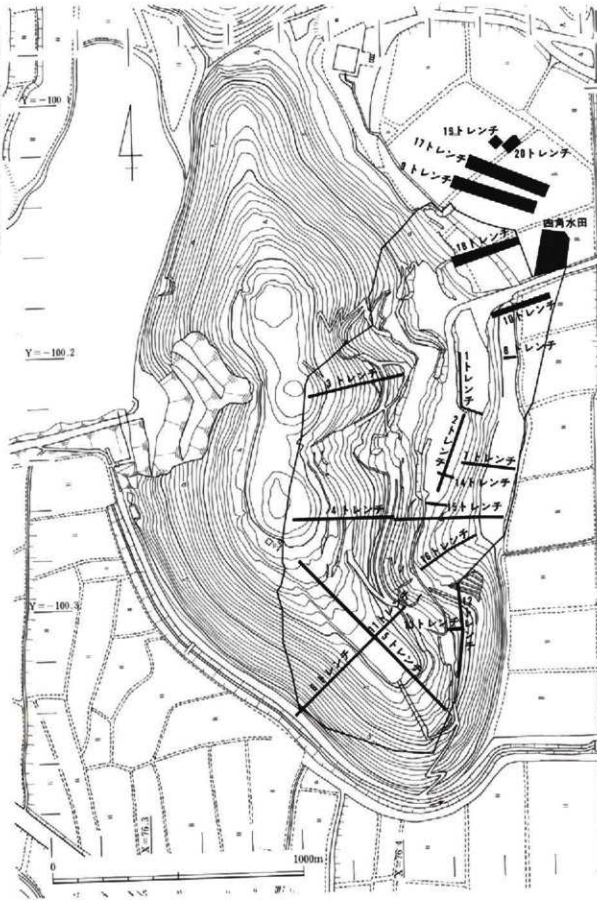


図版1　遺跡の位置（1／75、000）

図版2　遺跡周辺微地形図

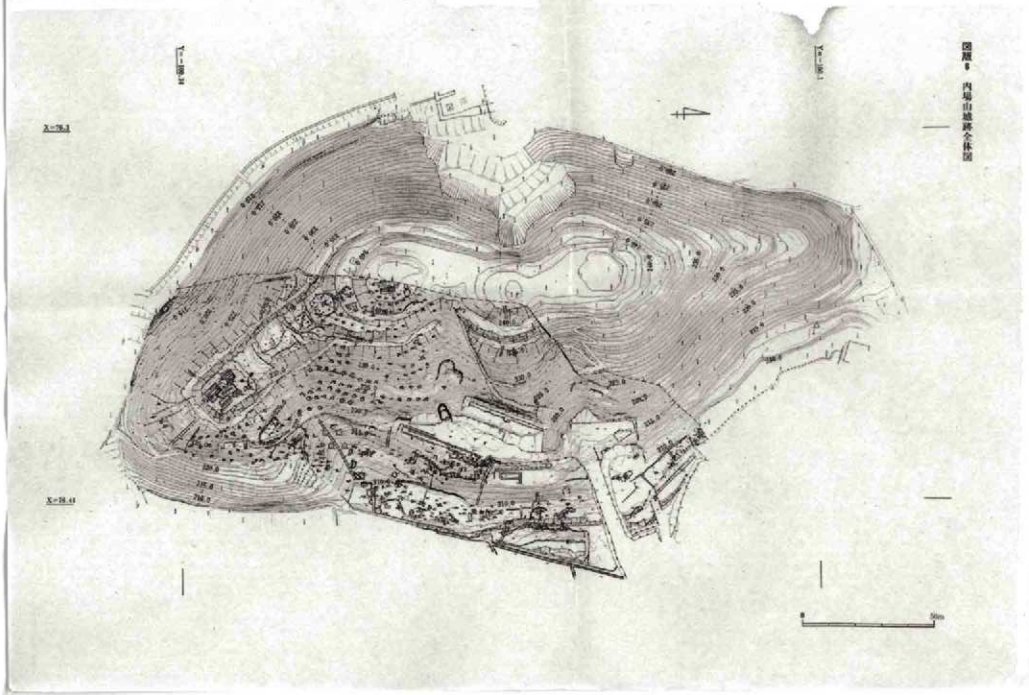


図版3　工事の路線と調査の位置



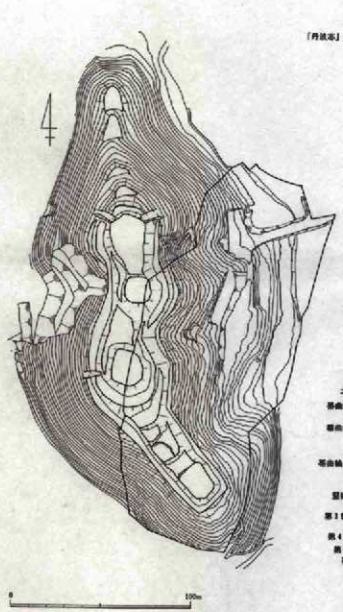
図版4　調査範囲とトレンチの配置

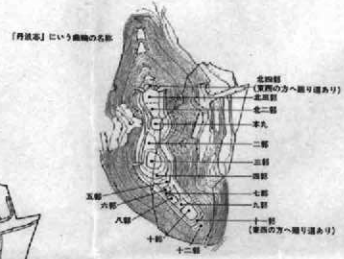
図面-5 貯水施設平面図

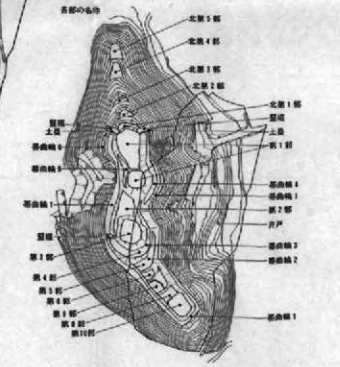


図版 8　内場山城跡全体図

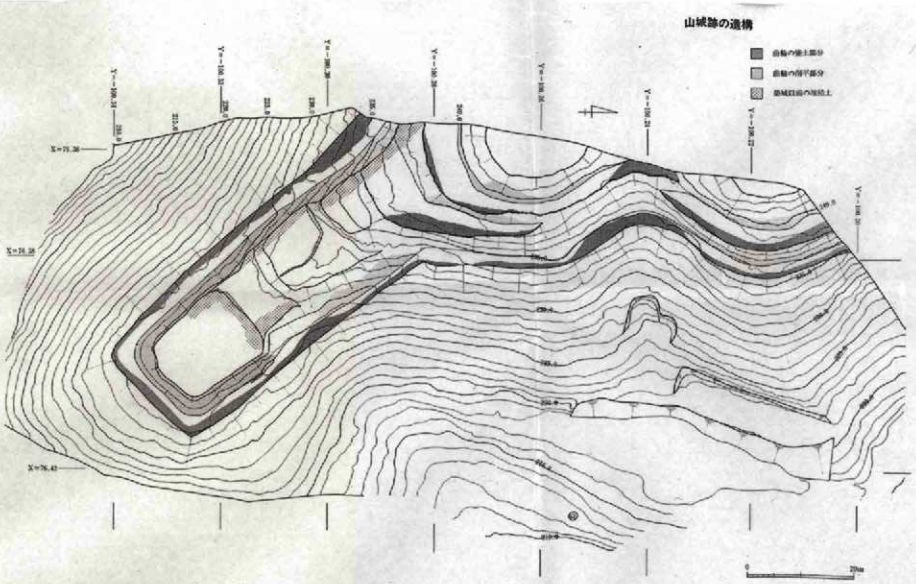
山城跡の遺構





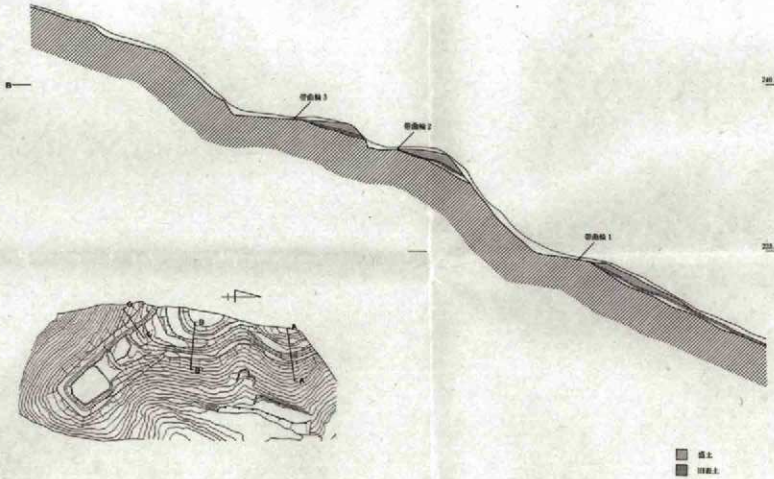


図版７　内海山城縄張り図



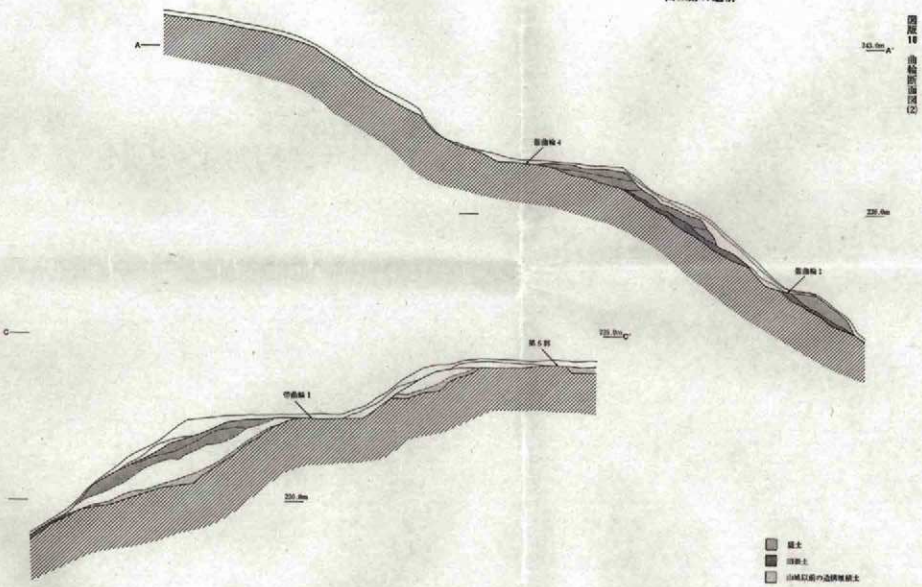
図版1　山城跡遺構全体図および盛土・切土の造成図

山城跡の遺構



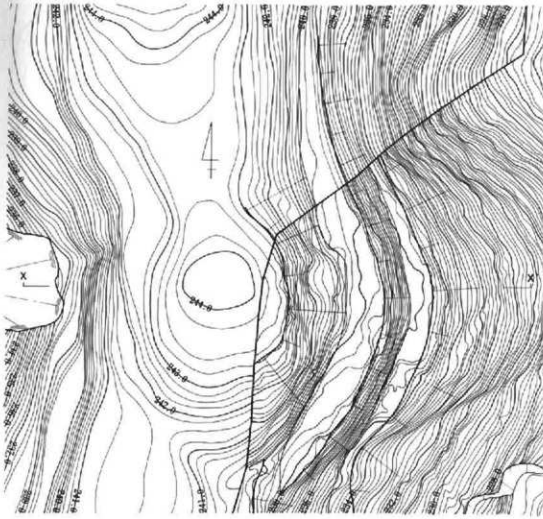
図版 9　曲輪断面図(1)

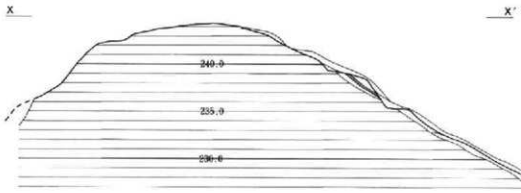
山城跡の遺構



図版18 造構断面図(2)

図版11　第1郭周辺



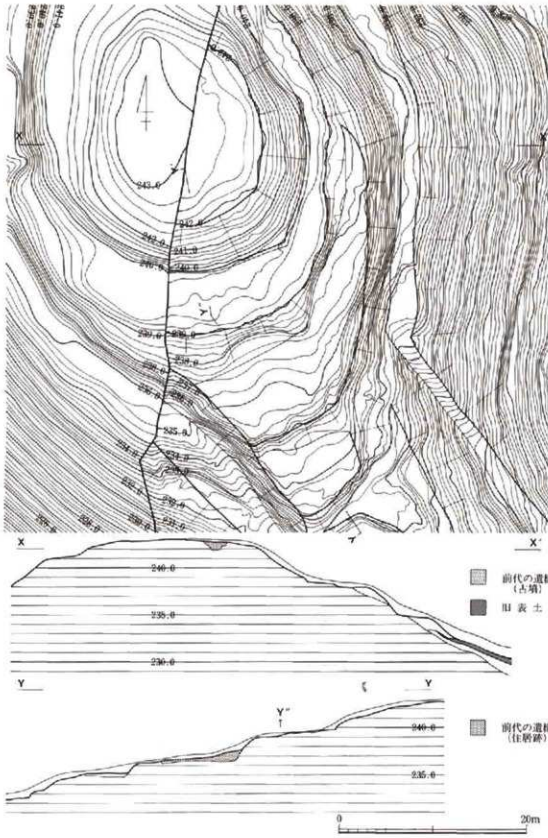


■ 田表土

0　20m

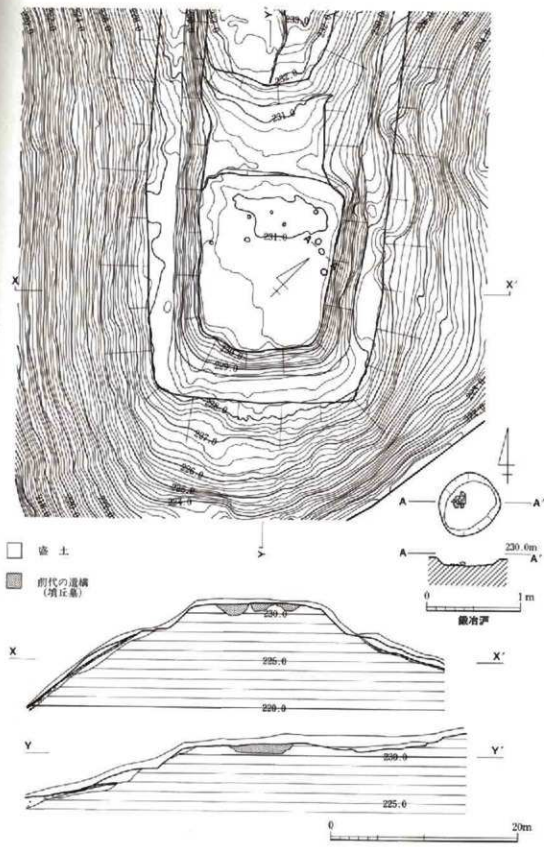
山城跡の遺構

図版12　第3～6郭周辺



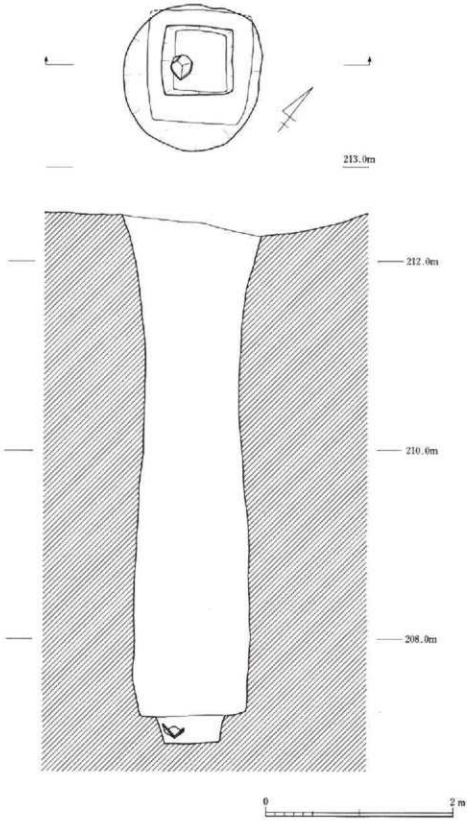
山城跡の遺構

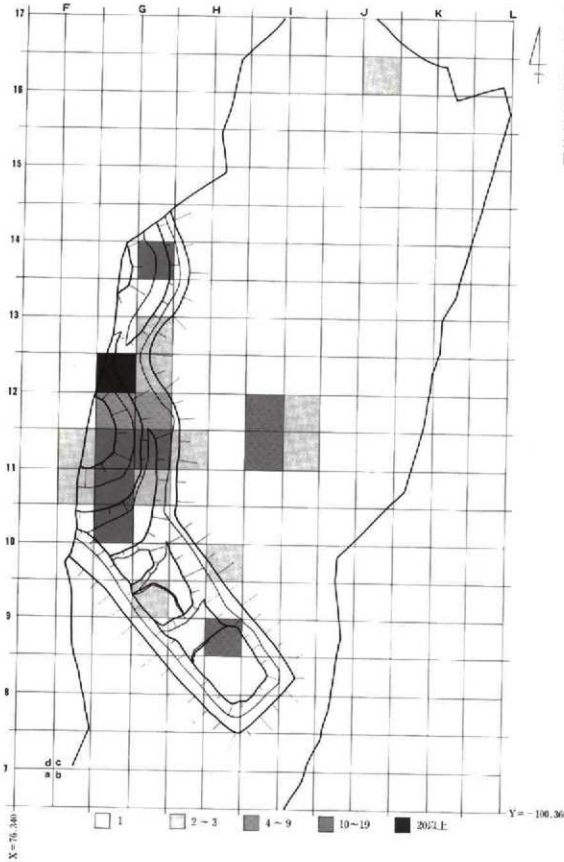
図版13　第10郭周辺



図版14　井戸2

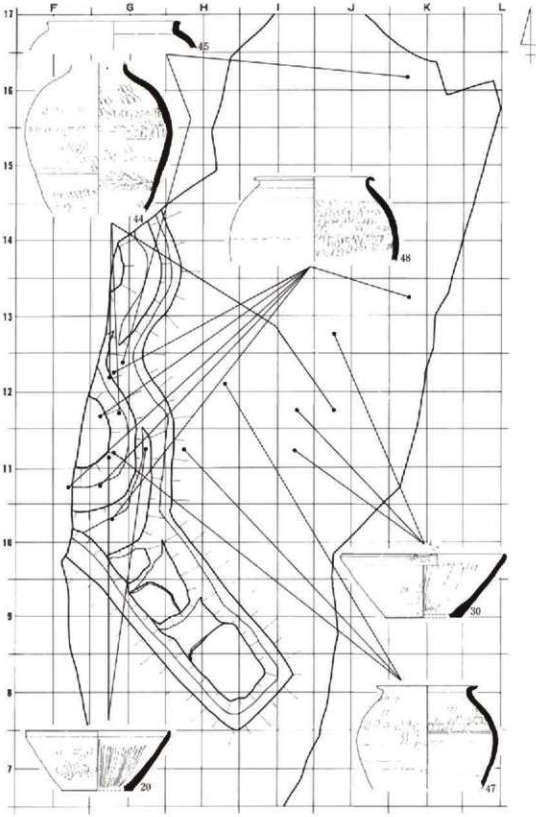
山城跡の遺構

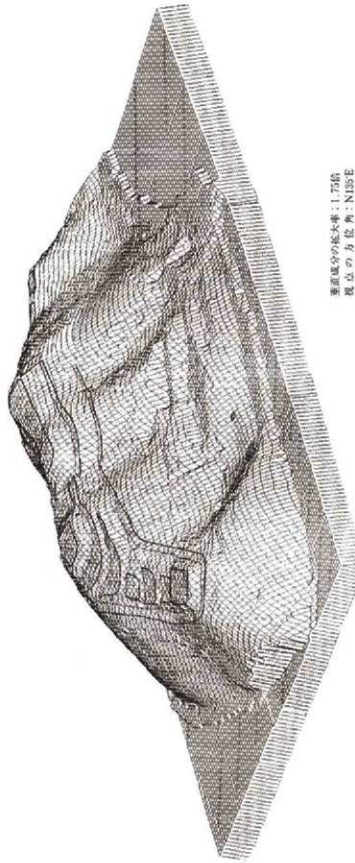




図版15　遺物出土分布図

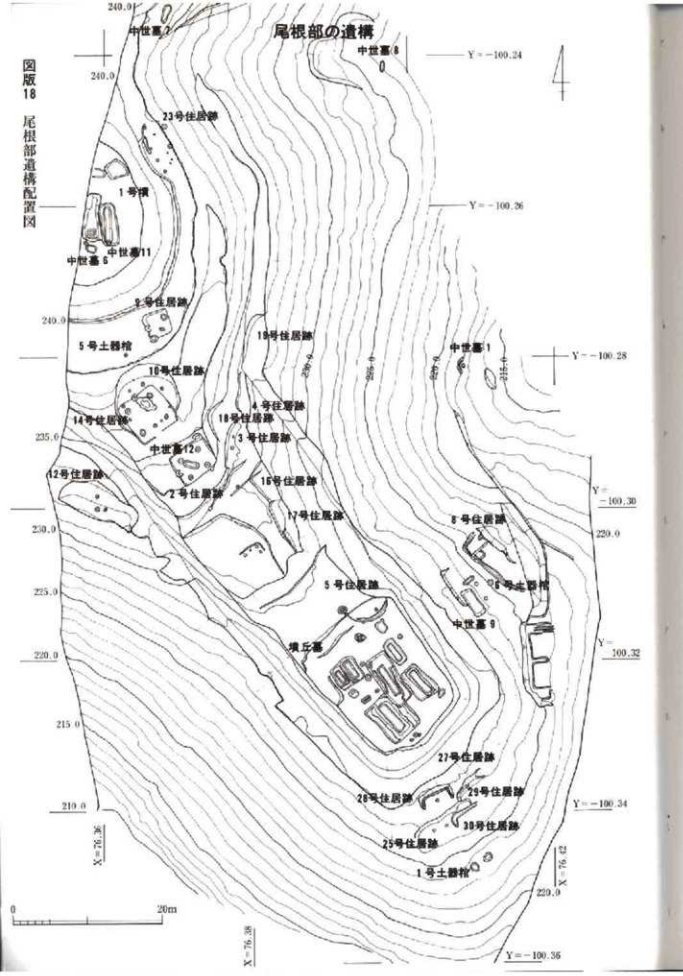
図版16 接合関係図





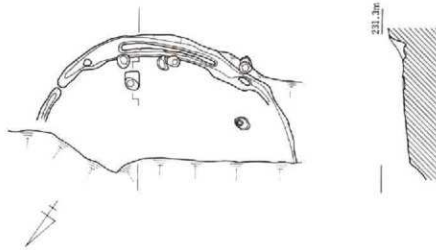
図版17　ブロックダイヤグラム

図版18 尾根部遺構配置図

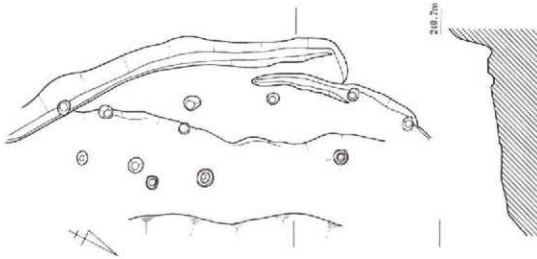


図版19　5・23号住居跡

5号住居跡



23号住居跡

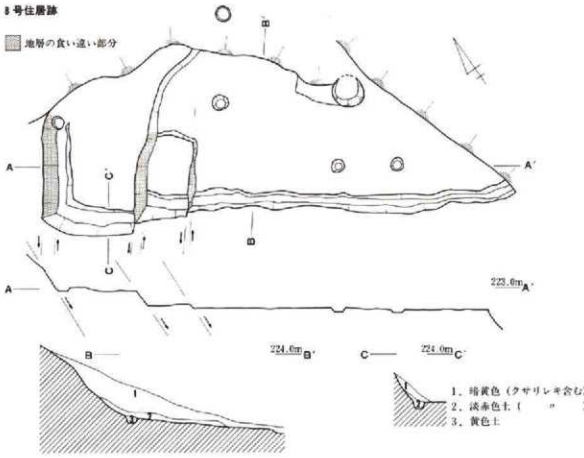


尾根部の遺構

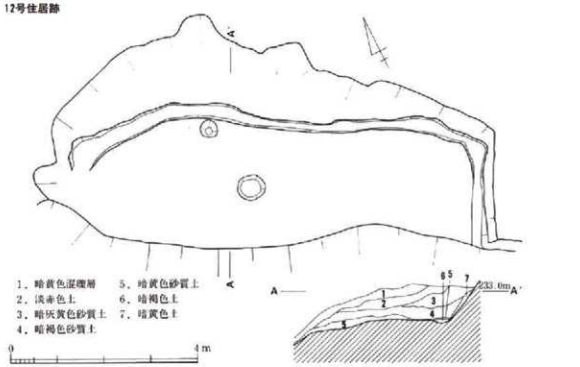
図版20　8・12号住居跡

8号住居跡

地層の食い違い部分

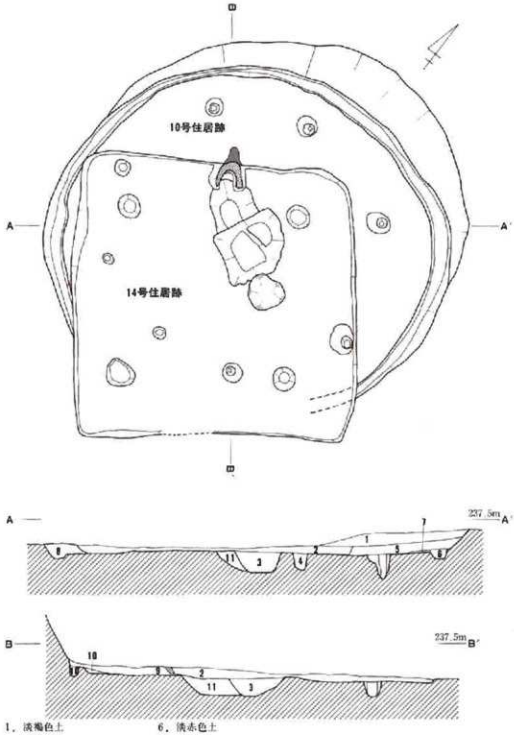


12号住居跡



尾根部の遺構

図版21　10・14号住居跡

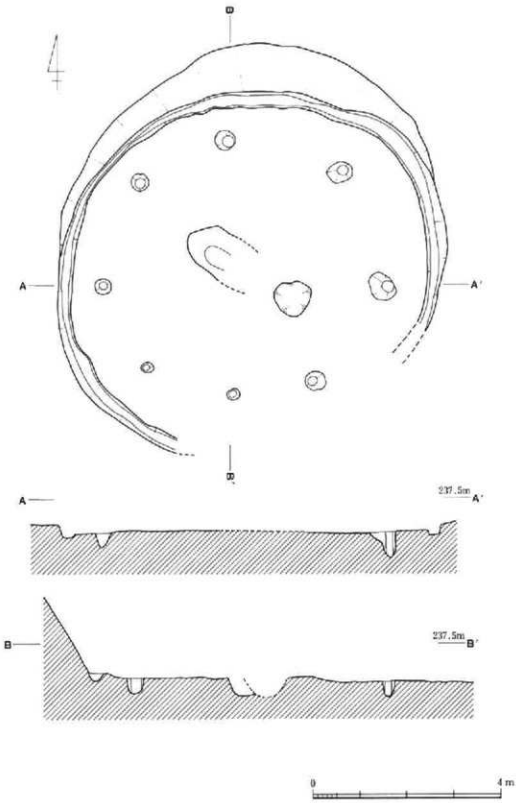


1．淡褐色土
2．暗黄色土
3．暗黄赤色土（土器・炭含む）
4．暗褐色土
5．褐色土
6．淡赤色土
7．黄色土
8．暗赤黄色土
9．黄色砂質土（クサリレキ含む）
10．黄色砂質土
11．暗褐色土（レキ混じる）

0　4m

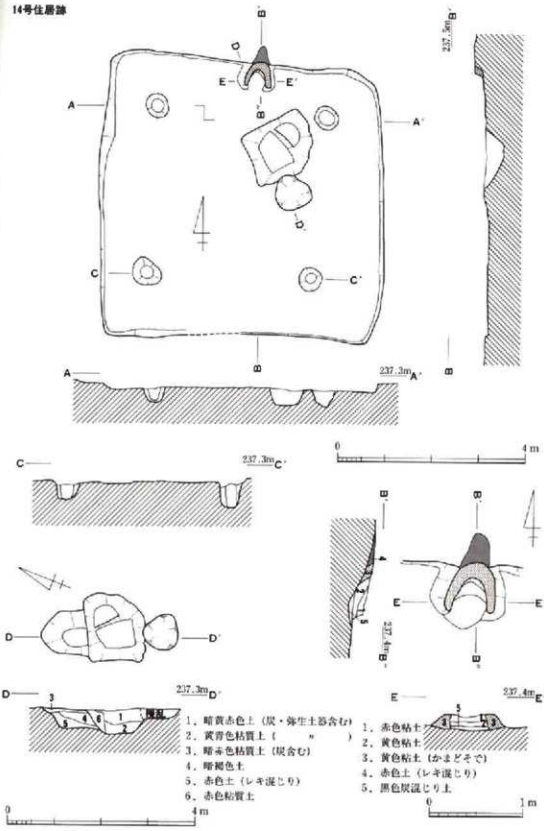
図版22 10号住居跡

10号住居跡



尾根部の遺構

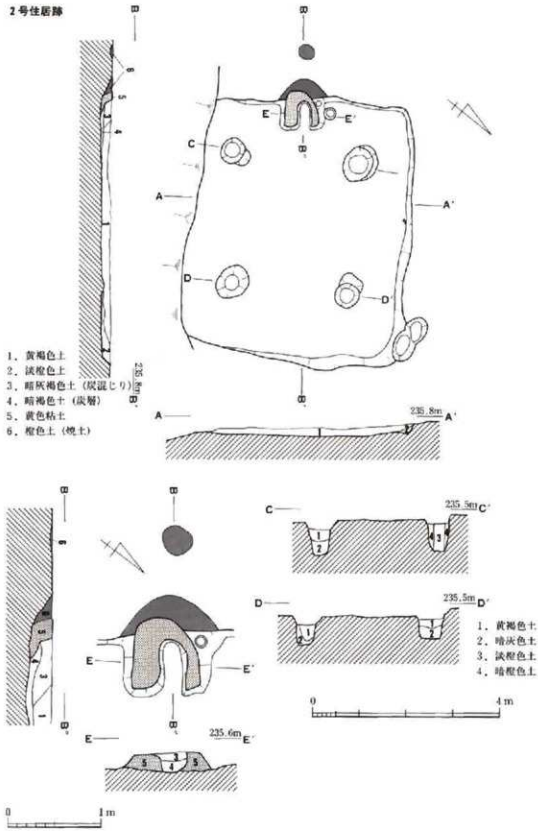
14号住居跡



図版23　14号住居跡

図版24　2号住居跡

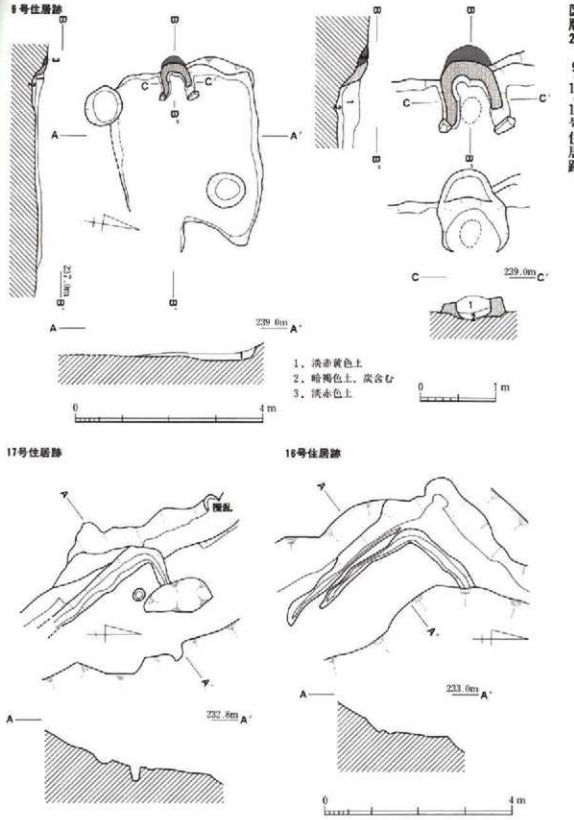
2号住居跡



尾根部の遺構

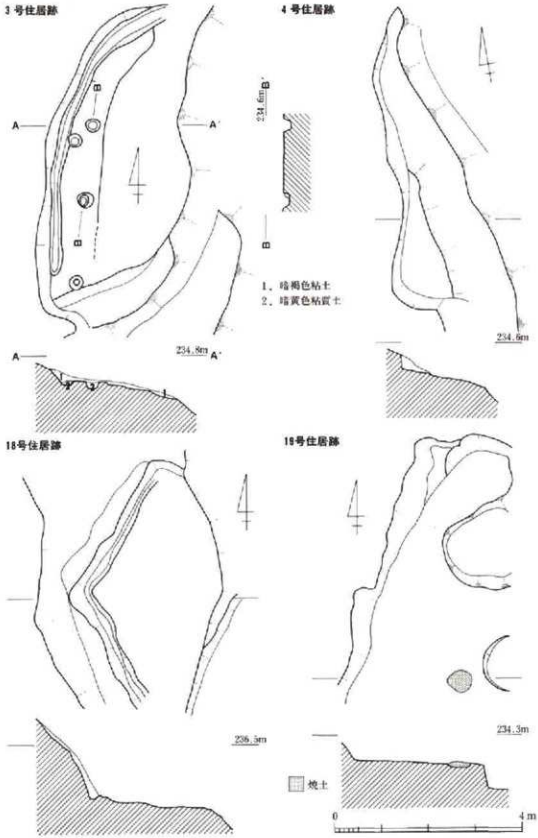
図版25

9・16・17号住居跡



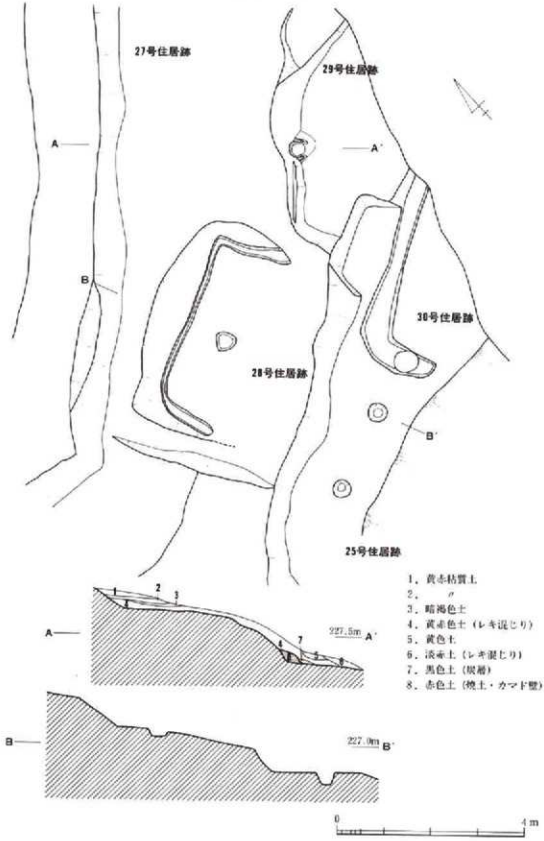
尾根部の遺構

図版26　3・4・18・19号住居跡



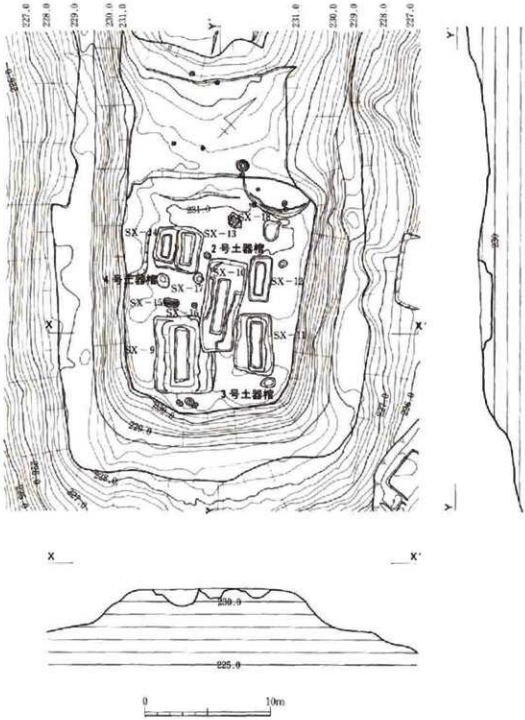
尾根部の遺構

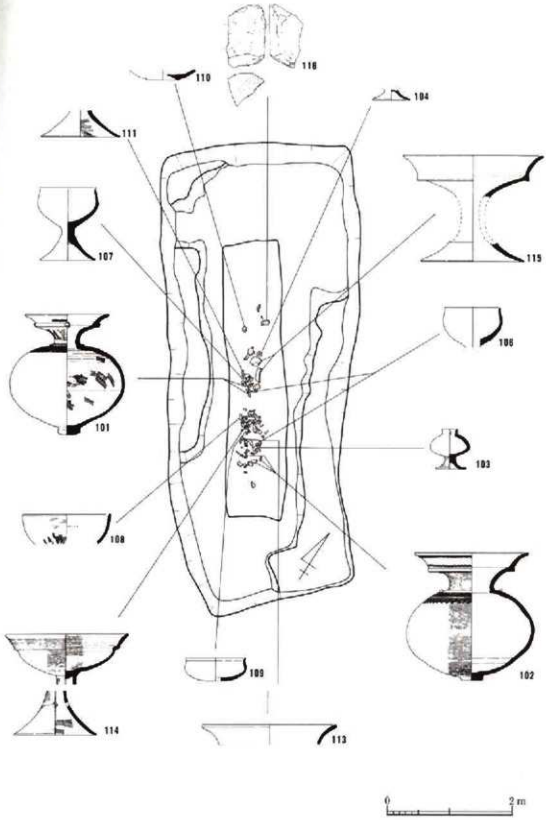
図版27　25・27～30号住居跡



尾根部の遺構

図版28　墳丘墓全体図

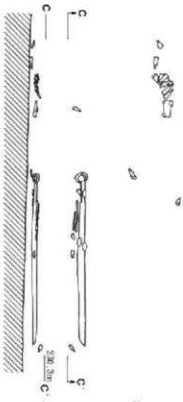




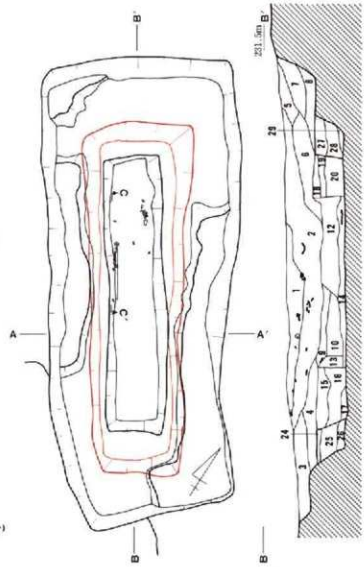
図版29　墳丘墓SX-10供献土器出土状況図

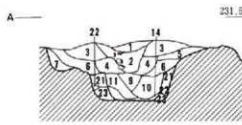
図版30　墳丘墓SX－10棺内副葬品出土状況図

尾根部の遺構



副葬品出土状況拡大図

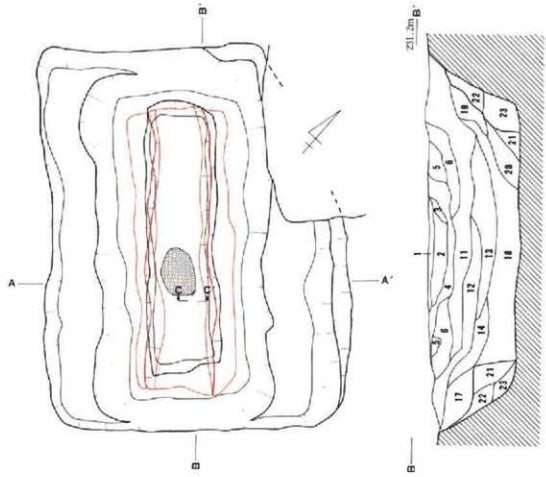


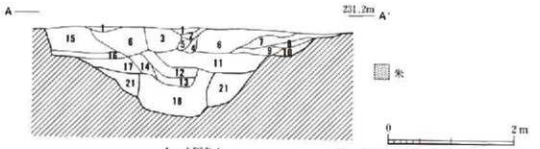


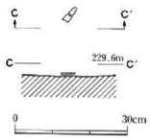
1．暗褐色土（土器含む）
2．褐色土
3．赤灰褐色土（細レキ混じり土器含む）
4．赤褐色土（細レキ混じり）
5．暗赤褐色土（　〃　）
6．暗濃赤褐色土（細レキ混じり）
7．赤褐色砂質土（中レキ混じり）
8．明赤褐色砂質土（　〃　）
9．黄赤褐色土（土器含む）
10．　〃
11．暗茶褐色土（中レキ混じり）
12．明黄茶褐色土（細レキ混じり）
13．灰赤褐色土（中レキ混じり）
14．赤褐色土（鉄器含む）
15．黄茶褐色土
16．中～大レキ
17．明赤褐色土
18．暗赤褐色土（細レキ含む）
19．赤灰褐色土（中レキ混じり）
20．中～大レキ
21．濃黄赤褐色土（中レキ混じり）
22．濃茶褐色土（細レキ混じり）
23．濃赤褐色土（　〃　）
24．明黄赤褐色土
25．中レキ
26．暗赤茶褐色土（中レキ混じり）
27．赤灰褐色土（細レキ混じり）
28．中レキ
29．濃赤褐色土

0　2m

尾根部の遺構



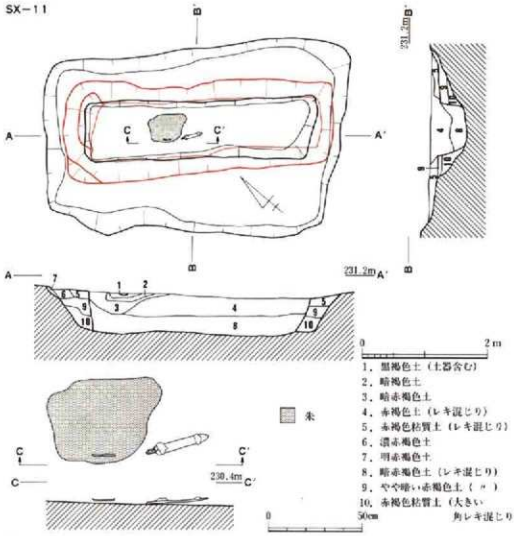




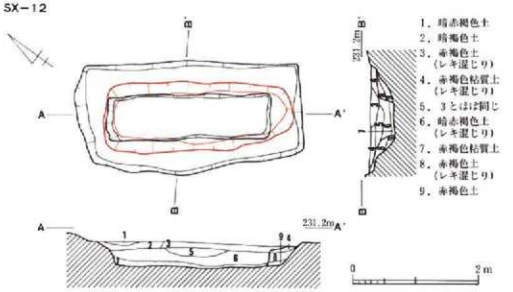
1．赤灰色土
2．暗褐色土（上器、炭含む）
3．暗赤褐色土
4．濃褐色土
5．黒褐色土
6．濃赤褐色土（中レキ混じり）
7．淡赤褐色土（中～大レキ混じり）
8．赤褐色土（大レキ混じり）
9．〃　（　〃　）
10．赤褐色砂質土
11．赤褐色土
12．中～大レキ
13．赤褐色土（中レキ混じり）
14．細～大レキ
15．赤褐色土（大レキ混じり）
16．明赤褐色粘質土
17．赤褐色土（中レキ混じり）
18．暗濃赤褐色砂質土（細～中レキ混じり）
19．赤褐色土（中レキ混じり）
20．暗赤褐色砂質土
21．暗濃赤褐色砂質土
22．赤褐色砂質土
23．赤褐色土

図版32 墳丘墓SX－11・12

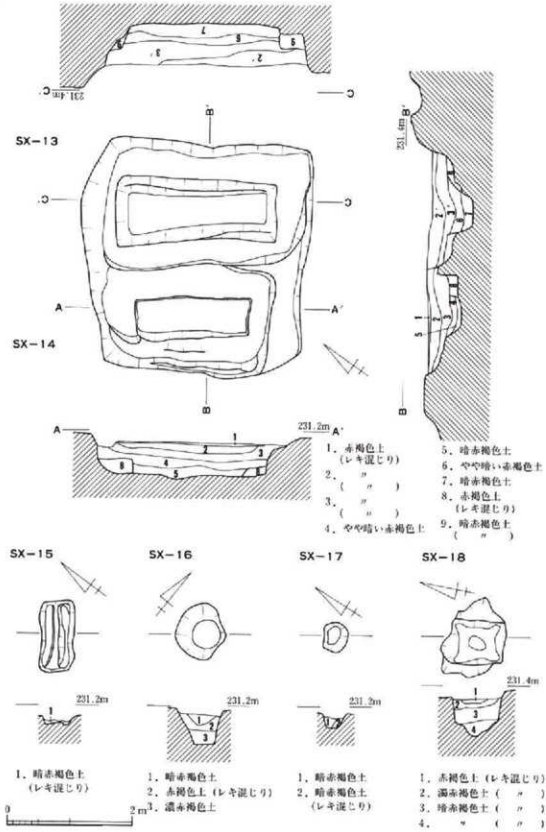
SX－11



SX－12

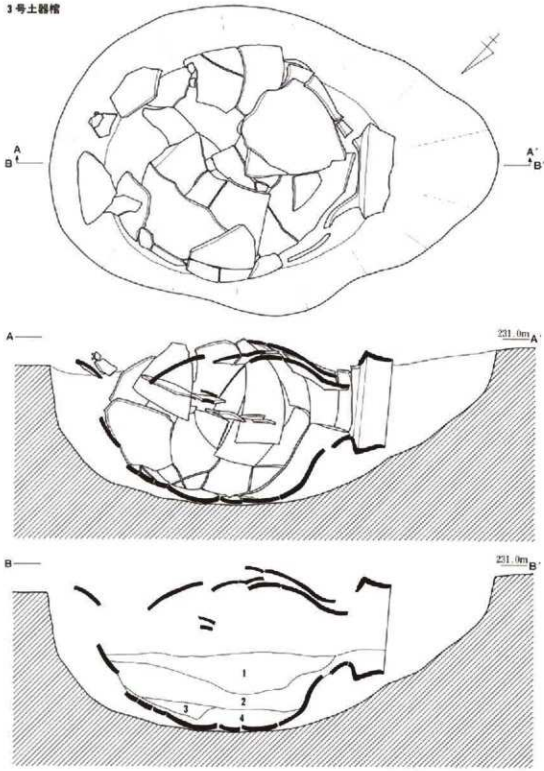


尾根部の遺構


SX−13
SX−14
231.4m
231.2m
1. 赤褐色土（レキ混じり）
2. 〃（〃）
3. 〃（〃）
4. やや暗い赤褐色土
5. 暗赤褐色土
6. やや暗い赤褐色土
7. 暗赤褐色土
8. 赤褐色土（レキ混じり）
9. 暗赤褐色土（〃）
SX−15
SX−16
SX−17
SX−18
231.2m
231.4m
1. 暗赤褐色土（レキ混じり）
1. 暗赤褐色土
2. 赤褐色土（レキ混じり）
3. 濃赤褐色土
1. 暗赤褐色土
2. 暗赤褐色土（レキ混じり）
1. 赤褐色土（レキ混じり）
2. 濃赤褐色土（〃）
3. 暗赤褐色土（〃）
4. 〃（〃）
0
2m

尾根部の遺構

図版34　墳丘墓3号土器棺

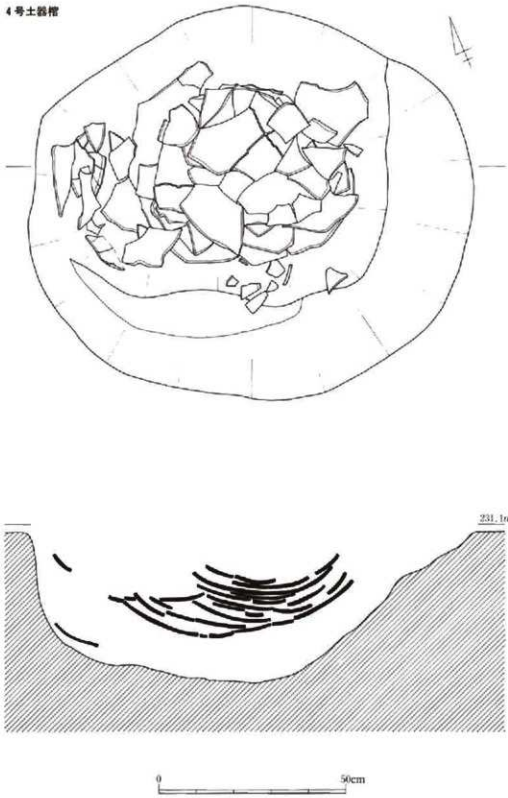


1．暗赤褐色土（レキ多く含む）
2．赤褐色土（レキ混じり）
3．黄赤褐色土（　〃　）
4．黄赤褐色粘質土

0　50cm

尾根部の遺構

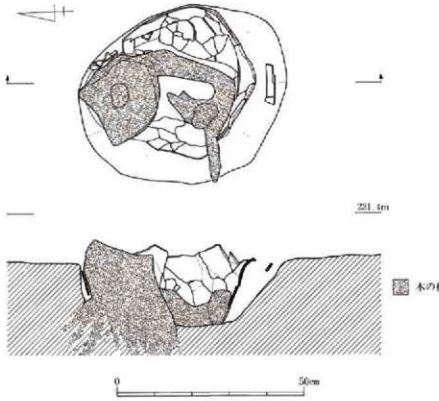
4号土器棺



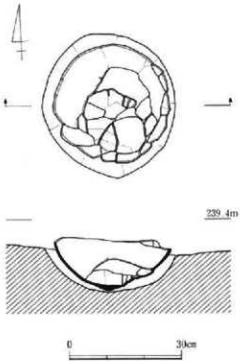
図版35　墳丘墓4号土器棺

図版36 墳丘墓2号土器棺、5・6号土器棺

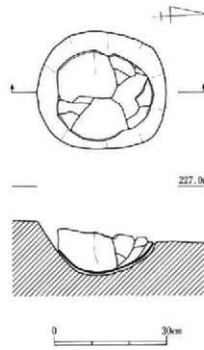
2号土器棺



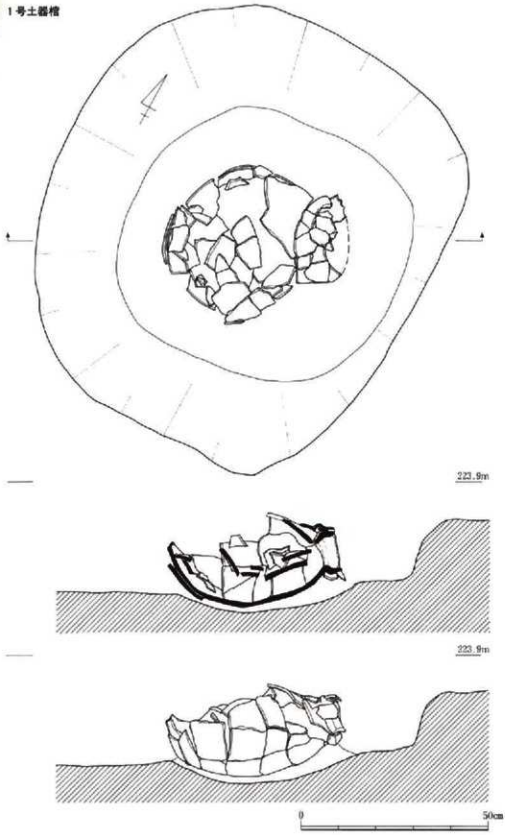
5号土器棺



6号土器棺



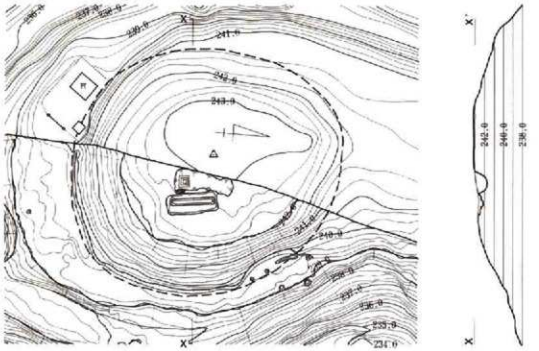
1号土器棺

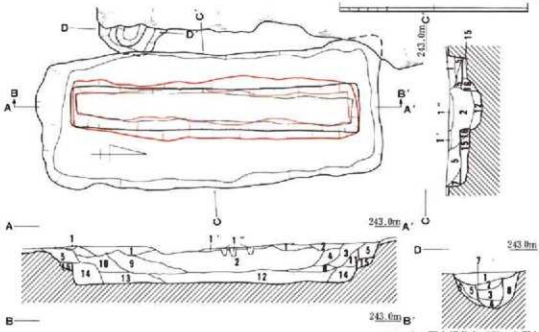


図版37 1号土器棺

尾根部の遺構

図版38　1号墳





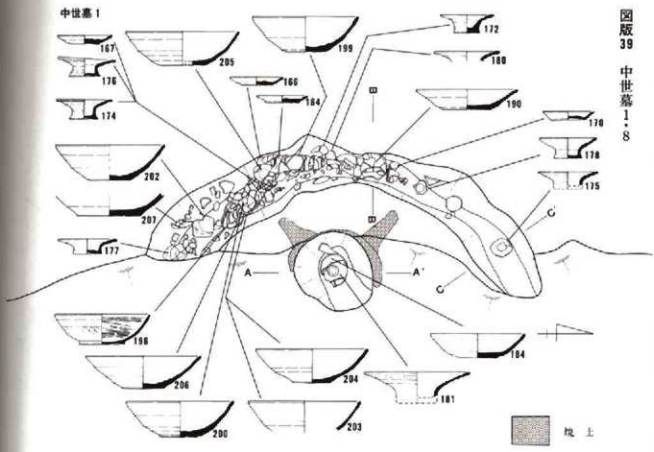
1．暗黄色撹乱土
2．汚れた淡赤色土
3．淡い黒色土
4．黒褐色土
5．淡赤色土
6．赤色土（地山）
7．淡赤色砂質土
8．にぶい赤褐色土
9．淡赤褐色土（レキ混じり）
10．淡赤色土（レキ混じり）
11．にぶい赤褐色土
12．暗赤褐色砂土
13．〃
14．〃
15．〃
16．赤褐色土（レキ混じり）

1．明赤褐色土（柵レキ混じり）
2．暗赤褐色土（柵レキ混じり）
3．暗赤褐色土
4．赤褐色土
5．明赤褐色土
6．〃
7．赤褐色土
8．明赤褐色土

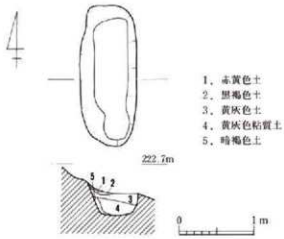
尾根部の遺構

図版39 中世墓1・8

中世墓1



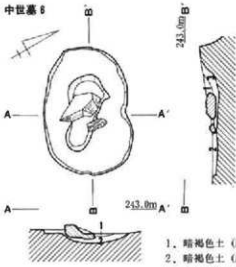
中世墓8



尾根部の遺構

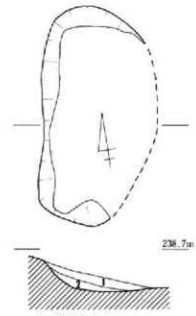
図版40 中世墓6・7・9・11・12

中世墓6



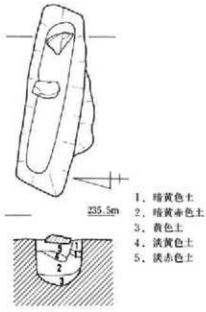
1. 暗褐色土（炭・焼土混じり）
2. 暗褐色土（炭混じり）
3. 淡黄赤色土（地山土？）

中世墓7



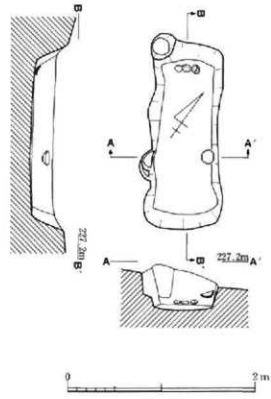
1. 暗褐色土
2. 黒褐色土

中世墓12

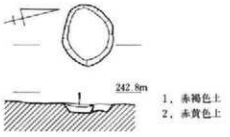


1. 暗黄色土
2. 暗黄赤色土
3. 黄色土
4. 淡黄色土
5. 淡赤色土

中世墓9



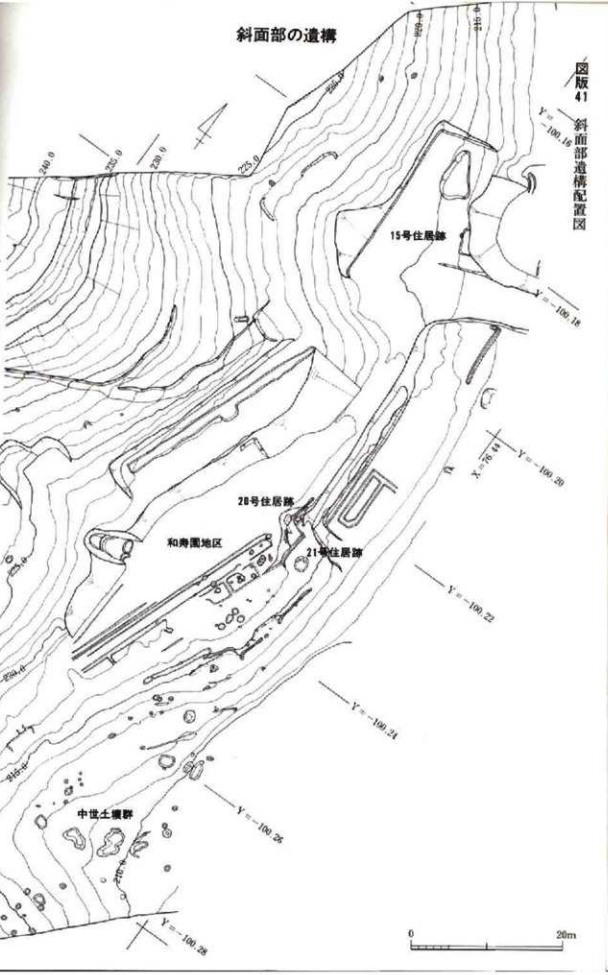
中世墓11



1. 赤褐色土
2. 赤黄色土

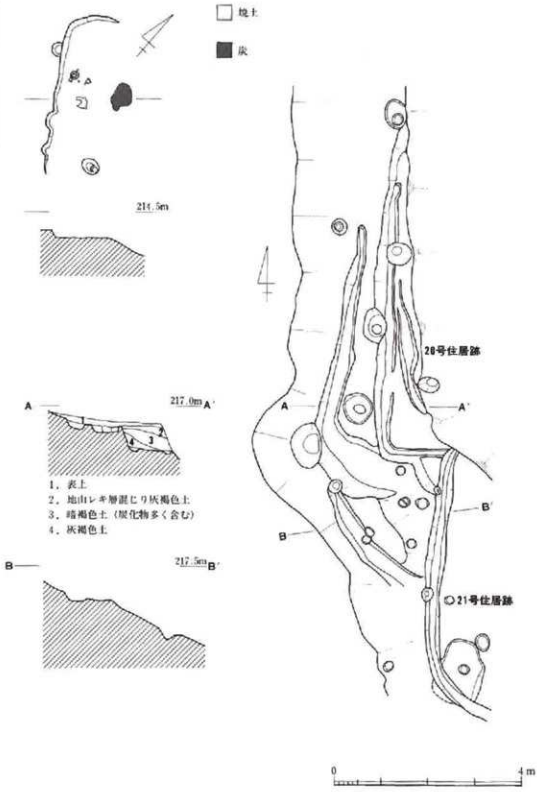
斜面部の遺構

図版41 斜面部遺構配置図

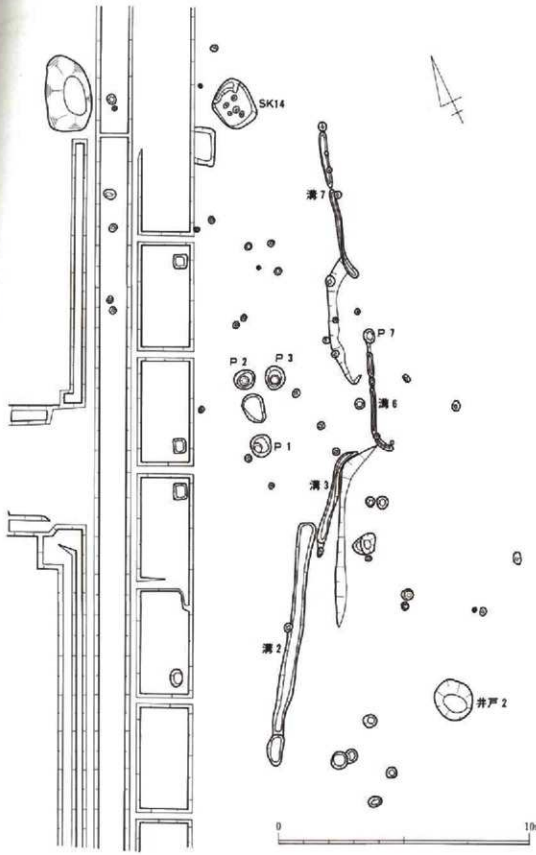


図版42 15・20・21号住居跡

15号住居跡



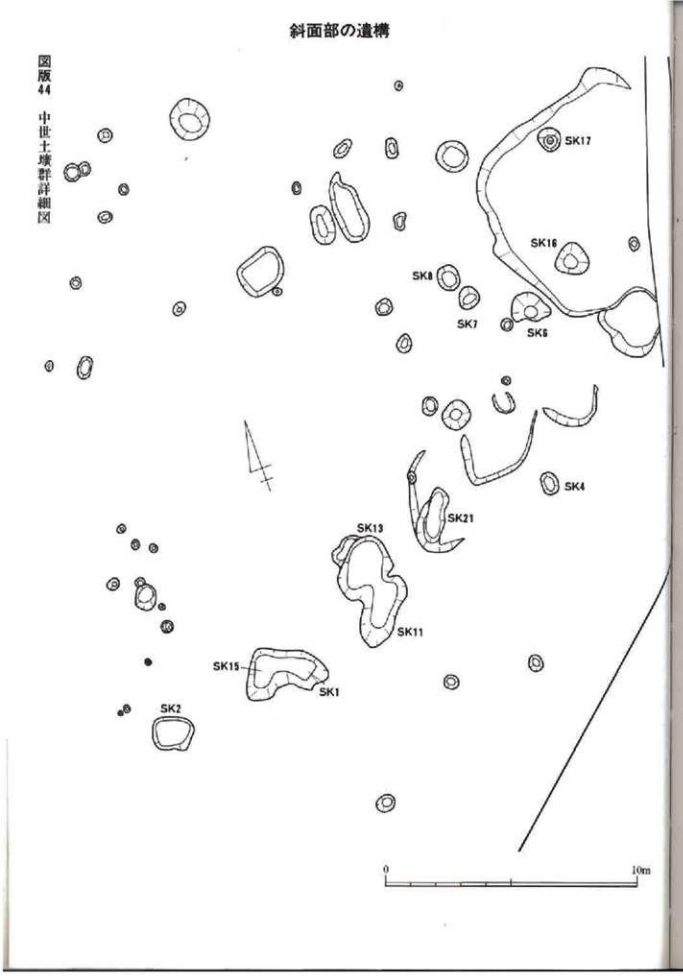
斜面部の遺構

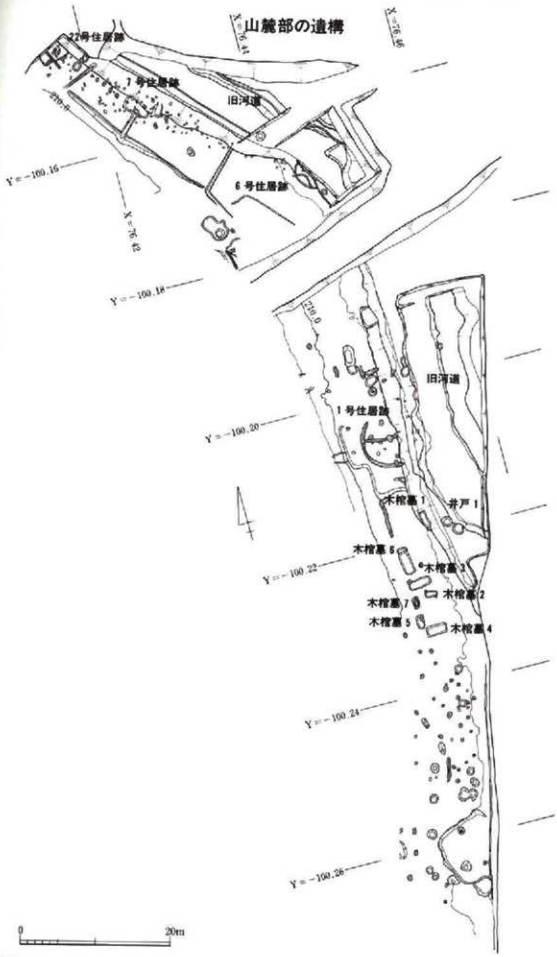


図版43 和寿園地区遺構詳細図

図版44 中世土壙群詳細図

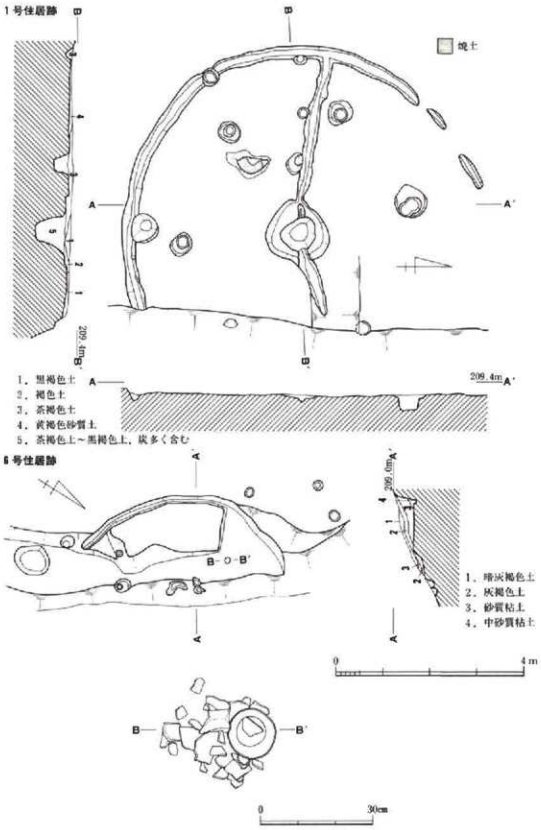
斜面部の遺構



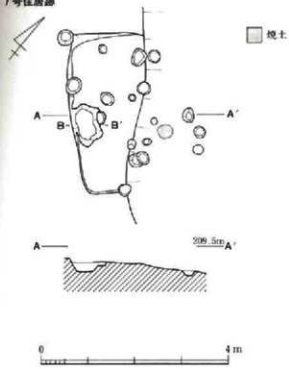


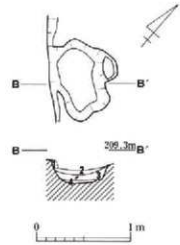
図版45 山麓部遺構配置図

図版46 1・6号住居跡


1号住居跡
焼土
1．黒褐色土
2．褐色土
3．茶褐色土
4．黄褐色砂質土
5．茶褐色土～黒褐色土，炭多く含む
209.4m
6号住居跡
B-○-B'
209.6m
1．暗灰褐色土
2．灰褐色土
3．砂質粘土
4．中砂質粘土
0
4m
30cm

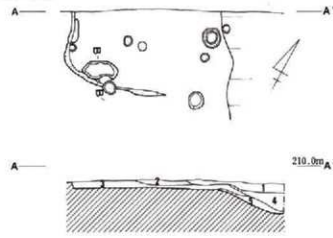
7号住居跡

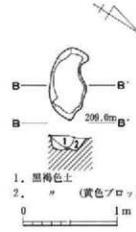




1．淡茶褐色土
2．黄茶褐色土（地山ブロック含む）
3．茶褐色土（土器・炭含む）
4．暗褐色土

22号住居跡





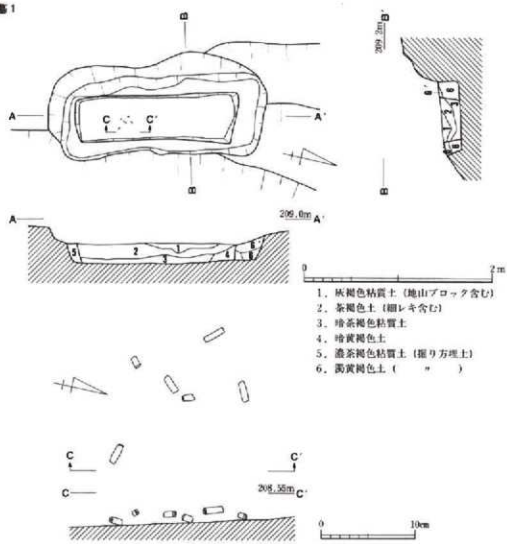
1．黒褐色土
2．〃　（黄色ブロック含む）

1．茶褐色土（鉄分やや含む）
2．淡黄色土（ブロック）
3．暗褐色土（やや粘質）
4．〃　（　〃　）
5．淡黄灰色土

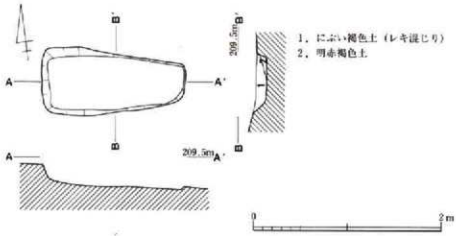
山麓部の遺構

図版48 木棺墓1・2

木棺墓1



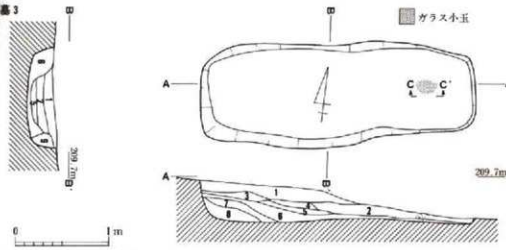
木棺墓2



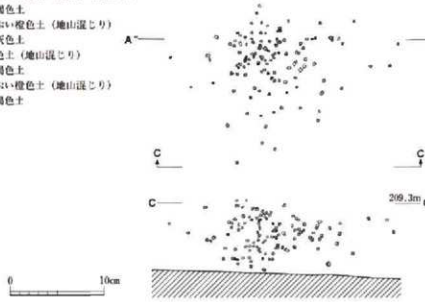
山麓部の遺構

図版49 木棺墓3・4

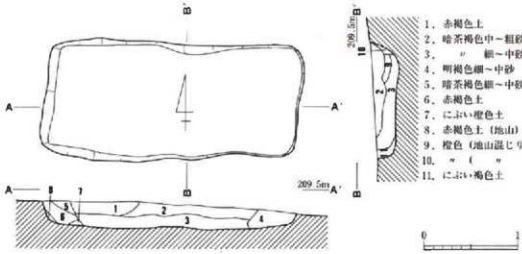
木棺墓3



1. にぶい褐色土（地山レキ混じり）
2. 灰褐色土
3. にぶい橙色土（地山混じり）
4. 褐灰色土
5. 橙色土（地山混じり）
6. 灰褐色土
7. にぶい橙色土（地山混じり）
8. 黒褐色土



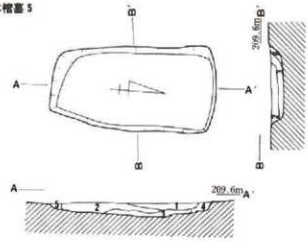
木棺墓4



1. 赤褐色土
2. 暗茶褐色中～粗砂
3. 〃　細～中砂
4. 明褐色細～中砂
5. 暗茶褐色細～中砂
6. 赤褐色土
7. にぶい橙色土
8. 赤褐色土（地山）
9. 橙色（地山混じり）
10. 〃（　〃　）
11. にぶい褐色土

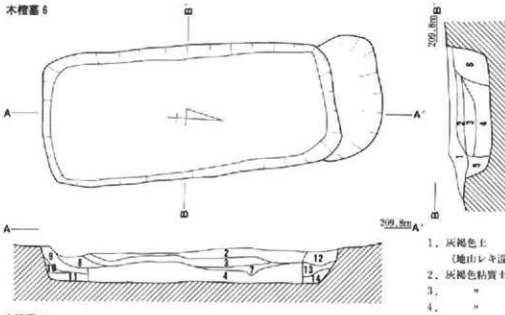
図版50 木棺墓5～7

木棺墓5



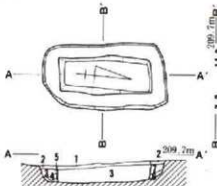
1. 灰褐色土
2. にぶい赤褐色（地山レキ混じり）
3. 〃 （ 〃 ）
4. 灰褐色土
5. 〃
6. 明赤褐色土

木棺墓6



1. 灰褐色土（地山レキ混じり）
2. 灰褐色粘質土
3. 〃
4. 〃
5. 〃
6. にぶい褐色土（レキ混じり）
7. 灰褐色粘質土
8. 〃
9. にぶい黄褐色土
10. 褐灰色土
11. にぶい黄褐色土
12. 浅黄～黒褐色土
13. 灰褐色粘質土
14. 灰褐色粘質土（地山混じり）

木棺墓7

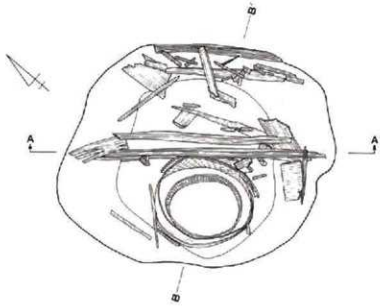


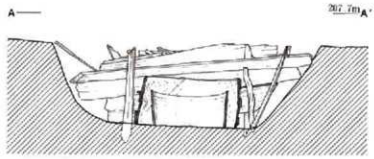
1. 暗褐色土（細レキ混じり）
2. 暗灰褐色土
3. 暗茶褐色土（細レキ混じり）
4. 暗灰褐色土
5. 暗黄褐色土（ブロック含む）
6. 茶褐色土
7. 茶褐色砂混じり土
8. 黄色粘質土
9. 黄茶褐色粘質土
10. 黄茶褐色砂混じり土
11. 黄色粘質土

0 2m

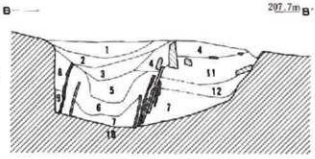
山麓部の遺構

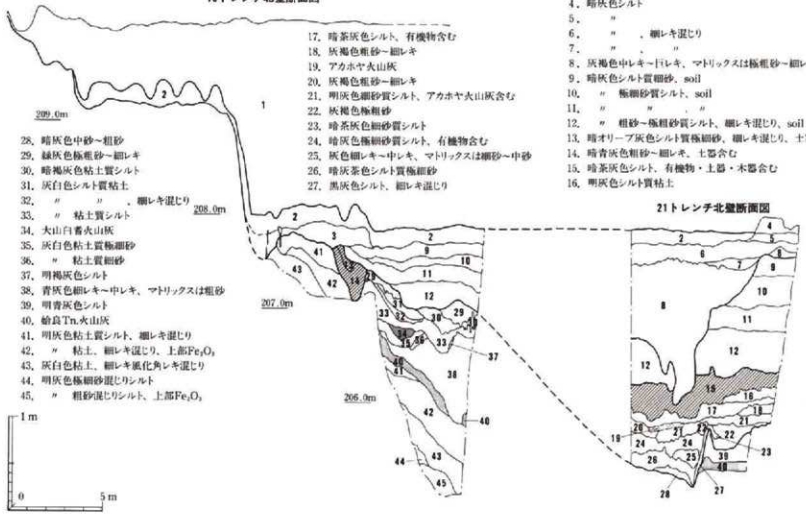
図版51 井戸1





1．暗灰色細礫混じり極細砂シルト
2．黒灰色極細砂シルト
3．黒灰色極粗砂混じりシルト
4．暗灰色細礫混じり極細砂シルト
5．　〃
6．黒灰色シルト（極粗砂少量と底に有機物堆積）
7．暗灰色シルト
8．暗灰色極細砂混じりシルト
9．暗青灰色シルト混じり中砂～極細砂
10．青灰色粗砂シルト（地山）
11．黒灰色粗砂シルト
12．暗灰色細砂混じり極細砂シルト

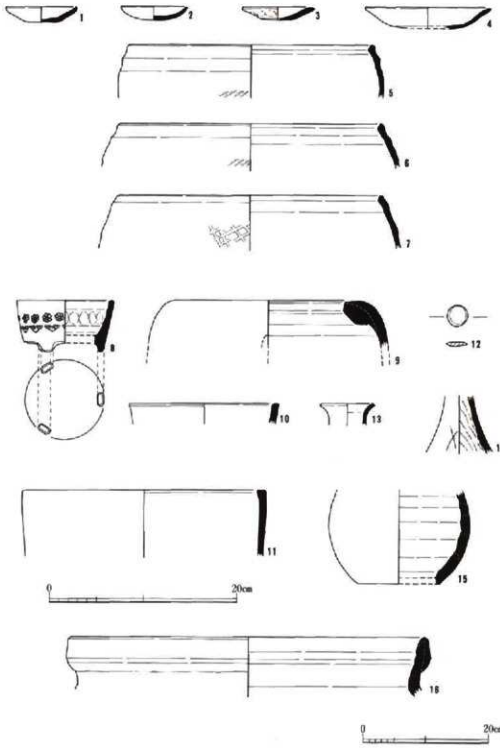



18トレンチ北壁断面図
21トレンチ北壁断面図
209.0m
208.0m
207.0m
206.0m
1 m
0
5 m
1．盛土
2．現耕土
3．青灰色粘質土（旧耕土）、杭
4．暗灰色シルト
5．〃
6．〃 ，礫レキ混じり
7．〃 ，〃
8．灰褐色中レキ～巨レキ、マトリックスは極粗砂～細レキ
9．暗灰色シルト質細砂，soil
10．〃 極細砂質シルト，soil
11．〃 〃 ，〃
12．〃 粗砂～極粗砂質シルト，礫レキ混じり，soil
13．暗オリーブ灰色シルト質極細砂，礫レキ混じり，土器含む
14．暗青灰色粗砂～細レキ，土器含む
15．暗茶灰色シルト，有機物・土器・木器含む
16．明灰色シルト質粘土
17．暗茶灰色シルト，有機物含む
18．灰褐色粗砂～細レキ
19．アカホヤ火山灰
20．灰褐色粗砂～細レキ
21．明灰色細砂質シルト，アカホヤ火山灰含む
22．灰褐色極粗砂
23．暗茶灰色細砂質シルト
24．暗灰色極細砂質シルト，有機物含む
25．灰色細レキ～中レキ，マトリックスは細砂～中砂
26．暗灰茶色シルト質極細砂
27．黒灰色シルト，細レキ混じり
28．暗灰色中砂～粗砂
29．緑灰色極粗砂～細レキ
30．暗褐灰色粘土質シルト
31．灰白色シルト質粘土
32．〃 〃 ，礫レキ混じり
33．〃 粘土質シルト
34．大山白香火山灰
35．灰白色粘土質極細砂
36．〃 粘土質細砂
37．明褐灰色シルト
38．青灰色細レキ～中レキ，マトリックスは粗砂
39．明青灰色シルト
40．鹿ノ島Tn火山灰
41．明灰色粘土質シルト，礫レキ混じり
42．〃 粘土，細レキ混じり，上部Fe_2O_3
43．灰白色粘土，細レキ風化角レキ混じり
44．明灰色極細砂混じりシルト
45．〃 粗砂混じりシルト，上部Fe_2O_3

山城跡の遺物

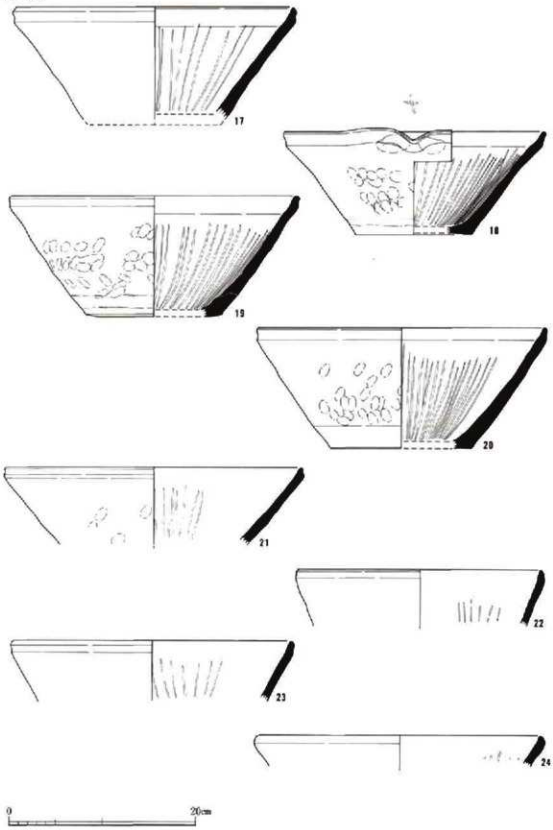
1～16

図版53　土師器・備前焼・碁石



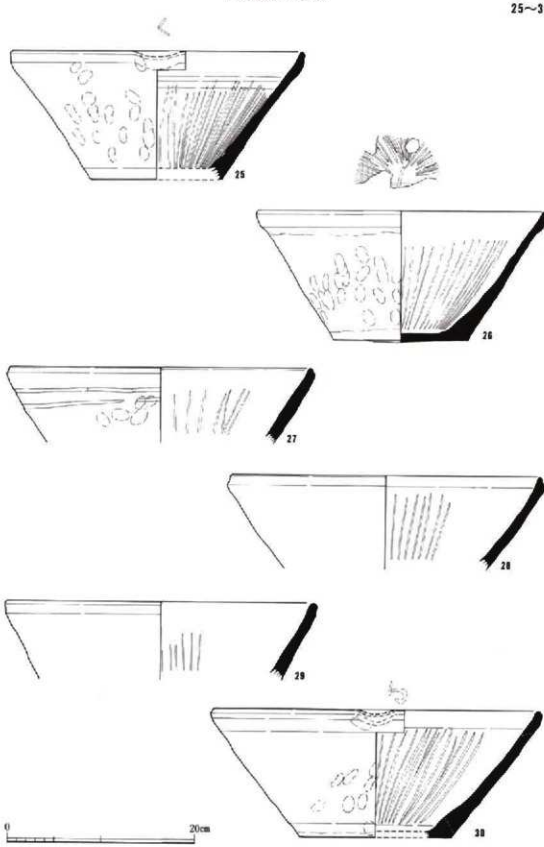
図版54　丹波焼(1)

17～24



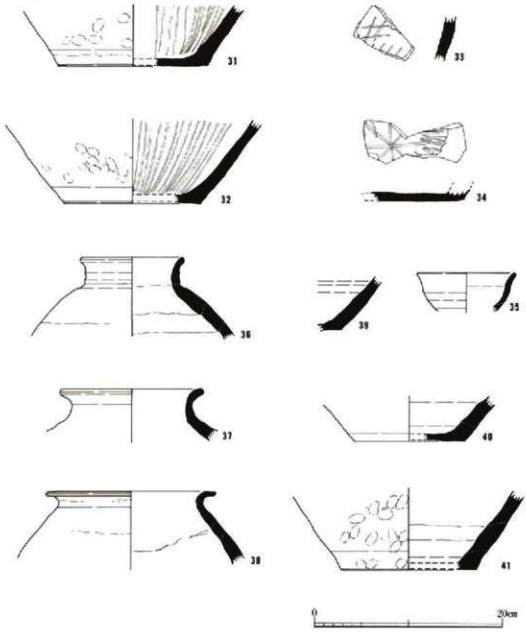
25～30

図版55 丹波焼(2)

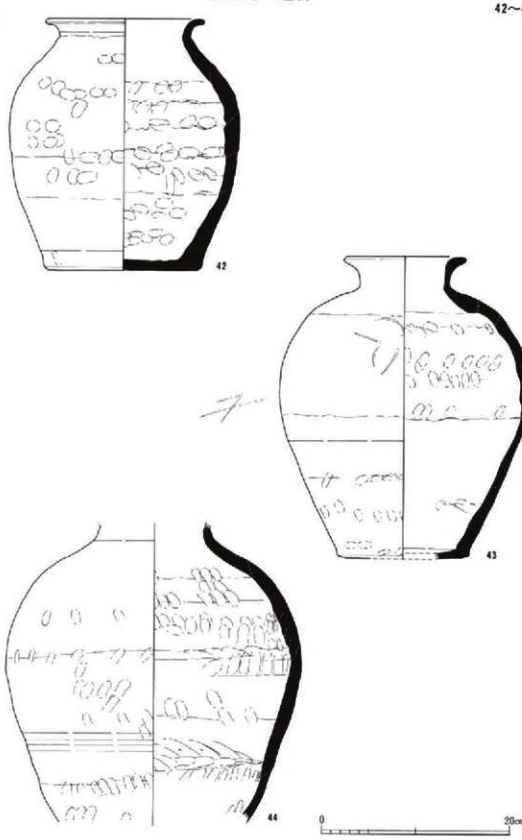


図版56 丹波焼(3)

31～41

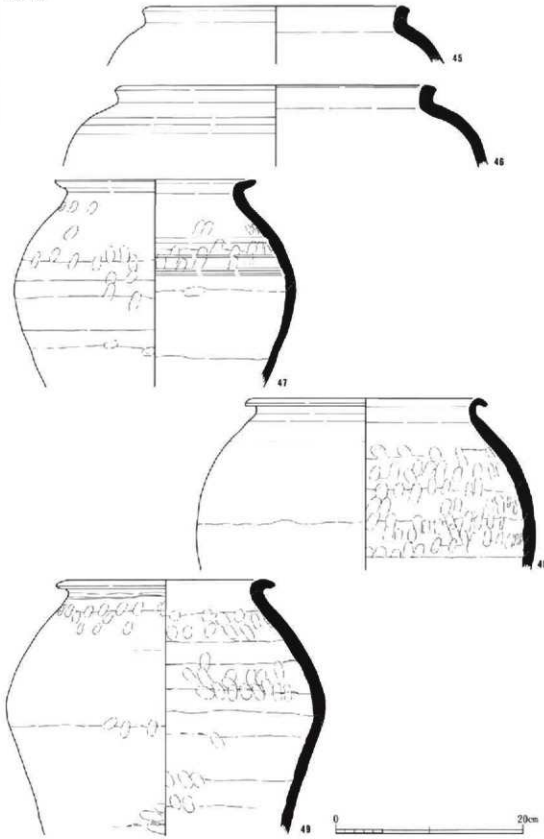


42～44

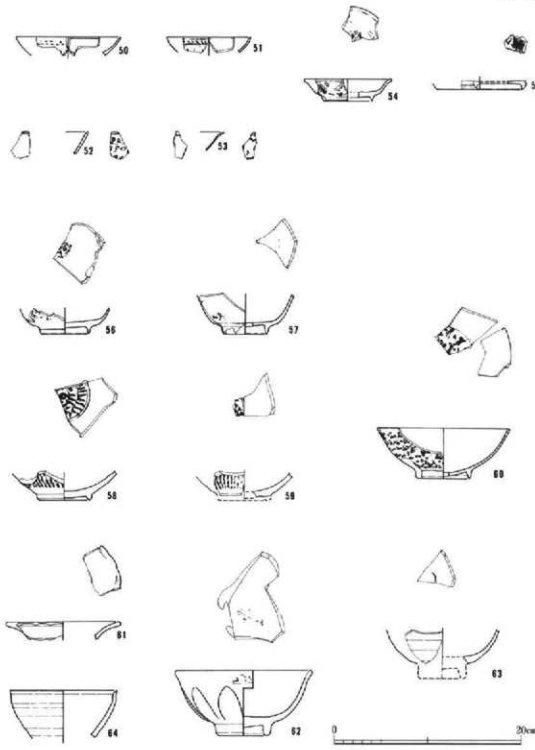


45～49

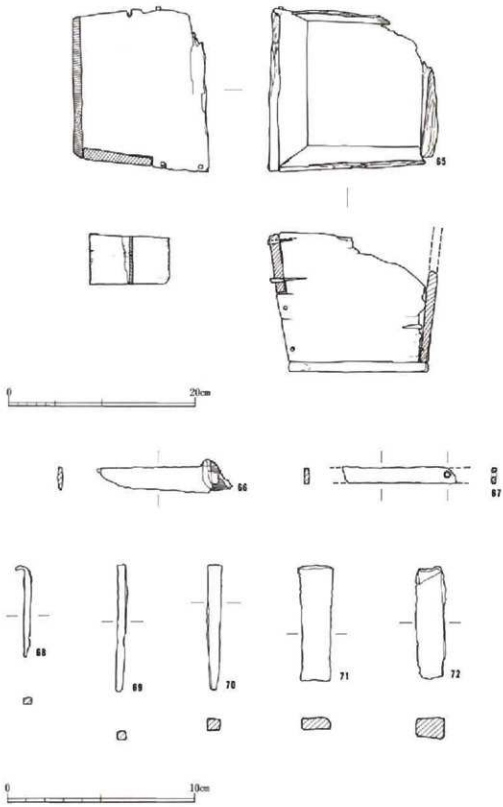
図版58 丹波焼(5)



図版59 中国産磁器・瀬戸美濃産陶器



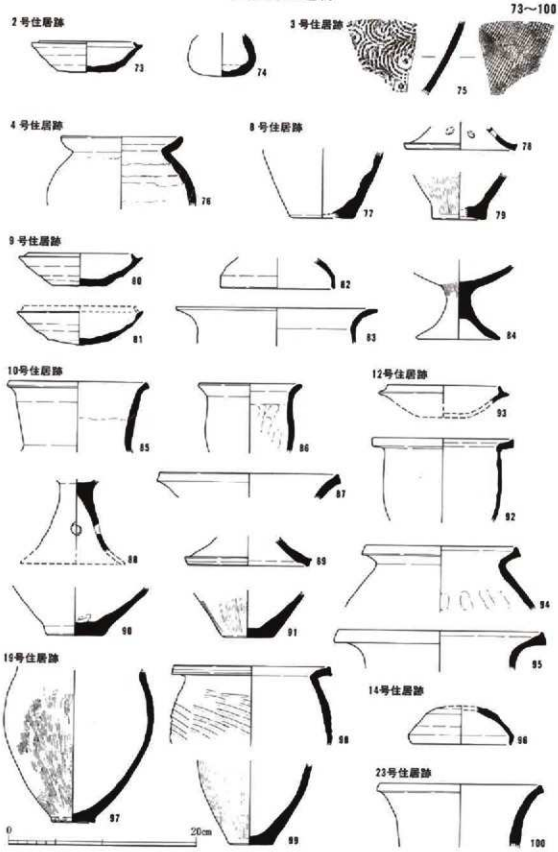
図版60 木器・鉄器



尾根部の遺物

73～100

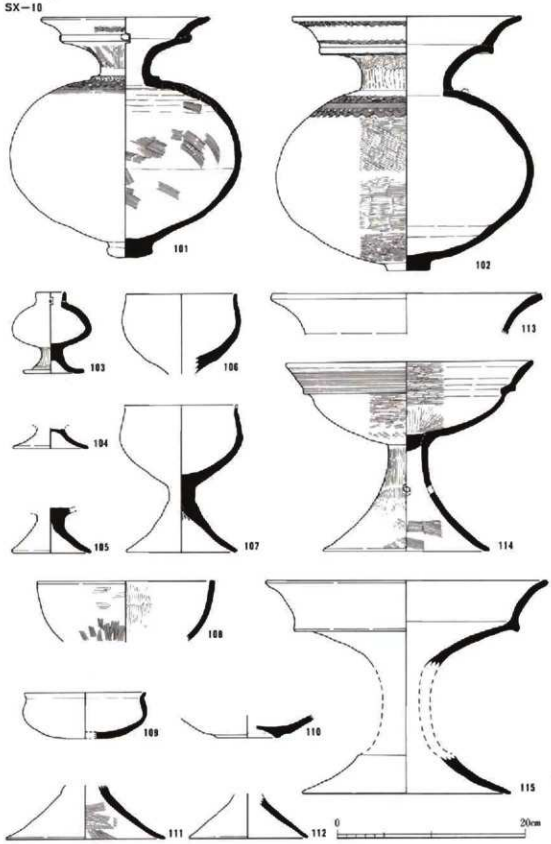
図版61　竪穴住居跡出土遺物(1)



尾根部の遺物

101～115
SX－10

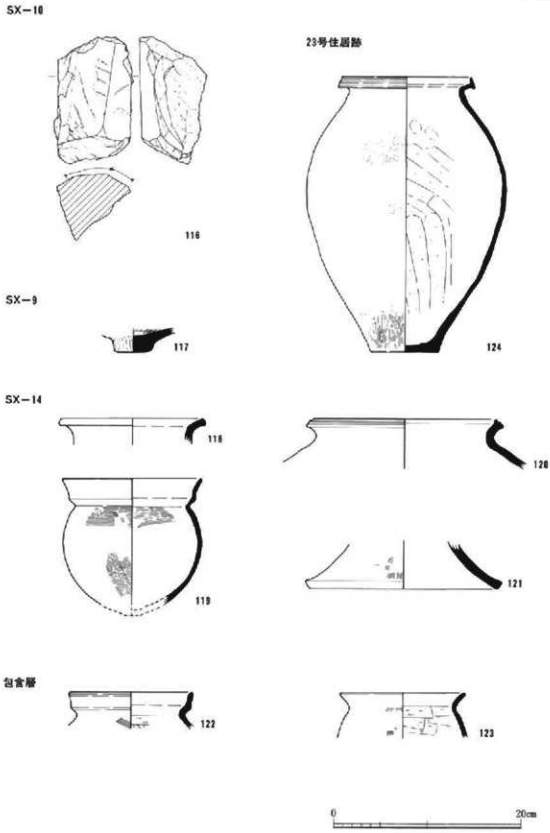
図版62　墳丘墓出土遺物(1)



尾根部の遺物

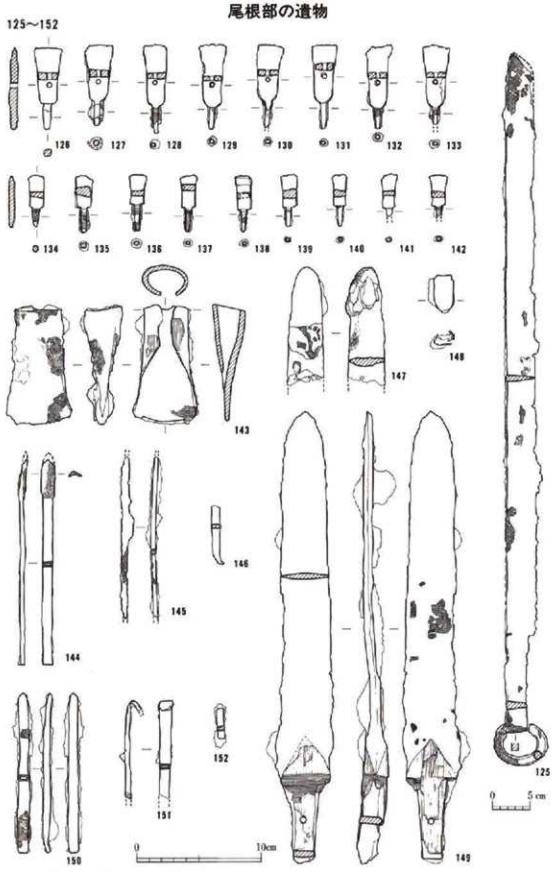
116～124

図版63　墳丘墓出土遺物(2)、竪穴住居跡出土遺物(2)



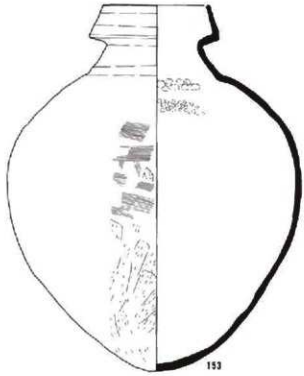
図版64 墳丘墓出土遺物(3)

尾根部の遺物

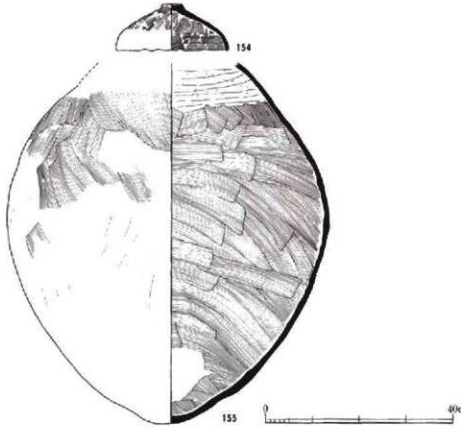


SX－10 125～146、 SX－9 147～148、 SX－11 149～150、SX－14 151、2号土器棺 152

3号土器棺



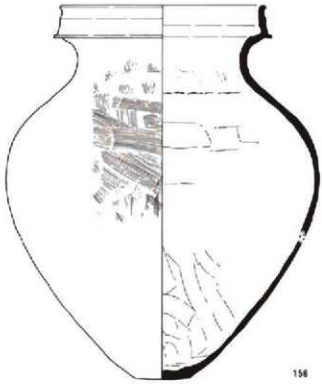
4号土器棺

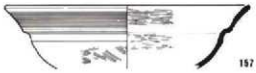


図版66 土器棺(2)

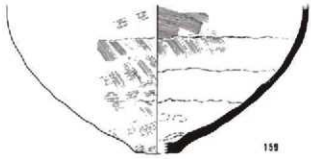
156～160

2号土器棺





5号土器棺

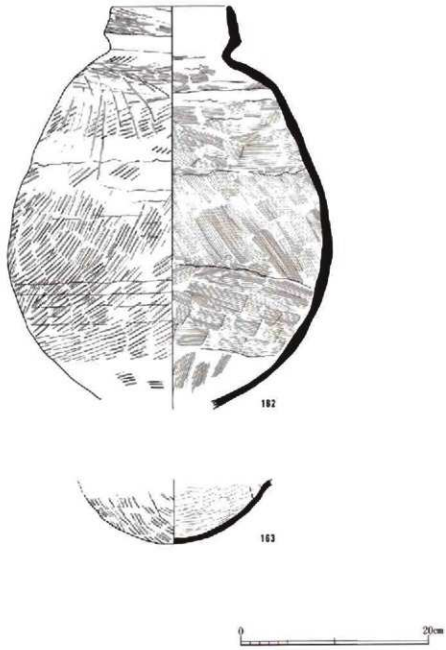


包含層

1号土器棺

161～163

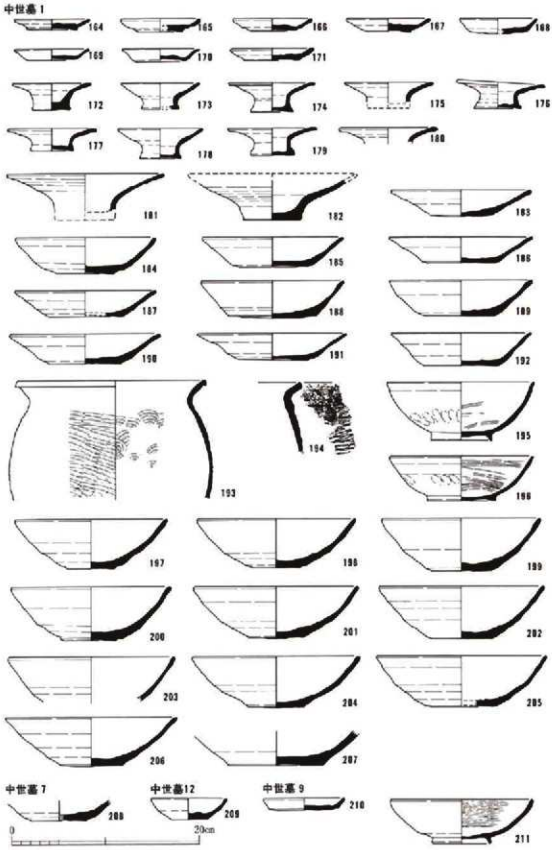
図版67 上器棺(3)



尾根部の遺物

184～211

図版68　中世墓出土遺物



斜面部の遺物

212～247

15号住居跡

212 213 214 215 216 217

和寿園地区

218 219 220 221 222 223 224 225 226 227 228 229 230 231 232 233 234 235 236 237 238 239 240 241 242 243 244 245 246 247

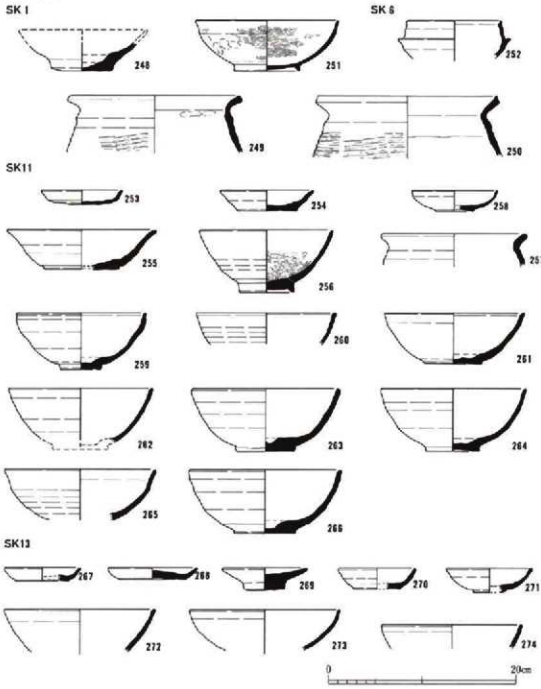
0 20cm

図版69 竪穴住居跡・和寿園地区出土遺物

図版70　中世土壙群出土遺物

斜面部の遺物

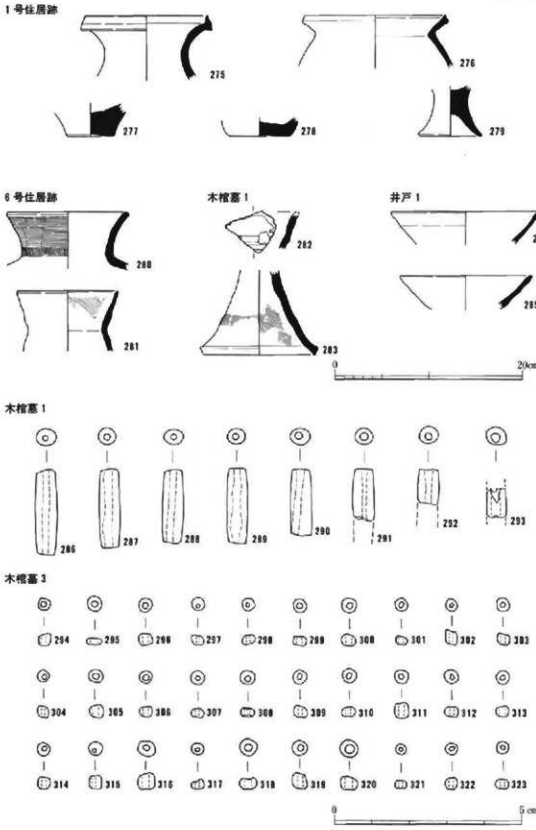
248～274



山麓部の遺物

275～323

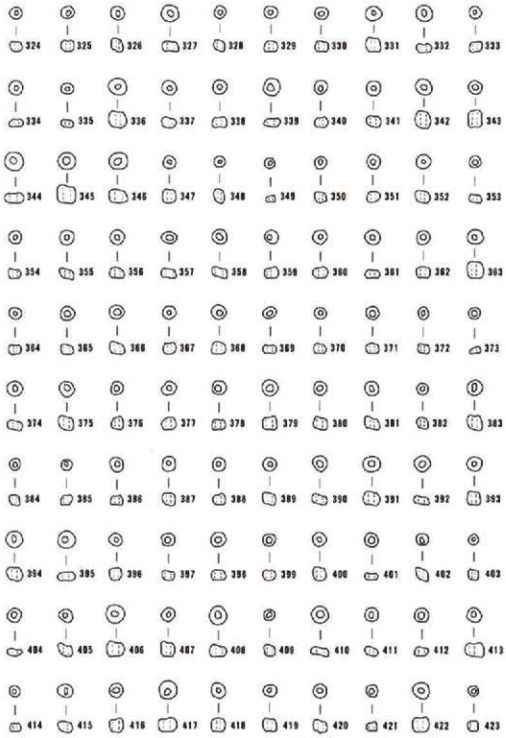
図版71　竪穴住居跡・木棺墓・井戸出土遺物



山麓部の遺物

324～426

木棺墓 3

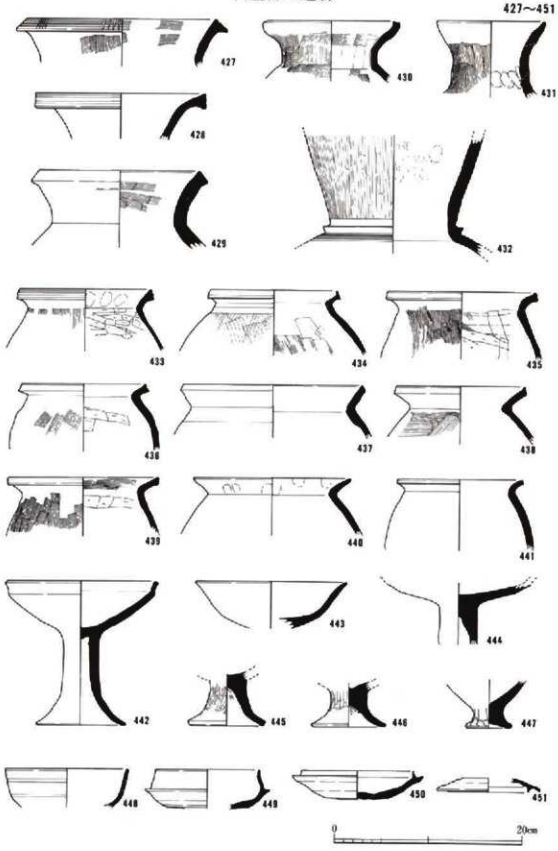


木棺墓 2

井戸 1

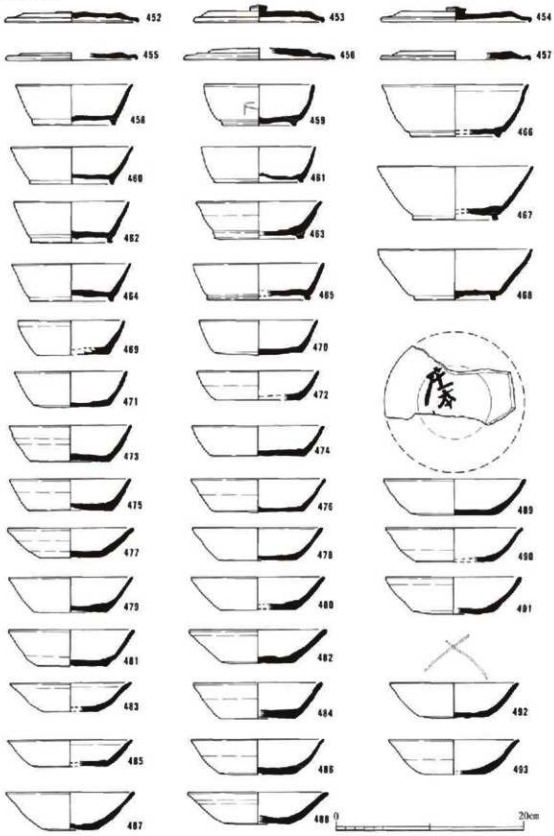
427～451

図版73 旧河道出土遺物 土器(1)



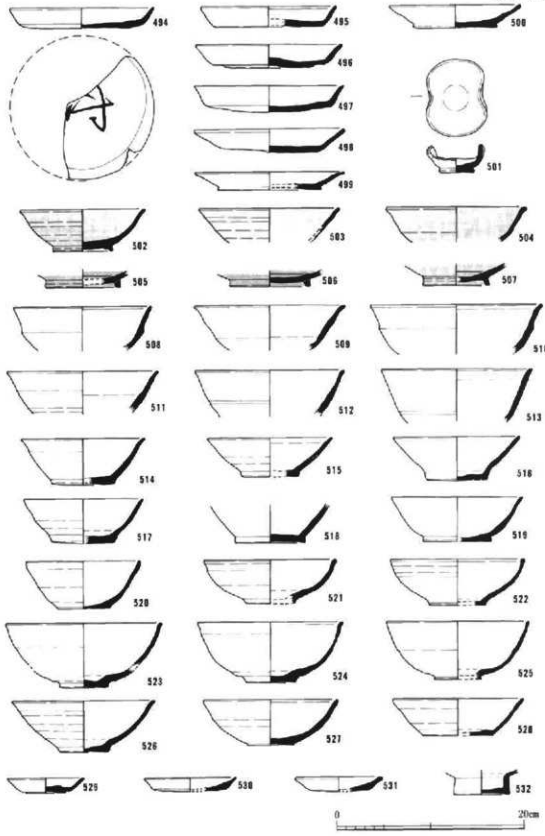
山麓部の遺物

452～493



山麓部の遺物

494~532

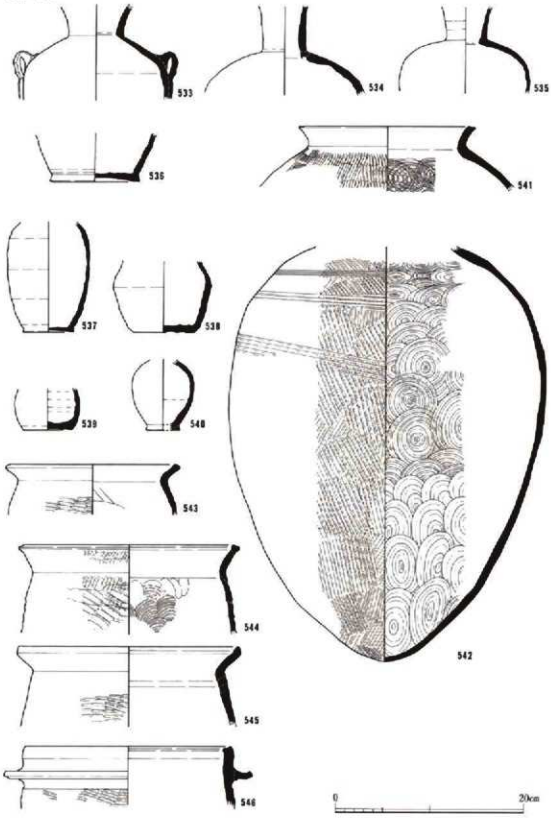


図版75 旧河道出土遺物 土器(3)

図版76　旧河道出土遺物　土器(4)

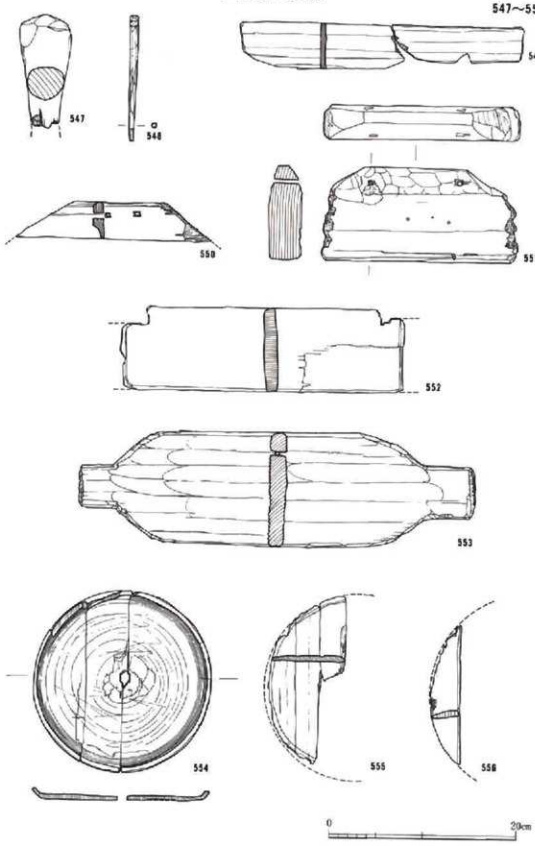
山麓部の遺物

533～546



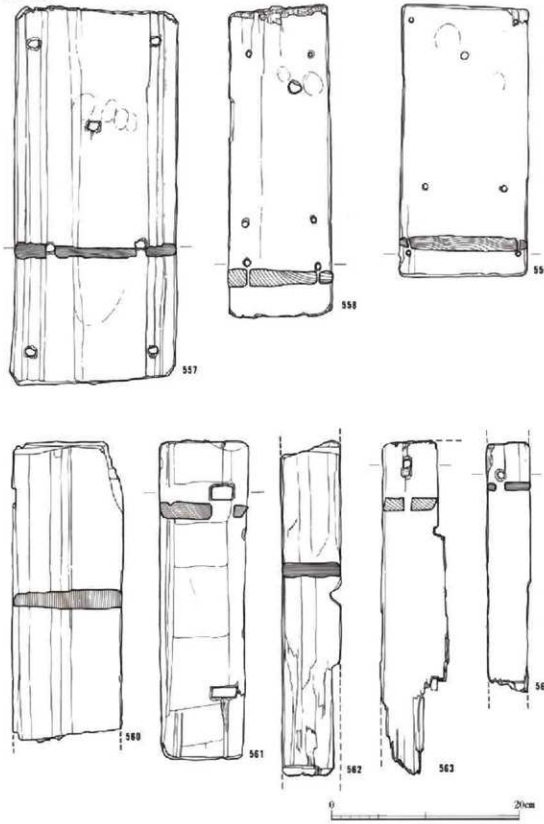
547～556

図版77 旧河道出土遺物 木器(1)



山麓部の遺物

557～564

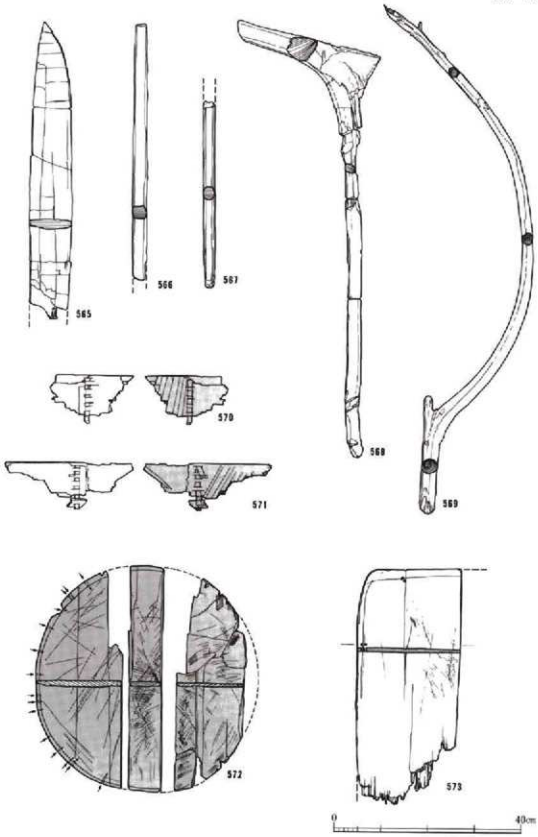


図版78　田河道出土遺物　木器(2)

山麓部の遺物

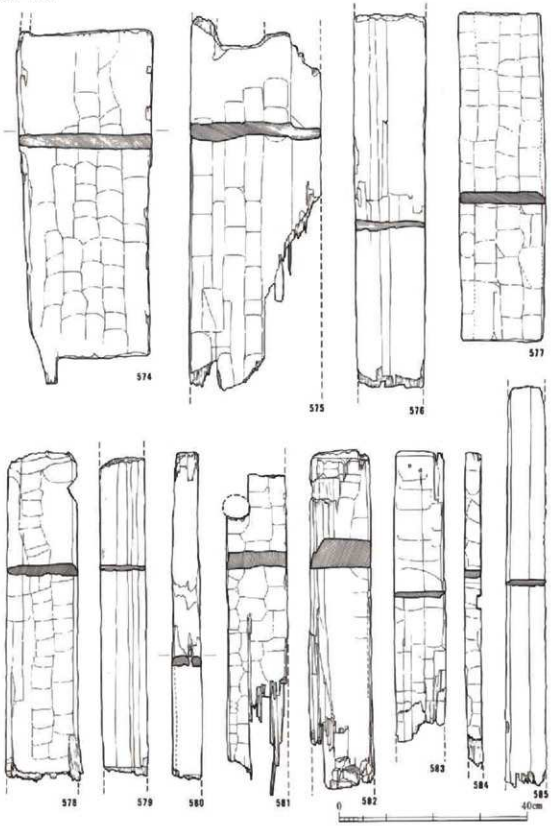
565～573

図版79　田河道出土遺物　木器(3)



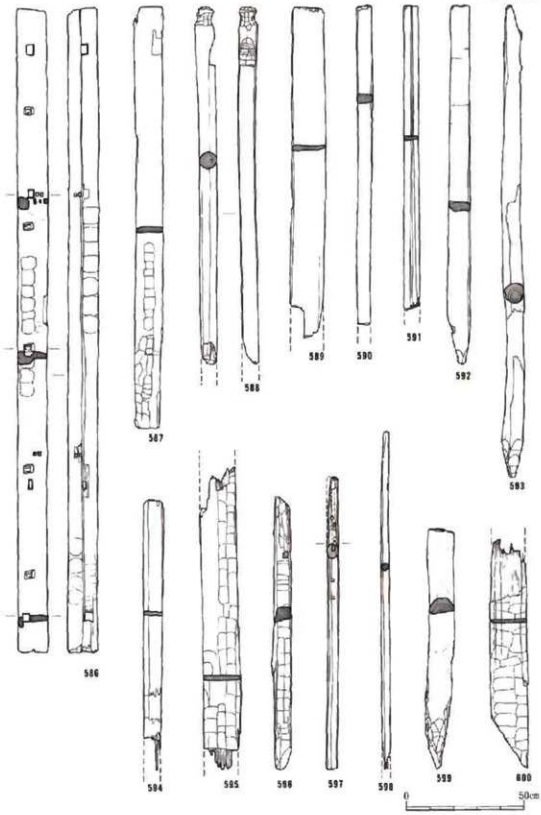
574〜585

図版80　旧河道出土遺物　木器(4)



山麓部の遺物

586～600

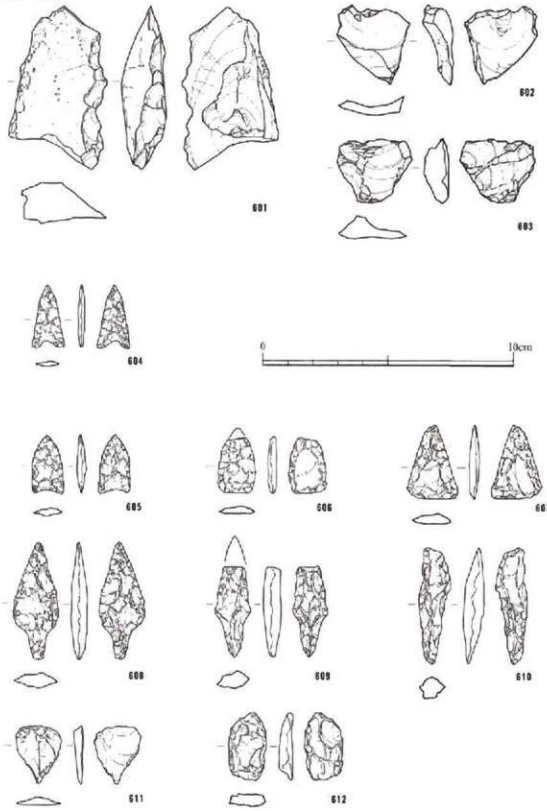


図版81　旧河道出土遺物　木器(5)

石器

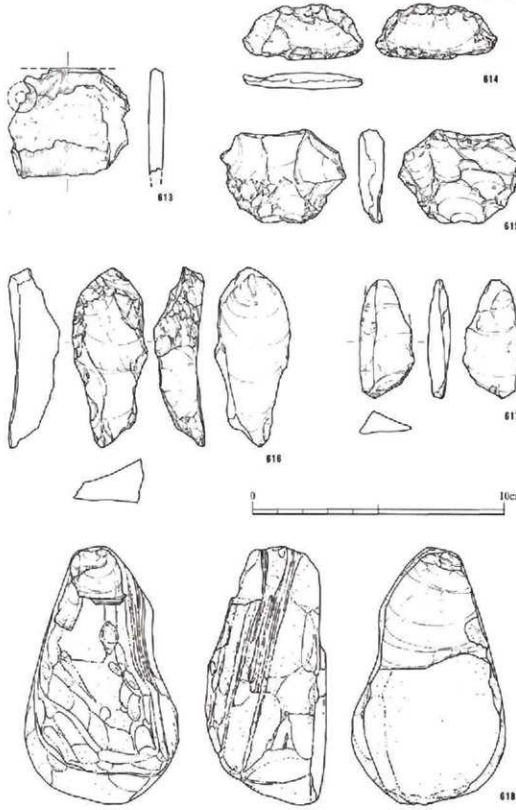
601～612

図版82 石器(1)



石 器

613～618



写真図版

写真図版1　内場山城跡周辺空中写真

1．東から

2．南東から

3．北東から

1．南からの空中写真

2．東から

1．5トレンチ　北西から

2．2トレンチ　南西から

1．斜面部掘削状況　北から

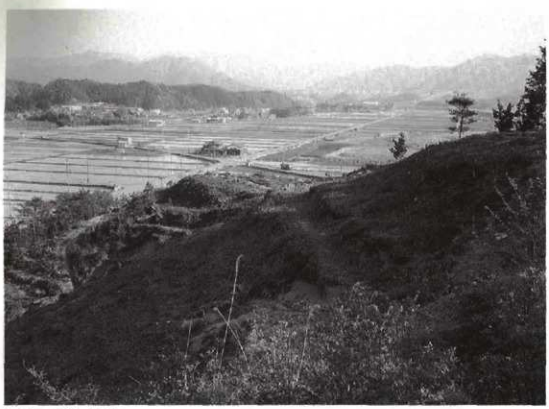
2．1号住居跡掘削状況　北西から

1．第10郭（墳丘墓）掘削状況　北西から

2．第6郭（2号住居跡）掘削状況　北から

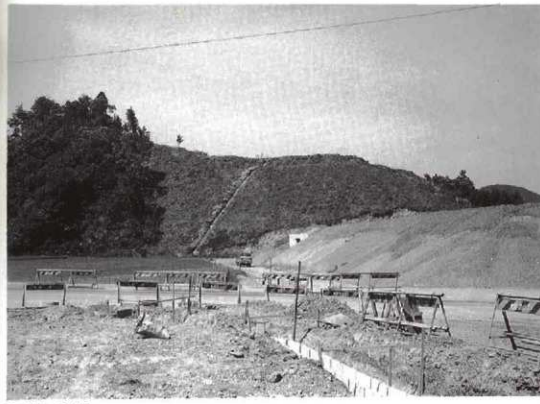
1．曲輪と見学者

2．説明風景



1．第3～10郭　北から

2．第5～10郭　北西から



1．遠景　南から

2．第5～10郭南側の帯曲輪　北西から

山城跡の遺構

1．八上城遠景

2．宝篋印塔（伝城主一族の墓）

1．東からの空中写真

2．北からの空中写真

山城跡の遺構

1．南東からの空中写真

2．南東からの空中写真

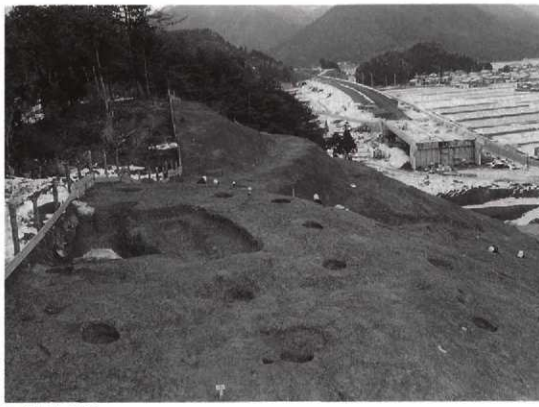
1．南からの空中写真

2．第10郭　南からの空中写真

1．北東からの空中写真

2．第3～10郭　北から

1．第3～8郭　南東から

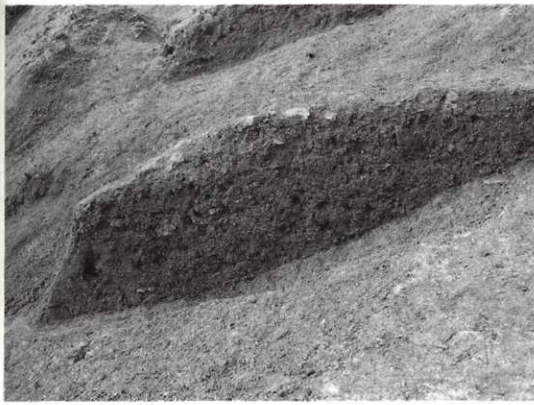


2．第3郭　南から

山城跡の遺構

1．帯曲輪東面の状況　南東から

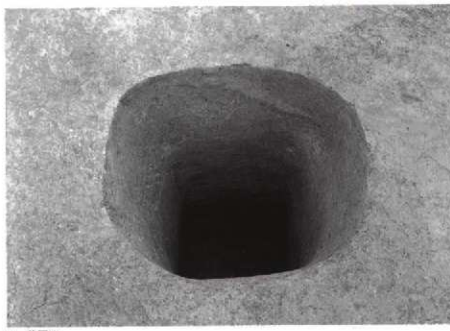
2．帯曲輪近景　南から



1．帯曲輪1断面（第10郭南側）

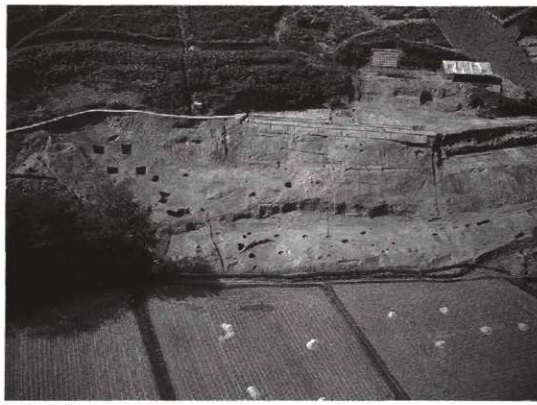
2．帯曲輪1断面（第10郭北側）

山城跡の遺構

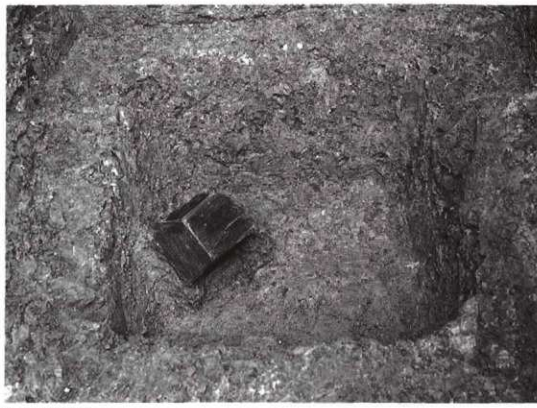


1．井戸2

2．井戸2断ち割り状況

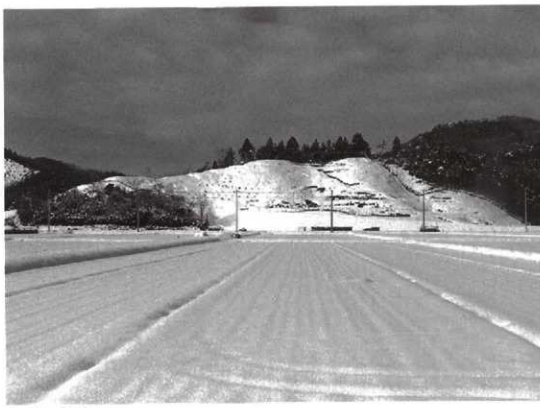


1．水の手周辺　東からの空中写真

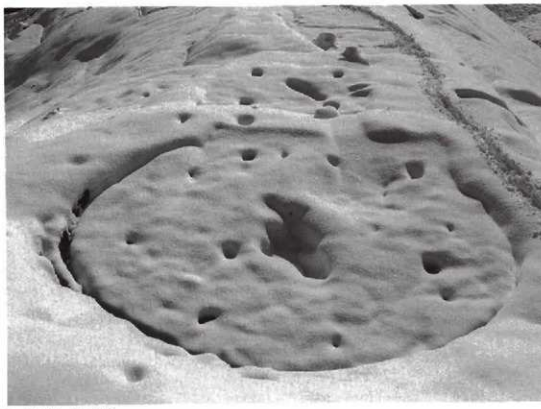


2．釣瓶出土状況

写真図版20　積雪状況



1．遠景　東から



2．第5郭　北西から

1．第1～3郭付近　南から

2．第4～10郭付近　北西から

尾根部の遺構

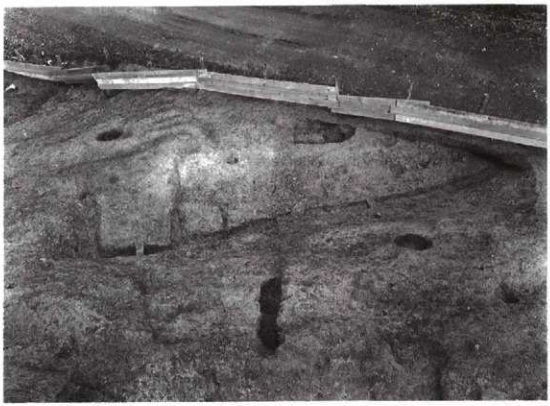
1．南西からの空中写真

2．北西から

1．5号住居跡　北西から

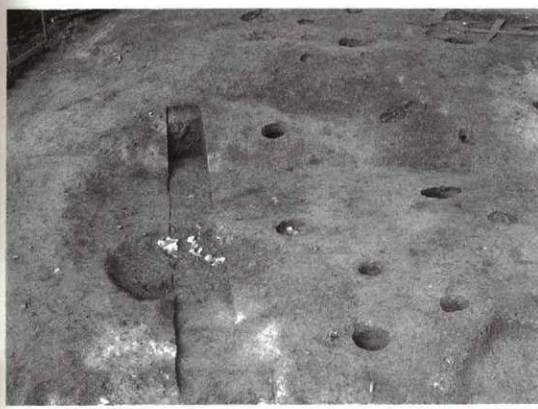
2．23号住居跡　北から

尾根部の遺構

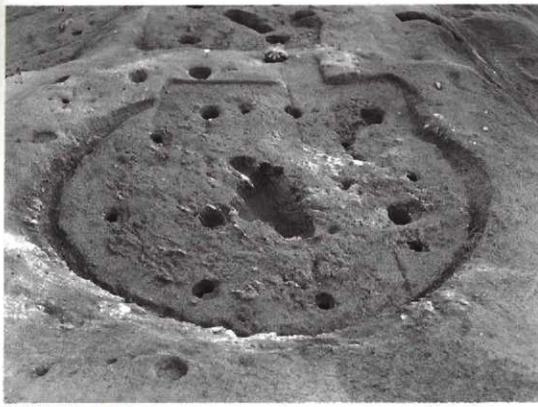


1．8号住居跡　南西から

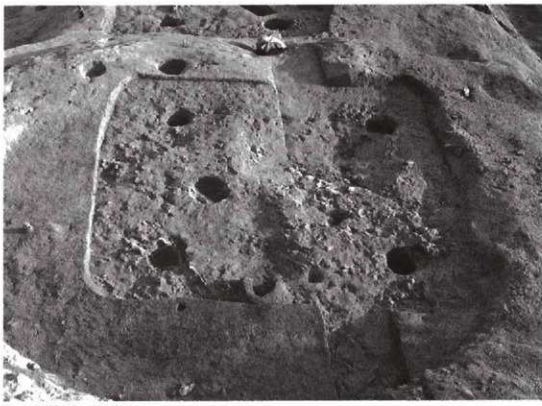
2．12号住居跡　北東から



1．10・14号住居跡検出状況　南東から

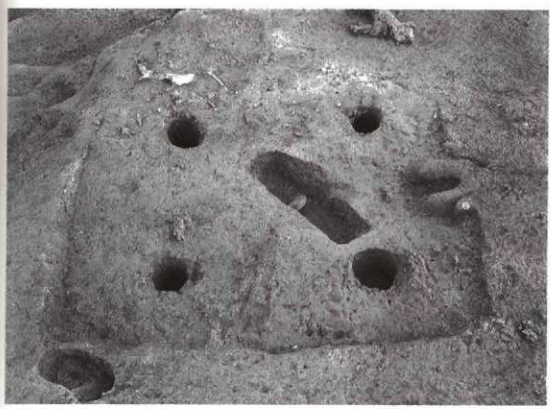


2．18号住居跡　北西から



1．14号住居跡　北西から

2．14号住居跡カマド　南東から

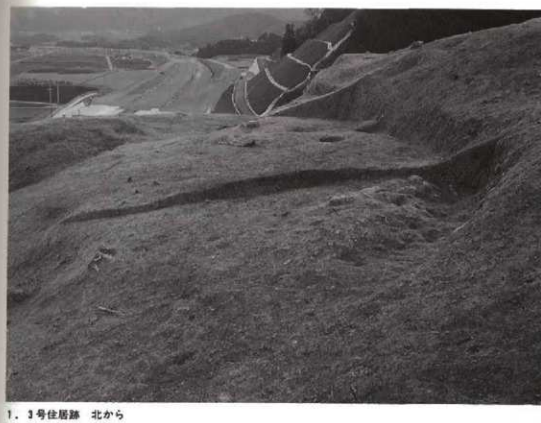


1．2号住居跡　北西から

2．2号住居跡カマド　北東から

1．9号住居跡　南西から

2．9号住居跡カマド　北東から



1．3号住居跡　北から

2．3・4・18・19号住居跡　南から

尾根部の遺構

1．25号住居跡　北西から

2．28号住居跡　北から

1．29号住居跡　北西から

2．30号住居跡　北西から

尾根部の遺構

1．全景　北西から

2．SX－9　北西から

3．SX－10　北西から

尾根部の遺構

1．SX－11　北西から

2．SX－12　北西から

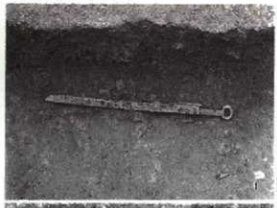
3．SX－13・14　北西から

尾根部の遺構

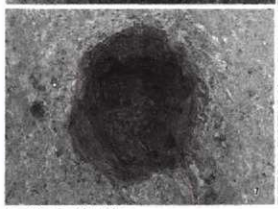
1．SX－10　供献土器出土状況　北東から

2．SX－10　供献土器出土状況　北東から

尾根部の遺構



1．SX－10　素環頭大刀出土状況　北東から
2．SX－10　鉄鏃・鉄斧出土状況　南西から
3．SX－9　鉄剣出土状況　南西から
4．SX－11　鉄槍・鏃出土状況　北東から

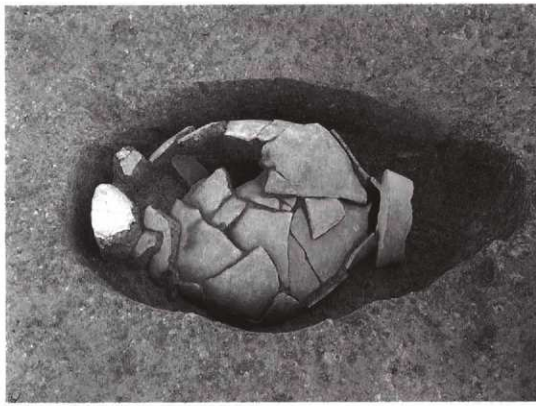


5．SX－15　北西から
6．SX－16　真上から
7．SX－17　真上から
8．SX－18　東から

尾根部の遺構

1．1号土器棺　南西から

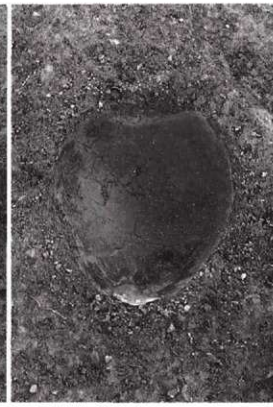
2．2号土器棺　真上から



3．3号土器棺　南東から

1．4号土器棺　南から

2．5号土器棺　真上から



3．6号土器棺　真上から

尾根部の遺構

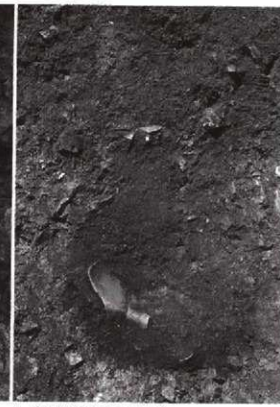
1．全景　南東から

2．第1主体　北から

3．棺内の断面　南から
4．第2主体　南から

1．中世墓1　北から

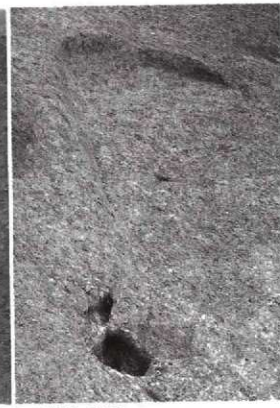
2．中世墓1土壙内土器出土状況　東から



3．中世墓1土壙断面　東から

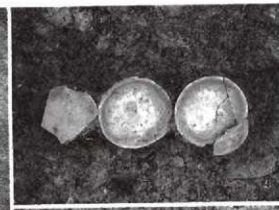
尾根部の遺構

1．中世墓12　西から



2．中世墓7　南から

3．中世墓9　東から



4．中世墓9土器出土状況
5．中世墓9土器出土状況

斜面部の遺構

1．調査前　南から

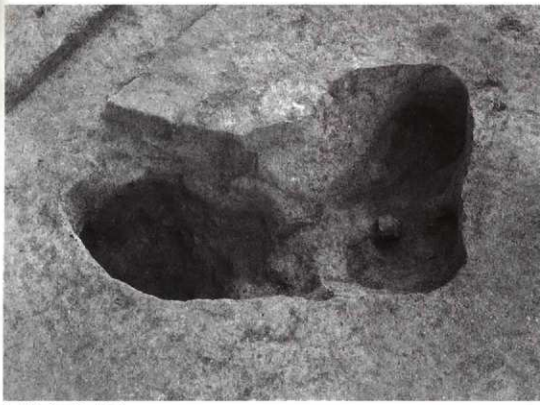
2．調査後　南から

斜面部の遺構

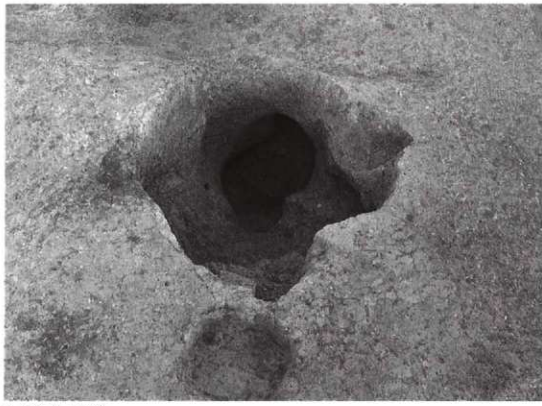
1．15号住居跡　南西から

2．20・21号住居跡　北東から

斜面部の遺構

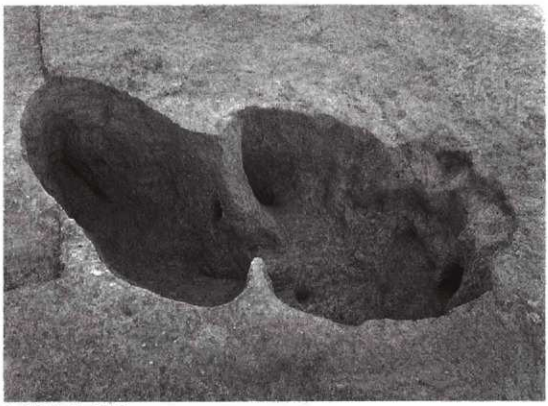


1．SK－1・15　北から



2．SK－6　西から

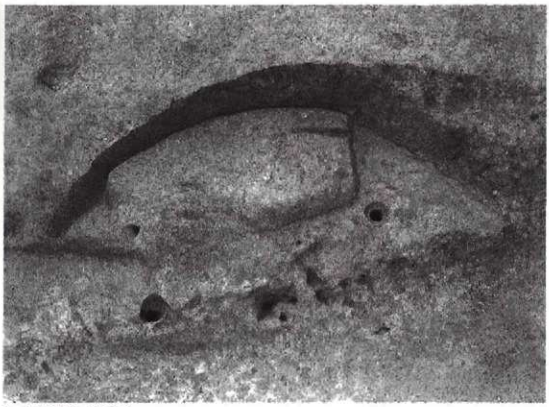
斜面部の遺構



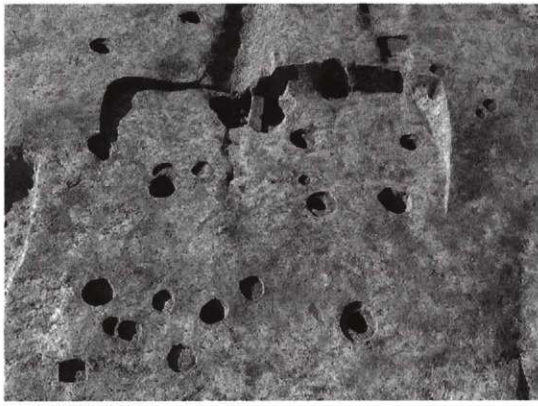
1．SK−11・13　東から

2．SK−16　東から

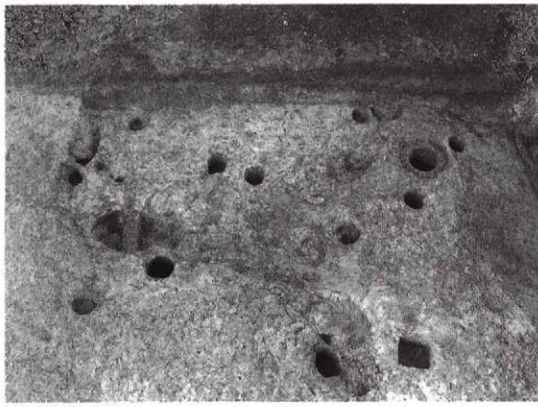
1．1号住居跡　西から



2．6号住居跡　北東から



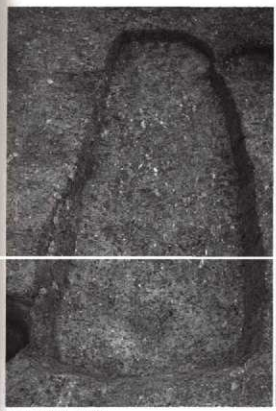
1．7号住居跡　北東から



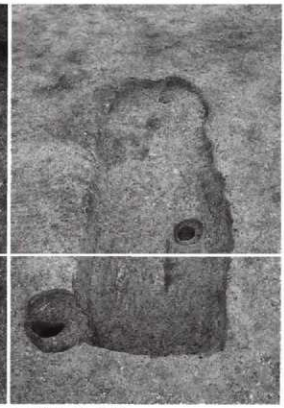
2．22号住居跡　南から

1．木棺墓群　北から

2．木棺墓1　北から

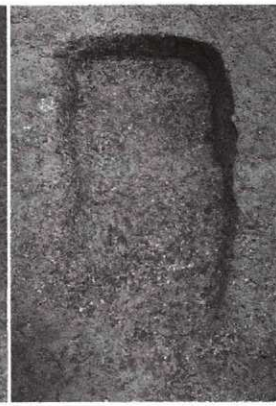


3．木棺墓2　西から



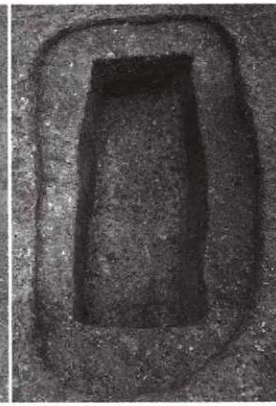
4．木棺墓　3　西から

1．木棺墓4　西から



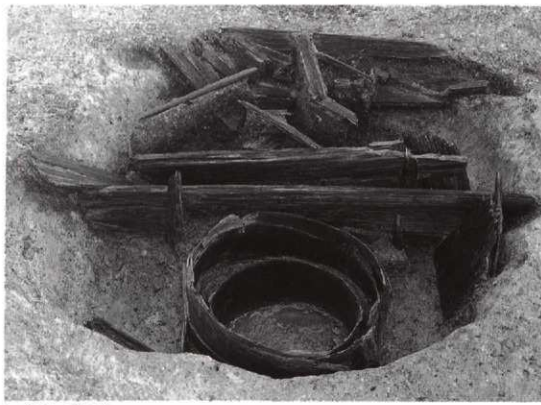
2．木棺墓5　南から

3．木棺墓6　北から

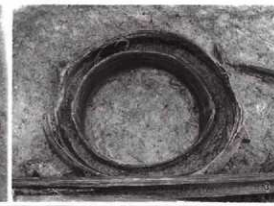


4．木棺墓7　南から

山麓部の遺構



1．井戸1　南西から



2．井戸1　南東から
4．井戸側　南西から

3．水溜に使われた曲物
5．曲物の内面

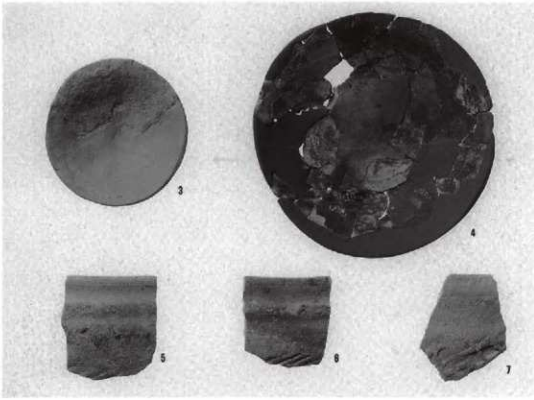
1．三角水田地区の旧河道　南から

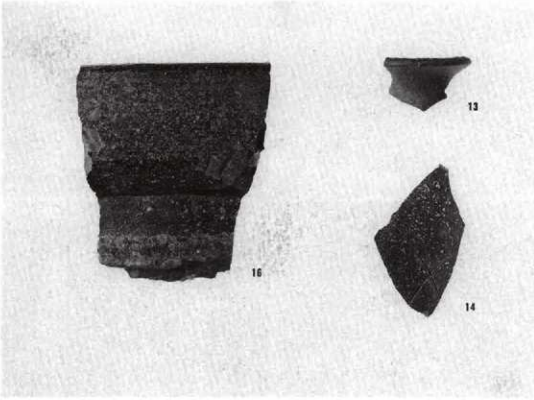
2．18トレンチ拡張区の旧河道　南から

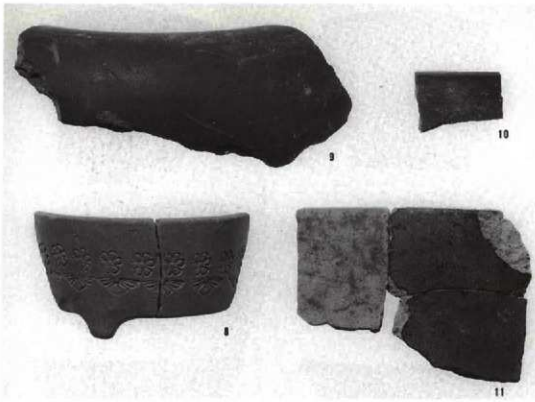
山麓部の遺構

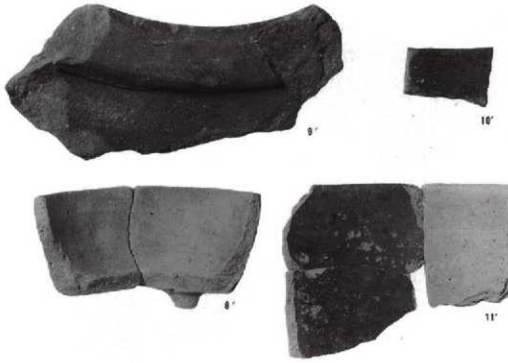
1．旧河道断面

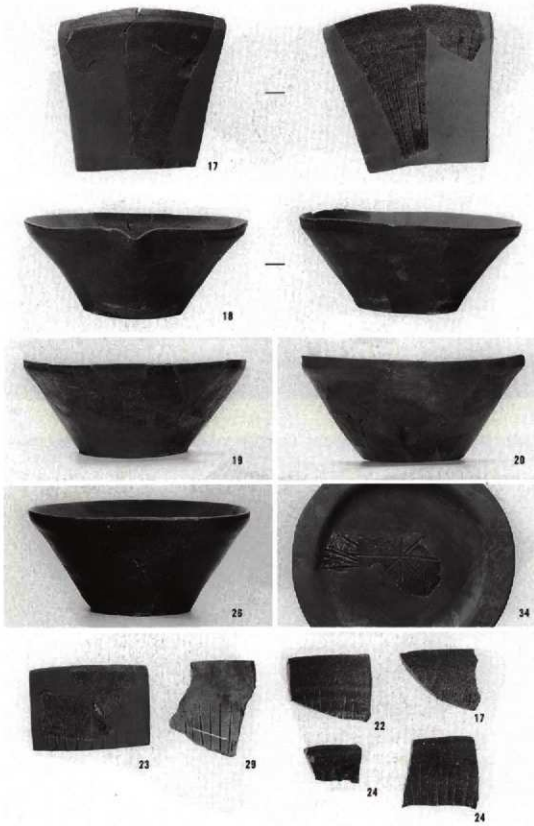
2．木器出土状況
3．木器出土状況
4．旧河道掘削状況
5．旧河道掘削状況

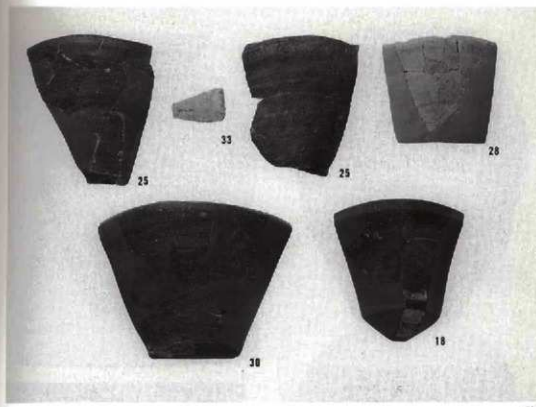

3
4
5
6
7


13
16
14

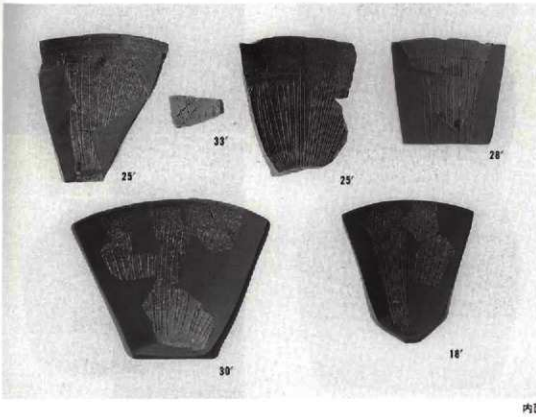

9
10
8
11


9'
10'
8'
11'


17
18
19
20
26
34
23
29
22
17
24
24

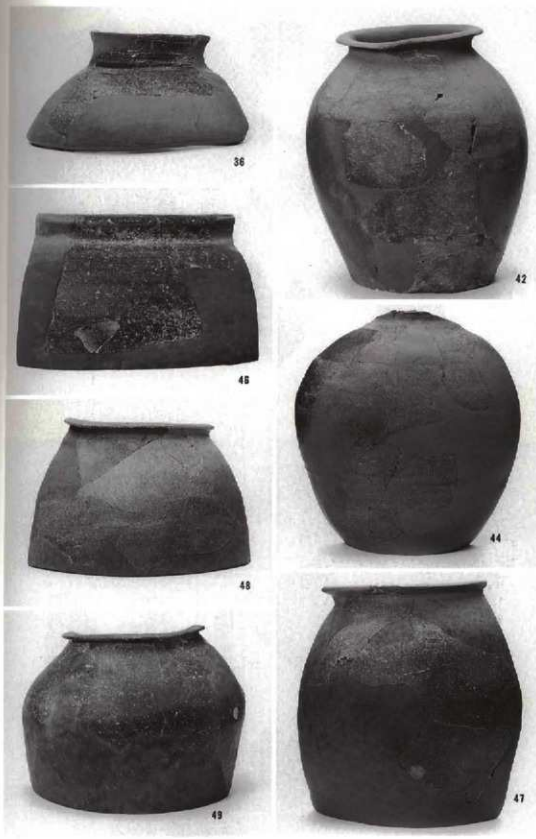


外面

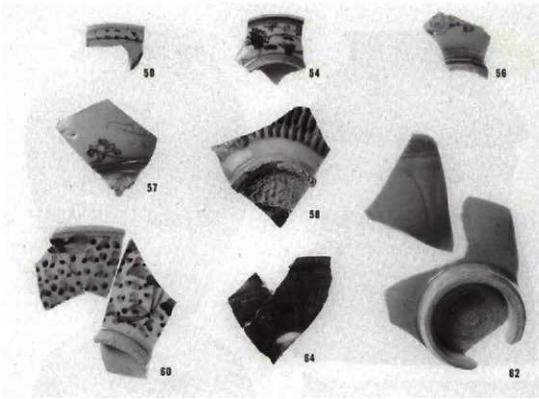


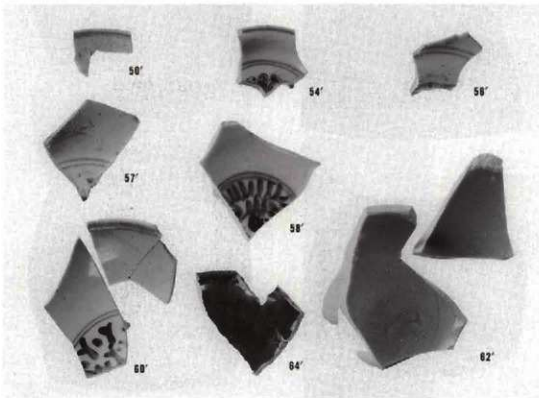
内面

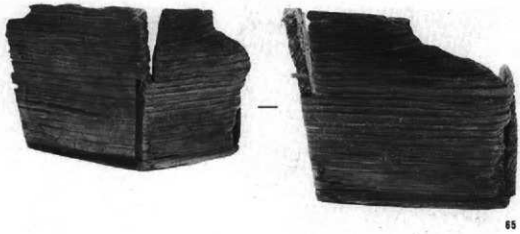
43

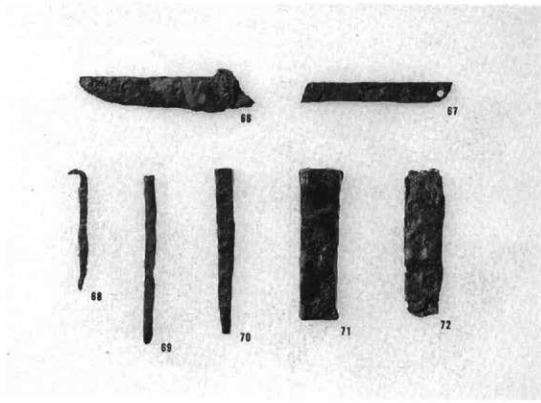

36
42
45
44
48
47
49

写真図版58　中国産磁器・瀬戸美濃産陶器






65


66
67
68
69
70
71
72

73

74

82

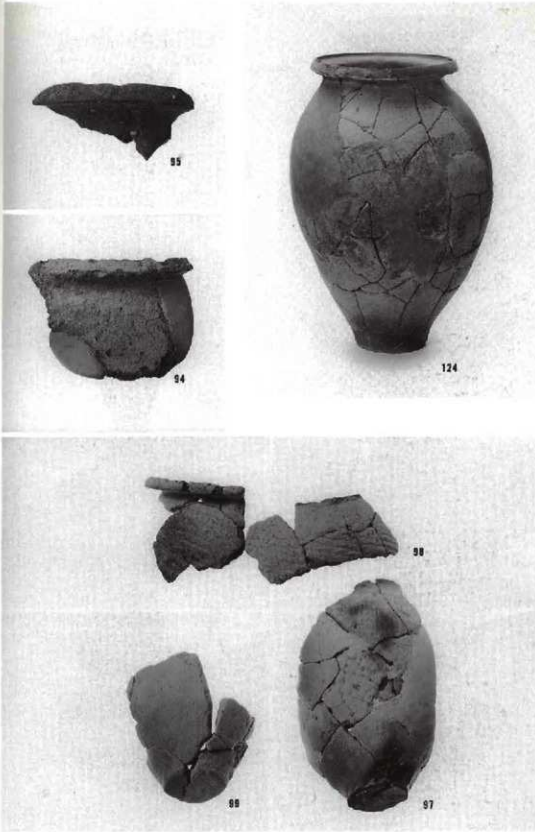
84

80

81

88

90


95
94
124
98
96
97

写真図版62　墳丘墓出土遺物(1)

101

102

114

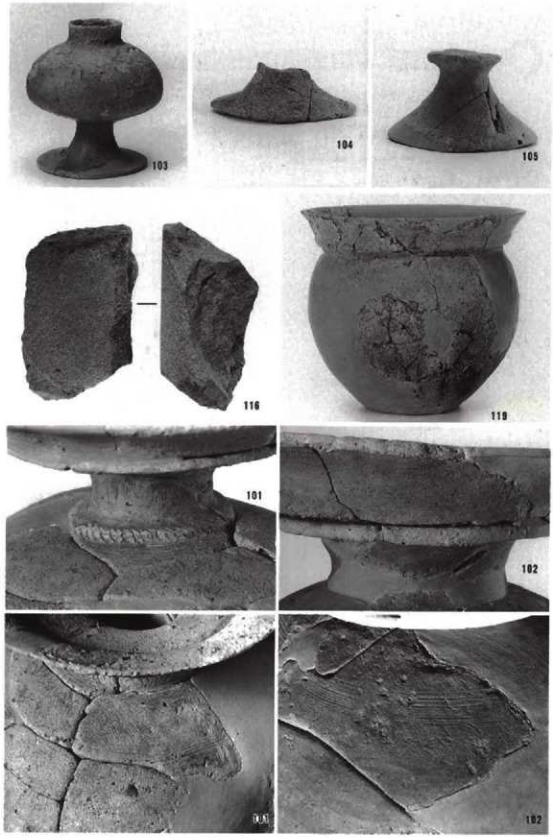
115

107

108

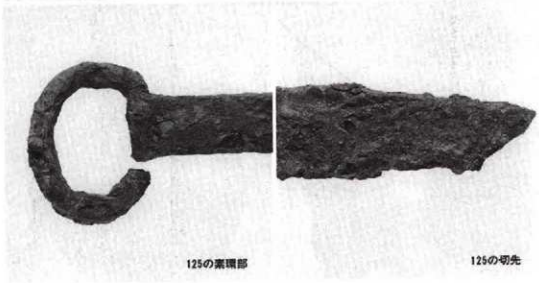
109

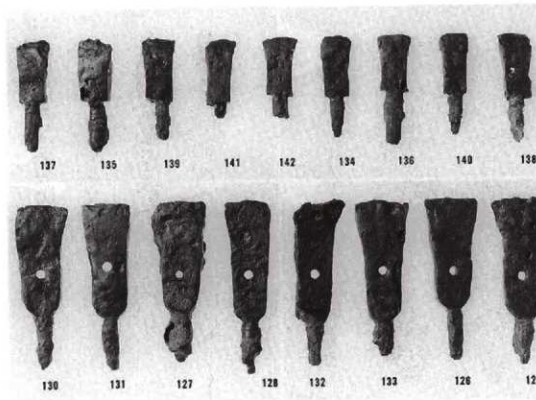
尾根部の遺物



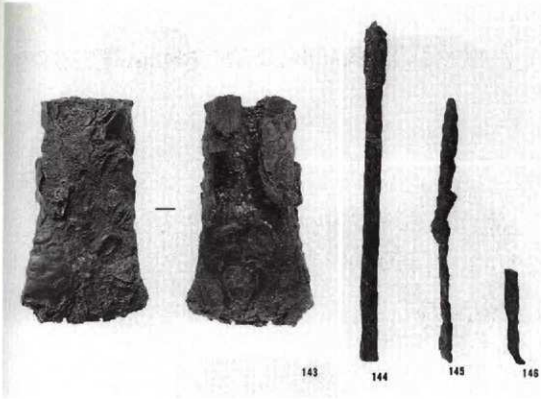
尾根部の遺物

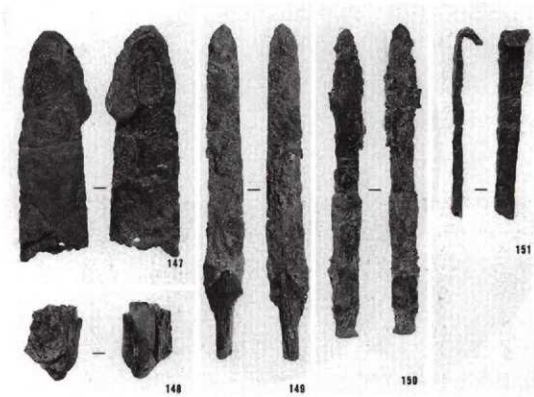
125


125の素環部
125の切先


137
135
139
141
142
134
136
140
138
130
131
127
128
132
133
126
129

尾根部の遺物





161

163

162

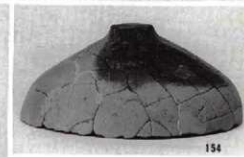
153

156

157

158

155


154

159

尾根部の遺物

164

165

166

167

168

169

172

170

173

174

175

176

177

178

179

181

189

184

185

183

187

188

186

190

191

192

193

195

196

尾根部の遺物

197

198

199

200

201

202

204

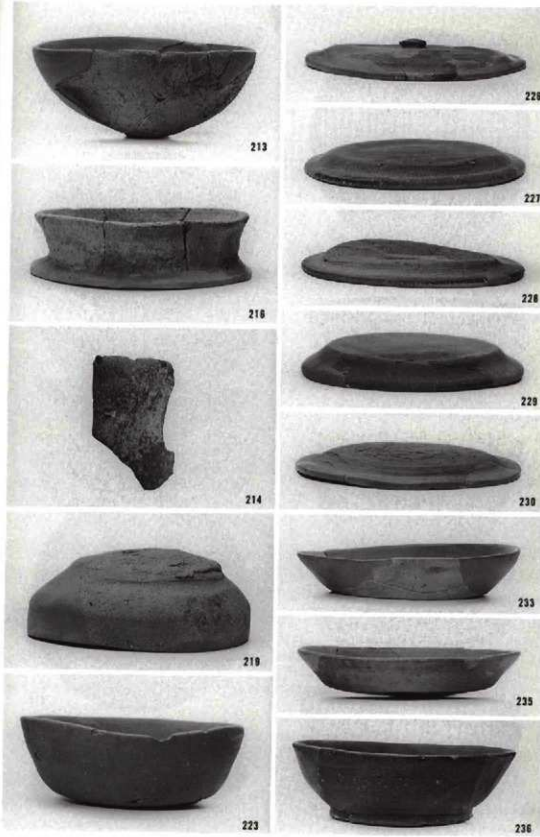
206

210

209

211

斜面部の遺物



写真図版71　竪穴住居跡・和寿園地区出土遺物

斜面部の遺物

240

241

244

237

238

242

619

斜面部の遺物

251

253

254

255

258

256

261

259

264

263

266

268

269

写真図版74　旧河道出土遺物　土器(1)

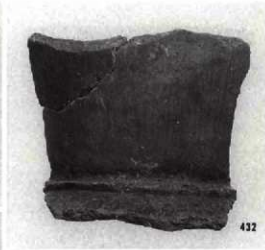
430

442

453

458

464


432

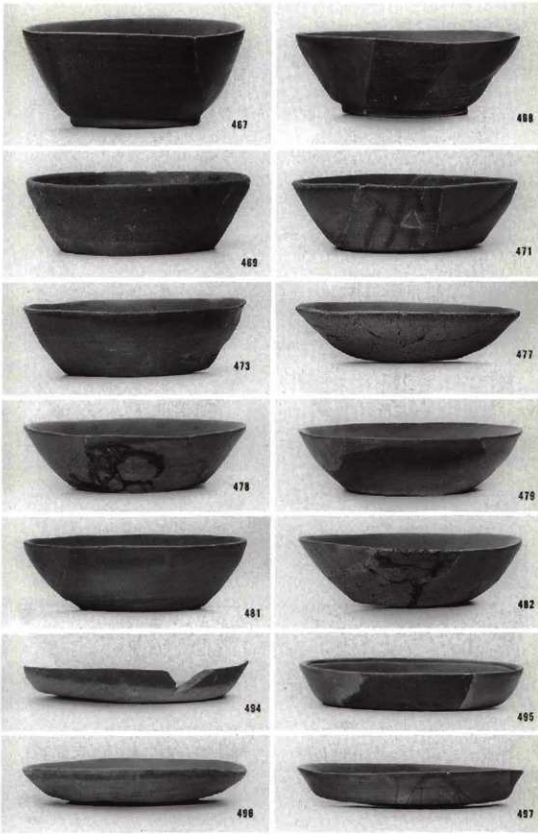
443

449

456

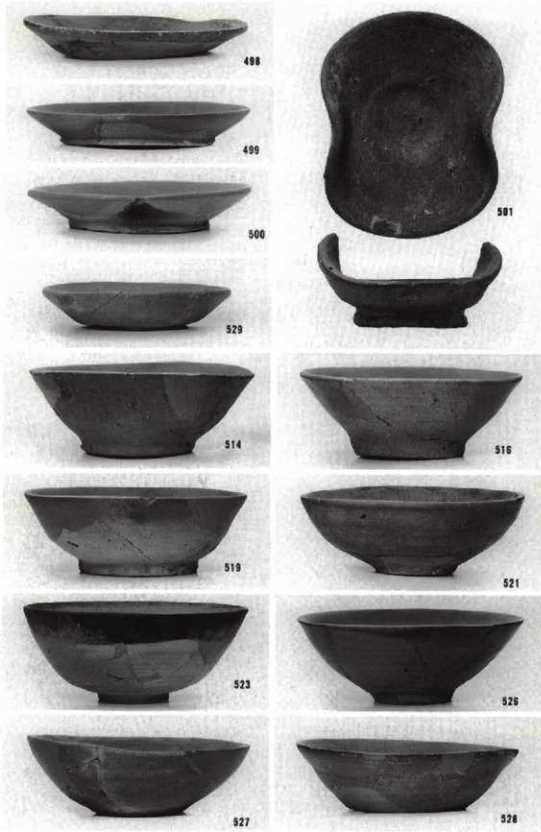
461

465



写真図版75　旧河道出土遺物　土器(2)

旧河道出土遺物　土器(3)



533

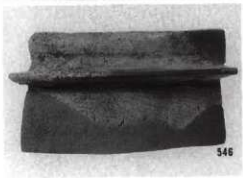
535

536

541

537

542

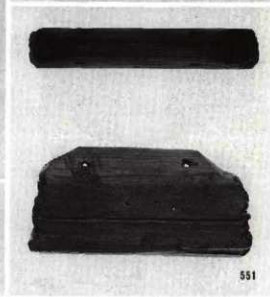

546

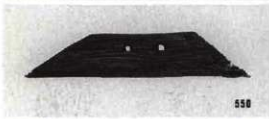
写真図版78　旧河道出土遺物　木器(1)

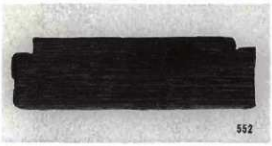
547

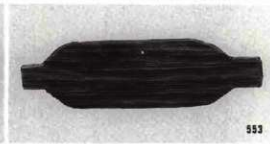
548

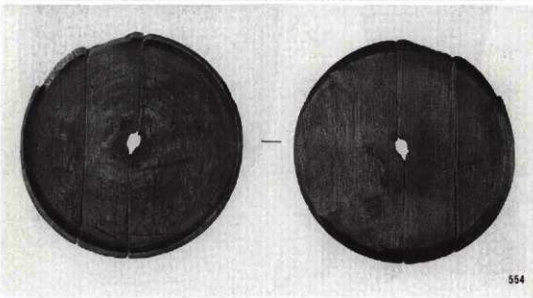
549

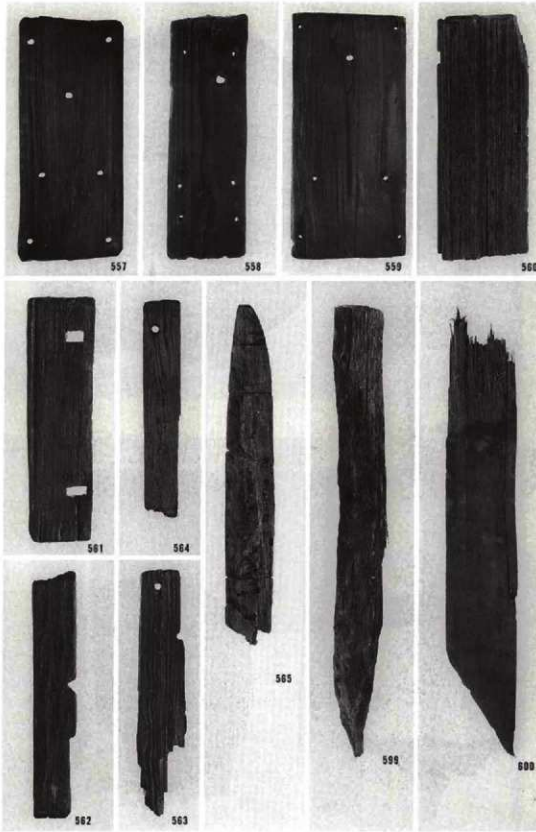

551


550

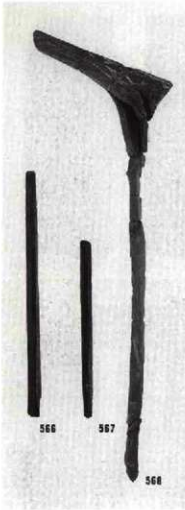

552


553

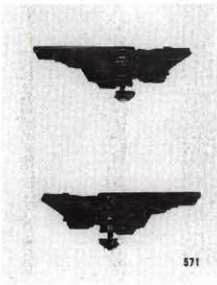

554

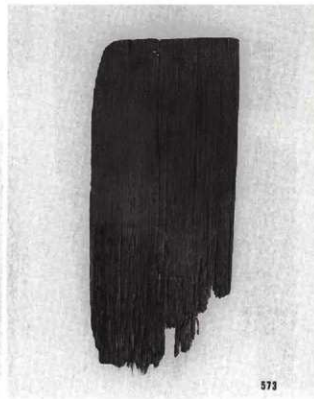


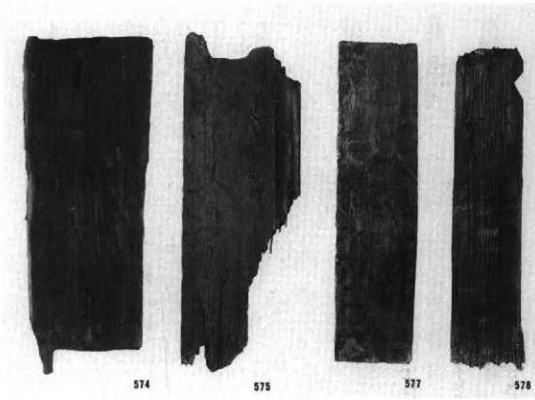
写真図版79　旧河道出土遺物　木器(2)

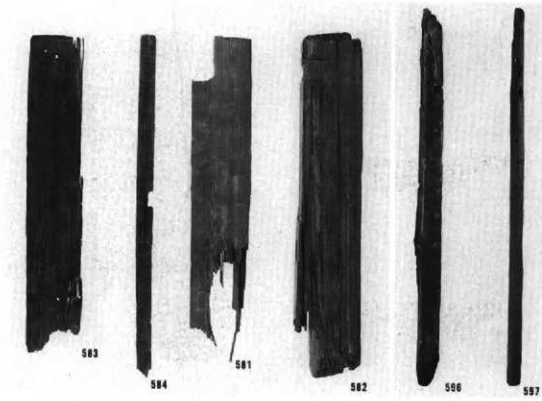

566
567
568

572

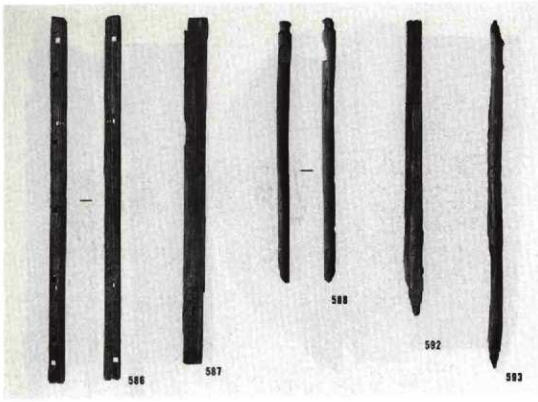

571

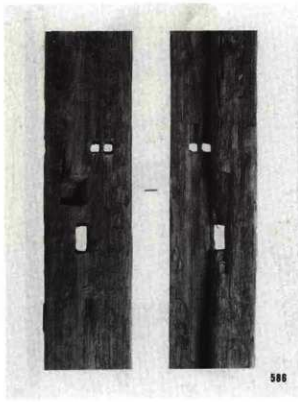

573

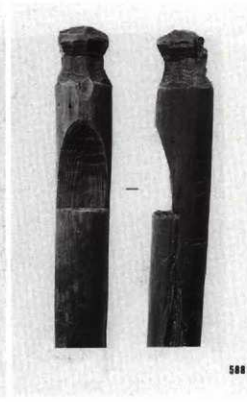

574
575
577
578

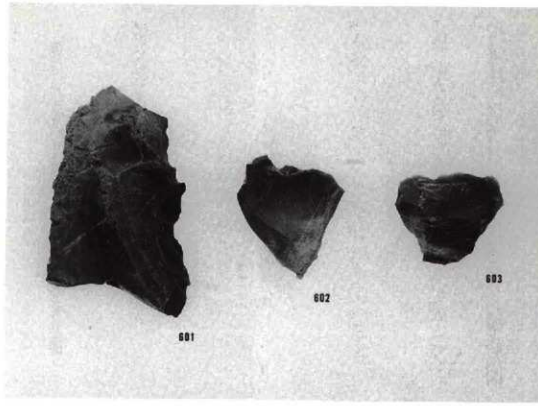

583
584
581
582
596
597

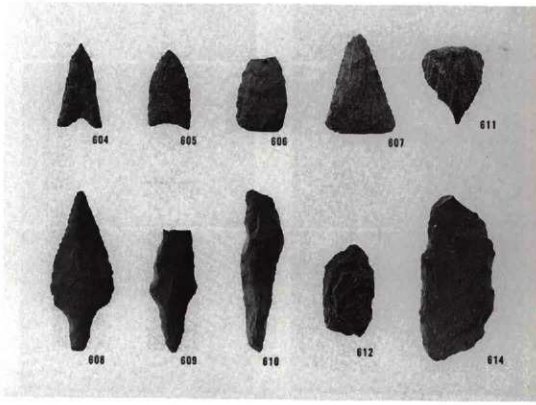
写真図版82　旧河道出土遺物　木器(5)

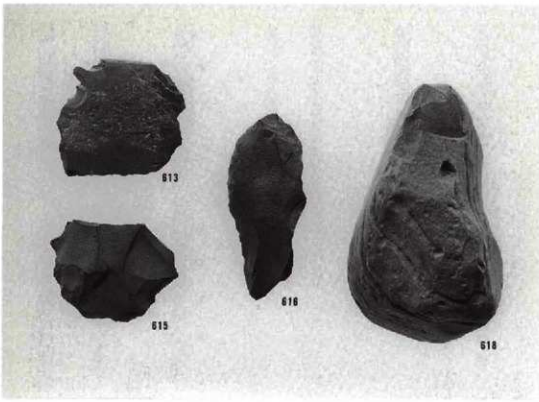


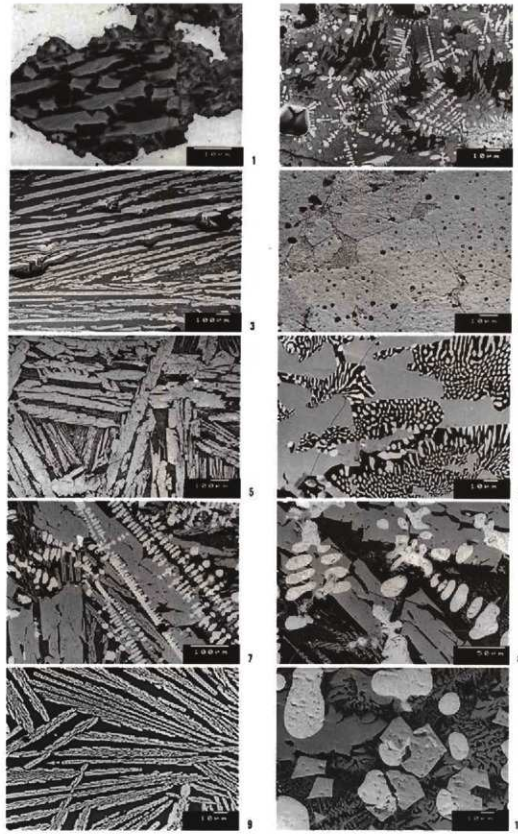





601
602
603


604
605
606
607
611
608
609
610
612
614


613
615
616
618


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10

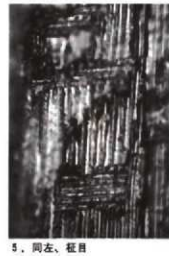
写真図版86　炭化材の樹種(1)

1．マツ(No.20)木口

2．同左、柾目

3．同左、板目

4．モミ(No.14)木口


5．同左、柾目

6．同左、板目

7．スギ(No.23)木口

8．同左、柾目

9．同左、板目

(1、4、7は×50、他は×100)

10.スギ(No.13)木口

11.同左、柾目

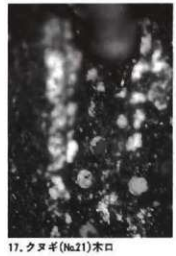
12.同左、板目

13コナラ(No.19)木口

14.同左、板目

15.コナラ(No.22)木口

16.クヌギ(No.14)木口


17.クヌギ(No.21)木口

18.同左、板目

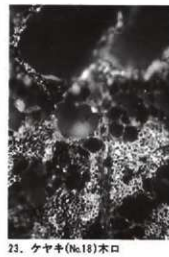
(×50、11は×100)

19.カシ類(No.23)木口

20.同左、柾目

21.同左、板目

22.カシ類(No.1)木口


23. ケヤキ(No.18)木口

24. 同左、板目

25. コブシ？(No.2)木口

26. 同左、柾目

27. 同左、板目

(×50)

28. カマツカ？(No.8)木口

29. 同左、柾目

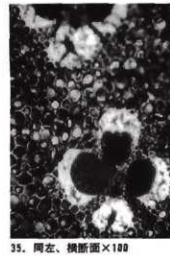
30. 同左、板目

31. トネリコ属(No.4)木口

32. 同左、柾目

33. 同左、板目

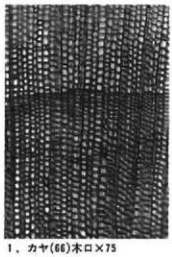
34. マダケ属？(No.17)横断面


35. 同左、横断面×100

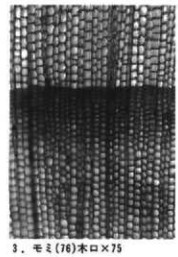
36. 同左、縦断面×100

(特記以外は×50)

写真図版90　木製品の樹種(1)


1．カヤ(66)木口×75

2．カヤ(71)板目×150


3．モミ(76)木口×75

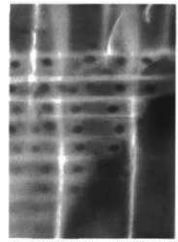
4．モミ(17)柾目×150

5．二葉マツ(26)木口×30

6．二葉マツ(61)柾目×300

7．スギ(87)木口×30

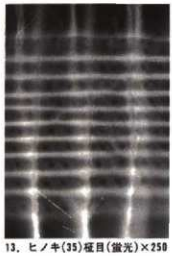
8．スギ(12)柾目×30


9．スギ(14)柾目　(蛍光)×250

10. スギ(41)柾目(蛍光)×250

11. ヒノキ(11)木口×30

12. ヒノキ(51)柾目×75


13. ヒノキ(35)柾目(蛍光)×250

14. ヒノキ(52)柾目(蛍光)×250

15. アカガシ亜属(6)木口×30

16. アカガシ亜属(64)板目×30

17. ヤチダモ(28)木口×30

18. ヤチダモ(28)板目×30

兵庫県文化財調査報告　第126冊

多紀郡西紀町

内場山城跡

近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書（XXI）

平成５年３月31日発行

編集　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652 神戸市兵庫区荒田町２丁目１番５号
TEL 078-531-7011
発行　兵庫県教育委員会
〒650 神戸市中央区下山手通５丁目10番１号
印刷　菱三印刷株式会社
〒652 神戸市兵庫区大開通２丁目2-11